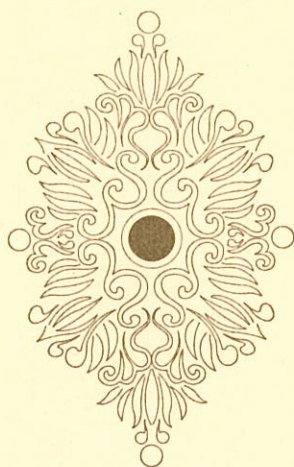


宗像 沖ノ島

史料

第三次學術調査隊



宗像大社復興期成会

凡 例

一 本書は、第三次沖ノ島調査報告書『宗像沖ノ島』三分冊の一であって、沖ノ島の考古学的研究の参考に資するため編纂したものである。

一 本書の内容は宗像大神の出現・鎮座資料及び編年史料の二部より成り、巻末に索引を付した。

一 宗像大神の出現・鎮座資料には神代卷瑞珠盟約章を中心とする関係記事を収め、末尾に付載資料として縁起・地誌類等より、『宗像大菩薩御縁起』『正平二十三年宗像宮年中行事』『筑前国統風土記』『宗像三社縁起附録』『瀛津島防人日記』『筑前国統風土記拾遺』を抄録して掲げた。

一 編年史料は、前掲の趣旨に基づき、次のような方針によって収集した史料を収めた。

(1) 沖ノ島を中心とする古代宗像に関する史料を網羅的に集めるよう努めた。「宗像」とは宗像大神・宗像神社(含分祀社)・宗像氏・宗像郡人・宗像部・宗像地方等宗像の名を冠するものを指す。宗像地方とは旧筑前国宗像郡に当る地域であり、現在の福岡県宗像郡宗像町・福岡町・津屋崎町・玄海町・大島村の四町一村を指す。

(2) 沖ノ島祭祀遺品の示す性格との関連において、以下の史料を併載した。

(イ) 沖ノ島祭祀遺品の多くは、朝廷による恒例・臨時の祭祀、奉幣の品々と考えられるところから、その御崇敬に関する史料として六国史を中心とした主なる奉幣及び神祇関係記事。

(ロ) 我が国と新羅との交渉を反映している奉献品が多いことや、遣唐使人の手による奉献と推定される品々が存在することから、遣新羅使・遣唐使関係の基礎的史料と考えられるもの。

一 編年史料の年代的下限は、沖ノ島へ祭祀品を奉獻することが急速に消滅したと考えられる遣唐使廃止後の昌泰三年（九〇〇）までとした。なお末尾には延喜式より関係史料を収録した。また、後代の成立にかかる文献についても適宜収録したものである。

一 編年史料については、原則として史料を一括、編年に整理し、便宜上（一）奈良時代以前（二）奈良時代（三）平安時代に分った。

一 編年史料の体裁は、原則としてまず綱文をたて、次に史料を掲げた。綱文は冒頭の史料の上欄に掲げた。

一 綱文はこれを一括して目次に掲げた。

一 年代は異なっても一箇所にまとめて掲げる方が便利と考えられる史料及び関係記事は、関連する人物・事項の史料末尾に参考として加え、それらの史料の首部に＊印を付けて区別した。

一 頭註として本文の内容や名辞その他を適宜標示して繙読の便を図った。

一 史料採録に当っては、主として現在通行の校訂本に拠った。本来ならば、掲出史料ごとに依拠本を註記すべきであるが、紙幅・体裁との関係上これを省略した。その依拠本・史料集の主なものとは左記の通りである。

『大日本古文書』〔新訂増補〕『国史大系』『大日本仏教全書』〔岩波〕『日本古典文学大系』〔岩波〕『日本思想大系』〔新校〕『群書類従』『続々群書類従』『新群書類従』『史料纂集』『福岡県史資料』『宗像郡誌』

一 依拠本の返り点・訓点・読み仮名・史料傍らの日付などは印刷の都合で省略した。なお、史料本文に日付を付ける場合は、史料内容が数日にわたる場合及び綱文と異なる日に限った。また使用の便宜を考えて、主要な日本紀年・外国〔中国朝鮮〕紀年の傍らに数字で西暦年数を付記した。

一 史料本文中、依拠本と若干違う箇所があるが、それは原本・異種の刊本・参考文献によって行なった私案であ

って、依拠本に註記案文がある場合には当該箇所^一に片仮名をもってこれを付記したが、その註記は繁雑を避けて最小限に止めた。また、編者私案のものは平仮名を用いて区別した。

一 用字等の表記は依拠本に従うを原則としたが、特殊な漢字については正漢字若しくは通行の漢字に改めた場合もある。文字に誤字・脱字・衍字ありと思われるところはママ、または編者の案を傍註し、これにはすべて（ ）を施した。また、朱筆による箇所の註記は原則として省略したが、必要と思われる場合には「」を付し（朱）と傍註した。

一 万葉集の歌首の番号は『国歌大観』所収の『万葉集』の歌首番号である。なお万葉集の和歌にはその読み下しを、『^岩日本古典文学大系』所収の『万葉集』により掲げた。

一 大日本古文书編年文書中の符号・表示は印刷の都合上省略した場合もある。

一 史料検索や、綱文・頭註を施すにあたっては小島鉦作等『宗像神社史（上・下・附巻）』、兵庫県神社庁編『神祇史年表上』、竹内理三編『寧楽遺文』『平安遺文』『鎌倉遺文』『大宰府・太宰府天満宮史料』、竹内理三・平野邦雄・山田英雄編『日本古代人名辞典』、東京大学史料編纂所編『大日本古文书』『大日本史料』『読史備要』、森克己『遣唐使』『日中交渉史年表』、田村洋幸『日鮮交渉史年表』、朝鮮史編修会『統一新羅史』、小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』、蔵中進『唐大和上東征伝の研究』、『^岩日本古典文学大系』、『^{中国朝鮮の史}日本史料集成』『日本庶民生活史料集成』等の恩恵を被った。

目次

凡例	一
----	---

宗像大神（三女神）の出現と鎮座

宗像三女神、天照大神と素戔鳴尊との天安河原における誓約により、出現し給ふ、	三
---------------------------------------	---

日本書紀	三
------	---

古事記	五
-----	---

西海道風土記逸文	六
----------	---

釋日本紀	七
------	---

先代舊事本紀	八
--------	---

〔付載資料〕

宗像大菩薩御緣起	九
----------	---

宗像宮年中行事	三
---------	---

筑前國續風土記	一三
---------	----

宗像三社緣起附錄	二四
----------	----

瀛津島防人日記	二六
---------	----

筑前國續風土記拾遺	四四
-----------	----

編年史料

目次

六

(一) 奈良時代以前

景初・正始年中

某 歲 魏の使、倭の奴國より不彌國に到る、…………… 四

仲哀天皇九年

十 月 宗像大神、神功皇后の征新羅の役に神助を加へ給ふ、…………… 四

應神天皇三十七年

二 月 朔 日 阿知使主・都加使主を吳に遣し、縫工女を求めしむ、…………… 五

應神天皇四十一年

二 月 阿知使主、吳國より筑紫に歸還、胸形大神の請により吳國の織女兄媛を奉獻す、…………… 五

仁德天皇十七年

九 月 新羅朝貢せざるにより、砥田宿禰・賢遣臣を遣して之を責む、…………… 五

仁德天皇五十三年

五 月 新羅朝貢せざるにより、竹葉瀨を遣して之を責む、尋で竹葉瀨の弟田道を派して新羅を撃つ、…………… 五

履仲天皇五年

三 月 朔 日 筑紫の三神、宮中に現れ、天皇に領民收奪のことを託宣し給ふ、…………… 五

十 月 十一 日 天皇、詔して車持君が筑紫の車持部を支配するを停めて、之を收公し、更めて宗像三神に寄進し給ふ、…………… 五

允恭天皇三年

五

正月朔日	天皇、御病のため醫を新羅に求めらる、仍て醫來朝し、御病全治す、	五
雄略天皇九年（四六五）		
二月朔日	凡河内直香賜と采女とを遣して、胸方神を祠らしむ、	五
三月	月 是より先、天皇親ら新羅を伐たんとせられしも、宗像神の神戒により之を停め給ひ、 紀小弓宿禰らを派し給ふ、	五
雄略天皇十年（四六六）		
九月四日	水間君の犬、吳より獻上の鵝を喰殺すにより、水間君、鴻・養鳥人を獻す、	五
雄略天皇二十三年（四七九）		
是	歲 筑紫安致臣・馬飼臣ら、船師を率ゐて、高麗を撃つ、	五
繼體天皇二十一年（五二七）		
六月三日	近江毛野を任那に派し、新羅を討たんとす、時に筑紫國造磐井、新羅の賂をうけて、 毛野の軍を防遏す、	五
欽明天皇二十三年（五六二）		
八月	月 大將軍大伴連狹手彥を遣して、高麗を伐つ、	五
欽明天皇三十二年（五七一）		
三月五日	新羅に坂田耳子郎君を遣して、任那を滅ぼすを問責せしむ、	五
敏達天皇四年（五七五）		
四月六日	吉士金子を新羅に、吉士木連子を任那に、吉士譯語彥を百濟に遣す、	六
敏達天皇十三年（五八四）		
二月八日	難波吉士木連子を新羅に遣す、	六
崇峻天皇四年（五九一）		

十一月 四 日	吉士金を新羅に、吉士木蓮子を任那に遣す、	六〇
推古天皇五年（五九七）		
十一月二十二日	吉士磐金を新羅に遣す、尋で翌六年四月、磐金新羅より歸り、鵠二羽を獻ず、	六〇
推古天皇八年（六〇〇・開皇二十年）		
二 月	新羅、任那を攻む、天皇、境部臣らを派して任那を救援し、新羅を攻め降す、仍て難波吉師神を新羅に、難波吉士木蓮子を任那に遣す、	六〇
是 歲	倭の使、隋に入貢す、	六〇
推古天皇十年（六〇二）		
二 月	來目皇子を征新羅將軍として筑紫に派す、尋で六月、皇子病みて征討を果さず、	六〇
推古天皇十一年（六〇三）		
七 月 三 日	是より先、來目皇子、筑紫に薨じ、代りて是日、當摩皇子、征新羅將軍として難波より進發す、然るに同皇子の妃薨するにより、皇子征討せず、	六〇
推古天皇十五年（六〇七・大業三年）		
七 月 三 日	遣隋使小野妹子・通事鞍作福利を隋に遣す、	六〇
是 歲	倭、隋に朝貢す、	六〇
推古天皇十六年（六〇八・大業四年）		
四 月	遣隋使小野妹子、隋使裴世清と共に、筑紫に至る、	六〇
九 月 十一日	隋使裴世清ら歸國す、遣隋大使小野妹子・小使吉士雄成らをして之を送らしむ、是時、留學生ら八人、隨行す、	六〇
是 歲	倭、隋に朝貢す、	六〇
推古天皇十七年（六〇九）		

二月二十二日	津守連大海を高麗に、國勝吉士水鷄を百濟に、草壁吉士眞跡を新羅に、坂本吉士長兄を任那に遣す、……………	六
大化二年（六四六）		
九月	高向博士黑麻呂を新羅に遣して、質を徴す、尋で翌三年、金春秋らと共に歸る、……………	六
大化五年（六四九）		
五月朔日	三輪君色夫・掃部連角麻呂を新羅に遣す、……………	六
大化年中		
某歲	宗形郡建置せらる、尋で神郡として當社に寄進せらる、……………	六
白雉四年（六五三）		
五月十二日	遣唐大使吉士長丹・副使吉士駒・學問僧・學生ら一二一人、一船に乗り唐に赴く、また別に大使高田首根麻呂・副使掃部連小麻呂・學問僧ら一二〇人、一船に乗り唐に向ふ、……………	六
七月	遣唐使高田根麻呂らの船、薩摩國曲・竹嶋の間にて難破するも、門部金ら五人神嶋に漂着す、……………	七
白雉五年（六五四・永徽五年）		
二月	遣大唐押使高向史玄理・大使河邊臣麻呂・副使藥師惠日ら二船に分乘し、新羅道によつて唐に赴く、……………	七
七月二十四日	西海使吉士長丹ら百濟・新羅送使と共に、筑紫に至る、……………	七
十二月	倭國、入唐朝貢す、……………	七
齊明天皇元年（六五五）		
八月朔日	遣唐大使河邊臣麻呂ら唐より歸る、……………	七

齊明天皇三年（六五七）	
是	
歲 使を新羅に派し、沙門智達らを唐に送り、到らしむを求む、新羅、聽かざるにより智達ら歸國す、……………	七三
齊明天皇四年（六五八）	
是	
歲 智通・智達、新羅船に乗り入唐す、……………	七三
齊明天皇五年（六五九）	
七月三日 遣唐使坂合部連石布・津守連吉祥ら、二船に分乘して進發す、尋で石布の船逆風のため遭難し、吉祥らのみ洛陽に至る、……………	七三
齊明天皇六年（六六〇）	
十月 遣唐使歸來す、……………	七三
齊明天皇七年（六六一）	
五月二十三日 遣唐副使津守連吉祥ら、耽羅の王子阿波伎らを伴ひ歸着す、……………	七三
天智天皇二年（六六三）	
三月 將軍上毛野君稚子・間人連大蓋ら、二萬七千人を率ゐ新羅を伐つ、……………	七三
八月 白村江に戦ひて、日本の船師敗れ退く、……………	七四
天智天皇四年（六六五）	
是	
歲 守君大石・坂合部連石積・吉士岐彌・吉士針間らを唐に遣す、……………	七四
天智天皇六年（六六七）	
十一月九日 百濟鎮將劉仁願の使司馬法聰ら、境部連石積らを送りて、筑紫都督府に至る、……………	七四
天智天皇七年（六六八）	
十一月五日 道守臣麻呂・吉士小鮪を新羅に遣す、……………	七四

九月十六日	遣新羅使歸國す、		七
天武天皇十年（六八一）			
正月二日	幣帛を諸神祇に頒つ、		七
七月四日	大使采女臣竹羅・小使當摩公楯を新羅に遣す、是日、大使佐伯連廣足・小使小墾田臣麻呂を高麗に派す、		七
九月三日	高麗・新羅へ遣せし使、歸國拜朝す、		七
天武天皇十三年（六八四）			
四月二十日	大使高向臣麻呂・小使都努臣牛甘を新羅に遣す、		七
十一月朔日	胸方君、他の五十一氏と共に、朝臣の姓を賜はる、		八
十二月六日	遣唐留學生土師甥ら、筑紫三宅得許らと共に、新羅送使に送られ、築紫に至る、		八
天武天皇十四年（六八五）			
五月二十六日	高向朝臣麻呂ら、新羅より歸國す、		八
朱鳥元年（六八六）			
六月二日	大唐學生らに爵位を賜ふ、		八
持統天皇元年（六八七）			
正月十九日	田中朝臣法麻呂・守君苅田らを新羅に遣し、天武天皇の喪を告げしむ、		八
九月二十三日	學問僧智隆、新羅使に従ひて歸朝す、		八
持統天皇三年（六八九）			
正月八日	田中朝臣法麻呂ら、新羅より歸る、		八
四月二十日	學問僧明聰ら、新羅使に従ひて歸朝す、		八
六月二十日	筑紫大宰、學問僧明聰らの新羅師友に送る綿を給す、		八

持統天皇四年（六九〇）

七月三日 天神地祇に班幣す、…………… 八

九月二十三日 遣唐學問僧義徳ら、軍丁大伴部博麻と共に、新羅の送使に従ひ歸朝す、…………… 八

持統天皇六年（六九二）

十一月八日 遣新羅使息長真人老・川内忌寸連らに祿を賜ふ、…………… 八

持統天皇七年（六九三）

三月十六日 遣新羅使息長真人老・大伴宿禰子君・學問僧らに、純・綿・布を賜ふ、…………… 八

四月十七日 使を遣して諸社に雨を祈る、…………… 八

七月十四日 使を遣して諸社に雨を祈る、…………… 八

持統天皇八年（六九四）

三月二十二日 諸社に奉幣す、…………… 八

持統天皇九年（六九五）

七月二十六日 遣新羅使小野朝臣毛野・伊吉連博徳らに物を賜ふ、…………… 八

九月六日 小野朝臣毛野、新羅に發向す、…………… 八

持統天皇十一年（六九七）

五月八日 使を派して諸社に雨を祈る、…………… 八

六月十九日 神祇に班幣す、尋で二十八日、諸社に雨を祈る、…………… 八

文武天皇二年（六九八）

正月十五日 新羅の貢物を諸社に供ふ、…………… 八

三月九日 筑前國宗形郡司、出雲國意宇郡司と共に、三等以上の親の連任を聽さる、…………… 八

是月 日本國使新羅に至る、…………… 八

五月朔日	諸國旱するにより、諸社に奉幣す、	八三
六月二十八日	諸社に馬を奉り、雨を祈る、	八三
文武天皇四年(七〇〇)		
五月十三日	遣新羅大使に佐伯宿禰麻呂、小使に佐味朝臣賀佐麻呂を任ず、	八四
十月十九日	佐伯宿禰麻呂ら、新羅より歸る、	八四
大寶元年(七〇一)		
正月二十三日	粟田朝臣眞人を遣唐執節使に、高橋朝臣笠間を大使に、坂合部宿禰大分を副使に任ず、	八四
三月三日	是より先、筑紫胸形に坐す中部大神、松崎に天下り坐し給ふ、是日、川邊腹男・秦忌寸都理ら、松尾に勸請すと傳ふ、	八四
四月十日	遣唐大通事大津造廣人に垂水君の姓を賜ふ、尋で十二日遣唐使ら拜朝す、	八五
四月十五日	諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る、	八六
五月七日	遣唐執節使粟田朝臣眞人に節刀を授く、	八六
大寶二年(七〇二・長安二年)		
三月十二日	大祓により畿内・七道の諸社に奉幣す、	八六
六月二十九日	遣唐使、筑紫より海に入る、	八六
十月三日	薩摩隼人征討の報賽により、大宰所部の神九處に、奉幣す、	八六
是月	日本國使入唐朝貢す、	八六
是歲	筑前國・豊前國戸籍成る、中に、宗形部宿奈賣・宗形部阿比太賣・宗形部大麻呂の名あり、	八六
大寶三年(七〇三)		
九月二十二日	波多朝臣廣足を遣新羅大使に任ず、	八六

十月二十五日 遣新羅使波多朝臣廣足・額田人足らに、袈・衣を賜ふ、…………… 六六
 是 歲 日本國使新羅に至る、…………… 六六

慶雲元年(七〇四)

六月二十二日 諸社に奉幣し雨を祈る、…………… 六七
 七月朔日 粟田朝臣眞人、唐より歸朝す、…………… 六七
 七月九日 諸社に奉幣し雨を祈る、…………… 六七
 八月三日 遣新羅使波多朝臣廣足ら、新羅より歸朝す、…………… 六七
 十月九日 幡文通を遣新羅大使に任ず、…………… 六七
 十二月十日 諸社に幣帛を供す、…………… 六七

慶雲二年(七〇五)

五月二十四日 遣新羅大使幡文通ら、新羅より歸朝す、…………… 六七
 六月二十六日 諸社に奉幣し雨を祈る、…………… 六七
 八月十一日 粟田眞人を從三位に敍す、…………… 六七

慶雲三年(七〇六)

閏正月 十三日 新羅の調を伊勢大神宮及び七道諸社に奉る、…………… 六七
 閏正月 二十日 天下疫病あるにより、神祇に禱祈せしむ、…………… 六七
 二月二十二日 入唐執節使粟田朝臣眞人の乗れる船佐伯を、從五位下に敍す、…………… 六七
 七月二十四日 丹波・但馬、山火のため、使を遣し、神祇に奉幣せしむ、…………… 六七
 八月二十一日 美努連淨麻呂を遣新羅大使に任ず、…………… 六七
 十一月三日 遣新羅大使美努連淨麻呂・副使對馬連堅石らに出國を命ず、…………… 六七

慶雲四年(七〇七)

(二)奈良時代

三月 二 日	遣唐副使巨勢朝臣邑治ら、唐より歸る、	九
四月 二十五 日	天下の疫飢甚しきにより、諸社に奉幣す、	九
五月 十五 日	入唐副使巨勢邑治らに、綿・緇・鉏等を賜ふ、	九
五月 二十八 日	遣新羅使美努連淨麻呂、學問僧義法らと共に、歸着す、	九
八月 十六 日	入唐副使巨勢邑治ら昇敍さる、	一〇
和銅二年(七〇九)		
五月 五 日	筑前國宗形郡大領從五位下宗形朝臣等杼、外從五位上に昇敍せらる、	一〇
六月 二十 日	筑前國御笠郡大領正七位下宗形部堅牛に、益城連の姓を賜ふ、	一〇
和銅三年(七一〇)		
四月 二十二 日	諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る、	一〇
和銅四年(七一一)		
閏六月 二十一 日	宗形部加麻麻伎に、穴太連の姓を賜ふ、	一〇
和銅五年(七一二)		
九月 十九 日	道君首名を遣新羅大使に任ず、	一〇
十月 二十八 日	遣新羅使ら辭見す、	一〇
和銅六年(七一三)		
五月 二 日	諸國に「風土記」の撰上を命ず、播磨國風土記・西海道風土記逸文に宗像の名見ゆ、	一〇
是 頃	筑前國宗像郡人珂是古、肥前國基肄郡姫社郷に請ぜられ、同社を祭り、祈禱を修せしに、神異ありし由を傳ふ、	一〇

八月十日	遣新羅大使道公首名、新羅より歸る、	一〇五
和銅七年(七一四)		
六月二十三日	詔により諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る、	一〇五
靈龜元年(七一五)		
六月十三日	太政官の奏請により使を遣し、諸社に奉幣し雨を祈る、	一〇五
九月二日	天下の諸社祝部等に、物を賜ふ、	一〇五
靈龜二年(七一六)		
八月二十日	多治比真人縣守を遣唐押使に、阿倍朝臣安麻呂を遣唐大使に、藤原朝臣馬養を副使に任ず、	一〇六
九月四日	大伴宿禰山守を阿倍朝臣安麻呂に代へて遣唐大使となす、	一〇六
養老元年(七一七・開元五年)		
二月朔日	遣唐使、神祇を御笠山の南に祠り、二十三日、遣唐使ら拜朝す、尋で三月九日、遣唐押使多治比真人縣守に節刀を賜ふ、	一〇六
十月	日本國使入唐朝貢す、	一〇七
十一月八日	遣唐使の水手已上に、一房の徭役咸く免ず、	一一二
養老二年(七一八)		
三月二十日	小野朝臣馬養を遣新羅大使となす、尋で五月二十三日、遣新羅使ら辭見す、	一一三
十月二十日	大宰府、遣唐使多治比真人縣守の來歸を報ず、	一一三
十二月十三日	縣守ら歸朝す、	一一三
十二月十五日	遣唐押使節刀を進む、此度の使人大體缺亡なく、大寶二年入唐の坂合部宿禰大分を隨伴して歸朝す、	一一三

是	歲	養老律成る、衛禁律「古答」に胄形社の名見ゆ、	二二
是	歲	養老令成る、賦役令の義解、諸國貢獻物の條に、胄形箭の名見ゆ、	二三
養老三年(七一九)			
正月十日		遣唐使ら拜見す、	二三
二月十日		遣新羅使小野朝臣馬養ら歸朝す、	二三
閏七月十一日		白猪史廣成を遣新羅使に任ずるも、八月八日、廣成之を拜辭す、	二三
養老五年(七二一)			
正月二十七日		解工正七位下胄形朝臣赤麻呂に、絶十疋・絲十絢・布二十端・鍬二十口を賜ふ、	二三
是	歲	元右京人宗形横根の子嶋守、母姓を冒し、名草氏に隸す、	二四
養老六年(七二二)			
五月十日		津史主治麻呂を遣新羅使に任ず、尋で二十九日、主治麻呂ら拜朝す、同年十二月二十三日、遣新羅使ら歸朝す、	二四
養老七年(七二三)			
十一月十六日		筑前國宗形郡等八神郡の少領以上の官司に、三等以上の親の連任を聽さる、	二四
神龜元年(七二四)			
八月二十一日		土師宿禰豐麻呂を遣新羅大使に任ず、翌二年五月二十三日、新羅より歸朝す、	二四
神龜年中			
某	歲	大宰府、宗像郡の百姓宗形部津麻呂を、對馬に食糧を送る船の梶師となす、	二四
天平元年(七二九)			
四月五日		筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣島麻呂、神齋に供奉すべき狀を奏し、外從五位下を授けられ、物を賜はる、	二六

八月五日	詔して、諸國の天神地祇は長官をして致祭せしめ給ふ、	二六
天平二年(七三〇)		
閏六月十七日	霹靂により畿内七道の諸社に奉幣す、	二六
十月二十九日	渤海の信物を諸國の名神社に奉る、	二七
十一月	大伴坂上郎女、大宰府より歸京の際、宗像郡名見山を越え、歌を詠す、	二七
天平四年(七三二)		
正月二十日	角朝臣家主を遣新羅使に任ず、尋で二月二十七日、角朝臣ら拜朝す、	二七
七月五日	旱により、天神地祇名山大川に祈雨奉幣し、賑給を加へ大赦す、	二七
八月十一日	遣新羅使ら歸國す、	二七
八月十七日	多治比真人廣成を遣唐大使に、中臣朝臣名代を副使に任ず、仍て九月四日、近江・丹波・播磨・備中等の國に、遣唐使のため船四隻を建造せしむ、	二八
天平五年(七三三)		
三月二十一日	遣唐大使多治比真人廣成ら拜朝す、尋で閏三月二十六日、廣成らに節刀を授く、仍て	
四月三日	遣唐使船四隻、難波津より進發す、	二八
八月	日本國使真人廣成、入唐朝貢す、	二三
是	山背國愛宕郡某郷計帳に、戸口宗方君族入鹿らの名見ゆ、	二六
天平六年(七三四・開元二十二年)		
四月十二日	使を畿内七道の諸國に遣し、地震に破損せる神社を檢看せしむ、	二九
是	日本國使入唐朝貢す、	二九
十一月二十日	遣唐大使多治比真人廣成・入唐僧玄昉ら、多福島に歸着す、	三〇
天平七年(七三五)		

三月十日	遣唐大使唐より歸朝し、節刀を進む、尋で入唐留學生吉備眞備、唐禮・太衍曆經等を獻ず、また入唐使秦大麻呂、問答六卷を獻ず、……………	二〇
八月十二日	大宰府管内に疫死するもの多し、仍て部内神祇に奉幣し、民のために祈禱せしむ、……………	二三
天平八年(七三六)		
二月二十八日	阿倍朝臣繼麻呂を遣新羅大使に任ず、尋で繼麻呂ら拜朝し、六月、筑紫より入海す、……………	二四
八月二十三日	遣唐副使中臣朝臣名代ら、唐人・波斯人を率ゐて拜朝す、……………	二五
十一月三日	遣唐副使中臣朝臣名代らを昇敍す、……………	二五
是 歲	伊豫國正稅帳に大唐使中臣朝臣の名見ゆ、……………	二五
是 歲	薩摩國正稅帳に遣唐使第二船供給額稻の名見ゆ、……………	二六
天平九年(七三七)		
正月二十七日	遣新羅使大判官壬生使主字太麻呂ら歸朝して、新羅の禮を失して使の旨を受けざることを奏す、尋で、遣新羅副使大伴宿禰三中ら拜朝す、……………	二六
四月十九日	大宰府管内に疫瘡流行し、死する者多きを以て、部内の諸社に奉幣し、賑恤を行ふ、……………	二六
八月十三日	詔して諸國の驗有る神の、未だ幣帛に預らざるものを、悉く供幣の例に入る、……………	二六
十一月三日	使を遣し、畿内七道に諸神社を造らしむ、……………	二六
是 歲	豐後國正稅帳に遣新羅使料の名見ゆ、……………	二六
天平十年(七三八)		
二月十九日	筑紫宗形神主外從五位下宗形朝臣鳥麻呂、外從五位上に昇敍せらる、……………	二七
天平十一年(七三九)		
十月二十七日	遣唐判官平群朝臣ら、歸朝し入京す、……………	二七
十一月三日	遣唐判官平群朝臣廣成拜朝す、……………	二七

十二月二十一日 平群廣成、正五位上に昇敘せらる、	六
天平十二年(七四〇)	
正月 十三日 正六位上宗形朝臣赤麻呂、外從五位下に昇敘せらる、	六
三月 十五日 紀朝臣必登を遣新羅大使となす、四月二日、拜辭す、	六
九月 二十一日 使船、長門國來泊を報ずるによつて、勅して物資を長門國に留置す、十月十五日、遣新羅使紀朝臣必登ら歸朝す、	六
十一月 二十一日 宗形朝臣赤麻呂、外從五位上に昇敘せらる、	六
天平十三年(七四一)	
正月 十一日 伊勢大神宮及び七道諸社に奉幣して、恭仁京遷都を告げ給ふ、	六
是 歲 藤原廣嗣の靈威現るるにより、吉備眞備、宗像郡に下向し、宗像社より圓座御幣を受	六
け、怨心を和らげしと傳ふ、	六
天平十四年(七四二・景德元年・天寶元年)	
十 月 日本國使新羅に至るも納めず、	七
是 歲 日本國使入唐す、	七
天平十七年(七四五)	
正月 七日 外從五位上宗形朝臣赤麻呂、外正五位上に昇敘せらる、	七
五月 八日 諸國の神社に奉幣して雨を祈る、	七
六月 十四日 筑前國宗形郡大領外從八位上宗形朝臣興呂志、外從五位下に昇敘せらる、	七
十一月 十日 經師等調度充帳に大唐使の名見ゆ、	七
天平十九年(七四七)	
七月 七日 名山に奉幣し、諸社に雨を祈る、	七

天平勝寶元年（七四九）

二月二十二日 陸奥國より始めて黄金を貢するにより、畿内七道の諸社に奉幣して、之を告げ給ふ、……………一七二

天平勝寶二年（七五〇）

八月二十八日 造東大寺司解に宗形船依の名見ゆ、……………一七二

九月二十四日 藤原朝臣清河を遣唐大使に、大伴宿禰古麻呂を遣唐副使に任ず、……………一七三

天平勝寶三年（七五一）

二月 十七日 遣唐使雜色人百十三人に位を授く、……………一七三

四月 四日 伊勢大神宮・畿内七道の諸社に奉幣して、遣唐使の平安を祈らせ給ふ、……………一七三

十一月 七日 吉備朝臣眞備を遣唐副使となす、……………一七三

天平勝寶四年（七五二）

正月 二十五日 山口忌寸人麻呂を遣新羅使となす、……………一七五

三月 三日 遣唐使ら拜朝す、尋で閏三月九日、遣唐副使以上を内裏に召し、大使藤原朝臣清河に節刀を授け、各昇敘す、……………一七五

十一月 十七日 僧法榮、優婆塞として宗形部岡足を貢進す、……………一七六

天平勝寶五年（七五三・天寶十二載・景德十二年）

二月 九日 小野朝臣田守を遣新羅大使に任ず、……………一七九

三月 月 倭國唐に入貢す、……………一七九

八月 月 日本國使新羅に至る、……………一七九

天平勝寶六年（七五四）

正月 十六日 遣唐副使大伴古麻呂ら、唐僧鑑眞を隨へ歸朝す、尋で十七日、大宰府、入唐副使吉備眞備の船益久嶋に來着の由を奏す、……………一八〇

正月 三十日	遣唐副使大伴古麻呂、唐朝正月朝賀の狀を奏す、	一八〇
三月 十七日	大宰府、入唐第一船の消息を奏す、	一八五
四月 七日	入唐廻使大伴宿禰古麻呂・吉備朝臣眞備らを昇敍す、尋で十八日、大宰府、入唐第四船の薩摩國石籬浦に來泊せる由を注進す、	一八五
七月 十三日	入唐判官布勢朝臣人主を昇敍す、	一八六
十一月 十一日	大唐學問生船連夫子に外從五位下を授くるも、受けず、	一八六
天平寶字二年（七五八）		
三月 十六日	遣唐使船播磨・速鳥に、從五位下を賜ふ、	一八六
六月 二十一日	寫千卷經所錢并紙衣等納帳に宗形若萬呂の名見ゆ、	一八六
八月 十九日	伊勢大神宮及び諸國の神社に奉幣して、淳仁天皇即位を告げ給ふ、	一九三
天平寶字三年（七五九）		
正月 三十日	迎入唐大使使に高元度を任ず、尋で二月朔日、高麗國王、前年入唐の藤原清河を、日本國使と共に迎へんことを奏す、	一九三
二月 十六日	高麗國使揚承慶、迎入唐大使使高元度と共に歸國す、	一九三
六月 十六日	無位宗形王、從四位下を授けらる、	一九三
十月 十八日	迎藤原清河使判官内藏全成ら、渤海國使高南申と共に對馬に歸着す、唐の安祿山・史思明の亂により、その害を恐れるの故なり、迎入唐大使中、大使高元度ら十一人のみ唐に赴くを報ず、	一九四
天平寶字四年（七六〇）		
正月 五日	渤海國使高南申、在唐せる藤原清河の上表・貢物を獻ず、仍て二月二十日、在唐の大使藤原清河を文部卿となす、	一九四

三月 十三日 諸國の祝部等をして皇太后の御不豫御平復を禱らしむ、……………一四

天平寶字五年（七六一）

八月 十二日 迎藤原河清使高元度、唐國より歸る、唐國の送使沈惟岳らを大宰府に安置す、……………一五

十月 十日 上毛野公廣濱らを安藝國に遣し、遣唐使船四隻の建造を命ず、尋で二十二日、仲真人

石伴を遣唐大使に、石上朝臣宅嗣を副使に任ず、……………一五

天平寶字六年（七六二）

正月 九日 從四位下宗形王、右大舍人頭に任ぜらる、……………一六

三月 朔日 遣唐副使石上朝臣宅嗣を罷め、藤原朝臣田麻呂を副使となす、尋で四月十七日、遣唐

使船一隻に乗り、安藝國より難波江口に到り坐礁破壊す、仍て遣唐使を罷め、送唐人

使となし、中臣朝臣鷹主を任ず、……………一六

七月 送唐人使中臣朝臣鷹主ら、便風なく渡海し得ず、仍て八月九日、送客使らは入京する

を聽し、水手は歸郷せしむ、……………一六

十一月二十六日 天下の神祇に奉幣す、尋で二十八日、天下の群神に奉幣す、……………一六

天平寶字七年（七六三）

正月 九日 在唐大使藤原朝臣清河を常陸守に任ず、……………一七

十月 六日 遣唐留學生高内弓・學問僧ら、送渤海使板振鎌束の船にて歸朝す、……………一七

十二月 三十日 大宰帥藤原惠美朝臣眞先宅、造東大寺司に宛て宗形石麻呂、上日三十日の旨を牒す、……………一七

天平寶字八年（七六四）

正月 七日 在唐大使藤原清河を從三位に敘す、……………一八

天平神護元年（七六五）

正月 七日 諸國の神祝に各位一階を加ふ、……………一八

十一月五日	使を遣し、諸國の神社を修造せしむ、……………	一六
神護景雲元年（七六七）		
八月四日	是より先、筑前國宗形郡大領外從六位下宗形朝臣深津、僧壽應の勸めにより、同郡金埜に船瀬を築造す、是日、深津、その功により外從五位下に昇敘せられ、その妻無位竹生王も從五位下を授けらる、……………	一六
神護景雲三年（七六九）		
二月十六日	諸社に神服を奉る、……………	一六
寶龜元年（七七〇）		
三月四日	前年（神護景雲三年十一月十二日）到着の新羅使金初正ら、在唐大使藤原清河・朝衡の書を持ち來る、……………	一六
十月朔日	大神宮を始め諸社の禰宜等に位一階を賜ふ、……………	一六
寶龜二年（七七二）		
三月五日	諸國をして疫神を祭らしむ、……………	一六
十一月朔日	入唐使船四隻を安藝國に於て建造せしむ、……………	一六
寶龜三年（七七二）		
正月三日	無位宗形王、從五位下を授けらる、……………	一六
寶龜四年（七七三）		
七月十日	諸國をして疫神を祭らしむ、……………	一六
寶龜五年（七七四）		
三月四日	新羅國使金三玄ら大宰府に到る、在唐大使藤原河清の書持來るも、前禮に違ふにより之を放還す、……………	一六

寶龜六年（七七五）

四月 七日	河内・攝津の鼠害により、諸國の群神に奉幣す、	101
四月 十日	勝寶四年の入唐使第四船の梶師川部酒麻呂を、外從五位下に敘す、	101
六月 十九日	佐伯宿禰今毛人を遣唐大使に、大伴宿禰益立・藤原朝臣鷹取を副使に任じ、安藝國に於て使船四隻を建造せしむ、	101
八月二十九日	羽栗翼を遣唐准判官となす、	101

寶龜七年（七七六）

四月 十五日	遣唐大使佐伯今毛人宿禰に節刀を賜ふ、	103
八月 一日	天下の群神に奉幣す、	104
閏八月 六日	遣唐使船、信風の期を失して博多大津に歸り、大宰府に留りて、來夏を待たんことを請ふ、勅して之を聽す、	104
十一月 十五日	遣唐大使佐伯宿禰今毛人、歸京して節刀を進む、	104
十二月 十四日	遣唐副使大伴宿禰益立を停めて、小野朝臣石根・大神朝臣末足を副使となす、	104
是 歲	宗像社を造營すとの説あり、	105

寶龜八年（七七七）

正月 三日	遣唐副使小野朝臣石根を兼ねて播磨守となす、	105
二月 六日	遣唐使、春日山下に於て天神地祇を拜す、副使小野朝臣石根、祭祀を修す、	105
四月 十七日	遣唐大使佐伯宿禰今毛人ら辭見す、大使佐伯宿禰今毛人、羅城門に到り、病と稱して留る、仍て二十二日、遣唐副使小野石根先發し、大使の事を代行せしむ、	105
六月 朔 日	勅して、遣唐副使小野朝臣石根らを先發せしむ、	105
十月 十三日	從五位下宗形王、右大舍人頭に任ぜらる、	106

寶龜九年（七七八・大曆十三年）

正月 日本國使入唐朝貢す、……………二〇六

三月二十七日 伊勢大神宮及び天下の諸神に奉幣して、皇太子の御不豫を告げ給ふ、……………二〇六

四月 十四日 宗形郡大領外從八位上宗形朝臣大德、外從五位下に昇敘せらる、……………二〇七

十月二十二日 遣唐使判官小野朝臣滋野の第三船、唐國押送使と肥前國松浦郡橋浦に歸着す、……………二〇七

十月二十五日 大宰府、遣唐使判官小野滋野到泊の由を奏す、……………二〇八

十一月 十日 遣唐第四船、薩摩國甕嶋郡に歸着す、……………二〇八

十一月 十三日 遣唐第二船、薩摩國出水郡に歸着す、第一船は難破す、……………二〇九

十一月 十八日 唐客を送るための船二隻の建造を、安藝國に命ず、……………二一〇

十二月 十七日 布勢朝臣清直を送唐客使、甘南備真人清野・多治比真人濱成を判官に任ず、……………二一〇

寶龜十年（七七九）

二月 四日 故入唐大使藤原清河・副使小野石根を昇敘す、……………二一〇

二月 十三日 大宰少監下道朝臣長人を遣新羅使に任ず、……………二一〇

二月 二十三日 從五位下宗形王、紀伊守に任ぜらる、……………二一一

三月 十日 遣唐副使大神朝臣末足ら、唐國より歸る、……………二一一

四月 二十一日 遣唐副使大神朝臣末足・判官小野朝臣滋野・大伴宿禰繼人ら昇敘す、……………二一一

七月 十日 大宰府、遣新羅使下道朝臣長人、遣唐判官海上真人三狩らを率ゐる歸朝の由を奏す、……………二一一

寶龜十一年（七八〇・建中元年）

正月 五日 新羅使、御調を貢し、兼ねて元正を賀す、是時、遣唐判官海上三狩らを進む、……………二一二

二月 月 日本國使入唐朝貢す、……………二一二

是 歲 遣唐錄事羽栗臣翼、五紀曆經を貢す、……………二一二

天應元年（七八一）

六月二十四日 送唐客使布勢朝臣清直ら唐より歸朝し、節刀を進む、……………三二四

九月二十二日 送唐客使布勢朝臣清直らを昇敍す、……………三二四

是 歲 田島の邊津宮に宗像三所大神を合祀すと傳ふ、……………三二四

延暦元年（七八二）

是 歲 勅により、宗像宮を創造すとの説見ゆ、……………三二六

延暦二年（七八三）

二月二十九日 從五位下宗形王、從五位上に昇敍せらる、……………三二七

延暦三年（七八四）

四月二日 從五位上宗形王、大炊頭に任ぜらる、……………三二七

十二月六日 大祓により畿内七道の天神地祇に奉幣す、……………三二七

延暦七年（七八八）

二月二十二日 神祇官符により、宗像氏の中より、潔清廉貞、祭事に堪ふる者をもつて、神主に補し、

六年を限りて交替せしむ、……………三二七

五月二日 伊勢神宮及び七道の名神に雨を祈る、……………三二七

延暦九年（七九〇）

七月二十四日 從五位上宗形王、讃岐守に任ぜらる、……………三二八

(三) 平安時代

延暦十三年（七九四）

三月四日 少僧都傳燈大法師位等定らを筑前宗像社他二社に遣し、神前に讀經せしめ、度僧を置

九月二十八日	遷都及び征蝦夷のため、諸國名神に奉幣す、	三三
延曆十六年（七九七）		
六月十八日	畿内七道諸國の名神に奉幣して、萬國の安寧を祈る、	三二
延曆十七年（七九八）		
二月二十四日	宗像郡大領兼神主外從五位下宗像朝臣池作卒去す、爾來、適材なく供祭を闕く、	三二
三月十六日	宗像郡大領、譜第の選を永く停廢し、才能の仁を之に充つ、	三二
九月七日	祈年の幣帛を奉るべき神社を定め、僻遠の諸國の神社には、當國の物を用ひて奉幣せしむ、	三三
十月十二日	官符を下し、出雲國造及び筑前國宗像神主の神事に托して、百姓の女子を娶り、神宮采女と號して妾となすことを禁ず、	三三
延曆十八年（七九九）		
四月十六日	大伴宿禰麻呂を遣新羅使に任ずるも、五月二十九日、遣新羅使を停む、	三三
延曆十九年（八〇〇）		
十二月四日	是より先、大宰府、宗像郡大領の宗像神主を兼帶することにつき、官裁を請ふ、是日、太政官符を下して、宗像郡大領の宗像神主を兼帶することを禁ず、	三四
延曆二十年（八〇一）		
八月十日	藤原葛野麻呂を遣唐大使に、石川道益を副使に任ず、	三四
延曆二十二年（八〇三）		
三月六日	藤原河清に正二位を贈る、尋で十四日、遣唐使に彩帛を賜ふ、	三六
三月十八日	遣唐使拜朝し、二十九日、賜錢、天皇、遣唐使に御製を賜ふ、	三六

四月 二 日	遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂に節刀を授く、	三二七
四月 十六日	遣唐使、難波津を進發するも暴風雨に遭ひ、沈溺する者多し、	三二七
四月 二十八日	藤原葛野麻呂の上奏により、藤原貞嗣らを遣し、遣唐船・破損雜物を修造せしむ、	三二七
五月 二十二日	船舶の損壞のため渡海し得ざるにより、遣唐使節刀を奉還す、	三二七
七 月	新羅、日本國と交聘結好す、	三二七
閏十月 二十三日	僧最澄、渡海平安を祈らんがため、大宰府竈門山寺に藥師佛像を造る、	三二七
是 歲	大宰府、消息を新羅に送り、遣唐使派遣の由を告ぐ、	三二六
延曆二十三年(八〇四・哀莊王五年・貞元二十年)		
三月 五日	遣唐使拜朝す、	三二六
三月 二十五日	遣唐大使藤原葛野麻呂ら、殿上にて賜餞す、二十八日、遣唐大使藤原葛野麻呂に節刀を授く、	三二六
是 間	最澄、渡唐に際し、宗像孔大寺權現に參詣し、神明に圓戒を授くと傳ふ、	三二六
五 月	日本國使新羅に黄金を進む、	三二六
七 月	遣唐使船筑紫を發遣するも暴風に遭ふ、九月十八日、大伴宿禰岑萬里を新羅に遣し、遣唐使派遣の由を告ぐ、	三二六
十 二 月	日本國使入唐朝貢す、	三二〇
延曆二十四年(八〇五・貞元二十一年)		
二 月	唐帝、日本國王並に妻への回賜品を遣す、	三二二
六 月 八 日	遣唐使第一船、對馬嶋下縣郡に歸着す、十七日、遣唐使第二船、肥前國松浦郡に來到す、	三二二
七 月 朔 日	遣唐大使藤原葛野麻呂、節刀を進む、	三二二
七 月 十四日	葛野麻呂ら、唐國答信物を奉る、	三二三

七月十六日	大宰府、遣唐使第三船、肥前國の孤島に漂着せる由を奏す、	二四三
七月二十四日	親王參議らに唐國彩帛を賜ふ、	二四四
七月二十五日	遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂らを昇敘す、	二四四
八月九日	最澄、殿上に於て悔過讀經す、	二四四
八月十六日	故入唐副使石川道益に度僧一人を賜ふ、	二四四
十月十九日	入唐留學生粟田飽田麻呂に、正六位上を授く、	二四四
大同元年(八〇六・哀莊王七年・元和元年)		
正月二十八日	唐朝、日本國使大宰大監高階遠成を、中大夫試太子中允となす、	二四五
三月	日本國使新羅に至る、	二四六
四月二十四日	攝津國住吉大神に、遣唐使祈により從一位を授く、	二四六
十月二十二日	入唐僧空海歸朝す、遣唐判官大宰大監高階遠成に付して、請來法文の表を上る、	二四六
十二月十三日	遣唐判官高階遠成に従五位上を授く、	二四七
是歲	諸國の神寺諸家の封戸を牒上す、宗像神は七十四戸なり、	二四七
大同二年(八〇七)		
八月八日	神寶並に唐國信物を伊勢神宮に奉る、	二四八
大同三年(八〇八・哀莊王九年)		
二月	日本國使新羅に至る、	二四八
大同四年(八〇九)		
正月十八日	諸國名神に、大般若經一部を書寫奉讀せしむ、	二四九
四月十六日	勅して諸國神社修造の遅れを戒しめ、所在の長官をして專當せしめ給ふ、	二四九
五月一日	諸國の天神地祇に奉幣し、卽位の由を告ぐ、	二四九

弘仁二年(八一)	七月 十七日 安藝國伊都岐嶋神等、名神の例に預る、	二四九
	九月 二十三日 諸國神戸の百姓、供神の外、公役なきを以て、神社の破損を修理せしむ、	二五二
弘仁三年(八二)	五月 三日 有封の神社は神戸を以て修造せしむ、	二五三
	七月 朔日 疫旱あるにより、天下の名神に奉幣す、	二五二
弘仁四年(八一三)	十月 三日 豊稔報賽のため、名神に奉幣す、	二五二
是 歲	宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足歿す、	二五二
弘仁五年(八一四)	六月 一日 新撰姓氏錄を奏進す、中に宗形朝臣・宗形君の名見ゆ、	二五三
	九月 十五日 豊稔報賽のため名神に奉幣す、	二五四
弘仁七年(八一六)	七月 二十日 止風雨のため、畿内七道諸國の名神に奉幣す、	二五四
弘仁八年(八一七)	正月 七日 正六位上宗形朝臣勝麿を外從五位下に昇敘す、	二五四
弘仁十一年(八二〇)	六月 二十六日 名神に奉幣し雨を祈る、	二五四
弘仁十二年(八二一)	八月 三日 秋稼豊稔のため名神に奉幣す、	二五四
弘仁十三年(八二二)		

七月六日 諸國炎旱により、群神に奉幣せらる、	二五四
弘仁十四年(八二三)	
五月朔日 諸國の名神に奉幣し、即位の由を告ぐ、	二五五
天長元年(八二四)	
五月二日 五畿七道の名神に奉幣し、疫氣を謝す、	二五五
八月朔日 止風雨のため名神に奉幣す、	二五五
天長四年(八二七)	
五月二十一日 天下の名神に奉幣して雨を祈る、	二五五
天長五年(八二八)	
正月七日 外從五位下宗形朝臣勝麿を外從五位上に昇叙す、	二五五
三月二十八日 故宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足の妻、難波部安良賣の貞節を褒賞し、位二階を叙し、且つ戸口の租を免ず、	二五五
天長六年(八二九)	
二月二十日 五畿七道の名神に奉幣して雨を祈る、	二五六
天長七年(八三〇)	
七月十二日 攘災のため、五畿内七道諸國の名神に奉幣す、	二五六
天長八年(八三一)	
八月五日 防風雨のため名神に奉幣す、	二五七
天長九年(八三二)	
七月十五日 防風雨のため、五畿七道諸國の名神に奉幣す、	二五七
天長十年(八三三)	

三月 八日 諸國の天神地祇に奉幣して、即位の事を告げ給ふ、……………二五七
六月 八日 天下の神社寺院を修理す、……………二五七
閏七月 朔日 洪水敗稼の攘防のため、諸國の名神に奉幣せしむ、……………二五七

承和元年（八三四）

正月 十九日 藤原朝臣常嗣を持節大使に、副使に小野朝臣篁を任ず、……………二五七
二月 二日 丹墀真人貞成を造船使長官に、朝原宿禰嶋主を次官とし、笠朝臣仲守・伴宿禰成益ら
を遣唐装束司に任ず、……………二五七

五月 十三日 遣唐大使藤原朝臣常嗣を兼ねて備中權守に任ず、……………二五八

六月 二十八日 祈雨のため、伊勢大神宮、及び畿内七道の名神に奉幣す、……………二五八

七月 朔日 遣唐大使藤原朝臣常嗣を兼ねて近江權守となす、……………二五八

八月 四日 伴宿禰氏上を造船使長官となす、……………二五八

八月 十日 遣唐錄事・准錄事・知乗船事等を任ず、尋で十四日、遣唐都匠三嶋公嶋繼を兼ねて阿
波權掾に任ず、……………二五八

八月 二十日 遣唐使に事力及び職田を賜ふ、……………二六〇

承和二年（八三五）

正月 七日 遣唐史生道公廣持に、當道朝臣の姓を賜ふ、……………二六一

正月 十一日 遣唐副使小野朝臣篁を兼ねて備前權守となす、……………二六一

二月 二日 長岑宿禰高名を遣唐准判官に、松川造貞嗣を錄事に任ず、……………二六一

二月 七日 遣唐使の錄事已上に度者を賜ふ、……………二六一

三月 十二日 大宰府の綿甲一百領・冑一百口・袴四百腰を、遣唐船不虞の備に充つ、……………二六二

五月 十三日 遣唐判官長岑宿禰高名を兼ねて美作權介に任ず、……………二六二

七月二日	風雨の災を攘ふため、天下の名神に奉幣す、	二六二
十月十六日	遣唐譯語盧原公有子に朝臣の姓を賜ふ、尋で十九日、藤原朝臣貞敏を遣唐准判官に任ず、	二六二
十月二十七日	遣唐錄事松川造貞嗣に、高峰宿禰の姓を賜ふ、	二六三
十一月二十日	遣唐使知乘船事香山連清貞に、宿禰の姓を賜ふ、	二六三
十二月二日	遣唐大使藤原常嗣らに、遣唐使位を借す、	二六三
承和三年(八三六)		
正月二十五日	陸奥八溝黄金神に封戸二烟を充て、砂金を採得せしめ、遣唐の資に充つ、	二六三
二月朔日	遣唐使のために、北野に天神地祇を祠る、尋で七日、遣唐使、賀茂社に奉幣す、	二六三
二月九日	天皇、遣唐大使・副使を紫宸殿に引見し祿を賜ひ、尋で、八省院に於て、遣唐使史生已下に位記を賜ふ、	二六三
四月十日	遣唐使、八省院にて朝拜す、尋で二十四日、遣唐大使藤原朝臣常嗣・副使小野朝臣篁らに餞宴を賜ふ、	二六四
四月二十六日	遣唐使のために、五畿内七道の名神に奉幣す、	二六四
四月二十九日	遣唐使に節刀を賜ふ、尋で三十日、遣唐判官長岑宿禰高名に従五位下を授く、	二六四
五月二日	遣唐副使小野朝臣篁の請により、小野神に従五位下を授く、	二六五
五月九日	遣唐使の平安のため、河内國河内郡從四位下比賣神に従四位上を授く、	二六五
五月十日	在唐中歿せる入唐使・留學生八人に贈位し、幽魂を慰む、	二六六
五月十二日	藤原朝臣助衡を攝津難波海口に派し、遣唐使發遣を慰勞す、	二六六
五月十三日	遣唐使、難波にて乗船し、翌十四日、解纜す、	二六七
五月十八日	大風のため、入唐船寄宿の攝津國輪田泊に田邊吉備成を遣して、その安危を問はしむ、	二六七

五月二十二日	遣唐使のために、天智天皇・光仁天皇・桓武天皇・神功皇后らの御陵に奉幣し、その平安を祈る、……………	二六七
閏五月 八日	遣唐音聲長良校宿禰清上らを右京七條二坊に貫附す、……………	二六八
閏五月 十三日	遣唐使扶助要請のため、新羅に紀三津を遣す、……………	二六八
七月 十五日	五穀垂穂のため、五畿七道諸國の名神に奉幣し給ふ、是日、大宰府馳驛して、今月二日遣唐使四船發航の由を奏す、……………	二六八
七月 十六日	疫病間發するにより、五畿七道諸國司に令して、般若經を轉讀せしめ給ふ、是日、大宰府馳驛して、遣唐第一船及び第四船、漂蕩の狀を奏す、……………	二六九
七月 十七日	大使藤原朝臣常嗣らの乗船せる第一船・第四船を、再發の期まで府館に安置し修造せしむ、……………	二六九
七月 二十日	大宰府馳驛して、遣唐第三船の水脚、對馬嶋南浦に漂着せる由を奏す、……………	二七〇
七月二十四日	大宰府馳驛して、遣唐第二船小野朝臣篁の船、肥前國別島に漂着せる由を奏す、……………	二七〇
八月 朔日	大宰府馳驛して、遣唐第三船の水手等漂着の狀を奏す、……………	二七一
八月 二日	大宰府の奏により、遣唐使人等は入京、水脚等は歸郷せしめ、遣唐判官・錄事は府司と共に遣唐船を修造せしむ、……………	二七一
八月 四日	遣唐第三船の九人は肥前國に漂着す、……………	二七一
八月 八日	大宰府に命じて遣唐第二船の乗員存亡知れざる者多きをもつて、海邊・絶島へ漂着せる者を尋ね求めしむ、……………	二七一
八月 二十日	大宰府、僧眞濟らの、遣唐第三船漂蕩の狀を報ず、……………	二七二
八月二十五日	大宰府馳驛して、遣新羅使の發遣並に遣唐第三船對馬島に漂着せる由を奏す、……………	二七二
九月 十五日	遣唐大使・副使等、大宰府より入京す、……………	二七三

九月二十五日	伴宿禰氏上を修理遣唐舶使長官、三嶋公嶋繼を次官に任ず、	二七二
十月二十二日	遣新羅使紀三津、大宰府に歸る、	二七二
十一月朔日	勅により、五畿七道の神社に法華經を讀ましむ、	二七二
十二月三日	遣新羅使紀三津、復命す、	二七三
承和四年(八三七)		
二月朔日	遣唐使、天神地祇を山城國愛宕郡家門前に祠る、十三日、遣唐大使藤原朝臣常嗣、大宰權帥を兼任す、	二七四
三月五日	遣唐知乘船事槻本連良棟、安堀宿禰の姓を賜はる、	二七四
三月十一日	遣唐大使藤原常嗣・副使小野篁に賜餞、尋で、常嗣ら朝拜し、節刀を受く、	二七四
三月十九日	遣唐大使藤原常嗣、鴻臚館を出でて、大宰府に向ふ、仍て伊勢大神宮に奉幣し給ふ、尋で二十四日、遣唐副使、鴻臚館を發して大宰府に向ふ、	二七四
(四九) 五月五日	遣唐第一船大平良に、從五位下を授く、	二七五
六月二十八日	風雨豫防のため、五畿七道諸國の名神に奉幣す、	二七五
七月二十二日	大宰府馳驛して、遣唐三船、肥前國松浦郡旻樂埼を指して發航するも、逆風に遭ふを奏す、	二七五
八月二十日	大宰府、遣唐使三船漂廻の狀を奏す、	二七五
九月二十一日	石川朝臣橋繼を修理船使長官に、小野朝臣末嗣・長岑宿禰高名を次官に任ず、	二七五
承和五年(八三八・開成三年)		
三月二十七日	大宰府の監以上をして、國毎に一人、國司講師を率ゐて、國分寺及び香椎・八幡・宗像等の神宮寺に於て、遣唐使の往還平安を祈らしむ、	二七六
四月五日	遣唐使進發の日より歸朝の日まで、五畿七道諸國に海龍王經を轉讀せしむ、	二七六

四月二十八日	使を遣し、遣唐使の出發遲怠を勸發せしむ、	二七六
五月三日	遣唐使の上奏により、五畿七道諸國に令して今月中旬より歸朝の日に至るまで、海龍王經と併せて大般若經を轉讀せしむ、	二七六
六月十七日	遣唐第一・第四兩船、博多津を發航す、	二七七
六月二十二日	勸發遣唐使藤原朝臣助、副使小野朝臣篁の病により進發不能の由を奏す、	二七九
七月五日	大宰府、遣唐使第一・第四船進發の由を奏す、	二七九
七月十七日	秋稼のため諸國の名神に奉幣す、	二七九
七月二十九日	大宰府、遣唐第二船進發の由を奏す、	二七九
八月三日	遣唐使藤原常嗣の表奏到來す、	二七九
十二月十五日	是より先、小野篁、大使藤原常嗣と船を爭ひ、遂に發航せざるの故をもつて、是日、隱岐國に遠流せらる、	二八〇
十二月	日本國使入唐朝貢す、	二八四
承和六年(八三九・開成四年)		
閏正月	日本國使入唐朝貢す、	二八四
三月朔日	遣唐使歸朝の日まで、五畿七道諸國及び十五大寺に令して、大般若經及び海龍王經を轉讀せしむ、尋で、十六日、知乗船事・留學生等の逃亡せし者を佐渡國に遠流す、	二八五
三月二十二日	遣唐大使藤原常嗣ら、歸朝のため乗船す、	二八五
四月二十日	七道諸國の名神に、祈雨のため奠幣す、	二八七
八月十三日	勅により、西成を期すため、内外諸國の神祇に奉幣す、	二八七
八月十四日	大宰大貳南淵永河ら、飛驒して、遣唐錄事大神宗雄の來着の由を奏す、尋で二十四日、大宰府馳驛して、遣唐使藤原常嗣歸着の由を奏す、	二八七

九月十六日	遣唐持節大使藤原常嗣、歸京し節刀を進む、仍て十七日、常嗣らに纏頭物を賜ふ、	二九〇
九月二十三日	紀伊國人名草直豐成ら、宿禰の姓を賜はり、右京四條四坊に貫附さる、	二九〇
九月二十八日	遣唐大使藤原朝臣常嗣を從三位、判官長岑宿禰高名を從五位上、判官菅原朝臣善主を從五位下に昇敘せらる、	二九一
十月六日	遣唐大使以下八省院に朝拜す、尋で九日、遣唐使錄事山代宿禰氏益の船、筑前國博多津に歸着す、	二九一
十二月六日	入唐僧圓行歸來す、尋で請來の法門佛舍利等を上る、	二九一
承和七年(八四〇)		
三月三日	大宰府及び緣海諸國をして、未だ歸還せざる遣唐第二船のために、火を舉げて、之を候はしむ、	二九二
四月八日	大宰府、遣唐知乗船事菅原梶成らの第二船、大隅國に漂着せる由を奏す、	二九二
四月二十一日	筑前國勳八等宗像神に、從五位下を授く、	二九二
六月三日	常曉の請により、山城國法琳寺に大元帥靈像を安置し、修法するを許す、	二九三
六月五日	菅原梶成ら南海に漂着の際、得る所の兵器を獻ず、	二九三
六月十五日	内外諸國の神祇に奉幣して、甘雨を祈請す、	二九三
六月十八日	大宰府馳驛して、遣唐第二船准判官良岑長松ら、大隅國に廻着せる由を奏す、	二九三
六月二十九日	勅により五畿七道の名神に、風雨豫防のため奉幣す、	二九三
七月二十六日	出羽國飽海郡大物忌神に、遣唐使第二船南海漂着時の神助により、從四位下を授け奉る、	二九三
九月二十三日	大宰府の大主城一員を廢して、主厨・主船の二員を置く、	二九四
九月二十六日	入唐廻使判官已下水手已上の三百九十一人に加階す、	二九五

承和八年（八四一）	
正月二十三日	遣唐陰陽師春苑宿禰玉成、在唐中得し難義書一卷を、陰陽寮諸生に傳學せしむ、……………二九五
七月二十一日	勅により、五畿七道の名神に嘉穀の奠幣をなす、……………二九五
承和九年（八四二）	
二月四日	伊勢大神宮及び諸社に、祈年の奉幣をし給ふ、……………二九六
七月三日	祟あるにより、筑前國宗像神等の諸社に、使を遣して奉幣せしむ、……………二九六
九月二十日	來年、疫氣あるにより、防災のため伊勢大神宮に奉幣し、兼ねて天下の名神に奠幣し給ふ、……………二九六
承和十年（八四三）	
七月十日	百穀祈請のため、天下の名神に奉幣し給ふ、……………二九六
十二月九日	入唐留學僧圓載弟子仁好・順昌ら、長門國へ歸着す、……………二九六
承和十一年（八四四）	
七月二日	圓仁・圓載に旅資として黄金を賜ふ、……………二九六
承和十二年（八四五）	
五月十日	五畿七道諸國の名神に甘雨祈請のため、奉幣し給ふ、……………二九七
九月二十六日	筑前國宗形郡權主工從八位上難波部主足に美努宿禰の姓を賜ひ、河内國若江郡に貫す、……………二九七
承和十四年（八四七）	
七月八日	圓載の弟子仁好ら唐より來着す、尋で九月十八日、慧雲、孔雀等を獻す、……………二九七
十月二日	遣唐天台請益僧圓仁ら唐より歸着す、……………二九七
承和十五年（八四八・大中二年）	
三月二十六日	圓仁ら歸朝す、……………三〇四

是	月	日本國王入唐し、方物を貢す、	三〇五
六月	五日	留學僧圓載の願により、留住の延期を聽し、旅資として黄金を下賜す、	三〇五
六月	十日	雨害防止のため、五畿七道諸國の名神に奉幣し給ふ、	三〇五
嘉祥元年	(八四八)		
七月	十七日	大宰府、白龜を獻ずるにより、五畿七道の神祇に奉告す、	三〇五
十一月	二日	山城國無位櫟谷神、從五位下に敍せらる、	三〇五
嘉祥二年	(八四九)		
二月	二十五日	疫癘・洪水護防のため、五畿七道の名神に奉幣せしむ、	三〇六
嘉祥三年	(八五〇)		
二月	十五日	圓仁、仁壽殿に於て、文殊八字法を修す、	三〇六
七月	二十六日	宗形朝臣豐子、從五位下に敍せらる、	三〇六
七月	二十九日	筑前國織幡神に從五位下を授く、	三〇六
八月	五日	文德天皇、即位の由を五畿七道の諸神に告げ給ふ、	三〇七
九月	二十六日	五畿七道の名神に班幣して、賀瑞の由を告ぐ、	三〇七
十月	七日	筑前國宗像神、從五位上に昇敍せらる、	三〇七
是	歲	留學僧圓載を傳燈大法師に任ず、	三〇七
仁壽元年	(八五一)		
正月	二十七日	詔して、天下の諸神を正六位上に敍し給ふ、	三〇八
仁壽二年	(八五二)		
四月	八日	使を遣して、五畿七道の名神に奉幣し給ふ、	三〇八
十月	五日	地震により、中臣・忌部兩氏人を遣して、五畿七道の諸神社に奉幣し給ふ、	三〇八

仁壽三年（八五三・大中七年）

二月 三日 筑前國宗像神、正五位下に昇敍せらる、……………三〇九

四 月 日本國王子入唐朝貢す、……………三〇九

齊衡元年（八五四）

四月 三日 傳燈大法師智戒らを、七道名神の諸社に遣し、大般若經を轉讀、民福を祈らしむ、……………三〇九

十二月 十三日 賀瑞により、諸國の諸神に奉幣し給ふ、……………三〇九

齊衡三年（八五六）

八月 五日 伯耆國宗形神、從五位上に敍せらる、……………三〇九

天安元年（八五七）

二月 十七日 使を遣し、内外諸名神社に賀瑞を告げ、宣制す、……………三〇九

十月 二 日 筑前國正四位下勳八等宗像神、正三位に昇敍せらる、……………三〇

天安二年（八五八）

閏二月 二十六日 筑前國正四位下勳八等田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、並に正三位に昇敍せらる、……………三〇

四月 十日 諸名神に奉幣す、……………三〇

四月 十一日 諸大神社に奉幣し、天下平安を祈る、……………三〇

貞觀元年（八五九）

正 月 二十七日 筑前國正三位勳八等田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、並に從二位に昇敍せらる、……………三二

二 月 一 日 清和天皇、即位の由を、五畿七道の諸神に告げ給ふ、……………三二

二 月 二十七日 五畿七道に下知し、諸神社を修理せしむ、……………三二

二 月 三十日 筑前國從二位勳八等田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、並に正二位に昇敍せらる、是……………三二

日、太政大臣藤原良房東京一條第の宗像三神を正二位に敍す、……………三二

三月二十六日	安藝國伊都岐嶋中子天神、從五位下に敘せらる、	三三
七月十三日	奉幣使發遣につき、大祓を行ふ、	三三
十月七日	畿内畿外の諸國に奉幣して、風雨の災なきの神恩を報賽し給ふ、	三三
十月二十八日	鑄錢司、新鑄錢を諸名神社並に諸山陵に奉る、	三三
貞觀二年(八六〇)		
二月八日	肥前國田嶋神を從四位上に敘す、	三三
貞觀三年(八六一)		
二月七日	遣唐使者、攝津國住吉神社に向ひ神寶を奉る、	三三
貞觀五年(八六三)		
三月四日	神恩報賽のため、勅により七道諸國の名神に奉幣し給ふ、	三三
七月四日	諸名神社に班幣す、	三三
貞觀六年(八六四・景文王四年)		
正月七日	伊勢大神宮以下諸社の禰宜に、位一階を賜ふ、	三三
四月	日本國使新羅に至る、	三四
七月十七日	五畿七道諸國の大小諸神に奉幣す、	三四
十月十一日	太政大臣藤原良房第内の宗像三女神に、位一階を進め從一位に敘す、	三四
貞觀七年(八六五)		
二月十日	詔により、五畿七道の大小の諸社の長官に潔齋して奉幣せしむ、	三四
四月二日	近江國奥嶋神の託宣あり、	三五
四月十七日	内藏頭從五位上藤原朝臣安方を、太政大臣の東京一條第の宗像社に遣し、楯・鉾・鞍を奉獻して、寶祚の安泰と國家の無事を祈らしむ、	三五

五月二十五日	五畿七道諸神社の祝部に、白丁を補するを停む、	三六
貞觀八年(八六六)		
三月八日	大安寺僧傳燈法師位一如を遣し、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後等の諸神社に於て、讀經せしむ、	三六
四月十四日	應天門の炎上により、五畿七道の諸社に奉幣せしむ、	三六
六月九日	五畿七道に祈雨奉幣し、兼ねて金剛般若經を轉讀せしむ、	三六
七月三日	祈雨のため、宮城及び五畿七道の諸神に奉幣し給ふ、	三六
七月十六日	天下水害多く、五畿七道の諸神に奉幣して、金剛般若經を轉讀せしむ、	三七
十一月十七日	新羅寇賊防止のため、大宰府及び能登・因幡等の國府をして、諸神に奉幣し、健兒統領選士等に訓練を加へしむ、	三七
貞觀九年(八六七)		
十月十三日	安藝國伊都岐嶋神等に位階一階を加ふ、中に伊都嶋宗形小專神あり、	三七
十一月十三日	疫癘風雨の災豫防に神恩あるにより、報賽のため、五畿七道の諸社に班幣す、	三七
貞觀十年(八六八)		
六月二十八日	大和國城上郡宗像神社は封戸神田なきにより、筑前の祖神の封物をもつて、神舎の修理料に充てしむ、	三八
閏十二月十日	山城國櫟谷神に正五位下を授く、	三八
貞觀十一年(八六九)		
三月三日	疫病防止のため、五畿七道の諸神に班幣し、并せて、金剛般若・摩訶般若經等を轉讀せしむ、	三八
十二月十七日	勅により五畿七道の諸神に班幣せしむ、	三九

貞觀十二年（八七〇）

二月 十五日 從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄を遣して、宗像大神他三社に奉幣し、新羅船入寇に對して鎮護を祈らしむ、……………三九

十一月 十七日 葛野鑄錢所近くの宗像・櫛谷・清水・堰・小杜五神に、新貨幣の豐足を祈る、……………三三

貞觀十三年（八七一）

四月 三日 肥前國宗形天神に從五位下を授く、……………三三

六月 十日 諸神社に班幣し雨を祈る、……………三三

閏八月 七日 大暴風雨により諸神社に止雨を祈請す、……………三三

十二月 十四日 災疫豫防のため、五畿七道の諸神に班幣し、國分二寺に經を轉讀せしむ、……………三三

貞觀十五年（八七三）

二月 二十三日 災疫豫防のため、五畿七道の諸神に班幣し、國分寺定額寺に於て經を轉讀せしむ、……………三四

九月 十六日 肥前國田嶋神・志々支神・宗形神等の神位を昇授す、……………三四

貞觀十七年（八七五）

十二月 十三日 水旱・疾疫・兵喪・火災の豫攘のため、五畿七道の名神に奉幣し、國分寺・定額寺に於て金剛般若經を轉讀せしむ、……………三四

貞觀十八年（八七六）

三月 九日 大宰權帥在原行平の起請により、壹岐嶋水田一百町を公營して對馬嶋年糧に充て、肥

前國松浦郡底羅・值嘉兩郷を以て二郡を建て、值嘉嶋を置く、……………三四

六月 八日 肥前國田嶋神、正四位下に昇敍せらる、……………三六

八月 二十五日 火災豫防のため、中臣・齋部の氏人六位已下を五畿七道の諸神社に遣し、班幣せしむ、……………三六

十月 五日 五畿七道諸國に班幣し、兵火あるべきを告ぐ、……………三六

元慶元年（八七七）

二月二十七日 陽成天皇の即位により、大中臣・齋部兩氏の六位已下を五畿七道の諸國に遣し、諸社

に奉幣せしむ、……………三七

九月二十五日 大嘗會により、中臣・齋部兩氏人を五畿七道諸國に遣し、天神地祇三千一百三十四神

に奉幣せしむ、……………三七

十二月八日 大宰府、資財・蕃客・遣唐使留置・返上等の四箇帳を奏し、貢綿一千百五十二屯を砂

金五百七十二兩に相博して、永貯となさんことを請うて聽さる、……………三七

十二月十五日 筑前國織幡神を正五位下に敘す、……………三七

元慶二年（八七八・憲康王四年）

三月九日 五畿七道の名神に奉幣し、宿禰を賽す、……………三八

八月 日本國使新羅に至る、……………三八

十二月十五日 備後國隱岐島神に従五位下を授く、……………三八

十二月二十四日 大宰府、新羅の凶賊、我が隙を窺ふとの託宣を奏するにより、兵部少輔平季長を遣し、

宗像大神等に奉幣せしむ、……………三八

元慶四年（八八〇）

三月二十七日 大和國城上郡宗像神、官社に列せらる、是神は筑前國宗像郡に坐す神と同神なり、……………三九

十月十三日 丹後國息津嶋神に正六位上を授く、……………三九

元慶五年（八八一）

三月二十六日 五畿七道の諸神社の祝部・氏人をして、本系帳を三年に一進せしむ、……………三九

十月十六日 大和國城上郡從一位勳八等宗像神社に、筑前國の本社に準じて、神主を置き、高階眞

人仲守をもつて之に補す、……………三九

元慶六年（八八二・憲康王八年）

四月 日本國王、使を新羅に遣し、黄金・明珠を進む、……………三三

元慶八年（八八四）

二月二十一日 光孝天皇の即位により、大中臣氏人等を遣して、五畿七道諸國の名神に奉幣せしむ、……………三三

十二月 十六日 肥前國田嶋神、正四位上に昇敍せらる、……………三三

仁和四年（八八八）

二月二十五日 宇多天皇の即位により、五畿七道の諸社に奉幣す、……………三三

十月 七日 大神宮及び諸社に奉幣す、……………三三

十一月 八日 大神寶使を發遣す、……………三三

寛平元年（八八九）

十二月二十五日 筑前國正二位市杵島姫神・湍津姫神・田心姫神、並に従一位に昇敍せらる、……………三三

寛平三年（八九一）

六月 二日 諸社に奉幣して雨を祈る、……………三四

八月 二十八日 長門國宗形神、從五位上に敍せらる、……………三四

寛平四年（八九二）

八月 十四日 旱魃・怪異により諸社に奉幣す、……………三四

寛平五年（八九三）

正月 十一日 怪異により、五畿七道諸國の神社に奉幣す、……………三四

三月 二日 諸國の社司神主等に檢察を加へ、四箇祭を敬祀せしむ、……………三四

十月二十九日 往昔、大和國城上郡宗像神社の、修理に充てたる筑前國宗像郡金崎の氏賤十六人を、

良として調庸を輸せしめ、代りて大和國城上郡等の徭丁を差して、修理料に充てしむ、……………三五

十一月三日	諸國の神社に各位一階を進む、	三六
寛平六年(八九四)		
四月十日	大宰府、飛驒使を上る、勅により、大宰府管内の諸社に奉幣す、	三六
四月二十日	諸社へ幣帛使を遣す、	三六
七月二十二日	在唐の僧中瓊に太政官返牒を與ふ、	三六
八月二十一日	菅原朝臣道眞を遣唐大使に、紀朝臣長谷雄を副使に任ず、	三七
九月十四日	遣唐大使菅原朝臣道眞、遣唐使進止につき議定を請ふ、	三八
九月三十日	遣唐使派遣を停む、	三八
是月	諸社に奉幣す、	三六
十月八日	筑前國宗形郡從一位勳八等田心姫神・市杵島姫神・湍津姫神、並に勳七等を授けらる、	三五
十一月五日	左大辨高階眞人忠岑の解狀により、筑前國從一位勳七等宗像大神、勳六等を授けらる、	三五
寛平八年(八九六)		
八月十八日	諸社に奉幣す、	三七
八月二十二日	諸社に奉幣す、	三七
寛平九年(八九七)		
七月九日	諸社奉幣使を發遣す、	三七
八月十七日	諸社に奉幣し雨を祈る、	三七
八月二十八日	五畿七道に使を遣して諸社に奉幣し、大嘗會を行ふべき由を告げしむ、	三七
十二月三日	五畿七道の諸社三百四十社に、各位一階を授け給ふ、	三七
昌泰元年(八九八)		
五月四日	旱により、僧智行らをして大名神社に讀經せしむ、	三七

七月二十日	諸國をして神寶幣帛を名神に奉獻せしむ、	三七
八月二十三日	五畿七道の諸名神に神寶奉獻の使者を發遣す、	三七
昌泰二年(八九九)		
七月十七日	諸社に奉幣す、	三六
延長五年(九二七)		
十二月二十六日	延喜式成る、中に宗像社及び遣唐使に關する諸制あり、	三六
後記		三七
索引		三七

宗像大神(三女神)の出現と鎮座

含付載資料

宗像三女神、天照大神と素戔嗚尊との天安河原における誓約により、出現し給ふ
本文

〔日本書紀〕^{神代上} 始素戔嗚尊、昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴响、此則神性雄健使之

然也、天照大神、素知其神暴惡、至聞來詣之狀、乃勃然而驚曰、吾弟之來、豈以善意乎、謂當

有奪國之志歟、夫父母既任諸子、各有其境、如何棄置當就之國、而敢窺窬此處乎、乃結髮爲髻、

縛裳爲袴、便以八坂瓊之五百箇御統、^{御統、此云美須臾}纏其髻鬘及腕、又背負千箭之鞞、^{此云千箭、此云與五百箇}

之鞞、臂著稜威之高鞞、^{稜威、此云伊都}振起弓彌、急握劍柄、蹈堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、^{蹴散、此云俱}

奮稜威之雄詰、^{雄詰、此云鳴多稽眉}發稜威之噴讓、^{噴讓、此云舉慮毗}而徑詰問焉、素戔嗚尊對曰、吾元無黑心、但父

母已有嚴勅、將永就乎根國、如不與姉相見、吾何能敢去、是以、跋涉雲霧、遠自來參、不意、

阿姉翻起嚴顏、于時、天照大神復問曰、若然者、將何以明爾之赤心也、對曰、請與姉共誓、夫

誓約之中、^{誓約之中、此云宇氣誓能美健箇}必當生子、如吾所生、是女者、則可以爲有濁心、若是男者、則可以爲有

清心、於是、天照大神、乃索取素戔嗚尊十握劍、打折爲三段、濯於天真名井、^{齧然咀}齧然咀嚼、^{齧然咀}

^{云佐我彌爾加武}而吹棄氣噴之狹霧、^{吹棄氣噴之狹霧、此云浮根于都歷伊浮岐能佐擬理}所生神、號曰田心姬、次湍津姬、次市杵鳴姬、凡三

女矣、

既而素戔嗚尊、乞取天照大神髻鬘及腕所纏、八坂瓊之五百箇御統、濯於天真名井、齧然咀嚼、

而吹棄氣噴之狹霧所生神、號曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、次天穗日命、^{是出雲臣、土師連等祖也}次天津彥

根命、^{是凡川內直、山代直等祖也}次活津彥根命、次熊野櫛櫛日命、凡五男矣、是時、天照大神勅曰、原其物根、

則八坂瓊之五百箇御統者、是吾物也、故彼五男神、悉是吾兒、乃取而子養焉、又勅曰、其十握

劍者、是素戔嗚尊物也、故此三女神、悉是爾兒、便授之素戔嗚尊、此則筑紫胸肩君等所祭神是

三女神は素戔嗚尊の兒、筑紫胸肩君ら齋き祭る

也、

第一の一書

瀛津嶋姫
湍津姫
田心姫

天照大神の神勅

汝三の神宜しく道の中に降り居して天孫を助け奉りて天孫に祭かれよ

第二の一書

市杵嶋姫命は遠瀛、田心姫

一書曰、日神本知素戔鳴尊、有武健凌物之意、及其上至、便謂、弟所以來者、非是善意、必當奪我天原、乃設大夫武備、躬帶十握劍・九握劍・八握劍、又背上負鞍、又臂著稜威高軛、手捉弓箭、親迎防禦、是時、素戔鳴尊告曰、吾元無惡心、唯欲與姉相見、只爲暫來耳、於是、日神共素戔鳴尊、相對而立誓曰、若汝心明淨、不有凌奪之意者、汝所生兒、必當男矣、言訖、先食所帶十握劍生兒、號瀛津嶋姫、又食九握劍生兒、號湍津姫、又食八握劍生兒、號田心姫、凡三女神矣、已而素戔鳴尊、以其頸所嬰五百箇御統之瓊、濯于天渟名井、亦名去來之眞名井而食之、乃生兒、號正哉吾勝勝速日天忍骨尊、次天津彥根命、次活津彥根命、次天穗日命、次熊野忍蹈命、凡五男神矣、故素戔鳴尊、既得勝驗、於是、日神、方知素戔鳴尊、固無惡意、乃以日神所生三女神、令降於筑紫洲、因教之曰、汝三神、宜降居道中、奉助天孫、而爲天孫所祭也、

一書曰、素戔鳴尊、將昇天時、有一神、號羽明玉、此神奉迎、而進以瑞八坂瓊之曲玉、故素戔鳴尊、持其瓊玉、而到之於天上也、是時、天照大神、疑弟有惡心、起兵詰問、素戔鳴尊對曰、吾所以來者、實欲與姉相見、亦欲獻珍寶瑞八坂瓊之曲玉耳、不敢別有意也、時天照大神、復問曰、汝言虛實、將何以爲驗、對曰、請吾與姉、共立誓約、誓約之間、生女爲黑心、生男爲赤心、乃掘天真名井三處、相與對立、是時、天照大神、謂素戔鳴尊曰、以吾所帶之劍、今當奉汝、汝以汝所持八坂瓊之曲玉、可以授予矣、如此約束、共相換取、已而天照大神、則以八坂瓊之曲玉、浮寄於天真名井、嚙斷瓊端、而吹出氣噴之中化生神、號市杵嶋姫命、是居于

命は中瀛、湍津姫命は海濱に居す

第三の一書

瀛津嶋姫命

湍津姫命
田霧姫命

宇佐嶋にあま降り、今、海
北道中になつて道主貴と曰
す
筑紫水沼君ら齋き祭る

多紀理毘賣命
市寸嶋比賣命
多岐都比賣命

遠瀛者也、又嚙斷瓊中、而吹出氣噴之中化生神、號田心姫命、是居于中瀛者也、又嚙斷瓊尾、而吹出氣噴之中化生神、號湍津姫命、是居于海濱者也、凡三女神、於是、素戔嗚尊、以所持劔浮寄於天真名井、嚙斷劔末、而吹出氣噴之中化生神、號天穗日命、次正哉吾勝勝速日天忍骨尊、次天津彥根命、次活津彥根命、次熊野櫛樟日命、凡五男神云爾、

一書曰、日神與素戔嗚尊、隔天安河、而相對乃立誓約曰、汝若不有奸賊之心者、汝所生子、必男矣、如生男者、予以爲子、而令治天原也、於是、日神先食其十握劔化生兒、瀛津嶋姫命、亦名市杵嶋姫命、又食九握劔化生兒、湍津姫命、又食八握劔化生兒、田霧姫命、已而素戔嗚尊、含其左髻所纏五百箇御統之瓊、而著於左手掌中、便化生男矣、則稱之曰、正哉吾勝、故因名之、曰勝速日天忍穗耳尊、復含右髻之瓊、著於右手掌中、化生天穗日命、復含嬰頸之瓊、著於左臂中、化生天津彥根命、又自右臂中、化生活津彥根命、又自左足中、化生熯之速日命、又自右足中、化生熊野忍蹈命、亦名熊野忍隅命、其素戔嗚尊所生之兒、皆已男矣、故日神方知素戔嗚尊、元有赤心、便取其六男、以爲日神之子、使治天原、即以日神所生三女神者、使降居于葦原中國之宇佐嶋矣、今在海北道中、號曰道主貴、此筑紫水沼君等祭神是也、

〔古事記〕上 故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳

劔、打折三段而、奴那登母母由良爾、此八字以音下效此振滌天之眞名井而、佐賀美邇邇美而、自佐下六字以音下效此

於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命、此神名以音亦御名、謂奧津嶋比賣命、次市寸嶋比賣命、上比賣

命、亦御名、謂狹依毘賣命、次多岐都比賣命、三柱、此神名以音速須佐之男命、乞度天照大御神所纏左

御美豆良八尺勾瓊之五百津之美須麻流珠而、奴那登母母由良邇、振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命、亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天之菩卑能命、自菩下三字以音亦乞度所纏御縛之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天津日子根命、又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、活津日子根命、亦乞度所纏右御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、熊野久須毘命、自久下三字以音并五柱、於是天照大御神、告速須佐之男命、是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故、自吾子也、先所生之三柱女子者、物實因汝物所成、故乃汝子也、如此詔別也、

大國主命、多紀理毘賣命を娶り給ふ

故、其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之奥津宮、次市寸嶋比賣命者、坐胸形之中津宮、次田寸津比賣命者、坐胸形之邊津宮、此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也、○中略故、此大國主神、娶坐胸形奥津宮神、多紀理毘賣命、生子、阿遲二字以音鉏高日子根神、次妹高比賣命、亦名、下光比賣命、此之阿遲鉏高日子根神者、今謂迦毛大御神者也、大國主神、亦娶神屋楯比賣命、生子、事代主神、○下略

〔西海道風土記逸文〕

○宗像神社所藏、宗像大菩薩御緣起古寫本紙背

宗像大神、崎門山に天降り居まし、奥宮に青薤玉を置く

西海道風土記云、宗像太神自天降居崎門山之時、以青薤玉置奥宮之表、以八咫鏡置邊宮之表、以此三表、成神軀形、納置三宮、即隱之、因曰身形郡、(來)云、天神之子有四柱、兄三柱神敎弟大海命曰、汝命者、爲吾等三柱御身之像、而可居於此地、便一前

深田村高尾山

居於奥宮、一前居於海中、一前居於深田村高尾山邊、故號曰身像郡云々、」後人改曰宗像、共大海命子孫、今宗像朝臣等是也云々、

※〔釋日本紀〕六、述義二
神代上

奉助天孫、而爲天孫所祭矣、

私記曰、問、天孫是阿誰哉、答、天津彥火瓊々杵尊也、是天神之子正哉吾勝尊之子也、於天神爲其孫也、故云天孫、

私案、天津尊者、吾勝尊之子、母栲幡千々姬也、吾勝尊者天神天照大神子也、栲幡姬者、天神高皇產靈尊之女也、天津尊爲二柱天神之孫、故奉稱天孫、又奉號皇孫、

（一條實經）
大問云、此天孫指何哉、（兼文）先師申云、古答指天津彥火瓊々杵尊云々、此條不可然歟、于時瓊々杵尊未生給、然者、此天孫者不可限一人、未來繼躰至尊也、

筑紫胸肩君等所祭神、

神名帳曰、筑前國宗像郡宗像神社三座、並名
神太

瑞八坂瓊之曲玉、

先師說云、當時璽宮中物者、此曲玉也、

共立誓約、

先師說曰、世俗之詞、誓言立、此本緣歟、

市杵嶋姬命は遠瀛に居す

市杵嶋姬命、是居于遠瀛者也、

釋日本紀

市杵嶋姬命は安藝伊都伎嶋
と同體分身なり

神名帳曰、安藝國佐伯郡伊都伎嶋神社、名神大

先師說云、案之、千與都者、タチツ且トノ同五音也、日本紀之例、同音之字通用、然則宗像神三座之内、市杵嶋姬命者、安藝伊都伎嶋同躰分身也、

※〔釋日本紀〕七述義三
神代上

作日矛、

私記曰、問、今此日矛者、是何物哉、答、作戈矛之形、既圖日像、故加云日矛也、問、既云圖日神之像、而今作此矛形、然則日神之象豈如矛哉、答、上云圖彼神象者、是舉大略耳、未必圖寫其眞形也、凡矛者、是正神道之所執持也、日神亦有所持其矛、故便寫取其平生所持之矛、便爲日神之像也、胸肩神者、或是五百御統、或八尺曲瓊也、然則取神明所持之物、爲其神像者、其類甚多、是又同之耳、

胸肩の神體は玉たり

（兼文）先師說云、胸肩神躰爲玉之由、見風土記、然則尋其由來、爲其神像者也、重窺舊事本紀、採天金山之銅、令鑄造日矛、此鏡少不合、則紀伊國所坐日前神是也云々、○下略

※〔先代舊事本紀〕四
地神本紀

素戔嗚尊

此尊、與天照大神共誓約、則所生三女、是爾兒、

瀛津嶋姬命

號田心姬命、亦名奧津嶋姬命、亦瀛津嶋姬命、坐宗像興津宮、是所居于遠瀛嶋者也、

市杵嶋姬命

次市杵嶋姬命、亦名佐依姬命、亦云中津嶋姬命、坐宗像中津宮、是所居于中嶋者也、

湍津姬命

次湍津姬命、亦名多岐都姬命、亦名邊津嶋姬命、坐宗像邊都宮、是所居于海濱者也、

已上三神、天照大神所生三女之神、是汝兒也、因授素戔嗚尊、則降居於葦原中國、宜降居於筑紫國宇佐嶋在北海道中、號曰道中貴、因教之曰、奉助天孫而爲天孫所祭、即宗像君所祭之也、亦云、水沼君祭、並三柱神、宗像君齋祠三前大神也、○中略

兒大己貴神

亦名大國主神、亦云大物主神、亦云國造大穴牟遲命、亦云大國玉神、亦云顯見國玉神、亦云葦原醜雄命、亦云八千矛神、並有八名乎、

其子凡有百八十一神也、

先娶坐宗像興都嶋神田心姬命、生一男一女、

兒味鉏高彥根神、坐倭國葛上郡高鴨社、云捨篠社、

妹下照姬命、坐倭國葛上郡雲櫛社、

興都嶋に坐す田心姫命を娶る

【付載資料】

三所大菩薩御生誕の事

＊〔宗像大菩薩御緣起〕 一 三所大菩薩最初御誕生事

田心姫
湍津姫
市杵島姫

日本紀第一云、天照大神乃索取素戔嗚尊十握劍打折爲三段、濯於天真名井、齧然咀嚼、齧然咀嚼、此云佐我彌爾而吹棄氣噴之狹霧、吹棄氣噴之狹霧、此云浮枳于都履伊浮岐能佐擬理所生神號曰田心姫太神、次湍津姫太神、次市杵島姫太神、

先代舊事本紀・宗像大菩薩御緣起

三女神は素戔鳴尊の御子神なり

凡三女矣、既而素戔鳴尊、乞取天照大神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統、濯於天真名井、齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神、號曰正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、次天穗日命、次天津彥根命、次活津彥根命、次熊野櫛樟日尊、凡五男矣、是時天照大神勅曰、原其物根、則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也、故彼五男神、悉是吾兒、乃取而子養焉、又勅曰、其十握劍者、是素戔鳴尊物也、故此三女神、悉是爾兒、便賜之素戔鳴尊、此則筑紫之胸肩君今改宗像等所祭神是也、

又云一書曰、於是日神共素戔鳴尊相對而立誓曰、若汝心明淨、不有凌奪之意者、汝所生兒必當男矣、言訖、先食所帶十握劍、生兒、號瀛津鳴姫、第一太神又食九握劍生兒號湍津姫、第二太神又食八握

劍生兒、號田心姫、第三太神凡三女神矣、已而素戔鳴尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊、濯于天渟名井、

亦名去來之眞名井而食之、乃生兒、正哉吾勝々速日天忍骨尊、次天津彥根命、次活津彥根命、

次天穗日命、次熊野忍蹈命、凡五男神矣、故素戔鳴尊既得勝驗、於是日神方知素戔鳴尊、固无

惡意、乃以日神所生三女神、令降於筑紫洲、因教之曰、汝三神宜降居道中、奉助天孫、而爲天

孫所祭也云、

右如日本紀前後兩條之文者、天照大神並素戔鳴尊出生御子、陽神五男者、地神五代之內乃

神土成玉、陰神三女者、筑紫宗像之第一第二第三乃三神土成玉土見利、

一西海道風土記云、宗像太神自天降居崎門山之時、以青薤玉、置奥宮之表、以八尺薤紫玉、置

中宮之表、以八咫鏡、置邊宮之表、以此三表、成神軀形、納置三宮、即隱之、因曰身形郡、

後人改曰宗像、共大海命子孫、今宗像朝臣等是也云、

或記曰、此八咫鏡者、三種之神器之中、內侍所鏡土同軀異名也云、仍當神與內侍所一軀異

三表を以て神軀形となすに
より身形郡といふ

十握劍は宗像大菩薩の本體なり

孝靈天皇四年、三大神出雲簸河上より宗像へ御遷行

三所大菩薩御遷座の事

天應元年、託宣により大宮司宗像氏男、社殿を造立す

名也、然則本朝鎮護之靈寶、三韓征伐之靈神也、天下仁有怪異時者、此二玉一鏡靈光於放玉惠利

一日本紀一説云、素戔鳴尊自天而降到於出雲國簸之川上、時聞川上有啼哭之聲、故尋聲、覓往

者、有一老公、與老婆、中間、置一小女、撫而哭之、所以哭者、往時吾兒有八箇少女、每年

爲八岐大蛇所吞、今此小童且臨被吞、无由脫免、故以哀傷、時素戔鳴尊彼大蛇仁與酒、飲醉而

睡時、乃拔所帶十握劍、寸斬其蛇、至尾劍刃少缺、故割裂其尾、視之、中有一劍、此所謂草薙

劍、一書云、本名天叢雲劍、素戔鳴尊曰、是神劍也、吾何敢私以安乎、乃上獻於天神也云云取證

此十握劍、則宗像三所大菩薩本躰也、劍躰之時者、本朝之皇敵蛇類於降伏志、神躰時者、

異朝三韓之異類於征伐玉惠利

一天照大神十握劍於嚼嚙吹奇玉所生神三躰皇女示現垂迹事、

人皇第七代 孝靈天皇四年仁自出雲州簸河上、筑紫宗像仁御遷行云云一説仁波自地神五代之始、筑紫仁有御影向云云

第一神者、集海淡築嶋、示玉居於遠海之息、未來際可降伏異國之由、有御誓、留伴嶋給、則

號息御嶋、是日本與高麗中間也、居遠瀛、是於奉號田心姫、

第二神者、示玉居於中海之息、今號大嶋是也、嚴重之奇瑞多之、居玉中瀛、是於奉號湍津姫、

第三神者、示居於海邊、今號田嶋是也、居玉海濱、是於奉號市杵嶋姫、

其後或成男神、或現女神、利生方便區仁志天、垂跡受生數度仁及玉惠利、略中

一宗像三所大菩薩一所仁御遷座事

七戸神官之第一滋光大宮司之末葉、經數代後、當氏男大宮司之時代、光仁天皇仁王四御宇仁王五

桓武天皇(七八)天應元年辛酉有御託宣、虛空仁聲有天云、爲示吾宗大神之居、號始此所於宗像畢、早氏

宗像大菩薩御緣起

宗像宮年中行事

男之屋敷仁造社、可崇吾、○中略氏男驚此御音、即點屋敷於社壇、以茅草葺之、○下略

※〔宗像宮年中行事〕 ○奥書に「正平廿三年六月 日 大宮司氏郷（花押）」と見ゆ、

天照皇大神御子宗像宮

本社從神末社小神已下並年中行事等目錄事

本社三所大菩薩 大神宮 皇女

宗像三所大菩薩は大神宮皇女

一第一大神宮 田心姫一所

眷屬小神並堂塔等

善神王二所左右 織機明神 御加治屋 寶塔 六三昧所 彌勒寺 神圓寺

一第二大神宮 湍津姫一所

眷屬小神

地主明神一所 所主明神一所 御鎰持明神一所

一第三大神宮 市杵嶋姫一所

眷屬小神

伽藍明神一所 上袴明神一所 浪折明神一所 ○中略

息御嶋

一息御嶋 日本與高麗之堺第一大神宮本社云々

一中御嶋 宗像前大島是也第二大神宮本社云々

眷屬小神

息御嶋神事

御長手神事

五位社 大宮社 大神宮社 河上社 御袋代社 所司社 龍王社 年所社 止々社 祝詞社
荒熊社 山部社 山師社 御竈社 君達社 草上社 天宮社 金宮社 御船漕社 稗和社
四道社 朝拜社 風隼社 息送社 九日社 息正三位社^{○中略}
一息御嶋神事 第一宮本社

春 御長手神事 夏 同神事 秋 同神事 冬 同神事^{○下略}

胸肩の神體は玉たり

宗像郡

※〔筑前國續風土記〕^{十六} 日本紀第一卷には、胸肩と書けり、舊事記には、宗像とし、古事記には、宗形とす、凡和語のならひ、訓同しければ、文字相用るは常の事也、宗像と名付し意は、宗像社記云、筑前國風土記に曰、宗像之大神自居崎門山、天降之時、以青薤玉置澳津宮之表、以八坂瓊紫玉置中津宮之表、以八咫鏡置邊津宮之表、以此表成神體之形而納三宮、即納隱之、因曰身形郡、釋日本紀云、先師說云、胸肩之神體爲玉之由、見風土記、然則尋其由來爲其神像者也、今此說によりて案するに、宗像と名付し事、三神の御身の形を以て、三宮に納めし故、身の形の社と云、三神のいます所なる故、身形郡と號す、みのと、むなと音相通すれば、いにしへ和語のならひ、轉して、むなかたと名付しならん、

一凡此郡は、西北に海をうく、海中に島あり、東北は遠賀郡にとなりて、高山を以て限とし、東南は鞍手郡にさかひて、又山を隔て、西南は原野にて、糟屋郡につゞけり、郡中山野多くして、所々に小川あり、凡河海の利ともしからず、只西北海に近くして、時に颶風の災あるのみ、

一里民曰、此郡に六嶽あり、

室木嶽、薦がたけ、許斐たけ、宮地たけ、よりたけ、大島の御嶽、是なり、

一此郡に只二川あり、田島川、西郷川也、其餘諸村の谷水は、皆此二川に合て、北海に入る、

二川其源頭近くして深山なし、故に河水大ならず、

宗像山

一此郡の南の山邊の村、西より東へは、舍利倉、内殿、本木、大穂、野坂、朝町、名殘、藤原、吉留なり、道の北、宗像山より海邊迄の山下の村、東南より西北への序は、竹丸、石丸、楞嚴寺、三郎丸、平等寺、山田、池田、上八なり、

和名抄に十四郷を載す

和名抄に載る所、此郡の郷の名十四有、

秋 山 今も村の名に
のこれり

怡 土 荒 今も村の名に
のこれり

野 坂 同上 荒 木 海 部

席 今糟屋郡に席内と云大邑あり、むかし宗像郡の境内な
りしにや、いふかし、古今の轉變はめつらしからず、

深田郷

深 田 今も田島に深田、
田といふ小村あり、

蓑 生 西郷村に蓑生と云校村あり、福岡
生浦の邊を蓑生浦と稱す、名所也

辛 家 小 荒 大 荒

津 九津丸と云村は今もあり、丸
の字訛りて九とかけるか、

郡内村名

今稱する所の此郡の村の名

舍利藏村 本木村 河内村 本木村
の内

神湊村

田島村

畝町村 内殿村 檜木村内殿村

鳥巢村 久末村 津丸村

手光村 冠村手光村 上西郷村

大森村村上西郷 鞍掛村村上同 下西郷村

福間村村下西郷 宮司村 渡村

梅津村渡村 津屋崎村 在自村

大石村 須多田村 怒山村

生家村怒山村 勝浦村

山添村勝浦村 鹽江村同 勝浦濱村同

松原口村勝浦村 神湊村

江口村 吉田村 川端村吉田村

河東村 多禮村河東村

池浦村多禮村 牟田尻村

下牟田尻村牟田尻村 田島村

大井村 釋迦院村大井村 用山村

田熊村 平井村田熊村

東郷村今東江とかくは、郷の字、
の草書をあやまりてなり、

村山田村 八並村 山中村八並村

大島村

王丸村	大穗村	大穗町	大穗村に 屬す
野坂村	中山村	野坂村 の内	原町
朝町村	晝掛村	朝町村 の内	光岡村
久原村	平清水村	久原村 の内	曲村
名殘村	徳重村		兎渡村
藤原村	吉留村		安倉村
猿田村	松丸村	上同	武丸村
土師上村	赤間村	武丸村 の内	○古は赤馬といふ
陵嚴寺村	石丸村		田久村
三郎丸村	土穴村		稻元村
野添村	須惠村	稻元村 の内	平等寺村
山田村	横山村	山田村 の内	池田村
大王寺村	田野村	池田村 の内	向田野村
上八村	鐘崎村		地島村
大島村			

以上九十一村

内本校 五十八
三十三 此内新田村一

※〔筑前國續風土記〕^{十六} 宗像大神三社

宗像郡上

延喜式神名帳に、筑前國宗像郡宗像神社三座並名と記せり、此三座の神は田心姫、湍津姫、市

杵島姫也、奥島、大島、田島、三所にしつまりおはします、日本紀第一神代卷上を考ふるに、

素戔嗚尊父母の御心に叶ひ玉はす、根國にやはれ玉ふ時、暫く高天原にまうて、姉の尊照天

也、に相まみえて後、ひたふるにまかりなんとそのみ給ひしに、伊弉諾尊ゆるすとの玉ひしか

は、則天にのほり給ひしに、天照大神は素戔嗚尊の、國をうははむとするの志あるかと、う

たかはせ玉ひ、兵のそなへをして待玉ふ、素戔嗚尊此よしを見て、吾初より黒心なし、但父母

の嚴勅ます故に、ひたふるに根國にまかりなんとす、もし姉の尊と相ま見えすんは、吾いかん

ぞあへてまからん、こゝを以て雲霧を跋涉り、遠よりきたりまいりぬ、おもはず、あねのみこ

とかへりていかり給はむ事をと宣ふ、時に天照大神又とひてのたまはく、もししからは、將に

何を以て、爾か赤心をあかささん、對ていはく、請姉と共に誓はん、それ誓約の中に、必當に子

をうむへし、若吾かうめらん所女ならは、則濁心ありとおぼせ、もし是男ならは、清心ありと

おほせ、こゝに天照大神、乃素戔嗚尊の十握劍をこひ取、打折て三段となし、天の眞名井にふ

りすゝき、さがみにかんて吹出る氣噴の狹霧に、うまるゝ神をなつけて田心姫と云、次に湍津

姫、次に市杵島姫、すへて三柱の姫神ます、天照大神勅して曰、その十握劍は是素戔嗚尊の物

なり、故に此三女神は悉く是爾か兒なりと宣ひて、すなはち是を素戔嗚尊に授給ふ、此則筑紫

の胸肩の君等か、いつき祭る神はなりとしるせり、是田心姫を第一とし、湍津姫を第二とし、

市杵島姫を第三とする、日本紀の本説なり、且後代、文德實錄、三代實錄などに記せる次第も、

天照大神と素戔嗚命、天安
河に於て瑞珠盟約をなし給
ふ

日本紀の本説は田心姫を第
一神、湍津姫を第二神、市
杵島姫を第三神とす
文德實錄・三代實錄も本説
に同じ

皆是に同し、日本紀は 元正天皇の勅を奉て、舍人親王撰述したまひ、舊事記、古事記の過誤をも修正したまへる書なれば、もとより是を證とすへし、然とも日本紀本説の下に附たまへる、分註の數説も、古來の異義を存して、疑を傳へたまふ意なれば、是亦捨かたき事也、且三神の鎮りませる三所の地は、日本紀最初の説に詳ならずして、一書の説に出侍る故に、今日本紀分註の諸説、并舊事記、古事記の説を採録する事、左のことし、

瀛津島姫

世々の帝も奉幣使を下し給ふ

田島の社は昔は神湊の東の海濱にあり

日本紀一書の説に曰、日神素戔鳴尊と相對て立て、誓て曰、若汝が心明淨して、凌き奪はんといふ意あらすは、汝かなさむ兒、必當に男ならんとたまひおはつて、先はかせる十握劍を食し兒をなす、瀛津島姫と名つく、又九握劍を食し兒をなす、湍津姫となつく、又八握劍を食し兒をなす、田心姫となつく、凡三女神ます、略日神其うみませる所の三女神を以て、筑紫洲に降りまさしむ、因て教て、汝三神は宜しく道中に降りまして、天孫を助けまつり、天孫の爲にいつかれよとの玉ひき、是天照大神の御時、三女神すてに宗像に降り玉へる證とすへし、且世々の帝の、宗像の三神をあかめたまひ、時々奉幣使を下させ玉ひけるも、此故なるへし、又一書の説に、天照大神八坂瓊の曲玉を以て、天真名井にうけよせて、瓊の端を嚙斷て、吹出る氣噴の中になる神を、市杵島姫命と名つく、是は遠瀛にます神也、奥の島なり、又瓊の中をくひ斷て、吹出る氣噴の中になる神を、田心姫命と名つく、是は中瀛にます神也、大島なり、又瓊の尾を嚙斷て、吹出る氣噴の中になる神を、湍津姫命と名つく、是は海濱田島也、田島の社、昔は神湊の東に、今も其跡殘れり、にます神也とあり、又日本紀一書の説に、日神先食其十握劍、化生兒瀛津姫命、亦名市杵島姫命、又食九握劍、化生兒湍津姫命、又食八握劍、化生兒田霧姫命、舊事記には天照大神、素戔鳴尊のはかせる所の三劍を以て、天真名井にふりすゝき、さかみにかんて、吹出るいふきの狹霧の中に、あれます三

田心姫、異國降伏の御誓により、奥御島に留り給ふ

第一神は遠瀛、第二神は中瀛、第三神は海濱に鎮座し給ふとするは諸説皆同じ

女の神あり、十握劍の化生の神を名付て瀛津島姫神と云、又田心姫、又曰田霧姫、九握劍化生の神を號て湍津島姫命と云、八握劍化生の神を號て市杵島姫命と云、瀛津島姫命は是遠瀛にをる所の神、此田心姫なり、邊津島姫命は是海濱にをる所の神、是湍津島姫命なり、中津島姫命は是中島にをる所の神、是市杵島姫命也、又曰、田心姫命又奥津島姫命と名つく、又瀛津島姫神と云、宗像奥津宮にます、是遠瀛島にます所の神也、次に市杵島姫命、又佐依姫命と云、又中津島姫命と云、宗像中津宮にます、是中島にをる所の神也、次に湍津姫命、又多岐都姫命と名つく、亦の名は邊津島姫命、宗像邊津宮に座す、是海濱にをる所の神也、古事記にいはく、多記理毘賣命は胸形の奥津宮にまします、次に市杵島比賣命は胸形の中津宮にまします、次に田寸津比賣命は胸形の邊津宮にまします、此三はしらの神は胸形君等か、いつく三前大神是也とあり、宗像縁起の説に曰、第一神は海濱を集て島を築き、居を遠海の奥に示し給ふは、末世に至るまで、異國を降伏し玉ふへきよし御誓有て、彼島に留り給ふ、則奥の御島と號す、是日本高麗との中間なり、遠瀛に居玉ふ、是を田心姫と號し奉る、第二神は居を中海の奥に示し玉ふ、今大島と號する是也、中瀛に居給ふ、是を湍津姫と號し奉る、第三神は居を海濱に示し玉ふ、今田島と號する是也、海濱に居玉ふ、これを市杵島姫と號し奉るとかけり、三神御鎮座の所、三部本書の説同しからず、三部の内にも亦説多くして、いつれか是なる事をしらす、然とも、其最初に生れ給ふ御神、遠瀛に鎮座し、第二神中瀛に鎮りまし、第三神海濱にしつまり給ふ事は、諸説皆同くして、其御名に異同あるのみ、今宗像三所の神司も、共に田心姫を第一とし、湍津姫を第二とし、市杵島姫を第三と稱して、各異なる事なし、但鎮座の次第、奥島、田島の神職のいふ所

奥島の神職は日本紀の正説を本とす

三神の神位は皆同位なり

天應元年神託により三神鎮座

奥津島は大島より乾、四十八里

おなしからす、田島の神職は、昔大宮司の時より以來今に至りて、田島の宮に祭る所は田心姫なり、三神の次第、田心姫第一なれば、田島を第一とすといへり、奥島の神職は、日本紀の正説を本とし、舊事紀、古事記、及縁起の説を證として、奥島の神を田心姫とし、第一とす、兩社の神職猶辨説あれとも、くたくしければ、こゝにしろさす、かく古書に載る所、今世の傳る所、其説まち／＼にして同しからす、今しゐていつれを是といひきたむへくもあらず、古にひろき君子を待のみ、然るに三神は皆日神の御子にして、同胞の御事なれば、いつれもたふとふへき御神也、故に、朝廷より贈らせ給ふ神位も、皆同位なり、凡兄をたうとひ、弟をいやしむは常のならひなれと、それは郷黨にて齡をたつとふの禮也、むかしより弟賢にして君となり、兄不賢にして臣となるためしもあれば、必姉妹の次第を以、其貴賤と短長をあらそふへからす、凡田島、大島、奥津島、三所ともに、何れも三神を一社に合せ祭りて、各其社の主とする所を中座に崇め奉る、社家には、光仁天皇天應元年に神託有て、邊津宮の社内に、奥津島、中津島の兩神をも勸請して、一所に崇め奉ると云傳へ侍る、又三神鎮座の始を、縁起には、孝靈天皇四年に、出雲國簸の川上より、筑紫宗像に御遷行としるせり、然れ共、天照大神の勅によりて、神代よりすてに筑紫に降臨有し事、日本紀の文明白なれば、是を正説とすへし、他説を用ゆへからす、○下略

＊〔筑前國續風土記〕

十六 宗像郡上

奥津島俗に此島をおきの島と云、神をおきの御神と云、

此島は大島より乾の方にあり、其間四十八里といへり、然とも海上の里數詳ならず、大抵をい

中座田心姫命とす

へるなるへし、島のめぐり一里あり、此嶋に宗像の神一社おはします、いはゆる奥津宮是なり、右にしろすことく、此社の神司は三部の本書を證として、此御社を第一宮とし、日本紀の本説及縁起の説によりて、御神を田心姫とす、故に田心姫を主として、中位を神座とす、祭る所の神座の列左のことし、

左第三 市杵嶋姫命

中第一 田心姫命

右第二 湍津姫命

今田嶋の社家田嶋の別宮に祭る所の奥津嶋の神座の列は、中を市杵嶋姫とし、左を田心姫とし、右を湍津姫とす、是と異なり、

奥津宮は西南に向つて山の麓平地の高き所にあり祭る所の神名百八神

一ノ甲斐河野氏

寛永十六年より島守を置く

來島の人、まづ海水に浴し、正三位社に詣つ

たる日より、毎日潔齋し、第八日に當る日祭る、かねて魚をつりて神膳にそなふ、魚を得されは祭日をのふる、(一六三九)寛永十六年より以來、國主より島守を置玉ふ、足輕三人、水主四人、大島より役夫二人、凡九人かはるゝ來る、五十日を以て限とす、送りの舟は大島より二艘出す、島に常住の人なし、初て此島に來る人は、先海水に浴し、正三位の社に參り、七日の間毎日一度海水を浴し、第八日に本社にまうづ、足輕水主もおなし、島山高し、其峯三あり、いと高きを

忌詞多し

神饌の微び具合にて吉凶を
占ふ

黒く微びるときは凶とす

島の物取り荒さは神の祟あ
り

一の岳と云、其次二の岳、其次白だけ、皆岩山なり、一の岳も糟屋郡立花山よりひきし、凡此島山の形状、風景うるはしくして、奇異なる事、他邦におゐていまた見ざる所也と云、遠く俗塵をはなれたる佳境也、岩そひえ、木しけれり、島のめぐり皆大岩也、本社のおしろ左右にも大岩あり、いつれも見あくるはかり也、山中雜木大竹多し、松なし、岩間より大竹おひ出たり、山上より對馬、朝鮮見ゆ、東の崎よりは長州見ゆ、田圃は少もなし、大島、金崎、初浦の漁夫、春夏秋の間來りて漁す、其外他方よりは來り漁する事ならず、凡此神の威靈をは衆人甚おそる、靈驗むかしよりしほく多きよしかり傳ふ、此島にて忌詞多し、常の詞はけかれなりと云、僧尼、山伏、女人、牛、馬、鹿、鼠などは、皆別名あり、祭の時御饌をそなへし御飯を、後の祭禮の時徹す、其時御飯の變によりて、世の吉凶を占ふ、むかしより三神の御前、一神に各三饌、すべて九饌を備奉るに、各其人に屬したるためし有て、天子、將軍、國主、國の大夫、社人の自身、或諸社家の事に應ず、世に變災なき時はかはる事なし、其人變災有へき時は、其人に當りたる御饌の御飯に變怪あり、或御飯すへてかふろのかみの如く、小兒の黒髪のうるはしくおひとゝのへるか如し、或海藻の如く、或黒くくさりて、手にとれは、忽くたけ消ぬ、さまざまの變あり、其變怪あるを見て、其應する所の人の凶をしる、むかしより此ためしたかふ事なく、必しるしありと云、

一此島の竹木土石など取來る事、神のをしみ玉ひて、必災となるよしいひて甚おそる、みたり島に島の物をむさほり取てあらさは、誠に神の祟あるへし、但正神は俗のいへることくに、鄙吝なる事は有へからず、

一奥津島のまへ廿町許、島の巽の方に、小屋島とて小島あり、高さ水面より七丈、めくり百間許、皆岩也、

一小屋島と奥津島との間、御門柱とて岩二ならび、あたかも神門のことくなるあり、其兩間四五間あり、本社の方へ向へり、いとことなる所也、

一奥津島の磯に太鼓石とて、大岩海中にさし出たり、夫木の歌によめるは、此所なるへし、荒船に近し、晝夜潮のみち干に、此石にあたりて鳴ひく故、太鼓をうつか如し、しほの満干しるゝ也、

顯 仲

たつ波につゝみの音をうちそへて

唐人よせぬおきの島もり

龜石

一南方磯の岸の上に龜石あり、大さ方三尺、耳、目、鼻、口、手、足、甲、尾、皆そなはりて、龜の形に似たり、龜瀬海中にあり、

一島守の居る所は海濱に近し、後は岩也、奇石にて疊をつめるか如し、又なれこ石と云石あり、初て此島に來る者は、海水に浴し、夜中に此石の邊をまはる、身の不淨をはらはんかため也、

一此島に船の入所は、島守の居る所の前に、わつかに小舟を一艘こき入ほとあり、あたかも竹生島の神前の如し、左右に背あり、浪あらし、故に漁船など來れば、濱の上に引あけ、岩によせかけてならへおく、

御麻島

一此島の山中に御麻島とて、一町許諸木不生所有て、草のみ茂れり、

奥津島の末社は七十五社

一田島、大島、奥津島の末社は、三所共にみな七十五社、一百八神也、近世は三所共に合せ祭りて、末社の數すくなし、一社に數神をいはひ納む、

一此島にけた物なし、只鼠多し、北土の異邦より渡り來る鳥、先此嶋にて羽をやすむ、蛇、石龍子の類、むかしよりなし、諸島時に應して多し、蛇、さゝえ、淡菜、海藻多し、薪多く大竹あり、

奥津島の土産

一奥津島の土産

黄精 風蘭 沙防風 天南星 大葉麥門冬 風藤 包橘 こば葉似椶櫚幹直 駒鳥多し 鷹 蛇 淡菜

榮螺 海蝦 黑魚如鯛深黒多脂美味 久魚 阿羅 鰯 鯛 魚師 海鱸 烏蛇在海中

此島奇境なれば、異木異草など多し

此島奇境なれば、此外異木、異草、藥草など多かるへし、渡りし者見しらされは、其有無しれす、

荒船御社

一荒船御社 奥津島より少し前、荒船と云所あり、船の形なる大岩有、はなれたる小島なり、前に少入海あり、御手洗と云、此所に不淨の物をすてす、大岩のみ有て、土地なし、波あらき所也、其内北の方にすこしはなれて、山上に社あり、高大明神と云、是荒船の御社なるへし、

藤原輔相

拾遺第七物名

草も木もみなみとりなるふか芹は

あらふねのみやしろく見ゆらん

※〔宗像三社縁起附録〕 奥津島

奥の御神

大宮司氏俊縁起

奥津島、日本紀第一卷には、遠瀛と稱す、舊事紀に、宗像の奥津宮とし、遠瀛島と云是也、俗に奥の島と云、神をば、奥の御神と稱す、神名の異説まち／＼なる事、右に記せり、奥津宮の神司は、舊事紀古事記及大宮司氏俊縁起の説に隨ひて、此島の御神を田心姫とし、第一の宮とす、故に中座を田心姫として、主神とす、左を市杵島姫とし、右を湍津島姫とす、其神座、かくの如し、

左座 第三 市杵島姫命

中座 第一 田心姫命

右座 第二 湍津島姫命

御社は西南に向ひて、山の麓にあり

社司、渡島の時より潔齋し、八の日、神膳をととのへ、祭奠をそなふ

此島は大島より子の方にありて、相去事海上四十八里有と云、されど日永き時、朝につとめて舟を出し、波風のさはりだになくて、のどかなれば、暮つかたより前につきぬ、かくあれば、只二十里餘有べしと云、御社は西南に向ひて、山の麓、平地の高き所に立給ふ、海濱より御社まで、其間百五十間のぼりゆけど、路けはしからず、今の神殿はわづかに方九尺、前に拜殿あり、末社の數、いにしへは凡七十五區、神名一百八神あり、近年は末社の數を合せ祭りて、十五區とす、神司は今只一員、其家を一甲斐と云、河野氏也、世々此御社の祭を司る、常には大島に居て、年ごとに暮春、初冬兩度の祭禮ある時、彼島にわたりてつかへ奉る、昔大宮司ありし時は、秋の祭もありしが、近き世は秋を略して祭らず、風烈しく波高くして、渡る事かなはねば、たびの衣のたつ日も定めず、其故に祭日は何れの日ともきはまらず、社司彼島に渡りし時より、日ごとに潔齋し、八日といふに當れる日、かねて魚をつりて神膳をととのへ、祭奠をそなふ、

正三位社は海濱を守り給ふ

あざらかなる物を得ざれば、祭日をのぶ、むかしは三時の御祭ごとに、其そなへ甚いかめしく、御饌奉幣など、いと豊かに、潔かりし事、其品目古き記籍にのせて、今も一甲斐が家に傳はりぬ、又いにしへ祭禮のありし時、つかふまつりし神司の輩の座列の席をしるせし籍も残りりとかや、島守を國守よりつねに置玉ふ、百日毎に交替の番をつとむ、凡此島に來る人は、先海水に浴し、正三位の社海邊に有海邊に有小社なり、志賀神のよし云にまうで、又七日の間、日ごとに一たび海水に浴し、八日に當れる日、本社に参りまうで、ぬかづき奉る、島守水主もおなじ、

主なる忌詞

忌詞は伊勢齋宮の忌詞の類ならん

試

神事にけがれある物をばいみて、まさしき名をいはで、名をかへていふ、僧尼、山伏、女人、牛馬、鹿鼠など、皆別名をいふ、死をくろやうせいと稱し、僧をまるやうせいと稱し、六畜の類をやつと稱し、鳥をくろとり、尼をかみなと稱す、女をほとめ、衡をためし、鹽をなみの、はな、升をはかり、未醬をひしほ、酢をみい延喜式にしるせし、伊勢齋宮の、内外の忌詞の類ならん、唐土に宗廟を祭るの禮には、神にそなふる物のいさぎよきを以て、其名をかへて、よき名を以て稱するにはかはれり、されどかれはきよきをめで、これはけがれをいむ、其意は同じかるべし、春の祭にそなへし御饌をば、冬の祭に徹し、冬の祭にそなへし御饌を、明る春の祭に徹する時、御饌の變によりて、世の吉凶を占なふ、是を名づけて試と云、むかしより三神の御まへ、一神ごとに三饌、すべて九饌を備へ奉る、御饌に變あれば、各其人にあたる例有て、天子、將軍、國君、大臣、國老及國の大夫、又社司産子の事に應ず、御饌に常にかはれる事なければ、世に災變なし、もし御饌に變怪ありて、すべて黒き毛おひて、かぶろの髪かぶろの髪の如く、小兒の黒髪小兒の黒髪のうるはしく、生

三の峰は皆岩山

本社の御後左右に見あぐるばかりの大岩あり

俗塵に遠き奇境にて神仙の窟宅せる靈區

息津宮は遠き荒き海の中に立給ふ

とゝのふるが如し、或海藻の如く、或黒く腐て、手にとれば忽くだけ消えぬ、さまざま變異有、其變怪あるを以て、其應ずる人のいみじき事を告給ふ事、必しるしあり、此ためし、昔よりたがふ事なしと云傳ふ、

此島は、めぐり一里あり、山高くして三の峰あり、其内にていと高きを一の嶽と云、次は二の嶽、第三に當れるを白嶽と名づく、皆岩山也、林木しげり、うるはし、岩間より大竹多く生じたり、島をめぐりて、皆大岩也、本社の御後左右にも、皆見あぐるばかりなる大岩あり、凡此島は、世ばなれて、異所に似ず、あやしくことなるさまなり、山のそびえてつらなれるかたち、岩のたゞずまる、すぐれてうるはしき事、他邦にたとふべき所もあらず、はかなき草木までも見所あり、此島のけしき繪にかゝせて、人にも見せまほし、朝夕に見れども、時ごとにおもしろしと、目を驚かしぬる由、渡れる人いふ、まことに俗塵に遠き奇境にて、神仙の窟宅せる靈區なれば、さこそと思ひやられ侍べる、もし彼所にいたらば、只蓬萊山に行しこゝ地ぞすべき、峰にあがりて遠く望めば、對州ま近く見ゆ、又しらぬ新羅の山も、ほのかに見え侍べる、

凡此御社は、きはめて遠きあら海の中に立給ひ、もとより此島に常に住む人もなければ、社司島守の外、まうでくる人なく、みてぐらをさゝぐる産子なし、然る故に、中津宮、へつみやより、猶衰きはまりぬれど、只大神の御威の、いかめしき事のみ、むかしにかはらず、此島の竹木土石など取て、船にのせかへる事、神のおしみ給ふ故にや、必たゞり有て、船人共甚おそる、島の物をみだりにそこなひ、むさぼり取て、暴逆をなさば、神の祟もありなん、正神は俗説の如くに、鄙吝なる事は有まじけれど、此事故あり、奥津島の前、巽の方二十町許に、

太鼓石

小屋島とて、小島あり、皆岩也、小屋島と奥津島の間、御門柱とて、岩二ならべり、あたかも鳥居のたてるさまなり、其兩間四五間ありて、本社のお方にむかへり、天然の神門なるべし、いと異なる奇境にて、御社のたうとき事も、いやましにおぼゆる、奥津島の磯に、太鼓石とて、大岩海中にさし出たり、潮のみち干に、此石に波のあたりてひびく事、あたかも太鼓をうつが如し、夫木集顯仲の歌に、たつ波に鼓の音をうちそへて、唐人よせぬ奥の島守、とよめるは、此所の事なるべし、

荒船社

高大明神

荒船の御社は、奥津島より少前に、荒船とて、船の形なる大岩あり、海中にはなれたる小島也、前に少入海あり、大岩のみ有て、土地なし、其上に小社あり、高大明神と云、是則荒船の御社なるべし、拾遺集第七卷、物の名の歌に、草も木もみなみどりなるふか芹は、あらふねの宮しるく見ゆらんと、藤原輔相のよめりしは、此所の事なるべきか、

※〔瀛津島防人日記〕上 大島に、宗像の神一柱おはします、中津宮と申すは此の宮なり、御社の前に、小川あり、天の河といふ、天の安河によれる名なるべし、彦星宮・織棚つ女の宮と、川をへだてて左右にあり、男女のつまをねがふもの、此のやしろに籠るといふ事、中ごろの書に見えたり、上の高き峰を、御嶽といふ、天照大神の宮あり、

寛政六年四月朔日、瀛津島に渡る人々、大島の海中に入りて身そぎす

〔寛政六年〕四月朔日、同じ所なり、瀛津島に渡る人々、ここより朝毎に海に入りて身そぎす、そもく此の浦はいつしき皇神のしつまりますけにや、人ごとに物いはひして、けがらはしきことを、いたく忌みはゞかる、身まかりたるをいむは、さらにもいはず、女の月のけがれあるをば、別戸

をつくり入て、主の家にいることなし、そのほか、よのつねは、なほざりに打ち過すことも、此の浦人は、つゝしみて、かりにも犯すことなし、さきに過ぎこし志賀島も、同じならはしなり、

いつもみやこめきたる所は、人の心さかしだちて、物いみなんとするをば、愚なることにいひあふめるを、かゝるひなひたる所には、かへりて古の風の残れるものなり、かゝるならはしも、神がらならずや、けふ御嶽にのぼりて、をちこちを見めぐらすに、東は長門のしまゝよりはじめて、此の國なる山鹿の岬、南には豊前の彦の山、坤には御笠郡なるかまと山、早良郡なる脊振のみな、怡土郡の雷嶽、浮岳、同郡姫しま、肥前の松浦郡なる名護屋崎、同郡の平戸の島、壹岐の島、此の國なる大蛇島、乾のかたには對馬見ゆ、瀛津島は、いづこぞと見れど見えず、北のかたには、すべて何もみえず、猶目いたき迄みるに、辛くして浪のひまより見出たり、つしまの少し東の方に、嶺二つあるが、海の中よりものゝ角さし出したらんが如し、おのが行くべき島は、あれにこそといふに、皆人肝きえたり、いかで一たびは御島にまゐりてしかなと、心にねぎしかど、いまかくものすべしとは思ひかけざりしを、いとたふとくて、遙にをろがみまつりて、

いつしかも見むとおもひしむなかたの沖つ御島を見るがともしさ

中津宮にまゐりて、海の原安けく、平けく船泊てしめ給へとのみ奉る、御前よりまかるときに、天の河川霧たちて劔たち宗像の神のむかしおもほゆ

宗像にいつく祝部かゆふたすきかくるもかしこ神のむかしを

沖ノ島は、海の中よりもの角さし出したらんが如し

沖つ島の神司河野ぬし

三日、猶同じところなり、沖つしまの神づかさ、河野ぬしがもとより、來べきよいひおこせたり、打ちつれてゆく、酔ひしれて、日の暮るるをもしらず遊ぶ、
四日、風波やむべくもあらず、いつか沖つしまには渡りぬべきとのみいひあへり、浪のたつを見てよめるうた

梓弓はるはくれしをわたつみのかざしの花はいとゞ咲きそふ
とぞいへりける、

五日浪風靜なれば、船出せよといへど、梶取遙なる舟路にしあれば、追手のおりずば、いかで漕ぎあへむといふに、人々いたづらに海原をながめつつぞある、はかしくもの語ふべき人もなければ、いと侘しくて、日々に山にのぼり、磯に出でつゝ、同じ所をとほる、沖津みやの遙宮にまゐりて、

沖津宮の遙宮

角障經岩瀬の磯に潮まつと戕^(かし)刈ふりたつるあまの釣舟

けふはいとよく晴わたりて沖つしま見ゆ、

六日、けふも船出せず、

七日、おなじところなり、濱に出て網引するを見る、

八日、追手なれど、浪高しとて、船出せず、かゝるをりにや、むかし貫之ぬしの、土佐へゐてこしわらはの、海つ路にて「たてばたちゐれば又ゐる吹く風と浪とおもふどちにや有らむ」とよめりしも、おもひ出でられたり、

九日、風浪も叶ひぬればとて、神づかさがり行きて占ふに、中らのほど少しあし、こは風のな

青柳種信、寛政六年四月九日
沖ノ島へ渡る

風浪のよき日に、海上を占ふ

神中にて手向す

ぐにやあらむ、追風に帆を擧げてゆかざれば、舟路長きゆゑに、こぎてはえ堪す、依りて風のなぐをもあしとはいふなり、着のほどよろしければ、心にまかせぬは神に祈まつらむ、大島より沖津島にわたる海中、四十八里ほどのなかに、小島一つもなく、まことに、大洋中なれば、舟よすに着くほどと、三つをうらなふ、出づる時と、真中とは心のごとくならねども、着のほどよければ、舟を出す、若し出・中の二つは吉なりとも、着ければ、ふねをいだすことなし、いざよそひたせよ、われも共に船出せんとて、漕ぎ出でたり神主は恒例の祭に仕へ奉る、神中に行ける時、手向すとて、大島の海人等、沖つしまと大島の海の真中を、神中といふ

蒼海原神のみなかにぬさまつり幸くもがもとこひのむ我は

左り右りを見めぐらせど、向伏す雲のみなり、あへて漕ぎ出でし七つの舟は、木の葉のうきたらんよりもちひさし、浪のたつとはあらねど、大海のゆらふに、人々心あしみて、かしらを舟簀につきあてゝ、物をもえいはず、舟子どもは、神の御心になひ給へる人々にこそあらめ、年ごとに行きかへども、かゝるしづけ海をわたりし折なんなきとぞいふ、近づくまにく仰ぎみれば、其のさまいとあやしくて、他國に漂ひ着きたる心して、天皇の所食國內ともひたらず、

しら浪の八重折がうへにくすしくもいます神かも沖つ御島は

神司は崖の下の磯に庵す

磯におりて、海の平けかりしを、かたみに悦びあへり、神司は、懸崖の下なる磯にいほりして、齋こもらす、

正三位社、志賀の神を祭るといふ

十一日、さきの防人、例の事どもしをへて船出す、家に文ことづく、神官のいはりは、防人のすむ家に近ければ、物忌のほどは、かたみにゆきかひつゝあかしくらす、此の島に來る例、七日の間毎朝に海潮にみそきて、山中に入るることなし、七日に當る日に、正三位社（志賀の神を祭るといふ）にまゐり、八日に大神の宮にまゐる、毎朝に海水を浴みて、正三位社にまゐることは、其の後も日々同じ、大神の宮には、つねにはみだりに參ることなし、神威を恐れてなり、神づ

かさの請によりて、神代巻をよむ、又おのれ上つ代の學びのことも、ねぎ奉らんと、ふりはへて思ひ來しかば、祈の御手ぐらにとて、豊後國風土記と、延喜式の大祓の考とを寫して奉る、十五日、けふは物忌の七日といふ日なり、いまだ明もやらぬにおきいで、

おきつしま磯もとゆすりたつ浪に新防人いみそぎするかも

神主大島より渡り來る

神司はあすなん恆例の祭につかへ奉るべきとて、四月と十一月と、兩度の祭あり、神主大島より渡り來る、其渡り來て第八日にあたる日に祭をなす、祭日とて定れる日はなし、

海人どもを率て、沖に出て魚つらす、狭き魚だにえず、神の御心やなぎ給はぬなどいひあへり、日もくれなんとするころ、おいをちふものゝ、三さかあまりなるを、二つつりあげたり、神づかさのよろこびいはむかたなし、

十六日、大神宮に詣づ

十六日、大神の宮にまゐるとて、まづ正三位の社に額つく、岩崎の、さし出たるところに、御社あり、また側に、荒船社・蛭子社あり、岩崎の下を、御手洗といふ、岩間に、浪の打ちいる所あり、其海中に、船の形したる岩瀬二つあり、荒船岩といふ、荒船の神とは、風の神をいはふよしいへり、夫木集の物の名に「莖も葉も皆みどりなる深芹はあらふねのみや白くみゆらん」とよみしは、こゝのこと也と、貝原翁いへり、正三位社より、坂路五六丁ばかり登り行くほど、日のめもみえぬまで、木立しげれり、宮所は、一の嶽の麓、大なる巖の、物の足のごとく三つ聳立たるはざまにおはします、いと神さび、心すごき地なり、神殿・拜殿・末社十五區あり、又本社側に寶藏といふ、をろがみまつりて、のりとをさゝぐ、天照大神宮あり、拜殿の前には堀あり、又

寶藏
青柳種信、祝詞を捧ぐ

懸^母麻久^母長久言^母綾爾忌々志伎瀛津宮爾鎮坐須田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命登御名波申天、稱辭竟奉留、三柱乃皇神等乃大前爾長^母美申須、種麿皇朝乃上都大御代乃御手風乎痛久慕奉利、古支

神主の忌屋

御史等乎^平璞乃年月重^爾雖讀考從來黑^支心^波眞白玉潜得^留事志難久、足曳乃山乃麓山乃淺^支智^爾波^爾陰豆羅
可取得^支手着^奈、無在^支可畏皇大神^波御稜威逸早久世人乎幸^閉給^比守給^布事、滿潮乃彌益^爾御坐^波種
磨祈申願申事乎、神在隨安久平久所聞食眞種可美鏡押羽夫留事乃如久、上都大御代乃大御手風等
百限毛不落明^爾良^爾審^爾教給^比令悟給^比、又僕我親族產子乃八十綿連^毛常盤^爾堅盤^爾伊賀志夜久波叡乃
如久立榮志米給^倍登^倍、小鹿如膝折伏宇事物頸根衝拔^且恐^美恐^美申^須
神山のうち、何となく香ぐはしく、心もすが／＼し、神樂歌に、榊葉の香をかぐはしみとうた
へるも、かかるをりにこそと、おもひ得侍りぬ、祭終りて、神主の忌屋にてえらぎす、船人ど
も、酔ひしれて、岩坂のけはしきを、よろほひつゝ登り下り、國栖人ならねど、口鼓うちてあ
そぶ、

十七日、おのれが家に在りし橘樹を、もてまゐりて、御前に植うとて、そへてたてまたす歌、
霜おけど、いや常葉なる、とこよものあへたちばな、ほづ枝に白和幣かけ、しづ枝に青にぎ
てかけ、はろ／＼に、いこじまゐりて、畏こきや、神の御前に、移しうゑて、のみまつらく
は、これの葉の、とこしきが如、これの實のかぐはしきごと、萬代に、榮えをゆかむ、皇神
の、御魂たばりて、ちはひ給はね

反歌

時じくのかぐのこの實を奉りおきてわれもあえなむそのとこしきに

十九日、小屋島にあさる、此の島は、沖つしまの東南廿丁ばかりに在り、高さ七丈ばかり、な
べて巖のみにして土なし、木もなく、山の上に草少し生ひたり、岸に、いがひ・さじえ・蠣・

小屋島

石花多し、深き岩の谷に、浪の打ち入音、雷のごとし、あら・すゞきなンド釣らんとて、岸に臨みて、釣垂しに、大魚の海底より遊び出て、鰭をたてゝ浮き沈む、その大きき、乗りてこし舟にひとし、人々おちて、岩の蔭にかきつき震ひをり、船人どもは、かれ取りてんなンどののしりあひ、鉾取りのべ、岩の上に立ちわたる、魚は、青海をとよもし、沖の方に出でぬ、よくみれば、鮫魚にそありける、おきつしまを見さけて、

こゞしかも岩の神さび福草のみかみの嶽に雲るたなびく

御門柱

此の島の東南の方海中に、御門柱とて、高さ七丈ばかりの巖、柱の如く立ちのぼりて、二つ竝び立ちて、沖つ島に向ひたり、其のかたち怪し、兩巖のあひだ十間ばかりもやあらむ、其の間、海甚ふかし、

ふたならび大海の原に立ちならぶ御門の岩を見るがたふとさ

或日御社にまゐりて、

姫大神は崎門の山にあまく
だりいまし給ふ

天地の、始の時に、天照す、日女尊、味凝のあやにかしこき、神語に、のらし給はく、三柱の、姫大神は、わたの北の道のみなかに、しづまりて、御孫命の、樛木の、いや繼つきに、知食す、天津日嗣を、守給ひ、誓ひ給へと、言依さし、よさし給へれ、そこ故に、御ことのまにま、あま雲を、やへ搔きわけて、筑紫なる、崎門の山に、あまくだり、いまし給ひて、水江の、青薺美玉を、沖つしま、此の大宮の、みしるしと、いはひまつらし、八尺瓊の、紫の玉は、中津宮の、しるしにおかし、八咫鏡、とらし給ひて、邊津宮の、神の御形と、のり給ひ、おかし給へれ、しかれこそ、いまのをつゝに、福草の、みつのみたからを、三所の神

の、御形とをさめ給ひ、いつきまつれり、うべなく、身のかたの宮と、御名に負せり

反歌

みたからを沖つ御しまの此のみやにしづまりいます皇大御神

御島のめぐりの岩に金多くあり

御島のめぐりなる岩に、金おほくあり、そは浪に打ち出されて、桃の大きなるもあり、又は岩の缺げたる内に、切金などいふ物の如くなるが、いくらも出づるもあり、又水晶など見る如く、方に刻み立てたるやうなる黒きかねの出でたるもあり、打ちわりてみれば、中は銀の如し、中にも水の島といふ所のあたりの岩岸、すべて金のみなり、雨降りて晴れなんとするころ、日のさし出でたる時なンド、そこら光りあひて、きらきらし、その岩岸に、水のしたゝる所あり、土さけて、てる夏の日にも、かるることなし、もろもろの病をいやす陶もの、あるは竹の筒やうの物に、汲みて持ち返る國人、いたく重んじあへり、此の水の流れ出づる下の磯の岩間に、金の色したる小き海鼠をれり、俗に金海鼠といふ、

老人のわかゆとふ水ぞ沖つしまありその岩井いざむすびてな

目かゞやくこがね花さく岩の間ゆいづる走井飲はしよしも

はしりゐの水底さへにてるまでに五百箇岩むらにくがねかがよふ

級戸邊のいぶきしづけて、韓人の寄來とふ事もなく、手むだきをれば、防人等は、ひたすら神につかふる人の如く、朝夕に御前に落ちちりたる木の葉をはらひ、石をしきなンとして、つかへまつる、神山の内に入には、つねに聲とどろかしてゆく、もしひそかにゆけば、神の遊び給ふにゆきあふと、いひ傳へたり、

神山に入るには聲とどろかして行く、ひそかに行けば神の遊び給ふに行きあふと傳ふ

玉ちはふ神につかふとききもりは岩ねさくみてけふもまるでつ

とつづしり歌ひて、朝ごとに御山をのぼりくだりす、

五月朔日、けふなん、高の社にまゐりて、杜鵑を聞きつと、人のいひければ、

高々にまつ吾をおきて深山べに鳴くべきものかしこほとゝぎす

島の西の方、對馬にむかひて、大いなるいはやあり、高さ十丈ばかり、深さも同じほどなるべし、潮みつれば、窟の内に浪打ちいる、又その少し南の方の磯に、高さ六七丈ばかりの、劔のさましたる大巖ありしが、近き年ころ、大浪にてをれたりとて、三段になりてあり、此のあたりの磯の岩ども、皆あやしき形なり、又高き岩壁に、繩を懸けてのぼり下る所あり、岩の上より水のしたたり落ちて、打散る、かれ霧雨となもいふ、そこをゆくとて、

狭霧ふるいはのかけ路はかしこけどわれはかよはん萬代までに

神山にのぼる山道にて、

神山の木のくれし^(マ)らにかほ鳥の聲のこほしきこの夕かも

木のくれ暗たどきもしらにおぼしく我行く道にたれよぶこ鳥

磯山の東のはなより、遙に長門なる角島のみえければ

秋の野の萩ふみしだき鳴く鹿のさゝぐ角島浪まより見ゆ

六月朔日、西北の海を見わたして、

しらぎべは夕立すらし百ふねのつしまのねろゆ雲るたち來も

此五日、六日ばかりがほどは、大なる龜ども、磯近き海に、こころ浮き出てあそぶ、又五月の

磯の岩ども、皆あやしき形なり

神山にのぼる

磯山の東の端より長門の角島見ゆ

鼓岩

初つころより、いるかのいと大きなが、この磯ちかくすみてゐたりしが、近きころは見えず、

正三位社の後の高なる小屋
にのぼる

廿七日、きのふより海あれ、白浪いやたつ、防人のやどりの南の磯に、鼓岩とてあり、岩の根、地中より生出たるにあらず、磯にはへたる岩の上に、すわりたる岩なり、岩の下ほど、間ある中に、波の打ち入りて、引き落す音、鼓をうつに似たり、かれ鼓岩といふ、「立つ浪につゞみのおとを打ちそへてから人よせぬ沖つしま守」とよめるも、此所なりと、貝原翁いへり、此の岩浪の打よする度ごとに、ゆらゆらと動くを、人々あやしみて、其の大きさを量り見るに、高さ三丈一尺三寸、長さ四丈四尺、横二丈五尺あり、また向ひなる小屋島を、浪の打ち越るさまのすさまじさ、譬ふべき物なし、こはよのつねの磯の岩なンド、浪の打ちこすとは殊にて、溟渤一面、高くもりあがれば、島は海の底に沈みて見え、海低くなるかと見れば、忽島あらはれいづ、四方の岩みねより、潮のたぎり流るゝさまのかしこさ、胸もとどろき、目もくるめくばかりなり、磯もくづれねど、打つなみに、防人の家も浪にとられぬべく覺えて、手々に器なんどひさげて、高なる小屋にのぼる、いにしへより家を大浪にとられしこと多し故、さる時の料にとて、正三位社の後高き所に別に屋をつくりてあり、こゝを高といふ、曉がたより瀾のおとよわりて聞ゆ、

一の嶽に登る

＊〔瀛津嶋防人日記〕下 七月二日、つとめて、一の嶽にのぼる、峯は磯より二十町ばかりいとさかしき岩のかけ路にて、いづこを道ともわきまへず、石綱、あるは木のうれなンドを踏み、み山の猿ならねど、かなたこなたにつたひわたりて、やうやう峯に登りつきて見れば、峯は只

對馬の國府の上なる金山見
ゆ

鰐の浦

麓より立ちのぼりたる一つの巖なり、その巖白くして、遠く見さくれば、山はなべて雪のつもりたらんが如し、これより良の方をさして、峯三つ聳立ちたり、此のみねは、西南のかたに在りて、最高し、良なる二つは、やゝ低くて、目の下に見渡さるるばかりなり、そのいやはてにある峯を、白嶽といふ、これは餘の二峯よりも、其色殊に白き故なづく、峯の岩に尻かけて、西北の海を、はろばろと打ち見渡すに、長く引はへたるは、津嶋なり、つねに磯より見ゆるは、國府の上なる金山、こは殊に高山にて、かの島にては、外に類ふべきも見えず、日ごろ、小島の多くならびたると思ひをりしを、爰より見れば、一ひらの大なる島にて、金山の北のかたより、續麻なすひきはへたり、金山の北のかたに、山の絶えたる地の見ゆるは、今切の迫門ともいひて、近き比、山あひを掘り通し、東より西に海門を開たり、鰐の浦の方と、國府とは、海門を隔て、二つの島の如しなど、率てのぼりし海人の、其のあたりの事しれるが、さしてをしふ、けふは風もふかねば、海の面も、鏡なす澄みわたりたれば、しらぎの國や見ゆると、人々見さくれど、秋たちていくかもあらねば、夏のけはひ残りて、對島よりあなたは、薄雲はれやらず、

ふるさとのかたりにせんを梶角のしらぎの崎に雲なたなびき

眉引山

いましばしあり、またばなどいひつゝ、土さけて照る日をもいとはで、まもりをるに、やゝありて、雲の立ちのぼるまにまに、瞭如山の端なもみえたる、人々あなやといふ、そは鰐の浦東北、いと遠そきて、雲かとのみあやまたる、此の島よりは北の方なり、八月九月の比の、清くさやかなる時ならましかばとぞ、いひあへりける、

西南の海に壹岐の島見ゆ

向さくる山にし有るべし大きみの官家となりし百濟の國は

國津物さはにまつりて御馬飼の部に仕へし新羅の國はや

言さへぐ高麗のこきしも天皇のやつことなりて仕へまつりし

古書に壹岐連を雪連と書く

大神汚穢を忌み給ふ

西南の海をかへりみれば、壹岐の島いとよく見ゆ、さきの海人が語らく、風元の西の方、一里ばかりに、白き岩島あり、周廻二三町ばかりやもあるべき、島の上には本草もなし、海の上に雪の浮みたる如くなる故に、雪の島ともいふ、其の嶼、雨風はげしく、海あれぬべき時は、かねてその色かはりて、眞黒に見ゆ、あやしき島なり、そこらの海人、是をうかゞひて、日和を占ふに、違ふことなしといへり、これによりてつらつら思ひめぐらすに、古き書の中に、壹岐を由岐と訓み、また壹岐連てふ姓を、雪連と書きたる書も、これ彼見ゆれば、もと彼の國の名の壹岐は、雪にして、やがて此の嶼より、一國の大名となりしにやあらむ、筑紫の海人どもの、常に壹岐をば、壹州とのみ呼びて、壹岐、雪などとおし出していふ時は、國の名にはあらで彼の小島の事なり、これらも、何とかや由縁有りげに聞ゆ、こはおのがおしあてのさかしらなれど、試に書きつく、此の島の大神、いたく汚穢を忌み給ふに依りて、山中にて、かりにも唾はき小便る事なし、もしあやまちて、けがす時は、其の地の土をすくひ、海に持ち出でて、磯に捨て、清き砂を、先の土取りし跡に埋みて、本の如くならしおく、是を犯してしかせざれば、忽狂亂なンドする、近き頃にも、さる人のありて、誰もよくしれることぞかし、さるべき設にとて、昨日より大きな竹筒を作り置きて、緒して腰に佩るやうに構へ置きたれば、けふなも人々、筒を腰に付けつゝのぼる、峯を下るには、薦・かづら・木の枝・岩角などに懸りて、

金崎の海人

いとわづらはしく、吾も人も行きなづみていと見ぐるしくなん、爰より、御社の東の峯をつたひて下る所を、金崎といふ、こは、先に金崎の海人等が、漁に來りていほりせし地なり、故にしか名つけたたり、いまは來らず、此の峯の上に、松ひともとたてり、茂山なれど、松の樹は、島の中に、唯これのみなり、

荒磯わにたてる山松なれをそも憐とおもふ獨しあれば

肥前國松浦郡湊浦の海人大
島の海人にやとはれ、鰻を
とる

同四日、壹岐のかたの海に、白浪の山のごとく高く見ゆる、怪しみ見るほどに、黒く大なる魚の、浪をかづきて、浮き沈みつゝ行くなり、かの物しれる海人、せみといふ鯨なりとそいふ、から歌に、鯨魚跋浪滄溟開といへりしも、思ひ出られたり、此海人は、肥前國松浦郡の湊浦といふところの者にて、鯨をとる時に、海底を潜て、鯨に繩を着くることを業とする、はざしちう者なり、こたび大島の海士にやとはれて、六月の中ころより來て、日々に鰻をかづきとる、朝夕かつきするいとまには來て、かのあたりの事など物語るに、すこしは旅の思ひをはるけぬ、同五日、西の方より、大きな竹の、浪のまにまにながれ來る、船漕ぎ出して取り上げてみれば、韓竹なり、長さ六尋ばかり、こは網の泛子やうのものなりしと見えて、根のかたに、穴を彫たり、ところどころ、石花、蠣なとつきて、をかしき物なりしかば、人々花瓶などに伐りて翫ぶ、

から國を詫びてし爰による泛子(マ、)の綱手やひとりうきねすらしも

同六日、海人のかづきを見て、

かづき得て我にえしめよ大海の水底てらししつくしら玉

船出に神のゆるしを得るため、持ち来る鰻鋒一つ、正三位社に獻り、畏りを申す
不言島

爰の鰻は、とる人稀なる故に、世にこえて大なれば、玉もありぬべしとて、磯に出て、日々に海人の取り得たる鰻のうちを探る、白く光なきは、誰も多く取り得たり、けふなも、青く光あり、其の大き大豆のほどなるを得たり、人々うらやみて、ねたきことどもをいふ、

わたつみの神の釧やたえぬらん浪間に拾ふ鰻しらたま

吾はもよ白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり

とやいはまし、

同七日、きその夜半より、海あれて、磯に沖つ藻の多く來寄せたるを見て、

あやなくも來よる玉藻かうつくしみなれにたぐへむ妹もあらなくに

同十日、海人等漁しをへて、大島にかへる、此の二日三日ばかりは、海も靜なれば、歸らんとて、船出を占ふに、神のゆるし給はねばとてやみぬ、けふなも、占ふに、又前の如し、もて來し鰻鋒といふものを一つ、正三位社に獻りて、畏を申し、かば、やがて船出をゆるし給へりとなむ、船びらきす、夫につきて、かしこくあやしとおもふこともあれど、世に不言島としも憚り來つるに依て、つばらかに物せずなん、隣國の人、此の島を見つけて、不言島と云、それは神異のことのあるをば、かへりて人にはぬよしの名なり、

同十一日、白嶽の下に行きて釣す、此嶽は島の良のはてなる峯なり、峯は、青海の底より直に立ちのぼりたる一つの大巖なり、岸もなく、磯もなくして、峰の頂まで壁立ちたれば、猛き獸とても、かけりつくべくおもはれず、まして人ののぼらんことは、かけてもおぼえずなん、峯の北のかたに、谷あり、船より遙に見あぐるに、櫻欄の形して、大きに、葉も櫻欄よりは長く垂れたる木、多く立ち茂れり、大島の海人ども、こを誤りて、櫻欄なりといひて、その谷をも櫻

欄谷とよべり、此木はおのれさきに、志摩郡の遠呂嶋にて見し、備呂といふ木なり、檳榔の類にや、此の峯、さばかりの高き懸厓の上にしあれば、目近く見える事あたはて、其のありさま、つまびらかにしられず、

今言ふ忌詞は海人等が定め
つると覺ゆ

防人にある日數も、やうやう立ちぬれば、かほりの舟やくると、日々に山に登りて、南の海づらをながめつゝぞある、忌詞なンドもやうやう還るべき間近くなりてそ、えあやまたずなりぬ、
此の島に忌言あり、佛經僧尼等を始めて器やうの物にも忌名あり、されど古の
は失せ果てたりとみえたり、今いふに皆海人等が定めつると覺しくていやし。

同十五日、こよひ月いとおもしろし、月は海の底よりぞいづる、「照る月の流るるみれば天の川出づるみなとは海にさりける」とよめりしも、今にしられて、唐大和のふるきうたの、折につけておもひ出らるるを、打ち誦してながめあかす、

月人のあまの河とを船出していづことまりとさしてこぐらむ

おのれ、この四とせ五年のほど、江門に在りて、月見しに、草より出でて草にいるはあれど、こよひの月にはくらぶべくもあらず、物かはにぞおもひ過さる、出るも入るも、唯浪の立ち騒ぐかとのみ見えて、雲かとまがふ山の端もなければ、大空も海のやうにおもはれて、南の海はおしなべて白銀をたゝみたらんが如し、

よもすがら流るる月の影みれば浪のあなたやとまりなるらん

同二十二日、未の時ばかり、船遙にうかひ來、申の時ばかりに、島に着きぬ、日頃待ちわびたりし防人のかはりの船なり、いまひとつの舟、わづか一里ばかりもや隔つらんとみしほどに、にはかに空かきくもり、北風烈しく吹きしきり、濤たちさわぎて、大海おどろくしくあらび

防人の舟一隻、強風に吹かれて遠呂島・呼子浦に漂流す

救助の術なく、人々、神に祈請するのみ

先の難破は大島にて觸磯のことあるによりて、神の咎めならんといふ

たり、とかくするうちに、日もくれぬ、いと暗きに、いかゞはせんとて、さきに來つきたりし舟子どもも、あはてゝ磯に火を擧て、爰よ爰よと呼ばれども、船ありともおぼえず、浪のそこにや打入られけん、又は風に放たれて、遠呂島・呼子浦などにや流れ行きけん、夜ふくるにつけて、浪の音は、千萬の雷の鳴りはたゞくらんやうなれば、よも此の島に向ひて、柁を立てはえあるまじ、助けに行くべきやうもなければ、人々神にねき乞ひのむばかりなり、子の時はかりに、雲少し晴れて、月さし出、なごろもすこしく和きたりとおぼゆる頃、いと悲しき聲して、をらびさけぶ、すはや舟のよりぬとて、手手に手火をさゝげて、磯にいづ、舟はからくして漕ぎよせたれども、磯浪高くして、ほとほと打ちかへされぬべく見えしかば、陸なる舟子とも、磯ぶりのよする中に飛び入り飛び入りして、岸に助けあげぬ、人々いかに苦しかりけん、物いへど、舟子ら、いらへもせで泣きゐたり、まして舟人ならぬは、いける心もなく、打ち臥しゐたりしが、人に助けられて、水舟のうちより、衣はしとゞにぬれてはひ出づ、されど船の内人、ひとりもあやまちなく、幸かりしことを、着くも待つも悦びあへり、かく人のからきめみるにつけても、歸るさのほど心もとなくなん、後に、舟人の語るをきけば、大島に風守りせしほど、いさゝか觸磯のこと有りし、これをや、神の咎め給ひけんとぞいふ、いとかしこくなん、

同廿三日、海なぎたれば、けふなも舟出すべけれど、よべのさわがしかりしにまぎれて、いまだ歸るべき設なんどもえせねば、あすこそとて、隣りのかたの家に移りてをり、

同廿四日にはよしとて舟出す、二三里ばかりにや來ぬらんとおぼしき比、風あしとて、又本の

如く漕ぎつれて歸りぬ、ことしはいつもよりもあつさ増りたれば、秋も半近くなりぬれど、猶涼風もたゞず、あら磯の小屋の煤たれるに、所せく物ら打ちつみたれば、いと暑けさ堪えやらず、風待つほどの住ひなれど、わびしくて有りしやうにもあらず、

新防人の齋

同廿五日、なごろ高しとて、出でたゞず、新防人の齋の中なれば、觸穢とて山にもいらす、磯にのみあさる、

同廿八日、けふは新防人の齋もはてぬれば、打ちつれて正三位社にまうづ、風もかなひぬれど、舟子どもさきにこりて、いざとて舟を出す者なし、一人二人がすまふもたゆたひつゝ、とかくしてつひにやみぬ、

廿九日、巳の時船出す

同廿九日、暁がたより艮の風心よく吹き渡りて、海の面もなざたり、舟人ら猶たゆたひしを、巳の時近くなりてなも、舟を出せる、日ごろは海濱の住居にわびて、歸るべき日のみかぞへたりしを、今はと出でたつには、さすがになごりををしまるる心ちす、海つぢ五里ばかりも來ぬらんと思ふほどより、風はやく強く吹きしきりて、浪の華も咲きさふばかりなり、艫より懸浪うちいるれども、追手なればとて、すこし心をのどめてゐたりしを、申の時ばかりには、大島につきぬ、○下略

＊〔筑前國續風土記拾遺〕

十七

沖津嶋

○上 大嶋の北洋中にあり、山峻嶮にして坤より艮に掛て三峯相連れり、白石峭立す、遠く是を望

神仙遊萃の祕區

めは、雪中の山の如し、其形狀殊異にして、國中の諸山に似す、神仙遊萃の祕區といひつへし、

全島一大磐石

茂林の中に奇巖鼎立

御寶藏

恩賀嶋

坤の最高き峯を一ノ岳と云ふ、巖壁深林の上に聳たり、艮の方低き峯を白岳と云、山色特に潔白也、故に名とす、此嶋すへて一大磐石也、只南方にのみ麓より腰迄、土あつて沃壤也、竹樹鬱蒼たり、茂林の中に奇巖鼎立せり、其間に御社あり、神殿・拜殿・渡殿有、末社三字^{前十五}百八神を合せ祀る、又天照大神宮あり、御前から池あり、其側の大窟に窟有、御寶藏と云、坂を數町下りて木島居有、御供所有、此所を高と云、其海に臨たる岸上に正三位・荒船社あり、神軀はいつれも鏡を齎き祭る、^{略中}又隣國海邊の者、オンガウ島或は沖ノオンガウ杯いへり、オンガウとは御神の儀なるへし、^略

^{按に、安藝嚴島の縁起に筑前國恩賀嶋より遷し祭るよしいへる、恩賀島○下は即此オンガウ嶋なるへし、朝鮮の海東諸國記に小崎於島と云是歟、略}

編年史料

(一) 奈良時代以前

景初・正始年中
某歲、魏の使、倭の奴國より不彌國に到る

〔三國志〕

魏志三十 東夷傳 倭人傳

東南至奴國百里、官曰卑奴母離、有二萬餘戶、東行至不彌國百里、官曰多模、副曰卑奴母離、有千餘家、南至投馬國、水行二十日、官曰彌彌、副曰彌彌那利、可五萬餘戶、南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月、○上略

○不彌國を宗像郡福間に比する説あり、姑くこゝに掲ぐ、

仲哀天皇九年

十月、宗像大神、神功皇后の征新羅の役に神助を加へ給ふ

〔日本書紀〕

九 仲哀天皇

九年冬十月辛丑、（三日）從和珥津發之、時飛廉起風、陽候學浪、海中大魚、悉

新羅王、貢を廢せば、天神地祇と共に討せ賜へと誓ふ

浮扶船、則大風順吹、帆船隨波、不勞櫂楫、便到新羅、時隨船潮浪、遠逮國中、即知、天神地祇悉助歟、新羅王、於是、戰々慄々厝身無所、則集諸人曰、新羅之建國以來、未嘗聞海水凌國、若天運盡之、國爲海乎、是言未訖之間、船師滿海、旌旗耀日、鼓吹起聲、山川悉振、新羅王遙望以爲、非常之兵、將滅己國、讐焉矢志、乃今醒之曰、吾聞、東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其國之神兵也、豈可舉兵以距乎、即素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、因以、叩頭之曰、從今以後、長與乾坤、伏爲飼部、其不乾船桅、而春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以每年貢男女之調、則重誓之曰、非東日更出西、且除阿利那禮河返以之逆流、及河石昇爲星辰、而殊闕春秋之朝、怠廢梳鞭之貢、天神地祇、共討焉、時或曰、欲誅新羅王、於是、皇后曰、初承神教、將授金銀之國、又號令三軍曰、勿殺自服、今既獲財國、亦人自降服、殺之不祥、乃解其縛爲飼部、遂入其國中、封重寶府庫、收圖籍文書、即以皇后所杖矛、樹於新羅王門、爲後葉之印、故其矛今猶樹於新羅王之門也、爰新羅王波沙寐錦、即以微叱已知波珍于岐、

景初・正始年中——仲哀天皇九年

仲哀天皇九年

五〇

爲質、仍齎金銀彩色、及綾・羅・織絹、載于八十艘船、令從官軍、是以、新羅王、常以八十船之調、貢于日本國、其是之緣也、於是、高麗・百濟二國王、聞新羅收圖籍、降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭款曰、從今以後、永稱西蕃、不絕朝貢、故因以、定內官家屯倉、是所謂之三韓也、皇后從新羅還之、

宗像宣命

〔日本三代實錄〕^{十七} 貞觀十二年二月十五日^{〇中} 又曰、天皇我詔旨止掛長岐宗像大神乃廣前爾

申賜^倍止申、去年六月以來、大宰府度々言上^{多良}久、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津^爾到來天、豐前

國乃貢調船乃絹綿^乎掠奪^天逃退^利太、又廳樓兵庫等上^爾依有大鳥之怪^天卜求^爾、隣國乃兵革之事可在止

卜申利、又肥後國^爾地震風水之災在天、舍宅悉仆顛利、人民多流亡^多利、如此之災比古來未聞止、古

老等毛申止言上^多利、然間^爾、陸奧國又異常^那留地震之災言上^多利、自餘國々毛、又頗有件災止言上^多利、傳

聞、彼新羅人^波、我日本朝止久^岐世時利與^比來^多利、而今入來境內天、奪取調物^利天、無懼沮之氣、量

其意況^爾兵寇之萌自此而生^加、我朝久无軍旅天、專忘警備^多利、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝^波

所謂神明之國^那利、神明乃助護利賜^波、何乃兵寇^加可近來^岐、亦我皇大神^波、掛毛長岐大帶日姬乃、彼

新羅人^乎降伏賜時^爾、相共加力倍賜^天、我朝^乎救賜^比守賜^奈利、而今如此^爾狎侮氣色^乎露出事^波乎、最是

皇大神乃聞驚岐怒恚^利賜^倍物^奈利、故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄^乎差使天、禮代乃大

幣帛^乎令捧持天奉出給布、此狀^乎平^久聞食天、假令時世乃禍亂^止天、上件寇賊之事在^倍物^奈利、掛長皇

大神、國內乃諸神^太知^遠唱導^岐賜^比天、未發向之前^爾沮拒排却賜^倍、若賊謀已熟天、兵船必來^久倍^在波、境

內^爾入賜^波須^之天、逐還漂沒^米賜^比天、我朝乃神國止憚^良禮^來留^故實^乎澆^多之失賜^布奈、自此之外^爾假令^止天、夷俘乃逆

宗像大神、神功皇后の新羅
征討の時に相共に力を加へ
賜ふ

謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天國家乃大禍、百姓乃深憂之止在良率遠波、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天下无躁驚久國內平安爾鎮護利救助賜此、天皇朝廷乎寶位无動、常磐堅磐爾夜守晝守爾護幸倍矜奉給倍止、恐美恐毛申賜波久止、

＊〔八幡愚童記〕上略然間、皇后御物狂ク氣出來ル、武内大臣、御簾ヲ半ニ卷上テ、「如何ナ

龍神女は嚴嶋大明神、水神女は宗像大明神

ル事ニテ坐スヤ」ト被申レバ、「我ハ五十鈴川ノ邊ニ栖ム天照大神也、三韓既ニ十萬八千艘ノ船ヲ出シ立テ、數萬ノ軍兵只今來ラントス、此地ニ不着前ニ急異國ニ可向給也」トゾ仰ケル、武内ハ、「一ノ驗ヲ現ゼサセ給ヘ」ト申サル、御詞ノ終ヌ前ニ、光ヲ放テ照十方宣ク、「一ノ針ヲ海ニ入ヨ、三尺ノ鮎食付テ可上、御髮ヲ河ニ入レ給ハ、水神ノ女、龍神ノ女二人來テ、御髮ヲ二ニ分ベシ、榊ノ枝ニ大鈴ヲ付テ山ノ巔ニ上テ、朝廷ノ神達ヲ驚シ申給ハ、其瑞忽ニ可顯」トテ、御心本ニ複シ給ケリ、任神託針ヲ海ニ入レ給ヘバ、三尺ノ鮎二ツ食付テ上ル、御髮ヲ河ニ浸セバ、水神・龍神ノ二人ノ童女參リ、御髮ヲ二ニ分ク、此龍神女ハ嚴嶋ノ大明神、水神女ハ宗像ノ大明神ト後ニハ顯レ給ケリ、四王寺山ニ御行シテ、榊ノ枝ニ大鈴ヲ付ケ御手ニ捧テ立給事、六日儘ニ成レ共無其驗、六日ノ間ダ終ニ供御モ不食立通シ給ヘバ、着給御妹ノ二人、一人ハ寶滿大菩薩ト顯レ、一人ハ河上大明神ト成給フ、此二人ノ御妹ノ申給ハク、「左而已ハ如何ガ角テ可坐、唯ナラヌ御身也」ト諫止給ヘドモ、更ニ御身ヲ不資御祈請無ニ心ケル、去バ四天王來下シテ成石躰、敵國降伏ノ憑ヲ増給シカバ、是ヲ左手コソ四王寺山ト名付ケレ、○中略寶滿大菩薩・河上大明神ハ、皇后ノ御妹ニ坐セバ、女人ノ御身ナレドモ、弓箭甲冑ニ携リ同ク

仲哀天皇九年

神功皇后に、諏訪・熱田・三嶋・宗像・嚴嶋明神扈從し給ふ

伴給ケリ、諏方・熱田・三嶋・宗像・嚴嶋明神達、都合三百七十五人、志賀ノ嶋ヨリ四十八艘ノ御船ニ乗給、此三百七十五人ハ一艘毎ニ身ヲ變ジ、同貌ナル人一艘ニ三百七十五人御坐ス、此内梶取ニハ志賀嶋大明神、大將軍ニハ住吉大明神、副將軍ニハ高良大明神也、今ノ兩大將軍ハ皇后ノ前後ニ隨ヒ、左右ニ侍テ、樊噲・張良ガ漢祖ニ翼從シテ楚王ヲ誅伐シ、矜迦羅・制多迦ノ明王ニ奉仕シテ惡魔ヲ降伏シ給フ歟ト覺ヘタリ、越王軍ニアリシニ人酒ヲ送シカバ、江ニ注テ飲之、味雖不足皆有醉容、人之所樂者生也、所惡者死也、爭先者非輕死而樂傷也、「夫將視兵如子、則兵事將如父」ト云ル如ク、今ノ兩大將ハ食ヲ分チ、味ヲ一ニシテ、謀ヲ異朝ノ外ニ廻シ、勝コトヲ士率ノ中ニ授テ、心ヲシテ人ヲ感ジ給シカバ、力ヲ盡シテ身ヲ忘レ、上下無隔シテ將率同ク調ル、如何ル猛キ武士モ是ニハ如何可向、○下略

＊〔宗像大菩薩御緣起〕

一宗像先祖強石將軍、與住吉大明神親子主成天、垂跡以來三千二百歲○中略

強石將軍は宗像大菩薩なり

一強石將軍今宗像大菩薩依神功皇后今香椎聖母大菩薩勅命、三韓征伐事、仲哀天皇○中略九年九月十三日、從大宰府

乾奈留四王寺嶽仁登天、皇后大多良智女、以大鈴、附櫛枝仁高振啼天曰久、我欲降伏隣敵、四天

王守利助給惠、日本國者神國也、雲下神達、天神地祇海神水神諸共仁合力給惠主、致祈念給惠波、

龍宮城乃昔御妹豐姬今河上大明神來給畢、即空中又有聲答給天、不經暫時、明皇天子皓然主志現前、立

化爲七旬之老翁、即住吉大明神是也相具玉一人若冠、面貌端正仁志、猶如秋月之出雲眼目澄淨仁志、宛似夏蓮

之敷池今高良玉垂大菩薩是也、于時亦老翁一人出現志天曰、余是瑞穗國帝地神五代之最初天照大神之御子、夷

敵征伐七箇度之棟梁高磯強石將軍也主天、今宗像大菩薩捧御長手來給惠利、仍大將六人宗像、河上、住吉、高良、武内立

老翁、神功皇后の前に現れ、強石將軍と名乗り給ふ

宗大臣（宗像大菩薩）、御手長を振下げ、振上げ給ふ

強石將軍御影向の地、息御島に御手長を立置く

應神天皇三十七年

二月朔日、阿知使主・都加使主を吳に遣し、縫工女を求めしむ

應神天皇四十一年

二月、阿知使主、吳國より筑紫に歸還、胸形大神の請により吳國の織女兄媛を奉獻す

艫舳、四十八艘仁（宋筆）強石將軍ノ櫓、雖爲二流、四十三百七十五人乘給惠利、梶取波安曇儀良也（宋筆）儀良者、雖爲一人、四十八人仁遍身志

天、船コトニ對馬島着給天、爲豐姬御使、遣龍宮城、乾珠滿珠二顆珠於借給惠利、○中乘玉惠利云々

于時武内大臣赤白二流之旗於織持天、強石將軍今宗像大菩薩御手長仁付玉惠利、捧之軍前陣仁進玉、軍指旗事、

自此時初禮利、隨而十月十五日丑辛新羅國渡給計利、波風御心仁任天、無程着彼國給、遣牒狀御方、

僅仁四十八艘仁三百七十五人也、夷敵波十萬八千艘仁四十九萬六千餘人乘禮利、其時夷國々王

大臣等嘲弄志天言、日本者賢所也計利、如何爲女人大將軍哉、絲惜哉士蔑如須、于時蒙皇后勅命、

宗大臣今宗像大菩薩、御手長於振下玉、藤大臣今高良大菩薩乾珠於海仁入玉志加波、潮忽皆干天海上成陸地、夷賊等喜

天天與留事也上天、自船下天步行與利圍來、遙仁途中仁出來時、宗大臣亦御手長於振上玉、藤大臣

亦滿珠於海仁乘入玉惠利波、潮亦忽滿上天、異州之軍兵悉皆溺死訖、○中十二月四日亥辛筑前國早良郡

姪濱仁着給、被于御衣裳泊濱土中、則宮崎仁着給天、強石將軍今宗像大菩薩白旗赤旗於立置玉惠利、於今者其跡於一所者號

赤旗之社、一所者號旗鉾之御堂、其後強石將軍根本御影向之地、息御嶋仁御手長於立置玉惠利、是

則異國征伐御旗杆也每年不絕、三竹之瓶中仁、無增減生長須留不思議有之、

〔日本書紀〕十應神天皇 卅七年春二月戊午朔、遣阿知使主・都加使主於吳、令求縫工女、爰阿知

使主等、渡高麗國、欲達于吳、則至高麗、更不知道路、乞知道者於高麗、々々王乃副久禮波・

久禮志、二人、爲導者、由是、得通吳、吳王、於是、與工女兄媛・弟媛・吳織・穴織、四婦女、

〔日本書紀〕十應神天皇 卅一年春二月、是月、阿知使主等、自吳至筑紫、時胸形大神、有乞工女等、

仲哀天皇九年—應神天皇四十一年

兄媛は筑紫御使君の祖

應神天皇四十一年—仁德天皇五十三年

五四

故以兄媛奉於胸形大神、是則今在筑紫國、御使君之祖也、既而率其三婦女、以至津國、及于武庫、而天皇崩之、不及、即獻于大鷦鷯尊、是女人等之後、今吳衣縫・蚊屋衣縫是也、

縫殿神社

※〔神社帳〕○宗像郡志上所收 縫殿神社

勝浦村大字奴山字大明神嶽にあり、

一祭神 大歲神 應神天皇 工女兄媛 弟媛 吳織 穴織、

※〔筑前國續風土記〕^{十七} 縫殿大明神
宗像郡下

奴山村に在、宗像神事帳にも有、里民の言傳るには、昔神功皇后新羅を征し給ふ時、舟の帆を縫し神なりと云、今其神名について思ふに、是兄媛を祭れる神歟、いぶかし、兄媛の事は、宗像三社の所に日本紀を引て記せり、

仁德天皇十七年

九月、新羅朝貢せざるにより、砥田宿禰・賢遺臣を遣して之を責む

〔日本書紀〕^{十一} 仁德天皇 十七年、新羅不朝貢、

秋九月、遣的臣祖砥田宿禰・小泊瀬造祖賢遺臣、而問闕貢之事、於是、新羅人懼之乃貢獻、調絹一千四百六十匹、及種々雜物、并八十艘、

仁德天皇五十三年

五月、新羅朝貢せざるにより、竹葉瀬を遣して之を責む、尋で竹葉瀬の弟田道を派して新羅を撃つ

〔日本書紀〕^{十一} 仁德天皇 五十三年、新羅不朝貢、

夏五月、遣上毛野君祖竹葉瀬、令問其闕貢、是道路之間獲白鹿、乃還之獻于天皇、更改日而行、俄且重遣竹葉瀬之弟田道、則詔之曰、若新羅距者、舉兵擊之、仍授精兵、新羅起兵而距之、爰

履仲天皇五年
三月朔日、筑紫の三神、宮中に現れ、天皇に領民收奪のことを託宣し給ふ

十月十一日、天皇、詔して車持君が筑紫の車持部を支配するを停めて、之を收公し、更めて宗像三神に寄進し給ふ

允恭天皇三年
正月朔日、天皇、御病のため醫を新羅に求めらる、仍て醫來朝し、御病全治す

雄略天皇九年（四六五）
二月朔日、凡河内直香賜と采女とを遣して、胸方神を祠らしむ

新羅人、日々挑戰、田道固塞而不出、時新羅軍卒一人、有放于營外、則掠俘之、因問消息、對曰、有強力者、曰百衡、輕捷猛幹、每爲軍右前鋒、故伺之擊左則敗也、時新羅空左備右、於是、田道連精騎擊其左、新羅軍潰之、因縱兵乘之、殺數百人、即虜四邑之人民、以歸焉、

〔日本書紀〕^{十二}
履仲天皇 五年春三月戊午朔、於筑紫所居三神、見于宮中、言、何奪我民矣、吾今慚汝、於是、禱而不祠、

〔日本書紀〕^{十二}
履仲天皇 五年冬十月甲子、葬皇妃、既而天皇、悔之不治神祟、而亡皇妃、更求其咎、或者曰、車持君行於筑紫國、而悉校車持部、兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既得實焉、因以、數之曰、爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也、既分寄于神車持部、兼奪取之、罪二也、則負惡解除・善解除、而出於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自今以後、不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

〔日本書紀〕^{十三}
允恭天皇 三年春正月辛酉朔、遣使求良醫於新羅、
秋八月、醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時、病已差也、天皇歡之、厚賞醫以歸于國、

〔日本書紀〕^{十四}
雄略天皇 九年春二月甲子朔、遣凡河内直香賜與采女、祠胸方神、香賜既至壇所^{此云香賜夫、}及將行事、奸其采女、天皇聞之曰、祠神祈福、可不愼歟、乃遣難波日鷹吉士將誅之、時香

仁德天皇五十三年—雄略天皇九年（四六五）

雄略天皇九年（四六五）—雄略天皇十年（四六六）

五六

賜退逃亡不在、天皇復遣弓削連豐穗、普求國郡縣、遂於三嶋郡藍原、執而斬焉、

三月、是より先、天皇親ら新羅を伐たんとせられしも、宗像神の神戒により之を停め給ひ、紀小弓宿禰らを派し給ふ

〔日本書紀〕

十四
雄略天皇

九年三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是、不果行、乃

勅紀小弓宿禰・蘇我韓子宿禰・大伴談連談、此云箇陀利・小鹿火宿禰等曰、新羅自居西土、累葉稱臣、

朝聘無違、貢職允濟、逮乎朕之王天下、投身對馬之外、竄跡匠羅之表、阻高麗之貢、吞百濟之

城、況復朝聘既闕、貢職莫脩、狼子野心、飽飛、飢附、以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、

天罰冀行、於是、紀小弓宿禰、使大伴室屋大連、憂陳於天皇曰、臣雖拙弱、敬奉勅矣、但今、

臣婦命過之際、莫能視養臣者、公冀將此事具陳天皇、於是、大伴室屋大連、具爲陳之、天皇聞

悲頹歎、以吉備上道采女大海、賜於紀小弓宿禰、爲隨身視養、遂推轂以遣焉、紀小弓宿禰等、

卽入新羅、行屠傍郡行屠、並

雄略天皇十年（四六六）

九月四日、水間君の犬、吳より獻上の鵝を喰殺すにより、水間君、鴻・養鳥人を獻ず

〔日本書紀〕

十四
雄略天皇

十年秋九月戊子、

身狹村主青等、將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君

犬所嚙死、

別本云、是鵝爲筑紫獻縣主泥麻呂犬所嚙死、

由是、水間君恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻與養鳥人、請以贖罪、

天皇許焉、

冬十月辛酉、（七日）以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村・磐余村、二所、

*〔日本書紀〕

七
景行天皇

四年春二月甲子、

（十一日）○中

次妃襲武媛、生國乳別皇子與國背別皇子一云宮道別皇子・豐

戶別皇子、其兄國乳別皇子、是水沼別之始祖也、弟豐戶別皇子、是火國別之始祖也、夫天皇之

景行天皇の妃襲武媛所生の國乳別皇子は水沼別の始祖なり

男女、前後并八十子、

○以下水沼君の史料一括こゝに掲ぐ、

景行天皇十八年七月七日、
天皇八女縣に到る

※〔日本書紀〕^七 景行天皇 十八年七月丁酉、到八女縣、則越藤山、以南望粟岬、詔之曰、其山峯岫重疊、且美麗之甚、若神有其山乎、時水沼縣主猿大海奏言、有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名、由此而起也、

※〔先代舊事本紀〕^五 天孫本紀

十四世孫物部大市御狩連公、尾輿大連之子、

此連公、譯語田宮御宇^{〔放達〕}天皇御世、爲大連奉齋神宮、弟贅古大連女宮古郎女爲妻生二兒、

弟物部守屋大連公、曰弓削大連、○中略

弟物部倭古連公^{依羅田部連等祖}

弟物部鹽古連公^{葛野韓國連等祖}

弟物部金古連公^{三嶋韓國連等祖}

弟物部阿遲古連公^{水間君等祖}

水間君祖

※〔先代舊事本紀〕^七 天皇本紀 景行天皇

諱日本大足彥忍代別尊者、活目入彥五十狹茅天皇第三太子也、母曰皇后日葉洲媛命、丹波道主雄略天皇十年（四六六）

王之女也○中略

夫天皇所生男女惣八十一皇子之中、男五十五、女廿六、就中除留六皇子、男五、女一、以外皆

封州縣矣、皇子五十、皇女廿六、合七十六、各封州縣、不入國史、稚倭根子命、大酢別命、吉

筑紫水間君祖
水間君祖

備兄彥命、武國凝別命、筑紫水間君祖神櫛別命、讚岐國造祖稻背入彥命、播磨別祖豐國別命、喜備別祖國背別命、水間君祖

忍之別命、日向襲津彥命、奄智君祖國乳別命、伊與字和別祖豐門入彥命、大田別祖五十狹城入彥命、三河長谷部直祖武國

凝別命、伊與御城別添御杖君祖稚屋彥命、彥人大兄命、直稚彥命、天帶根命、自鯉部君祖大曾色別命、五十河彥命、

三島水間君祖

讚岐直、五河別祖石社別命、大稻背別命、御杖君祖武押別命、豐門別命、三島水間君、奄智首、壯子○中

已上五十皇子、其廿六皇女、不在入限

〔日本書紀〕十四雄略天皇 廿三年○中略是歲、百濟調賦、益於常例、筑紫安致臣・馬飼臣等、率船師以

雄略天皇二十三年（四七九）
是歲、筑紫安致臣・馬飼臣ら、船師を率ゐて、高麗を撃つ

撃高麗、

繼體天皇二十一年（五二七）

六月三日、近江毛野を任那に派し、新羅を討たんとす、時に筑紫國造磐井、新羅の賂をうけて、毛野の軍を防遏す

〔日本書紀〕十七繼體天皇 廿一年夏六月甲午、（三日）近江毛野臣、率衆六萬、欲往任那、爲復興建新羅所破

南加羅・喙己吞、而合任那、於是、筑紫國造磐井、陰謀叛逆、猶預經年、恐事難成、恆伺間隙、

新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍、於是、磐井掩據火豐二國、勿使修職、外邀

海路、誘致高麗・百濟・新羅・任那等國年貢戰船、內遮遣任那毛野臣軍、亂語揚言曰、今爲使

者、昔爲吾伴、摩肩觸肘、共器同食、安得率爾爲使、俾余自伏爾前、遂戰而不受、驕而自矜、

是以、毛野臣、乃見防遏、中途淹滯、天皇詔大伴大連金村・物部大連鹿鹿火・許勢大臣男人等

物部麿鹿火、磐井と筑紫御井郡に交戦す

欽明天皇二十三年（五六二）
八月、大將軍大伴連狹手彥を遣して、高麗を伐つ

五色幡

欽明天皇三十二年（五七一）
三月五日、新羅に坂田耳子郎君を遣して、任那を滅ぼすを問責せしむ

曰、筑紫磐井反掩、有西戎之地、今誰可將者、大伴大連等僉曰、正直仁勇通於兵事、今無出於麿鹿火右、天皇曰、可、秋八月辛卯朔、詔曰、咨、大連、惟茲磐井弗率、汝徂征、物部麿鹿火大連再拜言、嗟、夫磐井西戎之奸猾、負川阻而不庭、憑山峻而稱亂、敗德反道、侮慢自賢、在昔道臣、爰及室屋、助帝而罰、拯民塗炭、彼此一時、唯天所贊、臣恆所重、能不恭伐、詔曰、良將之軍也、施恩推惠、恕己治人、攻如河決、戰如風發、重詔曰、大將民之司命、社稷存亡、於是乎在、曷哉、恭行天罰、天皇親操斧鉞、授大連曰、長門以東朕制之、筑紫以西汝制之、專行賞罰、勿煩頻奏、

廿二年冬十一月甲子、^{（十一日）}大將軍物部大連麿鹿火、親與賊帥磐井、交戰於筑紫御井郡、旗鼓相望、埃塵相接、決機兩陣之間、不避萬死之地、遂斬磐井、果定疆場、十二月、筑紫葛子、恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

〔日本書紀〕^{十九} 廿三年八月、天皇遣大將軍大伴連狹手彥、領兵數萬、伐于高麗、狹手彥乃用百濟計、打破高麗、其王踰牆而逃、狹手彥遂乘勝以入宮、盡得珍寶賂賂・七織帳・鐵屋還來、^{舊本云、鐵屋在高麗西高樓上、織帳張於高麗王內殿、}以七織帳、奉獻於天皇、以甲二領・金飾刀二口・銅鏤鍾三口・五色幡二竿・美女媛^{媛名也}并其從女吾田子、送於蘇我稻目宿禰大臣、

〔日本書紀〕^{十九} 廿二年春三月壬子、遣坂田耳子郎君、使於新羅、問任那滅由、是月、高麗獻物并表、未得呈奏、經歷數旬、占待良日、

繼體天皇二十一年（五二七）—欽明天皇三十二年（五七一）

敏達天皇四年（五七五）

四月六日、吉士金子を新羅に、吉士木蓮子を任那に、吉士譯語彦を百濟に遣す

〔日本書紀〕

敏達天皇

四年夏四月庚寅、遣吉士金子、使於新羅、吉士木蓮子使於任那、吉士譯語

彦使於百濟、

敏達天皇十三年（五八四）

二月八日、難波吉士木蓮子を新羅に遣す

〔日本書紀〕

敏達天皇

十三年春二月庚子、遣難波吉士木蓮子、使於新羅、遂之任那、秋九月、從

百濟來鹿深臣、字 關名有彌勒石像一軀、佐伯連、字 關名有佛像一軀、

崇峻天皇四年（五九一）

十一月四日、吉士金を新羅に、吉士木蓮子を任那に遣す

〔日本書紀〕

崇峻天皇

四年冬十一月壬午、差紀男麻呂宿禰・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良

臣、爲大將軍、率氏々臣連、爲裨將・部隊、領二萬餘軍、出居筑紫、遣吉士金於新羅、遣吉士

木蓮子於任那、問任那事、

推古天皇五年（五九七）

十一月二十二日、吉士磐金を新羅に遣す、尋で翌六年四月、磐金新羅より歸り、鵠二羽を獻ず

〔日本書紀〕

推古天皇

五年冬十一月甲午、遣吉士磐金於新羅、

六年夏四月、難波吉士磐金、至自新羅、而獻鵠二隻、仍俾養於難波社、因以巢枝而產之、

秋八月己亥朔、新羅貢孔雀一隻、

推古天皇八年（六〇〇・開皇二十年）

二月、新羅、任那を攻む、天皇、境部臣らを派して任那を救援し、新羅を攻め降す、仍て難波吉師神

〔日本書紀〕

推古天皇

八年春二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲、命境部臣爲大將軍、

以穗積臣爲副將軍、並關名則將萬餘衆、爲任那擊新羅、於是、直指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、

攻五城而拔、於是、新羅王、惶之舉白旗、到于將軍之麾下而立、割多々羅・素奈羅・弗知鬼・

を新羅に、難波吉士木連子を任那に遣す

委陀・南迦羅・阿羅々六城、以請服、時將軍共議曰、新羅知罪服之、強擊不可、則奏上、爰天皇更遣難波吉師神於新羅、復遣難波吉士木連子於任那、並檢校事狀、

是歲、倭の使、隋に入貢す

〔隋書〕八十一 東夷傳 倭國傳 開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思北孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕、

推古天皇十年（六〇二）

二月、來目皇子を征新羅將軍として筑紫に派す、尋で六月、皇子病みて征討を果さず

〔日本書紀〕二十二 推古天皇 十年春二月己酉朔、來目皇子爲擊新羅將軍、授諸神部及國造伴造等、并

軍衆二萬五千人、

夏四月戊申朔、將軍來目皇子、到于筑紫、乃進屯嶋郡、而聚船舶運軍糧、

六月己酉、（三日） 大伴連嚙・坂本臣糠手、共至自百濟、是時、來目皇子、臥病以不果征討、

推古天皇十一年（六〇三）

七月三日、是より先、來目皇子、筑紫に薨じ、代りて是日、當摩皇子、征新羅將軍として難波より進發す、然るに同皇子の妃薨ずるにより、皇子征討せず

〔日本書紀〕二十二 推古天皇 十一年春二月丙子、（四日） 來目皇子、薨於筑紫、仍驛使以奏上、爰天皇聞之大

驚、則召皇太子・蘇我大臣、謂之曰、征新羅大將軍來目皇子薨之、其臨大事、而不遂矣、甚悲乎、仍殯于周芳娑婆、乃遣土師連猪手、令掌殯事、故猪手連之孫曰娑婆連、其是之緣也、後葬

於河内埴生山岡上、

夏四月壬申朔、更以來目皇子之兄當摩皇子、爲征新羅將軍、

秋七月癸卯、（三日） 當摩皇子自難波發船、

丙午、（六日） 當摩皇子到播磨、時從妻舍人姬王薨於赤石、仍葬于赤石檜笠岡上、乃當摩皇子返之、遂不征討、

推古天皇八年（六〇〇）—推古天皇十一年（六〇三）

推古天皇十五年（六〇七・大業三年）
七月三日、遣隋使小野妹子・通事

鞍作福利を隋に遣す
是歲、倭、隋に朝貢す

〔日本書紀〕^{二十二} 十五年秋七月庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐^{（ヤ）}、以鞍作福利爲通事、

〔隋書〕^{八十一} 東夷傳^{（六〇七）} 大業三年、其王多利思北孤、遣使朝貢、使者曰、聞海西菩薩天子重興佛

法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法、其國書曰、日出處天子、致書日沒處天子、無恙云云、帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者、勿復以聞、

＊〔扶桑略記〕^四 十五年秋七月妹子遣於大唐^{（ヤ）}、太子令妹子曰、大隋赤縣之南、江南道中有

妹子、聖德太子の命により
衡山般若臺に登る

衡州、々中有衡山、是南岳也、山中有般若臺、登自南溪下、入滋松中三四許里、門臨谷口、吾昔同德皆既遷化、唯有三軀、汝宜以此法服、稱吾名而贈之、復吾昔身住其臺時、所持法花經、複爲一卷、乞受將來、妹子到彼、問彼土人、遂屈衡山、如太子命、入自南溪、比至門側、有一沙彌、在門之內、唱云、思禪師使人到來、有一老僧、策杖而出、又有二老僧、相續而出、相顧含笑、妹子三拜、言語不通、書地而語、各贈法服、老僧書地曰、思禪師於彼何號、妹子答曰、我日本國、元倭國也、在東海中、相去三年行矣、今有聖德太子、崇尊佛道、流通妙義、自說諸經、兼製義疏、^{私云、太子推古天皇十七年以後、作諸經疏、何云兼製義疏乎、}承其令旨、取昔身所持複法華經一卷、餘無異夏、老僧等大歡、命沙彌取之、須臾取經、納一漆篋而來、語妹子曰、是經并篋、思禪師之所持也、思禪師在此、惰倦讀經、眠而燒經、有一點處、僧等授經竟、指南峯上一石塔云、彼思禪師遷化骸骨之塔也、于今卅六歲矣、妹子受辭、拜而別去、三老僧各裹物納一篋、答曰、贈之、并有封書一篋、

推古天皇十六年（六〇八・大業四年）
四月、遣隋使小野妹子、隋使裴世清と共に、筑紫に至る

〔日本書紀〕^{二十二} 十六年夏四月、小野臣妹子、至自大唐、々國號妹子臣曰蘇因高、即大唐

使人裴世清・下客十二人、從妹子臣、至於筑紫、遣難波吉士雄成、召大唐客裴世清等、爲唐客

更造新館於難波高麗館之上、

六月^{十五日}丙辰、客等泊于難波津、是日、以飾船卅艘、迎客等于江口、安置新館、於是、以中臣宮地

連烏摩呂・大河內直糠手・船史王平爲掌客、爰妹子臣奏之曰、臣參還之時、唐帝以書授臣、然

經過百濟國之日、百濟人探以掠取、是以不得上、於是、群臣議之曰、夫使人雖死之、不失旨、

是使矣何怠之、失大國之書哉、則坐流刑、時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、輒不可罪、其大

國客等聞之、亦不良、乃赦之不坐也、

唐帝の國書、百濟人のため
掠取さる

※〔扶桑略記〕^四 十六年戊辰四月、遣唐使妹子歸朝、衡山般若臺中所納複一卷法華經持來、

并三老僧贈書褱物等、進于太子、太子大悅、披物而看、有舍利三枚、名香等、書辭他人不得見

之、太子讀竟、垂淚投火、不識其故、侍從驚奇之、

※〔隋書〕^{八十一} 東夷傳 倭國傳 明年、上遣文林郎裴清使於倭國、度百濟、行至竹島、南望耽羅國、經都

斯麻國、迥在大海中、又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國、其人同於華夏、以爲夷洲、

疑不能明也、又經十餘國、達於海岸、自竹斯國以東、皆附庸於倭、倭王遣小德阿輩臺、從數百

人、設儀仗、鳴鼓角來迎、後十日、又遣大禮哥多毗、從二百餘騎郊勞、既至彼都、其王與清相

推古天皇十六年（六〇八）

推古天皇十六年（六〇八）—推古天皇十七年（六〇九）

六四

見、大悅曰、我聞、海西有大隋禮義之國、故遣朝貢、我夷人僻在海隅、不聞禮義、是以稽留境內、不即相見、今故清道飾館、以待大使、冀聞大國惟新之化、清答曰、皇帝德竝二儀、澤流四海、以王慕化、故遣行人來此宣諭、既而引清就館、其後清遣人謂其王曰、朝命既達、請即戒塗、於是設宴享以遣清、

九月十一日、隋使裴世清ら歸國す、遣隋大使小野妹子・小使吉士雄成らをして之を送らしむ、是時、留學生ら八人、隨行す

〔日本書紀〕^{二十二} 十六年九月乙亥、饗客等於難波大郡、

辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客、

而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解、

季秋薄冷、尊何如、想清念、此即如常、今遣大禮蘇因高・大禮乎那利等往、謹白不具、是時、

遣於唐國學生倭漢直福因・奈羅譯語惠明・高向漢人玄理・新漢人大圀、學問僧新漢人日文・南

淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人廣濟等、并八人也、

是歲、倭、隋に朝貢す

邪久國

〔隋書〕^{八十一} 東夷傳 明年帝復令寬慰撫之、流求不從、寬取其布甲而還、時倭國使來朝、見之

曰、此夷邪久國人所用也、

〔隋書〕^{八十一} 東夷傳 明年、^{大業四年}復令使者隨清、來貢方物、此後遂絕、

推古天皇十七年（六〇九）
九月、小野妹子、隋より歸國す

〔日本書紀〕^{二十二} 十七年秋九月、小野臣妹子等、至自大唐、唯通事福利不來、

推古天皇十八年（六一〇・大業六年）
正月、倭國の使者、隋に入貢す

〔隋書〕^三 煬帝本紀上 大業六年、春正月、己丑、倭國遣使貢方物、

推古天皇二十二年（六一四）
六月十三日、犬上御田歙・矢田部造らを隋に遣す、翌二十三年九月、犬上御田歙ら、百濟使と共に歸國す

〔日本書紀〕^{二十一} 推古天皇 二十二年六月己卯、遣犬上御田歙・矢田部造^{マ、}名關於大唐、
廿三年秋九月、犬上御田歙・矢田部造、至自大唐、百濟之使、則從犬上君、而來朝、

推古天皇三十一年（六二三）
七月、大唐學問者僧惠齋・惠光ら、新羅使と共に來朝す

〔日本書紀〕^{二十一} 推古天皇 三十一年秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝、
仍貢佛像一具及金塔并舍利、且大觀頂幡一具・小幡十二條、即佛像居於葛野秦寺、以餘舍利金塔觀頂幡等、皆納于四天王寺、是時、大唐學問者僧惠齋・惠光、及醫惠日・福因等、並從智洗爾等來之、於是、惠日等共奏聞曰、留于唐國學者、皆學以成業、應喚、且其大唐國者、法式備定之珍國也、常須達、

是歲、是より先、新羅、任那を攻む、吉士磐金を新羅に、吉士倉下を任那に遣して、任那の事を問はしむ、十一月、磐金ら新羅より歸る

〔日本書紀〕^{二十一} 推古天皇 三十一年^{略中} 是歲、新羅伐任那、任那附新羅、於是、天皇將討新羅、謀及大臣、詢于群卿、田中臣對曰、不可急討、先察狀、以知逆後擊之不晚也、請試遣使覩其消息、中臣連國曰、任那是元我內官家、今新羅入伐而有之、請戒戎旅、征伐新羅、以取任那、附百濟、寧非益有于新羅乎、田中臣曰、不然、百濟是多反覆之國、道路之間尙詐之、凡彼所請皆非之、故不可附百濟、則不果征焉、爰遣吉士磐金於新羅、遣吉士倉下於任那、令問任那之事、時新羅國主、遣八大夫、啓新羅國事於磐金、且啓任那國事於倉下、因以約曰、任那小國、天皇附庸、

推古天皇十八年（六一〇）—推古天皇三十一年（六二三）

推古天皇三十一年（六三三）—舒明天皇四年（六三二）

六六

何新羅輒有之、隨常定內官家、願無煩矣、則遣奈末智洗遲、副於吉士磐金、復以任那人達率奈末遲、副於吉士倉下、仍貢兩國之調、然磐金等、未及于還、卽年、以大德境部臣雄摩侶・小德中臣連國爲大將軍、以小德河邊臣禰受・小德物部依網連乙等・小德波多臣廣庭・小德近江脚身臣飯蓋・小德平群臣宇志・小德大伴連名闕小德大宅臣軍爲副將軍、率數萬衆、以征討新羅、時磐金等、共會於津、將發船以候風波、於是、船師滿海多至、兩國使人、望瞻之愕然、乃還留焉、
○中略則發船而度之、唯將軍等、始到任那、而議之、欲襲新羅、
冬十一月、磐金・倉下等至自新羅、

舒明天皇二年（六三〇）
八月五日、大上君三田耜・藥師惠日らを唐に遣す

〔日本書紀〕二十三 二年秋八月丁酉、以大仁大上君三田耜・大仁藥師惠日、遣於大唐、
（五日）
庚子、饗高麗百濟客客於朝、

舒明天皇三年（六三一・貞觀五年）
是歲、倭の朝貢使唐に入朝す

〔舊唐書〕一九九上 東夷傳 （六三一） 貞觀五年、遣使獻方物、太宗矜其道遠、勅所司、無令歲貢、又遣新州刺史高表仁、持節往撫之、表仁無綏遠之才、與王子爭禮、不宜朝命而還、

〔新唐書〕二二〇 東夷傳 太宗貞觀五年、遣使者入朝、帝矜其遠、詔有司、毋拘歲貢、遣新州刺史高表仁往諭、與王爭禮不平、不肯宣天子命而還、

舒明天皇四年（六三二）

〔日本書紀〕二十三 四年秋八月、大唐遣高表仁、送三田耜、共泊于對馬、是時、學問僧靈雲・

八月、三田耜、靈雲らと共に唐より歸る

僧旻及勝鳥養、新羅送使等從之、

旻、國博士となる

※〔元亨釋書〕^{十六} 釋僧旻、入唐留學、舒明四年八月、從唐使高表仁、共沙門靈雲來歸、孝德

帝卽祚、以才勅爲國博士、大化六年二月、穴戶獻白雉、宣問群臣、又問旻、旻奏曰、休祥也、語涉經史、博物詳正、因此改元白雉、四年五月、旻病、帝幸房問病、口勅恩旨、六月寂、帝使官使弔賻、太后太子皆弔喪、

舒明天皇十一年（六三九）
九月、大唐學問僧惠隱ら入京す

〔日本書紀〕^{二十三} 十一年秋九月、大唐學問僧惠隱・惠雲、從新羅送使入京、

※〔元亨釋書〕^{十六} 釋惠隱、入唐留學、舒明十一年九月、從新羅使來歸、白雉三年、於宮中講無量壽經、沙門慧資爲問者、

舒明天皇十二年（六四〇）
十月十一日、遣唐學問僧清安ら、唐より新羅を経て歸着す

〔日本書紀〕^{二十三} 十二年冬十月乙亥、大唐學問僧清安・學生高向漢人玄理、傳新羅而至之、仍百濟・新羅朝貢之使、共從來之、則各賜爵一級、

皇極天皇元年（六四二）
二月二十二日、津守連大海を高麗に、國勝吉士水鷄を百濟に、草壁吉士眞跡を新羅に、坂本吉士長兄を任那に遣す

〔日本書紀〕^{二十四} 元年二月戊申、饗高麗・百濟客於難波郡、詔大臣曰、以津守連大海可使於高麗、以國勝吉士水鷄可使於百濟、^{水鷄、此云俱毗那}以草壁吉士眞跡可使於新羅、以坂本吉士長兄可使於任那、

舒明天皇四年（六三二）——皇極天皇元年（六四二）

大化二年（六四六）——大化五年（六四九）

六八

大化二年（六四六）
九月、高向博士黑麻呂を新羅に遣して、質を徴す、尋で翌三年、金春秋らと共に歸る

〔日本書紀〕^{二十五}
孝德天皇

大化二年九月、遣小德高向博士黑麻呂於新羅、而使貢質、遂罷任那之調、

黑麻呂、更
名玄理、
（六四七）

大化三年、是歲^{略中}

新羅遣上臣大阿食金春秋等、送博士小德高向黑麻呂・小山中中臣連押熊、

來獻孔雀一隻・鸚鵡一隻、仍以春秋爲質、春秋美姿顏善談笑、

大化五年（六四九）
五月朔日、三輪君色夫・掃部連角麻呂を新羅に遣す

〔日本書紀〕^{二十五}
孝德天皇

大化五年五月癸卯朔、遣小花下三輪君色夫・大山上掃部連角麻呂等於新

羅、

大化年中
某歲、宗形郡建置せらる、尋で神郡として當社に寄進せらる
八神郡

〔令集解〕^{十六}
選敍令

凡同司主典以上^{略中}不得用三等以上親、

謂、其非三等親者、縱得相隱、猶須任用也、釋云、養老七年十一月十六日太政官處分、伊勢國渡相郡、竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑前國宗形郡、常陸國鹿嶋郡、下總國香取郡、紀伊國名草郡、合八神郡、聽連任三等以上親也、跡云、四等親、雖相隱而任用同司无妨、古記云、三等以上親、案儀制令、父子爲一等、祖孫伯叔兄弟爲二等、會祖從父兄弟兄弟子會孫爲三等、以外雖相隱親、不在避限、

〔延喜式〕^{十八}
式部上

凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中無人可用者、雖同姓除同門外聽任、

神郡、陸奥緣邊郡、大隅馭謨、熊毛等郡者、不在制限、
謂伊勢國飯野、度會、多氣、安房國安房、下總國香取、常陸國鹿嶋、出雲國意宇、紀伊國名草、筑前國宗形郡爲

郡、神

倭名抄に見ゆる宗像郡の十
四郷

※〔倭名類聚抄〕^九

筑前國 百二十五

宗像郡

秋安岐 山田也萬多 怡土伊度 荒自安良之 野坂乃佐加 荒木安良木 海部安萬 席内字知 深田布加多

簗生美乃布 辛家 小荒 大荒 津九

※〔延喜式〕二十八 兵部省 西海道

筑前國驛馬獨見、夜久各十五疋、嶋門廿三疋、津日廿二疋、席打、夷守、美野各十五疋、久爾十疋、佐尉、深江、比菩、額田、石瀨、長丘、把伎、廣瀨、隈崎、伏見、網別各五疋、傳馬御笠郡十五疋、下略

津日驛馬二十二疋

白雉四年（六五三）

五月十二日、遣唐大使吉士長丹・副使吉士駒・學問僧・學生ら一人、一船に乗り唐に赴く、また別に大使高田首根麻呂・副使掃守連小麻呂・學問僧ら一二〇人、一船に乗り唐に向ふ

〔日本書紀〕二十五 孝德天皇 白雉四年夏五月壬戌、發遣大唐大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒、

駒、更名絲學問僧道嚴・道通・道光・惠施・覺勝・辨正・惠照・僧忍・知聰・道昭・定惠定惠内大臣之長子也・安

達安達中臣栗每連之子道觀道觀春日粟田臣百濟之子學生巨勢臣藥藥豐足臣之子氷連老人老人實玉之子、或本、以學問僧知辨義德、學生坂合部連磐積而增焉并一百廿一人、

俱乘一船、以室原首御田、爲送使、又大使大山下高田首根麻呂更名八副使小乙上掃守連小麻呂、

學問僧道福・義向、并一百廿人、俱乘一船、以土師連八手、爲送使、

※〔帝王編年記〕九 孝德天皇 白雉四年癸丑五月十二日壬戌、内臣中臣鎌子男僧定慧并道昭等學文僧

百二十人、隨遣唐大使吉士長丹等百二十一人、以上二百四十一人、遐渡海路、得達長安、

道昭

※〔扶桑略記〕四 孝德天皇 (六五二) 白雉二年、件年、元興寺道昭和尙隨使入唐、河内國人遇玄奘三藏、請益受業、

三藏特以寵恭、令住同房、予昔往西域時、飢乏在路、无村可乞、忽有一沙門、手以梨子與吾令啖、歡喜啖之、氣力自健、得遂先途、昔施梨子沙門、則今汝是也、又謂曰、經論旨深、不能究竟、不

大化五年（六四九）—白雉四年（六五三）

道昭、渡唐の時、新羅山中にて法華經を講ず

如汝學禪門可傳東土、和尚奉教、博習禪門、所悟稍多、已上和尚在大唐時、忽有五百群虎、來致延屈之礼、道昭解虎情、竟受請赴新羅國屈一山中、講法花經、群虎攢耳聽之、虎衆之中、時有一人、以倭語發問、道昭愕然顧視、有一優婆塞、問偈、爲誰、對言、日本行者役優婆塞也、下座求之、忽失所在矣、具如奈良京藥師寺僧景戒靈異記又爲憲記云、道昭和尙渡唐之時、受五百虎之請、至新羅山中、講法華經、時有以本朝之詞、舉疑之人、道和上問云、是誰人哉、答言、吾是日本行者役優婆塞也、我國神曲人諂、因是厭去、但時々往向、已上爲憲記也、私云、神曲人諂、因此厭去者、其旨未明、道昭和尙渡唐之比、彼役行者未坐配流、文武天皇三年己亥五月丁丑日、由葛城明神之讒奏、流伊豆嶋、大寶元年辛丑五月、有勅、召反之日、始厭神曲人諂之國、飛去唐也、尋件年者、道昭和尙歸朝入滅以後也、具在下第五卷、自孝德天皇白雉四年癸丑歲、至文武天皇大寶元年辛丑歲、合計相隔四十五年、豈白雉年遇道昭和尙、何云人神諂曲哉、定是誤也、但役優婆塞於新羅山值道昭和尙之事、在處處文、是只可行者之通力矣、不可論其先後、已上私言而已、和尚歸本朝時、玄奘三藏以佛舍利經論、授與道昭和尙、亦同付屬鐙子一口、語曰、吾自西域持來藥鐙也、煎物治病、必有神驗、和尚拜謝、泣而別去、至于登州、使人多病、和尚試出鐙子、暖水煮粥、與之令服、所痛忽痊、解纜歸朝、于時海上船止、風波不靜、停滯不進、七日七夜、諸人怪曰、風勢快好、計日應到本國、船不肯行、必有意乎、卜人占之、海神要物今在舟中、推是鐙子歟、和尚云、三藏所施、龍王何索哉、舟中衆人爲惜其命、強請和尚、遂以鐙子入海中畢、即時風息浪靜、速進歸朝、於元興寺東南隅別建禪院、止住行業之輩、多從學禪、和尚暗夜无燈之時、自其兩牙、通宵放光、披閱經論焉、禪院坐禪之間、或三日一起、或七日一起、時々香氣薰滿、時人異敬之、已上國史

＊〔三國佛法傳通緣起〕中大日本國諸宗傳通法相宗

第三十七代聖主孝德天皇御宇、白雉四年癸丑、道昭和

尙往大唐國、隨玄奘三藏學法相宗、自此已後漸、往還、諸師習學佛法而還、傳法高僧往還傳法、

乃至後代住々不絶、日域佛法摠有八宗、古來諸師漸々傳之、
一三論宗、二法相宗、三華嚴宗、四俱舍宗、五成實宗、六律宗、七天台宗、八眞言宗、隨一
宗陳弘傳相、

七月、遣唐使高田根麻呂らの船、薩摩國・竹嶋の間に難破するも、門部金ら五人神嶋に漂着す

〔日本書紀〕^{二十五} 白雉四年秋七月、被遣大唐使人高田根麻呂等、於薩麻之曲・竹嶋之間、合船没死、唯有五人、繫胸一板、流遇竹嶋、不知所計、五人之中、門部金、採竹爲筏、泊于神嶋、凡此五人、經六日六夜、而全不食飯、於是、褒美金、進位給祿、

白雉五年（六五四・永徽五年）

二月、遣大唐押使高向玄理・大使河邊臣麻呂・副使藥師惠日ら二船に分乘し、新羅道によつて唐に赴く

〔日本書紀〕^{二十五} 白雉五年二月、遣大唐押使大錦上高向玄理或本云夏五月、遣大唐押使大花下高向玄理、大使小錦下

河邊臣麻呂、副使大山下藥師惠日、判官大乙上書直麻呂・宮首阿彌陀或本云、判官小山下書直麻呂、小乙上岡君宜・置始連大伯・小乙下中臣間人連老老此云於喻、田邊史鳥等、分乘二船、留連數月、取新羅道、泊于

萊州、遂到于京、奉覲天子、於是、東宮監門郭丈舉、悉問日本國之地里及國初之神名、皆隨問

伊吉博得

而答、押使高向玄理、卒於大唐、伊吉博得言、學問僧惠妙、於唐死、知聰、於海死、智國、於海死、智宗、以庚寅年、付新羅船歸、覺勝於唐死、義通於海死、定惠、以乙丑年、付劉德高等船歸、妙位・法別倭種韓智興・趙元寶、今年共使人歸、

七月二十四日、西海使吉士長丹ら百濟・新羅送使と共に、筑紫に至る

〔日本書紀〕^{二十五} 白雉五年秋七月丁酉、西海使吉士長丹等、共百濟・新羅送使、泊于筑紫、

是月、褒美西海使等、奉對唐國天子、多得文書寶物、授小山上大使吉士長丹、以少花下、賜封二百戸、賜姓爲吳氏、授小乙上副使吉士駒、以小山上、

白雉四年（六五三）—白雉五年（六五四）

白雉五年（六五四）—齊明天皇五年（六五九）

七二

＊〔扶桑略記〕^四 孝德天皇 白雉五年甲寅七月、遣唐使長丹等多得文書寶物歸朝、

十二月、倭國、入唐朝貢す

〔舊唐書〕^四 高宗本紀 永徽五年十二月癸丑、倭國獻琥珀・礪磲、琥珀大如斛、礪磲大如五斛器、

齊明天皇元年（六五五）

八月朔日、遣唐大使河邊臣麻呂ら唐より歸る

齊明天皇三年（六五七）

是歲、使を新羅に派し、沙門智達らを唐に送り到らしむを求む、新羅、聽かざるにより智達ら歸國す

齊明天皇四年（六五八）

是歲、智通・智達、新羅船に乗り入唐す

〔三國佛法傳通緣起〕^中

法相宗

第三十八代女帝齊明天皇御宇^{皇極重祚}四年戊午、智通、智達兩般法師、

乘新羅船往大唐國、遇玄奘三藏、學法相宗、大日本國此戊午歲始行維摩會、爲永代規矩、兼學法於慈恩大師、後還本朝大弘宗旨、

齊明天皇五年（六五九）

七月三日、遣唐使坂合部連石布・津守連吉祥ら、二船に分乘して進發す、尋で石布の船逆風のため遭難し、吉祥らのみ洛陽に至る

伊吉連博德書

〔日本書紀〕^{二十六} 齊明天皇

五年秋七月戊寅、遣小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥、使於唐國、

仍以道與蝦夷男女二人、示唐天子、伊吉連博德書曰、同天皇之世、小錦下坂合部連石布連・大山下津守吉祥連等二船、奉

浦、九月十三日、行到百濟南畔之嶋、々々名母分明、以十四日寅時、二船相從、放出大海、十五日日入之時、石布連船、横遭逆風、漂到南海之嶋、々々名爾加委、仍爲嶋人所滅、便東漢長直阿利麻、坂合部連稻積等五人、盜乘嶋人之船、逃到括州、々々縣官人、送到洛陽之京、十六日夜半之時、吉祥連船、行到越州會稽縣須岸山、東北風、々々太急、廿二日行到餘姚縣、所乘大船及諸調度之物、留着彼處、潤十月一日、行到越州之底、十五日、乘驛入京、廿九日、馳到東京、天子在東京、卅日、天子相見問訊之、日本國天皇、平安以不、使人謹答

齊明天皇六年（六六〇）
十月、遣唐使歸來す

齊明天皇七年（六六一）

五月二十三日、遣唐副使津守連吉
祥ら、耽羅の王子阿波伎らを伴な
ひ歸着す

天智天皇二年（六六三）

三月、將軍上毛野君稚子・間人連大蓋ら、二萬七千人を率ゐ新羅を伐つ

天地合德，自得平安。天子問曰：此等蝦夷國有何方使人謹客？
萬民無事。天子問曰：此等蝦夷國有執事卿等，好在以不，使人謹客。
蝦夷、近者名熟蝦夷、今此熟蝦夷之國，入貢本國之朝。天子問曰：其國有五穀，使人謹客，無之、深山之中，止住樹木，每歲，厭見蝦夷身面之異，極理喜怪，使人遠來辛苦，退在館裏，後更相見，十一月一日，蝦夷人謹客，無名之。

倭客不得東歸，遂匿西京，幽置別處，閉戶防禁，不許東西，困苦經年，難波吉士男人書曰：向大唐大使，觸鳴而覆，副使親觀天子，奉示蝦夷，於是，蝦夷，以白鹿皮一弓三箭八十獻于天子。

朝有冬至之會，々日亦觀，所朝諸蕃之中，倭客最勝，後由出火之亂，乘而不復檢，十二月三日，韓智與倭人西漢大麻呂，枉讒我客，々等獲罪唐朝，已決流罪，前流智與於三千里之外，客中有伊吉連博德奏，因即免罪，事子之後，勅旨國家，來年必有海東之政，汝等

六年秋七月乙卯^(十六日)高麗使人乙相賀取文等罷歸、又靺𪊑羅人乾豆波斯達阿、

欲歸本土、求請送使曰、願後朝於大國、所以、留妻爲表、乃與數十人、入于西海之路、高麗沙門道顯日本

世記曰、七月云々、春秋智、借大將軍蘇定方之手、挾擊百濟亡之、或曰、百濟自亡、由君夫人妖女之無道、擅奪國柄、誅殺賢良故召斯禍矣、可不慎歟、云々々々、其亡云、新羅春秋智、不得願於內蓋金、故亦使於唐、捨俗衣冠、請婚於天子、投禍於隣國、而構斯見阿利麻等五人、十一月一日、爲將軍蘇定方等所捉、百濟王以下、太子降等、諸王子十三人、發自西京、十月十六日、遷到東京、始得相十許人、奉進朝堂、急召趨向天子、天子恩勅、兒前放着、十九日、賜勞、廿四日、發自東京、

〔扶桑略記〕
齊明天皇
五年七月、遣使大唐、
略○中
六年十月遣唐使歸來、

〔日本書紀〕二十六
齊明天皇
七年五月丁巳、耽羅始遣王子阿波伎等貢獻、
伊吉連博得書云、辛酉年正月廿五日、還
到越州、四月一日、從越州上路東歸、

七日、行到禮岸山明、以八日鷄鳴之時、順西南風、放船大海、々々中途、耽羅入朝、漂蕩辛苦、九日八夜、僅到耽羅之嶋、便即招慰王子阿波伎等九人、同載客船、擬獻帝朝、五月廿三日、奉進朝倉之朝、又、爲智興、倭人東漢草直足嶋、所議、使人等不蒙寵命、使人等怨、徹于上天之神、震死足嶋、時人稱曰、大倭天報之近、

〔日本書紀〕
天智天皇
二年三月、遣前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋・中將軍巨勢神前臣譯語・

齊明天皇五年（六五九）—天智天皇二年（六六三）

天智天皇二年（六六三）—天智天皇九年（六七〇）

七四

三輪君根麻呂・後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄、率二萬七千人、打新羅、

八月、白村江に戦ひて、日本の船師敗れ退く

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 二年秋八月戊戌^{（十七日）}、賊將至於州柔、繞其王城、大唐軍將、率戰船一百七十

艘、陣烈於白村江、

戊申^{（二十七日）}、日本船師初至者、與大唐船師合戰、日本不利而退、大唐堅陣而守、

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 四年^{○中} 是歲、遣小錦守君大石等於大唐、云々、^{等謂小山坂合部連石積、大乙吉士岐彌・吉士針間、蓋送唐使人乎}

天智天皇四年（六六五）
是歲、守君大石・坂合部連石積・吉士岐彌・吉士針間らを唐に遣す

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 六年十一月乙丑^{（九日）}、百濟鎮將劉仁願、遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法

天智天皇六年（六六七）
十一月九日、百濟鎮將劉仁願の使司馬法聰ら、境部連石積らを送りて、筑紫都督府に至る

聰等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府、
己巳^{（十三日）}、司馬法聰等罷歸、以小山下伊吉連博德、大乙下笠臣諸石、爲送使、

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 七年十一月乙酉、遣小山下道守臣麻呂・吉士小鮪於新羅、

天智天皇七年（六六八）
十一月五日、道守臣麻呂・吉士小鮪を新羅に遣す

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 八年^{○中} 是歲、遣小錦中河内直鯨等、使於大唐、

天智天皇八年（六六九）
是歲、河内直鯨らを唐に遣し、唐の高句麗を平定するを賀す

〔日本書紀〕^{二十七} 天智天皇 九年秋九月辛未朔、遣阿曇連頰垂於新羅、
天智天皇九年（六七〇・咸亨元年）
九月朔日、阿曇連頰垂を新羅に遣す

是歲、日本國使唐に朝貢す

〔新唐書〕二二〇 東夷傳 日本傳 咸亨元年、遣使賀平高麗、後稍習夏音、惡倭名、更號日本、使者自言、

國近日所出以爲名、或云、日本乃小國爲倭所并、故冒其號、使者不以情、故疑焉、又妄夸其國都方數千里、南西盡海、東北限大山、山外即毛人云、

天武天皇二年（六七三）

二月二十七日、是より先、天武天皇、胸形君德善の女、尼子娘を後宮にいれ給ひ、高市皇子生誕し給ふ

〔日本書紀〕二十九 天武天皇 二年二月癸未、天（大海人皇子）皇命有司設壇場、即帝位於飛鳥淨御原宮、立正妃爲

皇后、々生草壁皇子尊、先納皇后姉大田皇女爲妃○中略次納胸形君德善女尼子娘、生高市皇子命、次穴人臣大麻呂女櫛媛娘、生二男二女、其一曰忍壁皇子、其二曰磯城皇子、其三曰泊瀨部皇女、其四曰託基皇女、

※〔公卿補任〕 持統天皇

太政淨廣 高市皇子四年七月五日任太政大臣（年卅七）、十年七月十三日薨（年四十二、或四十三）、在官七年 天武天皇第三息、母胸形君德善女、尼女子娘也、

※〔日本書紀〕三十 持統天皇 四年秋七月庚辰（六九〇）、以皇子高市、爲太政大臣、以正廣參、授丹比嶋真人、

爲右大臣、并八省百寮、皆遷任焉、

持統天皇四年七月五日、高市皇子、太政大臣に任ぜらる

持統天皇十年七月十日、薨去（六九六） 十年秋七月庚戌（高市）、後皇子尊薨、

※〔類聚三代格〕一 神社事

天智天皇九年（六七〇）—天武天皇二年（六七三）

天武天皇二年（六七三）

七六

太政官符

應充行宗像神社修理料賤代徭丁事

從良賤十六人、正丁、在筑前國宗像郡金埼

充行徭丁十八人、大和國城上郡四人、高市郡二人、十市郡二人

大和國城上郡外山の宗像神社

高市皇子は、神主高階眞人の始祖

高市皇子、神舎を修理せらる

右得彼社氏人從五位下守右少辨兼大學頭高階眞人忠峯等解狀傳、件神坐大和國城上郡之内、與坐筑前國宗像郡從一位勳八等宗像大神同神也、舊記云、是天照大神之子也、大神勅曰、汝三神降居道中、奉助天孫、爲天孫所崇祭者、今國家每有禱請奉幣件神、是其本緣也、唯筑前社有封戸神田、大和社未預封例、因茲忠峯等始祖太政大臣淨廣壹高市皇子命、分氏賤年輸物、令修理神舎、以爲永例、而年代久遠物情解體、氏衰路遙不堪催發、○中略謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請者、仍須件徭丁待彼氏高階眞人長者并神主等共署申請充之、差充之後不得輒差他役、但其死闕及耆老之代、又同待請充之、永以爲例、

寬平五年十月廿九日

※〔本朝皇胤紹運錄〕

第四十
天武天皇

——高市皇子命（一品太政大臣淨廣一、母尼子媛、胸形君德善女）

長屋王（左大臣正二位、天平二・九、依謀反讒言、爲聖武天皇、被誅、號佐保左大臣、母夫持娘、御名部親王女）
鈴鹿王（知太政官事、從二、式部卿、大藏卿）

高階真人は高市皇子の後胤

※〔日本三代實錄〕^{二十四} 貞觀十五年七月廿八日庚寅、^{○中}左京人成相王、後相王、賜姓高階真人、其先、高市皇子之後也、

高階真人

※〔新撰姓氏錄〕 左京皇別
高階真人

出自諡天武皇子淨廣壹太政大臣高市王也、續日本紀合、

豐野真人

※〔新撰姓氏錄〕 右京皇別
豐野真人

天武天皇皇子淨廣壹高市王之後也、續日本紀合、

永原朝臣

※〔新撰姓氏錄〕 左京皇別上
永原朝臣

天武天皇皇子淨廣壹高市王之後也、續日本紀合、

天武天皇四年（六七五）
正月二十三日、諸社に奉幣す

〔日本書紀〕^{二十九} 四年春正月丙午朔、大學寮諸學生・陰陽寮・外藥寮、及舍衛女・墮羅女・
百濟王善光・新羅仕丁等、捧藥及珍異等物進、
^{二十三}戊辰、祭幣諸社、

天武天皇二年（六七三）——天武天皇四年（六七五）

七月七日、大使大伴連國麻呂・副使三宅吉士入石を新羅に遣す

〔日本書紀〕^{二十九} 四年秋七月己酉、小錦上大伴連國麻呂爲大使、小錦下三宅吉士入石爲副使、遣于新羅、

天武天皇五年（六七六）
二月、大伴連國麻呂ら新羅より歸國す

〔日本書紀〕^{二十九} 五年二月癸巳、^{二十四日}耽羅客賜船一艘、是月、大伴連國麻呂等、至自新羅、

是夏、大旱のため、使を四方に遣し、諸神祇に奉幣す

〔日本書紀〕^{二十九} 五年、是夏、大旱、遣使四方、以捧幣帛、祈諸神祇、亦請諸僧尼、祈于三寶、然不雨、由是、五穀不登、百姓飢之、

十月三日、幣帛を相新嘗の諸神祇に奉る

〔日本書紀〕^{二十九} 五年冬十月乙未朔、置酒宴群臣、^{三日}丁酉、祭幣帛於相新嘗諸神祇、

十月十日、大使物部連摩呂・小使山背直百足を新羅に遣す

〔日本書紀〕^{二十九} 五年冬十月甲辰、^{十日}以大乙上物部連摩呂爲大使、大乙中山背直百足爲小使、遣於新羅、

天武天皇六年（六七七）
二月一日、物部連摩呂、新羅より歸る

六年二月癸巳朔、物部連摩呂、至自新羅、

五月二十八日、天社・地社の神税を三分し、一分を供神料とし、二分を神主に分ち給ふ

〔日本書紀〕^{二十九} 六年五月己丑、勅、天社地社神税者、三分之一、爲擬供神、二分給神主、

天武天皇七年（六七八）
是歲、遣唐學問僧道光歸朝す
律を學ぶ

定慧と共に歸朝

天武天皇八年（六七九）
九月十六日、遣新羅使歸國す

天武天皇十年（六八一）
正月二日、幣帛を諸神祇に頒つ

七月四日、大使采女臣竹羅・小使
當摩公楯を新羅に遣す、是日、大
使佐伯連廣足・小使小墾田臣麻呂
を高麗に派す

九月三日、高麗・新羅へ遣せし使、
歸國拜朝す
天武天皇十三年（六八四）
四月二十日、大使高向臣麻呂・小
使都努臣牛甘を新羅に遣す

〔三國佛法傳通緣起〕^{律宗} 天武天皇御宇詔道光律師爲遣唐使令學律藏、奉勅入唐經年學律、
遂同御宇七年戊寅歸朝、彼師卽以此年作一卷書、名依四分律抄撰錄文、卽彼序云、戊寅年九月
十九日大倭國淨御原天皇大御命勅大唐學問道光律師撰定行法、^{已上}奧題云、依四分律撰錄行事
卷一、^{已上}淨御原天皇御宇已遣大唐令學律藏、而其歸朝與定慧和尚同時、道光入唐未詳何年、
當日本國天武天皇御宇元年壬申至七年戊寅歲者、厥時唐朝道成律師滿意懷素道岸弘景融濟周律
師等盛弘律藏之時代也、

〔日本書紀〕^{二十九} 八年九月癸巳、遣新羅使人等、返之拜朝、
天武天皇

〔日本書紀〕^{二十九} 十年春正月壬申、^{（二日）}頒幣帛於諸神祇、
天武天皇
^{（十九日）}己丑、詔畿內及諸國、修理天社地社神宮、

〔日本書紀〕^{二十九} 十年秋七月辛未、小錦下采女臣竹羅爲大使、當摩公楯爲小使、遣新羅國、
天武天皇
是日、小錦下佐伯連廣足爲大使、小墾田臣麻呂爲小使、遣高麗國、

〔日本書紀〕^{二十九} 十年九月己亥、遣高麗・新羅使人等、共至之拜朝、
天武天皇

〔日本書紀〕^{二十九} 十三年夏四月辛未、小錦下高向臣麻呂爲大使、小山下都努臣牛甘爲小使、
天武天皇

天武天皇七年（六七八）——天武天皇十三年（六八四）

遣新羅、

十一月朔日、胸方君、他の五十一氏と共に、朝臣の姓を賜はる

〔日本書紀〕

二十九
天武天皇

十三年十一月戊申朔、大三輪君・大春日臣・阿倍臣・巨勢臣・膳臣・紀

臣・波多臣・物部連・平群臣・雀部臣・中臣連・大宅臣・栗田臣・石川臣・櫻井臣・采女臣・

田中臣・小墾田臣・穗積臣・山背臣・鴨君・小野臣・川邊臣・櫟井臣・柿本臣・輕部臣・若櫻

部臣・岸田臣・高向臣・穴人臣・來目臣・犬上君・上毛野君・角臣・星川臣・多臣・胸方君・

車持君・綾君・下道臣・伊賀臣・阿閉臣・林臣・波彌臣・下毛野君・佐味君・道守臣・大野

君・坂本臣・池田君・玉手臣・笠臣、凡五十二氏、賜姓曰朝臣、

胸方君

車持君

十二月六日、遣唐留學生土師甥ら、筑紫三宅得許らと共に、新羅送使に送られ、筑紫に至る

〔日本書紀〕

二十九
天武天皇

十三年十二月癸未、大唐學生土師宿禰甥・白猪史寶然、及百濟役沒大唐

者猪使連子首・筑紫三宅連得許、傳新羅至、則新羅遣大那末金物儒、送甥等於筑紫、

天武天皇十四年（六八五）

五月二十六日、高向朝臣麻呂ら、新羅より歸國す

〔日本書紀〕

二十九
天武天皇

十四年五月辛未、高向朝臣麻呂、都努朝臣牛飼等、至自新羅、乃學問僧

觀常・靈觀從至之、新羅王獻物、馬二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻及種種物、

朱鳥元年（六八六）

六月二日、大唐學生らに爵位を賜ふ

〔日本書紀〕

二十九
天武天皇

朱鳥元年六月庚午、工匠・陰陽師・侍醫・大唐學生、及一二宮人、并卅

四人、授爵位、

乙亥、選諸司人等有功廿八人、增加爵位、

持統天皇元年（六八七）

正月十九日、田中朝臣法麻呂・守君・刈田らを新羅に遣し、天武天皇の喪を告げしむ

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

元年春正月甲申、使直廣肆田中朝臣法麻呂與追大貳守君・刈田等、使於新羅、

赴天皇喪、

九月二十三日、學問僧智隆、新羅使に従ひて歸朝す

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

元年九月甲申、新羅遣王子金霜林・級浪金薩慕及級浪金仁述・大舍蘇陽信等、奏請國政、且獻調賦、學問僧智隆附而至焉、筑紫大宰、使告天皇崩於霜林等、即日、霜林等、皆着喪服、東向三拜、三發哭焉、

持統天皇三年（六八九）

正月八日、田中朝臣法麻呂ら、新羅より歸る

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

三年正月辛酉、新羅使人田中朝臣法麻呂等、還自新羅、

四月二十日、學問僧明聰ら、新羅使に従ひて歸朝す

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

三年夏四月壬寅、新羅遣級浪金道那等、奉弔瀛真人天皇喪、并上送學問僧明聰・觀智等、別獻金銅阿彌陀像・金銅觀世音菩薩像・大勢至菩薩像、各一軀、綵帛錦綬、

六月二十日、筑紫大宰、學問僧明聰らの新羅師友に送る綿を給す

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

三年六月辛丑、詔筑紫大宰栗田真人朝臣等、賜學問僧明聰・觀智等、爲送新羅師友綿各一百四十斤、

持統天皇四年（六九〇）

七月三日、天神地祇に班幣す

〔日本書紀〕^{三十}

持統天皇

四年秋七月戊寅、班幣於天神地祇、

持統天皇元年（六八七）—持統天皇四年（六九〇）

持統天皇四年（六九〇）—持統天皇七年（六九三）

八二

九月二十三日、遣唐學問僧義徳ら、
軍丁大伴部博麻と共に、新羅の送
使に従ひ歸朝す

〔日本書紀〕^{三十} 四年九月丁酉、^{（二十三日）}大唐學問僧智宗・義徳・淨願、軍丁筑紫國上陽咩郡大伴
部博麻、從新羅送使大奈末金高訓等、還至筑紫、

冬十月癸丑、^{（十日）}大唐學問僧智宗等、至于京師、

戊午、^{（十五日）}遣使者、詔筑紫大宰河内王等曰、饗新羅送使大奈末金高訓等、准上送學生土師宿禰甥等
送使之例、其慰勞賜物、一依詔書、

持統天皇六年（六九二）
十一月八日、遣新羅使息長真人
老・川内忌寸連らに祿を賜ふ

〔日本書紀〕^{三十} 六年十一月戊戌、新羅遣級浪朴億徳・金深薩等進調、賜擬遣新羅使直廣
^{持統天皇} 肆息長真人老・務大貳川内忌寸連等祿、各有差、
十二月甲申、^{（二十四日）}遣大夫等、奉新羅調於五社、伊勢・住吉・紀伊・大倭・菟名足、

持統天皇七年（六九三）
三月十六日、遣新羅使息長真人
老・大伴宿禰子君・學問僧らに、
純・綿・布を賜ふ

〔日本書紀〕^{三十} 七年三月乙巳、賜擬遣新羅使直廣肆息長真人老・勤大貳大伴宿禰子君等、
^{持統天皇} 及學問僧辨通・神叡等、純綿布、各有差、又賜新羅王賄物、
〔日本書紀〕^{三十} 七年夏四月丙子、遣大夫謁者、詣諸社祈雨、又遣使者、祀廣瀨大忌神與龍
^{持統天皇} 田風神、

四月十七日、使を遣して諸社に雨
を祈る
七月十四日、使を遣して諸社に雨
を祈る

秋七月己亥、^{（十二日）}遣使者、祀廣瀨大忌神與龍田風神、
辛丑、^{（十四日）}遣大夫謁者、詣諸社祈雨、

持統天皇八年（六九四）
三月二十二日、諸社に奉幣す

〔日本書紀〕^{三十} 持統天皇 八年三月乙巳、奉幣於諸社、

持統天皇九年（六九五）
七月二十六日、遣新羅使小野朝臣毛野・伊吉連博德らに物を賜ふ
九月六日、小野朝臣毛野、新羅に發向す

〔日本書紀〕^{三十} 持統天皇 九年秋七月戊辰、遣使者、祀廣瀨大忌神與龍田風神、
^{二十六日} 辛未、賜擬遣新羅使直廣肆小野朝臣毛野・務大貳伊吉連博德等物、各有差、
^{六日} 九月庚戌、小野朝臣毛野等、發向新羅、

持統天皇十一年（六九七）
五月八日、使を派して諸社に雨を祈る

〔日本書紀〕^{三十} 持統天皇 十一年五月癸卯、遣大夫謁者、詣諸社請雨、
^{十九日} 六月甲申、班幣於神祇、

六月十九日、神祇に班幣す、尋で二十八日、諸社に雨を祈る

癸卯、遣大夫謁者、詣諸社請雨、
^{二十八日}

文武天皇二年（六九八）
正月十五日、新羅の貢物を諸社に供ふ

〔續日本紀〕^一 文武天皇 二年正月戊寅、供新羅貢物于諸社、
^{十九日} 庚辰、遣直廣參土師宿禰馬手、獻新羅貢物于大内山陵、
^{九日} 三月己巳、詔、筑前國宗形、出雲國意宇二郡司、並聽連任三等已上親、

三月九日、筑前國宗形郡司、出雲國意宇郡司と共に、三等以上の親の連任を聽さる

是月、日本國使新羅に至る

〔三國史記〕^{新羅本紀八} 孝昭王 七年三月、日本國使至、王引見於崇禮殿、
^{六九八}

五月朔日、諸國旱するにより、諸社に奉幣す
六月二十八日、諸社に馬を奉り、雨を祈る

〔續日本紀〕^一 文武天皇 二年五月庚申朔、諸國旱、因奉幣于諸社、
^{二十三日} 六月丙辰、奉馬于諸社、祈雨也、

持統天皇八年（六九四）―文武天皇二年（六九八）

文武天皇四年（七〇〇）

五月十三日、遣新羅大使に佐伯宿禰麻呂、小使に佐味朝臣賀佐麻呂を任ず

十月十九日、佐伯宿禰麻呂ら、新羅より歸る

〔續日本紀〕

文武天皇

四年五月辛酉、以直廣肆佐伯宿禰麻呂、爲遣新羅大使、勳大肆佐味朝臣賀佐麻呂爲小使、大少佑各一人、大少史各一人、

〔續日本紀〕

文武天皇

四年冬十月癸亥、直廣肆佐伯宿禰麻呂等至自新羅、獻孔雀及珍物、庚午、遣使于周防國造船、

大寶元年（七〇一）

正月二十三日、粟田朝臣真人を遣唐執節使に、高橋朝臣笠間を大使に、坂合部宿禰大分を副使に任ず

遣唐少錄山上憶良

〔續日本紀〕

文武天皇

大寶元年春正月丁酉、以民部尙書直大貳粟田朝臣真人、爲遣唐執節使、左大辨直廣參高橋朝臣笠間爲大使、右兵衛率直廣肆坂合部宿禰大分爲副使、參河守務大肆許勢朝臣祖父爲大位、刑部判事進大壹鴨朝臣吉備麻呂爲中位、山代國相樂郡令追廣肆掃守宿禰阿賀流爲小位、進大參錦部連道麻呂爲大錄、進大肆白猪史阿麻留、无位山於億良爲少錄、

〔本朝月令〕

四月
上申松尾祭ノ條

同日松尾祭事

略中

秦氏本系帳云、正一位勳一等松尾大神御社者、筑紫

三月三日、是より先、筑紫胸形に坐す中部大神、松崎に天下り坐し給ふ、是日、川邊腹男・秦忌寸都理ら、松尾に勸請すと傳ふ

秦氏本系帳

自日埼岑更奉請松尾、又田口腹女、秦忌寸知麻留女、始立御阿禮平、知麻留女之子、秦忌寸都賀布、自戊午年爲祝、子孫相承、祈祭大神、自其以降、至于元慶三年、二百三十四年、國史云、

延曆三年十一月、遣使修理松尾社、同五年十二月、敍從五位下松尾神從四位下、嘉祥二年二月、

勅從三位松尾大神社祝禰宜等、預把笏之例、神名帳云、仁壽二年五月、加山城國松尾神正二位、

國史云、貞觀元年正月、加山城國正二位勳二等松尾神從一位、貞觀十二年八月、松尾社物忌一人宛月糧、爲恆例、

瀛津嶋姬命

田心姬命

湍津姬命

宗像衣手

※〔雍州府志〕三松尾神社 在洛西、所祭神二座、大山咋命、瀛津嶋姬命、以此二神爲相殿、稱中本社、高皇座靈尊、月讀尊二座、稱南本社、田心姬命、湍津姬命、櫛谷神三座爲北本社、又加三宮四大神宗像衣手、號七所之本社也、松尾神坐近江北叡山、號山王大宮大權現、用鳴鏑神也、本殿之左右有社、北號新宮、爲北本社之遙拜所、又爲賀茂別雷神、南號本宮、爲南本社之遙拜所、

※〔神社啓蒙〕二松尾 南殿有一社 奥祕

氏成私記云、別雷苗裔神也、二十二社註式云、市杵島姬也、今舉兩說、

※〔二十二社註式〕二松尾 延喜神祇式曰、山城國葛野郡松尾神社二座、

一座大山咋神、本社也 一座曾形中初大神、市杵島姬也、素戔嗚尊御子

人皇四十二代文武天皇治五年大寶元年、秦都理奉勸請松尾、始造立神殿、
(七三〇)
第四十五代聖武天皇治七年天平二年、預大社、

四月十日、遣唐大通事大津造廣人に垂水君の姓を賜ふ、尋で十二日遣唐使ら拜朝す

〔續日本紀〕二文武天皇 大寶元年四月癸丑、十日遣唐大通事大津造廣人賜垂水君姓、
(十二日)乙卯、遣唐使等拜朝、

大寶元年(七〇一)

大寶元年（七〇一）—大寶二年（七〇二）

八六

四月十五日、諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る

〔續日本紀〕^二 文武天皇 大寶元年四月戊午、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、

五月七日、遣唐執節使粟田朝臣真人に節刀を授く

〔續日本紀〕^二 文武天皇 大寶元年五月己卯、入唐使粟田朝臣真人授節刀、

大寶二年（七〇二・長安二年）三月十二日、大赦により畿内・七道の諸社に奉幣す

〔續日本紀〕^二 文武天皇 大寶二年三月己卯、鎮大安殿大赦、天皇御新宮正殿齋戒、惣頒幣帛於畿内及七道諸社、

六月二十九日、遣唐使、筑紫より海に入る

〔續日本紀〕^二 文武天皇 大寶二年六月乙丑、遣唐使等去年從筑紫而入海、風浪暴險不得渡海、至是乃發、

十月三日、薩摩隼人征討の報賽により、大宰所部の神九處に、奉幣す

〔續日本紀〕^二 文武天皇 大寶二年十月丁酉、先是、征薩摩隼人時、禱祈大宰所部神九處、實賴神威遂平荒賊、爰奉幣帛以賽其禱焉、唱更國司等^{今薩摩國也}言、於國內要害之地、建柵置戍守之、許焉、鎮祭諸神、爲將幸參河國也、

是月、日本國使入唐朝貢す

〔舊唐書〕^六 則天皇后 長安二年、冬十月、日本國遣使貢方物、

*〔美努連岡萬墓誌〕

大寶元年五月、美努連岡麿唐國に使す

我祖美努岡萬連飛鳥淨御原(天武) 天皇御世甲申年正月十六日、勅賜連姓、藤原宮御宇、大行 天皇(六八四)
御世大寶元年歲次辛丑五月、使乎唐國、平城宮治天下大行 天皇御世靈龜二年歲次丙辰正月五日、授從五位下、任主殿寮頭、神龜五年歲次戊辰十月廿日卒、春秋六十有七、其爲人小心事帝、移孝爲忠、忠簡帝心、能秀臣下、成功廣業、照一代之高榮、揚名顯親、遺千歲之長跡、令聞難盡、餘慶無窮、仍作斯文、納置中墓、(七三〇)

天平二年歲次庚午十月廿日

美努連岡麿入唐の時の歌

※〔萬葉集〕一 三野連名入唐時、春日藏首老作歌

62 在根良 對馬乃渡 中爾 幣取向而 早還許年

海中に幣取り向く

ありねよし對馬の渡り海中に幣取り向けて早歸り來ね

遣唐使粟田真人已下百六十人

※〔萬葉集題詞書入〕○西本願寺本 ○三野連名入唐時云々の題詞右傍に朱筆にて書入れあり、

國史云大寶元年正月遣唐使民部卿粟田真人朝臣已下百六十人乗船五隻小商監從七位下中宮小進美奴連岡麿(マ、)云々

○加藤千蔭の「萬葉集略解」には國史を類聚國史に比するも所見せず、參考のため姑くこゝに掲ぐ、

長安三年、粟田朝臣真人ら朝貢し、則天武后に謁す

※〔舊唐書〕一九九上 倭國傳 東夷傳 長安三年、其大臣朝臣真人、來貢方物、朝臣真人者、猶中國戶部尙

書、冠進德冠、其頂爲花、分而四散、身服紫袍、以帛爲腰帶、真人好讀經史、解屬文、容止溫

大寶二年(七〇二)

大寶二年（七〇二）

八八

雅、則天宴之於麟德殿、授司膳卿、放還本國、

真人、學文を好み進止容あり

※〔新唐書〕二三〇 東夷傳 日本傳

長安元年、

其王文武立、改元曰大寶、遣朝臣真人栗田、貢方物、朝

臣真人者、猶唐尚書也、冠進德冠、頂有華蔭四披、紫袍帛帶、真人好學能屬文、進止有容、武后宴之麟德殿、授司膳卿還之、

※〔釋日本紀〕一 開題

問、號日本濫觴、見大唐何時書哉、

答、元慶說不詳、公望私記曰、大寶二年壬寅、當唐則天后長安二年、續日本紀云、此歲正

四位上民部卿栗田朝臣真人爲遣唐持節使、唐曆云、此歲、日本國遣其大臣朝臣真人貢方物、

唐朝、真人を司膳員外郎に任ず

日本國者、倭國之別名也、朝臣真人者、猶中國地官尚書也、頗讀經史、容止溫雅、朝廷異之、

拜司膳員外郎、云々、大唐稱日本之濫觴見於此、略

憶良、本郷を憶ひ作れる歌

※〔萬葉集〕一 雜歌

山上臣憶良在大唐時、憶本郷作歌

63 去來子等 早日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

道慈

※〔續日本紀〕十五 聖武天皇

天平十六年冬十月辛卯、

（二日）

律師道慈法師卒、天平元年 爲律師、法師俗姓額田氏、添下

郡人也、性聰悟爲衆所推、大寶元年(七〇一)隨使入唐、涉覽經典、尤精三論、養老二年(七一八)歸朝、是時釋門之秀者唯法師及神叡法師二人而已、著述愚志一卷論僧尼之事、其略曰、今察日本素繙行佛法軌模全異大唐道俗傳聖教法則、若順經典、能護國土、如違憲章、不利人民、一國佛法、萬家修善、何用虛設、豈不慎乎、弟子傳業者、于今不絕、屬遷造大安寺於平城、勅法師勾當其事、法師尤妙工巧、構作形製皆稟其規摹、所有匠手莫不歎服焉、卒時年七十有餘、

※〔懷風藻〕釋道慈、二首 釋道慈者、俗姓額田氏、添下人、少而出家、聰敏好學、英材明悟、爲衆所推、太寶元年(七〇一)、遣學唐國、歷訪明哲、留連講肆、妙通三藏之玄宗、廣談五明之微旨、時唐簡于國中義學高僧一百人、請入宮中、令講仁王般若、法師學業穎秀、預入選中、唐王憐其遠學、特加優賞、遊學西土、十有六歲、養老二年(七一八)、歸來本國、帝嘉之、拜僧綱律師、性甚骨鯁、爲時不容、解任歸、遊山野、時出京師、造大安寺、年七十餘、

五言、在唐奉本國皇太子、一首、

三寶持聖德、百靈扶仙壽、壽共日月長、德與天地久、

道慈、大寶二年より養老二年まで入唐

※〔三國佛法傳通緣起〕中三論宗 道慈第四十二代聖主文武天皇御宇大寶元年(七〇一)辛丑越海入唐、摠傳六宗、三論爲本、在唐學法一十八年、第四十四代元正天皇御宇養老二年(七一八)戊午道慈歸朝、

大安寺

※〔扶桑略記〕五文武天皇 大寶二年三月、大安寺道慈法師付遣唐大使粟田道麿渡海、道慈、俗姓額
大寶二年(七〇一)

大寶二年（七〇二）

九〇

田氏、大和國添下郡人也、一云大寶元年、道慈法師入唐、

釋辨正
圍碁を善くす、子朝慶と共に唐で客死

*〔懷風藻〕釋辨正、二首 辨正法師者、俗姓秦氏、性滑稽、善談論、少年出家、頗洪玄學、太寶年中、遣學唐國、時遇李隆基龍潛之日、以善圍碁、屢見賞遇、有子朝慶朝元、法師及慶在唐死、元歸本朝、仕至大夫、天平年中、拜入唐判官、到大唐見天子、天子以其父故、特優詔厚賞賜、還至本朝尋卒、

五言、與朝主人、一首、

鐘鼓沸城闔、戎蕃預國親、神明今漢主、柔遠靜胡塵、琴歌馬上怨、楊柳曲中春、唯有關山月、偏迎北塞人、

五言、在唐憶本鄉、一絕、

日邊瞻日本、雲裏望雲端、遠遊勞遠國、長恨苦長安、

〔正倉院文書〕正集 三十八・三十九

是歲、筑前國・豐前國戶籍成る、中に、宗形部宿奈賣・宗形部阿比太賣・宗形部赤賣・宗形部大麻呂の名あり

筑前國嶋郡川邊里戶籍

〔筑前國嶋郡川邊里大寶二年籍〕
（繼目表）
○川邊里ノ字面ニ「筑前國印」ニアリ、
略○中

戶主葛野部勾

戶主葛野部勾、年肆拾歲、 正丁 課戶

妻肥君武智利賣、年肆拾貳歲、 丁妻

男葛野部意比止麻呂、年捌歲、 小子 嫡子

宗形部宿奈賣

男葛野部止許志提、年伍歲、 小子 嫡弟

女葛野部酒持賣、年貳拾歲、 次女

女葛野部伊氣豆賣、年拾漆歲、 次女

女葛野部止與賣、年拾貳歲、 小女

女葛野部妹賣、年拾歲、 小女 上件四口嫡女

卜部方見賣、年拾捌歲、 次女 寄口

男卜部意富麻呂、年參歲、 綠兒

葛野部久漏麻呂、年肆拾肆歲、 正丁 寄口

妻宗形部宿奈賣、年參拾漆歲、 丁妻

男葛部比都目、年捌歲、 小子 嫡子

女葛野部氣豆賣、年拾參歲、 小子

.....

女葛野部麻泥豆賣、年參歲、 綠女 上件二口嫡女

弟葛野部牧夫、年貳拾貳歲、 正丁

男葛野部身麻呂、年壹歲、 綠兒

卜部意止麻呂、年拾陸歲、 小子 寄口

卜部忍男、年肆拾肆歲、 殘疾 寄口

妻宗形部阿比太賣、年肆拾玖歲、 丁妻

宗形部阿比太賣

大寶二年（七〇二）

大寶二年（七〇二）

奴夜惠麻呂、年拾壹歲、

婢伊奈豆賣、年肆拾肆歲、

上件二口戶主奴婢

凡口貳拾貳



受田貳町九段陸拾步

戶主卜部首羊、年肆拾歲、

正丁 課戶 略○下

〔正倉院文書〕續修

（繼日表母）

「豐前國仲津郡丁里太寶二年籍」

○丁里ノ字面ニ「豊前國印」一アリ、

豐前國仲津郡丁里戶籍

略○中

女婢多彌賣、年貳拾陸歲、

奴猪手、年參拾歲、

奴歲身、年貳拾參歲、

婢猪手賣、年拾肆歲、

上件二口長日賣男

奴梗手、年陸拾壹歲、

男奴赤麻呂、年貳拾玖歲、

奴犬手、年壹歲、

赤麻呂男

妹婢廣賣、年伍拾貳歲、

甥奴牛手、年參拾貳歲、

男奴小犬、年拾歲、

弟奴鳥、年貳拾玖歲、

弟奴多祁、年拾玖歲、

男秦部羊、年參拾歲、

正丁 嫡子

婦秦部宇提賣、年貳拾貳歲、

丁妻

從父弟秦部阿利、年伍拾參歲、

正丁

女秦部久須利賣、年貳拾陸歲、

丁女

女秦部牛賣、年拾壹歲、

小女 上件二口嫡女

弟秦部馬、年肆拾歲、

兵士

丁勝倭、年肆拾陸歲、

正丁 寄口

秦部麻呂、年伍拾肆歲、

正丁 寄口

大寶二年（七〇二）

九四

丁妻

丁女
嫡女

綠女 刀良賣女

小子寄口

丁女

小子

小子

次女

正丁 奇口

丁妻

小子
嫡子

小子
嫡弟

耆女 寄口

宗形部赤賣

凡口壹拾伍

口壹拾捌不課

口肆課

「三三三」

一口三口
三小次
女女

口六丁女
口二次女

口口口
一一五
耆綠小
老兒子

寄口

姬弟

嬀子

奇口

奇口

次女

小子

小子

丁女

小子

綠女

丁女

丁妻

九四

「口一殘疾

受田貳町壹段壹佰漆拾壹步
○中略

「口一小子

口捌不課

口四丁女
口二小女

從父弟川邊勝羊、年貳拾捌歲、正丁

男川邊勝兄麻呂、年壹歲、綠兒 嫡子

女川邊勝泥牟賣、年參歲、綠女

女川邊勝弟賣、年貳歲、綠女

女川邊勝宇提賣、年壹歲、綠女 上件三口嫡女

宗形部大麻呂

甥宗形部大麻呂、年拾陸歲、小子

母狹度勝根賣、年參拾伍歲、丁女

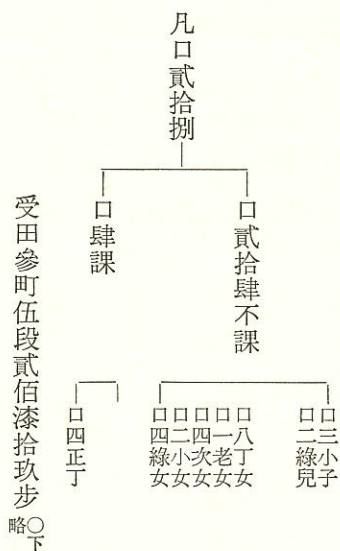
異父姉秦部惠良賣、年貳拾歲、次女

秦部大賣、年伍拾漆歲、丁女 寄口

女矢作部蟲賣、年漆歲、小女

大寶二年（七〇二）

大寶二年（七〇二）—大寶三年（七〇三）



〔續日本紀〕文武天皇 大寶三年九月庚戌、以從五位下波多朝臣廣足爲遣新羅大使、

大寶三年（七〇三）
九月二十二日、波多朝臣廣足を遣新羅大使に任ず

〔續日本紀〕文武天皇 大寶三年十月癸未、天皇御大安殿 詔賜遣新羅使波多朝臣廣足、額田人足、各衾一領、衣一襲、又賜新羅王錦二匹、絁卅匹、

十月二十五日、遣新羅使波多朝臣廣足・額田人足らに、衾・衣を賜ふ

〔三國史記〕新羅本紀八 聖德王 二年（七〇三）秋七月（ヤ、）略 日本國使至、摠二百四人、

是歲、日本國使新羅に至る

遣唐學問僧智鸞ら入唐す

※〔三國佛法傳通緣起〕中法相宗 第四十二主文武天皇御宇大寶三年癸卯、新羅智鳳、智鸞、智雄三師、俱奉勅命渡海入唐、謁撲揚大師學法相宗、或遇玄奘慈恩學智宗旨者、然二師入滅經年序、遂歸本朝、大弘宗教、智鳳慶雲三年丙午維摩講師、

慶雲元年（七〇四）
六月二十二日、諸社に奉幣し雨を
祈る

七月朔日、栗田朝臣真人、唐より
歸朝す

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲元年六月丙子、奉幣祈雨于諸社、

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲元年秋七月甲申朔、正四位下栗田朝臣真人自唐國至、初至唐時、有

人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、我使反問曰、此是何州界、答曰、是大周楚州鹽城縣界
也、更問、先是大唐、今稱大周、國號緣何改稱、答曰、永淳二年、天皇太帝崩、^{（六八三）}
皇太后登位、^{（高宗）}

稱號聖神皇帝、國號大周、問答畧了、唐人謂我使曰、亟聞、海東有大倭國、謂之君子國、人民
豐樂、禮義敦行、今看使人、儀容大淨、豈不信乎、語畢而去、

七月九日、諸社に奉幣し雨を祈る

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲元年七月壬辰、以時雨不降、遣使祈雨於諸社、

八月三日、遣新羅使波多朝臣廣足
ら、新羅より歸朝す
十月九日、幡文通を遣新羅大使に
任ず

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲元年八月丙辰、^{（三）}
遣新羅使從五位上波多朝臣廣足等至自新羅、

十月辛酉、栗田朝臣真人等拜朝、正六位上幡文通爲遣新羅大使、
戊辰、^{（十六日）}
幡文通賜造姓、

十二月十日、諸社に幣帛を供す

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲元年十二月辛酉、供幣帛于諸社、

慶雲二年（七〇五）
五月二十四日、遣新羅大使幡文通
ら、新羅より歸朝す

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲二年五月癸卯、幡文造通等自新羅至、

慶雲元年（七〇四）—慶雲二年（七〇五）

六月二十六日、諸社に奉幣し雨を祈る

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲二年六月乙亥、奉幣帛于諸社、以祈雨焉、

八月十一日、粟田真人を從三位に敘す

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲二年八月戊午、○中略又授遣唐使粟田朝臣真人從三位、其使下人等、進

位賜物各有差、

慶雲三年（七〇六）

閏正月十三日、新羅の調を伊勢大神宮及び七道諸社に奉る

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年閏正月戊午、奉新羅調於伊勢太神宮及七道諸社、

閏正月二十日、天下疫病あるにより、神祇に禱祈せしむ

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年閏正月乙丑、勅令禱祈神祇、由天下疫病也、

二月二十二日、入唐執節使粟田朝臣真人の乗れる船佐伯を、從五位下に敘す

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年二月丙申、授船號佐伯從五位下、入唐執節使從三位粟田朝臣真人之所乗者也

七月二十四日、丹波・但馬、山火のため、使を遣し、神祇に奉幣せしむ

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年七月乙丑、丹波、但馬、二國山火、遣使奉幣帛于神祇、即雷聲

忽應、不撲自滅、

八月二十一日、美努連淨麻呂を遣新羅大使に任ず

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年八月壬辰、以從五位下美努連淨麻呂、爲遣新羅大使、

十一月三日、遣新羅大使美努連淨

〔續日本紀〕

文武天皇

慶雲三年十一月癸卯、賜新羅國王勅書曰、天皇敬問新羅國王、朕以虛薄、

麻呂・副使對馬連堅石らに出國を命ず

謬承景運、慚無練石之才、徒奉握鏡之任、日旰忘飢、翼々之懷愈積、宵分輟寢、業々之想彌深、冀覃覆載之仁遐被寰區之表、況王世居國境、撫寧人民、深秉並舟之至誠、長脩朝貢之厚禮、庶磐石開基、騰茂響於磨岫、維城作固、振芳規於鴈池、國內安樂、風俗淳和、寒氣嚴切、比如何也、今故遣大使從五位下美努連淨麻呂、副使從六位下對馬連堅石等、指宣往意、更不多及、

慶雲四年（七〇七）
三月二日、遣唐副使巨勢朝臣邑治ら、唐より歸る

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲四年三月庚子、遣唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等自唐國至、

※〔津守氏古系圖〕

〔從イ〕
正八位下津守宿禰池吉

〔奉仕イアリ〕
平安宮天皇 帝イアリ、御世、遣唐神主、給借五位、還來大神祭祀、
〔城〕

四月二十五日、天下の疫飢甚しきにより、諸社に奉幣す

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲四年四月丙申、^{〔二十五日〕}天下疫飢、詔加振恤、但丹波、出雲、石見三國尤甚、奉幣帛於諸社、又令京畿及諸國寺讀經焉、

五月十五日、入唐副使巨勢邑治らに、綿・純・鉦等を賜ふ
五月二十八日、遣新羅使美努連淨麻呂、學問僧義法らと共に、歸着す

〔續日本紀〕^三 文武天皇 慶雲四年五月壬子、^{〔十五日〕}給從五位下巨勢朝臣邑治・從七位上賀茂朝臣吉備麻呂・從八位下伊吉連古麻呂等、綿・純・布・鉦并穀各有差、並以奉使^{〔遣唐使〕}絕域也、
^{〔二十八日〕}五月乙丑、從五位下美努連淨麻呂及學問僧義法、義基、惣集、慈定、淨達等至自新羅、

慶雲四年（七〇七）—和銅二年（七〇九）

一〇〇

八月十六日、入唐副使巨勢邑治ら
昇敘さる

〔續日本紀〕^四 元明天皇 慶雲四年八月辛巳、入唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等進位有差、從七位
上鴨朝臣吉備麻呂授從五位下、水手等給復十年、

和銅二年（七〇九）
五月五日、筑前國宗形郡大領從五
位下宗形朝臣等杼、外從五位上に
昇敘せらる

〔續日本紀〕^四 元明天皇 和銅二年五月庚申、筑前國宗形郡大領外從五位下宗形朝臣等杼授外從五
位上、尾張國愛知郡大領外從六位上尾張宿禰乎己志外從五位下、^{○下}
略

六月二十日、筑前國御笠郡大領正
七位下宗形部堅牛に、益城連の姓
を賜ふ

〔續日本紀〕^四 元明天皇 和銅二年六月乙巳、令諸國進驛起稻帳、筑前國御笠郡大領正七位下宗形
部堅牛、賜益城連姓、嶋郡少領從七位上中臣部加比、中臣志斐連姓、^{○下}
略

編年史料
(二) 奈良時代

和銅三年（七一〇）
四月二十二日、諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る

和銅四年（七一）
閏六月二十一日、宗形部加麻麻伎に、穴太連の姓を賜ふ

和銅五年（七一二）
九月十九日、道君首名を遣新羅大使に任ず
十月二十八日、遣新羅使ら辭見す

和銅六年（七一三）
五月二日、諸國に「風土記」の撰上を命ず、播磨國風土記・西海道風土記逸文に宗像の名見ゆ

宗形大神奥津嶋比賣命、大國主命の子を懷妊し給ふ

〔續日本紀〕^五 元明天皇 和銅三年四月壬寅、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、

〔續日本紀〕^五 元明天皇 和銅四年閏六月甲子、宗形部加麻麻伎賜姓穴太連、

〔續日本紀〕^五 元明天皇 和銅五年九月乙酉、^{（十九日）}以從五位下道君首名、爲遣新羅大使、
^{（二十八日）}十月甲子、遣新羅使等辭見、

〔續日本紀〕^六 元明天皇 和銅六年五月甲子、制、畿内七道諸國郡郷名着好字、其郡内所生、銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物、具錄色目、及土地沃瘠、山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍亦宜言上、

〔播磨國風土記〕^{託賀郡 黑田里 袁布山支閉 岡大羅野} 土上下 右 以土黑爲名、

云袁布山者 昔 宗形大神奥津嶋比賣命 ^{（大國主命）}任伊和大神之子 到來此山云 我可產之時訖、故曰袁布山、

云支閉丘者 宗形大神云 我可產之月盡 故曰支閉丘、

云大羅野者 昔 老夫與老女 張羅於袁布山中 以捕禽鳥 衆鳥多來 負羅飛去 落於件野 故曰大羅野、

和銅三年（七一〇）—和銅六年（七一三）

西海道風土記逸文

〔宗像大菩薩御緣起〕 西海道風土記云、宗像太神 自天降居埤門山之時、以青薤玉 置奧宮之表 以八尺薤紫玉置中宮之表、以八咫鏡置邊宮之表、以此三表、成神體形、納置三宮 卽隱之因曰身形郡 後人改曰宗像、共大海命子孫 今宗像朝臣等是也云々 ○上 下略

西海道風土記逸文の一傳

〔宗像大菩薩御緣起裏書〕 同風土記云、面ノ輪ノ内ニ有之 ○朱筆

一云、天神之子有四柱、兄三柱神教弟大海命曰、汝命者、爲吾等三柱御身之像、而可居於此地、便一前居於奧宮、一前居於海中、一前居於深田村高尾山邊、故號曰身像郡云々、

※〔釋日本紀〕 七述義三 神代上 先師說云、胸肩神軀、爲玉之由、見風土記、

〔肥前國風土記〕

基肄郡 姬社郷

是頃、筑前國宗像郡人珂是古、肥前國基肄郡姬社郷に請ぜられ、同社を祭り、祈禱を修せしに、神異ありし由を傳ふ

此郷之中有川、名曰山道川、其源出郡北山、南流而會御井大川 昔者 此川之西 有荒神、行路之人、多被殺害、半凌半殺、于時、卜求祟由、兆云 令筑前國宗像郡人、珂是古、祭吾社、若合願者、不起荒心、覓珂是古、令祭神社、珂是古、卽捧幡祈禱云、誠有欲吾祀者、此幡順風飛往、墮願吾之神邊、便即舉幡、順風放遣、于時、其幡飛往、墮於御原郡姬社之社、更還飛來、落此山道川邊之、因此、珂是古、自知神之在處、其夜夢見 臥機 謂久都利儂遊出來、壓驚 珂是古、於是亦識女神、卽立社祭之、自爾已來、行路之人、不被殺害 因曰姬社、今以爲郷名、

絡塚

八月十日、遣新羅大使道公首名、新羅より歸る

〔續日本紀〕^六 元明天皇 和銅六年八月辛丑、從五位下道公首名至自新羅、

和銅七年（七一四）
六月二十三日、詔により諸社に奉幣し、名山大川に雨を祈る

〔續日本紀〕^六 元明天皇 和銅七年六月戊寅、詔曰、頃者陰陽殊謬、氣序乖違、南畝方興、膏澤未降、百姓田園、往々損傷、宜以幣帛、奉諸社、祈雨于名山大川、庶致嘉澍、勿虧農桑、

靈龜元年（七一五）
六月十三日、太政官の奏請により使を遣し、諸社に奉幣し雨を祈る

〔續日本紀〕^六 元明天皇 靈龜元年六月壬戌、^{（十二日）}太政官奏、懸像失度、亢旱彌旬、恐東皇不耕、南畝損稼、昔者周王遇旱、有雲漢之詩、漢帝祈雨、興改元之詔、人君之願、載感上天、請奉幣帛、祈於諸社、使民有年、誰知堯力、

^{（十三日）}癸亥、設齋於弘福法隆二寺、詔、遣使奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、於是未經數日、澍雨滂沱、時人以爲、聖德感通所致焉、因賜百官人祿各有差、

九月二日、天下の諸社祝部等に、物を賜ふ

〔續日本紀〕^七 元正天皇 靈龜元年九月庚辰、受禪、即位于大極殿、詔曰、朕欽承禪命、不敢推讓、

履祚登極、欲保社稷、粵得左京職所貢瑞龜、臨位之初、天表嘉瑞、天地貺施不可不酬、其改和銅八年、爲靈龜元年、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸從赦除、但謀殺々訖、私鑄錢、強竊二盜、及常赦所不原者、並不在赦限、親王已下及百官人、并京畿諸寺僧尼、天下諸社祝部等、賜物各有差、

靈龜二年（七一六）
八月二十日、多治比真人縣守を遣唐押使に、阿倍朝臣安麻呂を遣唐大使に、藤原朝臣馬養を副使に任ず

〔續日本紀〕^七 元正天皇 靈龜二年八月癸亥、^{〇中}是日、以從四位下多治比真人縣守爲遣唐押使、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲大使、正六位下藤原朝臣馬養爲副使、大判官一人、少判官二人、大錄事二人、少錄事二人、

*〔扶桑略記〕^六 元正天皇 靈龜二年八月、大伴山守爲遣唐大使、多治比縣守、安倍仲麿爲副使、下道吉備生年廿、從使入唐、沙門玄昉同入唐、乘舡四艘、五百五十七人渡海、

大和宿禰長岡、靈龜二年入唐請益生

*〔續日本紀〕^{三十} 神護景雲三年十月癸亥、^{（七六九）}大和國造正四位下大和宿禰長岡卒、刑部少輔從五位上五百足之子也、少好刑名之學、兼能屬文、靈龜二年、入唐請益、凝滯之處、多有發明、

當時言法令者、就長岡而質之、勝寶年中、改忌寸賜宿禰、寶字初、仕至正五位下民部大輔兼坤宮大忠、四年遷河內守、政無仁惠、吏民患之、其後授從四位下以散位還第、八年任右京大夫、以年老自辭去職、^{（七六八）}景雲二年、賀正之宴、有詔特侍殿上、時鬢髮未衰、進退無惑、天皇問之曰、卿年幾、長岡避席言曰、今日方登八十、天皇嘉嘆者久之、御製授正四位下、

九月四日、大伴宿禰山守を阿倍朝臣安麻呂に代へて遣唐大使となす

〔續日本紀〕^七 元正天皇 靈龜二年九月丙子、以從五位下大伴宿禰山守、代爲遣唐大使、

養老元年（七一七・開元五年）
二月朔日、遣唐使、神祇を御笠山の南に祠り、二十三日、遣唐使ら

〔續日本紀〕^七 元正天皇 養老元年二月壬申朔、遣唐使祠神祇於蓋山之南、^{（御笠山）}甲午、遣唐使等拜朝、

拜朝す、尋で三月九日、遣唐押使
多治比真人縣守に節刀を賜ふ

三月^(九日)巳酉、遣唐押使從四位下多治比真人縣守賜節刀、

十月、日本國使入唐朝貢す

〔冊府元龜〕^{九七一} 外臣部 開元五年十月、日本國遣使朝貢、命通事舍人就鴻臚宣慰、
^{朝貢四}

※〔住吉神社文書〕

住吉大社神代記

座攝津職住吉大社司解 申言上神代記事

合

從三位住吉大明神大社神代記

住吉現神大神顯座神緣記

座玉野國淳名椋長岡玉出峽墨江御峽大神<sup>今謂住吉郡神戶
鄉墨江住吉大神</sup>

御神殿四宮

第一宮表筒男

第二宮中筒男

第三宮底筒男

右三前令三軍大明神<sup>亦御名向置男聞襲大歷五
御魂速狹騰尊又速逆騰尊</sup>

第四宮<sup>姫神宮 御名氣息帶長足姫皇后宮
奉齋祀神主津守宿禰氏人者、元手搓見足尼後</sup>

神戸二百十四烟<sup>當國冊烟播磨八十二烟長門國九十五烟
(七)烟國</sup>

齋垣内四至<sup>限東□道 限南墨江
限西海棹及限 限北住道郷</sup>

養老元年(七一一)

凡大神宮所在九箇處

當國住吉大社四前 西成郡座摩社二前

菟原郡社三前
○中略

長柄船瀬

長柄船瀬本記

四至 東限高瀬大庭 南限大江
西限船瀬 北限川岸

遣唐貢調使

右船瀬泊欲遣唐貢調使調物積船舫造泊、天皇念行時、大神訓賜、我造長柄船瀬進矣□造也、
○中略

筑前國那珂郡住吉荒魂社

筑前國那珂郡住吉荒魂社三前

遣唐使

右社者、擊熊襲二國新羅國時、遣唐使將御社祭大宰府例供也、并能護嶋爲御厨所領、從長門國

御社にて祭し大宰府供るを
例とす

西方九國內別小嶋皆所領御厨已了、

志賀社、（擊說）新羅時御船挾抄

大唐御社・新羅社

大唐御社 新羅社 鎮服社也
○中略

以前、御大神顯座神代記、引勘己未年七月朔丙子注進大山下右大辨津守連吉祥、去以大寶二年
（702）

壬寅八月廿七日壬辰定給本緣起等、依宣旨具勘注、所言上如件、謹以解、

（731）
天平三年七月五日

神主從八位下津守宿禰 「嶋麻呂」

遣唐使神主

遣唐使神主正六位上津守宿禰 「客 人」

件神代記肆通之中、進官一通、社納一通、氏納、一門一通二門一通、後胤各祕藏、妄不可傳
見、努力、如前起請之、但客人家料也、

「嶋麻呂」

「客 人」

爲後代驗請判、津守宿禰「屋主」

「郡判依請之、

擬大領外正六位下勳十一等津守宿禰「和麻呂」擬主帳士師「豐繼」少領外從八位上津守宿禰「淨山」

「職判依郡判、

從五位下行大進小野朝臣「澤守」

正六位上行少進葛木「氷魚麻呂」

正六位下行少屬勳十一等物部首

從七位上行少屬堅部使主

延曆八年八月廿七日

○字面一面ニ「住吉神印」ヲ踏ス、

※〔舊唐書〕一九九上 東夷傳 倭國傳 開元初、又遣使來朝、因請儒士授經、詔四門助教趙玄默、就鴻臚寺

安倍仲麿姓名を朝衡と改む

教之、乃遣玄默潤幅布、以爲束修之禮、題云、白龜元（靈カ）年調布、人亦疑其僞此題、所得錫賚、盡市文籍、泛海而還、其偏使朝臣仲滿、慕中國之風、因留不去、改姓名爲朝衡、仕歷左補闕・儀王友、衡留京師五十年、好書籍、放歸郷、逗留不去、

※〔古今和歌集目錄〕九 羈旅

安倍朝臣仲麿一首旅、

養老元年（七一七）

養老元年（七一七）

一一〇

入唐留學問生

中務大輔正五位上船守男、靈龜^{（七一六）}二年八月廿二日^{乙丑}、爲遣唐學生留學生、從四位上安倍朝臣仲麿、大唐光祿大夫散騎常侍、兼御史中丞、北海郡開國公、贈潞州大都督朝衡、國史云、本名仲麿、唐朝賜姓朝氏名衡字仲滿、性聰敏、好讀書、靈龜二年以選爲入唐留學問生、時年十有六、十九年京兆尹崔日知薦之、下詔褒賞、超拜左補闕、廿一年以親老上請歸、不許、賦詩曰、慕義名空在、愉忠孝不全、報恩無有日、歸國定何年、至于天寶^{（七五三）}十二載、與我朝使參議藤原清河同船溥歸、任風掣曳、漂泊安南、屬祿山構逆羣盜蜂起、而夷獠放橫、劫殺衆類、同舟遇害者、一百七十餘人、僅遺十餘人、以大曆^{（七七〇）}五年正月薨、時年七十三、贈潞州大都督、

※〔古今和歌集〕

九
歸旅歌

もろこしにて月を見てよみける

安倍 仲麿

あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

この哥は、むかしなまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたちけるに、めいしうといふところのうみべにて、かのくにの人むまのはなむけしけり、よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるをみて、よめるとなむかたりつたふる、

明州にて詠むと傳ふ

※〔全唐詩〕

一二九
趙驛

朝衡、日本に歸國するを送る

送晁補闕歸日本國

趙 驊

西掖承休澣 東隅返故林 來稱鄴子學 歸是越人吟
馬上秋郊遠 舟中曙海陰 知君懷魏闕 萬里獨搖心

※〔文苑英華〕二九六

衡命使本國

胡 衡

衡命將辭國 非才忝侍臣 天中戀明主 海外憶慈親
伏奏違金闕 駢驂去玉津 蓬萊鄉路遠 若木故園鄰
西望懷恩日 東歸感義辰 平生一寶劍 留贈結交人

※〔全唐詩〕二 李白 二十四

哭晁卿衡

李 白

日本晁卿辭帝都 征帆一片繞蓬壺 明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧

仲麻呂、唐にて客死す

※〔續日本紀〕^{三十五} 寶龜十年五月丙寅、^(二六日)前學生阿倍朝臣仲麻呂在唐而亡、家口偏乏、葬禮有

闕、勅賜東純一百疋、白綿三百屯、

十一月八日、遣唐使の水手已上に、一房の衛役咸く免ず

〔續日本紀〕^七 元正天皇 養老元年十一月甲辰、^{○中}又、遣唐使水手已上一房衛役咸免、又九等戸以

養老元年（七一七）

養老元年（七一七）—養老二年（七八一）

一一一

賤多少勿長、准財爲定矣、

〔令集解〕^{十三} 賦役令

凡以公使、外蕃還者、免一年課役、穴云、使謂水手以上也、外蕃高百新等是、朱云、以公使外蕃還者、免一年課役、謂、還來後更免一年也、水手以上皆免也、問以公使外蕃還、遭風浪經年漂流何、貞答云、比沒落耳、問、公季夏季未還來何、貞答云、唯折免耳、其唐國者、免三年課役、謂、水手以上有課役者也、釋云、依格經歷之年、同籍難免免之、古記云、其唐國者、免三年課役也、靈龜三年十一月八日太政官符、遣大唐國水手已上後家徭役事、正身一房徭役已免不及別房、朱云、唐國者免三年課役者、未知、此等色、被免課役之年內、若會水旱恩復父母喪等何、若更亦不免不、又上復給二條同、亦所疑何、

養老二年（七八一）

三月二十日、小野朝臣馬養を遣新羅大使となす、尋で五月二十三日、遣新羅使ら辭見す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老二年三月乙卯^{二十日}、以少納言正五位下小野朝臣馬養、爲遣新羅大使、五月丙辰、遣新羅使等辭見、

十月二十日、大宰府、遣唐使多治比真人縣守の來歸を報ず

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老二年十月庚辰、大宰府言、遣唐使從四位下多治比真人縣守來歸、

十二月十三日、縣守ら歸朝す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老二年十二月壬申、多治比真人縣守等自唐國至、

十二月十五日、遣唐押使節刀を進む、此度の使人大體缺亡なく、大寶二年入唐の坂合部宿禰大分を隨伴して歸朝す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老二年十二月甲戌、進節刀、此度使人略無闕亡、前年大使從五位上坂合部宿禰大分亦隨而來歸、

是歲、養老律成る、衛禁律「古答」に胛形社の名見ゆ

〔師守記〕^七 貞治三年五月十三日條 略 〇上 衛禁律云、闌入大社門者徒一年、越垣徒二年、中社・小社者遞減三等、神部不覺減二等、監神又減一等、闌謂不應入而入、古答云、大社者伊勢神宮也、大倭・住

曾形社は中社

吉・紀伊・出雲・曾形等之屬、爲中社、自餘爲小社、

是歲、養老令成る、賦役令の義解、
諸國貢獻物の條に、曾形箭の名見
ゆ

〔令義解〕^三 賦役令 諸國貢獻物

凡諸國貢獻物者、^{○中}略 皆盡當土所出、其金、銀、珠玉、皮、革、羽毛、錦、罽、羅、縠、紬、綾、^{○中}略 香、藥、彩色、服食、器用^{謂服食者、服讀如服解之、如吉備略、欽羅、服之類是也、器用者、如下野略、曾形箭之類是也。}

養老三年（七一九）
正月十日、遣唐使ら拜見す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老三年正月己亥、入唐使等拜見、皆着唐國所授朝服、

二月十日、遣新羅使小野朝臣馬養
ら歸朝す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老三年二月己巳、遣新羅使正五位下小野朝臣馬養等來歸、

閏七月十一日、白猪史廣成を遣新
羅使に任ずるも、八月八日、廣成
之を拜辭す

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老三年閏七月丁卯、^{十一日}略 是日、以大外記從六位下白猪史廣成、爲遣新羅
使、

八月癸巳、^{八日}遣新羅使白猪史廣成等拜辭、

養老五年（七二一）
正月二十七日、解工正七位下曾形
朝臣赤麻呂に、絁十疋・絲十絢・
布二十端・鉄二十口を賜ふ

〔續日本紀〕^八 元正天皇 養老五年正月甲戌、^{○中}略 又 詔曰、文人武士、國家所重、醫卜方術、古今
斯崇、宜擢於百僚之内、優遊學業、堪爲師範者、特加賞賜、勸勵後生、^{○中}略 正七位下曾形朝臣赤
麻呂各絁十疋、絲十絢、布廿端、鉄廿口、

養老二年（七一八）—養老五年（七二一）

養老五年（七二二）—神龜年中（七二四—七二八）

一一四

是歲、元右京人宗形横根の子嶋守、母姓を冒し、名草氏に隸す

〔續日本後紀〕^八 仁明天皇 ^{（八三九）} 承和六年九月辛丑、^{（二一三）} 紀伊國人直講正六位上名草直豐成、少外記從六位上名草直安成等賜姓宿禰、兼貫附右京四條四坊、元右京人宗形横根娶紀伊國人名草直弟日之女、生男嶋守、養老五年冒母姓隸名草氏、嶋守即豐成之祖父也、

養老六年（七二二）

五月十日、津史主治麻呂を遣新羅使に任ず、尋で二十九日、主治麻呂ら拜朝す、同年十二月二十三日、遣新羅使ら歸朝す

〔續日本紀〕^九 元正天皇 ^{（十）} 養老六年五月己卯、以式部大錄正七位下津史主治麻呂、爲遣新羅使、^{（二九）} 戊戌、遣新羅使津史主治麻呂等拜朝、^{（二一三）} 十二月庚申、遣新羅使津史主治麻呂等還歸、

養老七年（七二三）

十一月十六日、筑前國宗形郡等八神郡の少領以上の官司に、三等以上上の親の連任を聽さる

〔令集解〕^{十六} 選彼令 凡同司主典以上、^{○中} 不得用三等以上親、

^{（二一三）} 謂其非三等親者、縱得相隱、猶須任用也、釋云、養老七年十一月十六日太政官處分、伊勢國渡相郡、竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑前國宗形郡、常陸國鹿嶋郡、下總國香取郡、紀伊國名草郡、合八神郡、聽連任三等以上親也、跡云四等親、雖相隱而任用同司无妨、古記云、三等以上親、案儀制令、父子爲一等、祖孫伯叔兄弟爲二等、會祖從父兄弟兄弟子會孫爲三等、以外雖相隱親、不在避限、

神龜元年（七二四）

八月二十一日、土師宿禰豐麻呂を遣新羅大使に任ず、翌二年五月二十三日、新羅より歸朝す

〔續日本紀〕^九 聖武天皇 ^{（二一）} 神龜元年八月丁未、以從五位上土師宿禰豐麻呂爲遣新羅大使、^{（二一三）} 二年夏五月甲辰、遣新羅使土師宿禰豐麻呂等還歸、

神龜年中

某歲、大宰府、宗像郡の百姓宗形部津麻呂を、對馬に食糧を送る船の梶師となす

〔萬葉集〕^{十六} 有由緣雜歌 筑前國志賀白水郎歌十首

3860 王之 不遣爾 情進爾 行之荒雄良 奧爾袖振

大君の遣さなくに情進に行きし荒雄ら沖に袖振る

志賀の海人の大浦田沼

3861 荒雄良乎 將來可不來可等 飯盛而 門爾出立 雖待來不座

荒雄らを來むか來じかと飯盛りて門に出で立ち待てど來まさぬ

3862 志賀乃山 痛勿伐 荒雄良我 餘須可乃山跡 見管將偲

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見つつ偲はむ

3863 荒雄良我 去爾之日從 志賀乃安麻乃 大浦田沼者 不樂有哉

荒雄らが行きにし日より志賀の海人の大浦田沼はさぶしくもあるか

3864 官許會 指亘毛遣米 情出爾 行之荒雄良 波爾袖振

官こそさしてもやらめ情出に行きし荒雄ら波に袖振る

3865 荒雄良者 妻子之產業乎波 不念呂 年之八歲乎 待騰來不座

荒雄らは妻子の產業をば思はずろ年の八歳を待てど來まさぬ

3866 奥鳥 鴨云船之 還來者 也良乃埼守 早告許會

沖つ鳥鴨とふ船の還り來ば也良の埼守早く告げこそ

3867 奥鳥 鴨云舟者 也良乃埼 多未亘榜來跡 所聞許奴可聞

沖つ鳥鴨とふ船は也良の崎廻みて漕ぎ來と聞え來ぬかも

3868 奥去哉 赤羅小船爾 裏遣者 若人見而 解披見 鴨

沖行くや赤ら小船に裏遣らばけだし人見て披き見むかも

3869 大船爾 小船引副 可豆久登毛 志賀乃荒雄爾 潛將相八方

大船に小船引き副へ潛くとも志賀の荒雄に潛きあはめやも

志賀村白水郎荒雄、津麻呂に代り梶師となる

肥前國松浦縣美禰良久崎より發船すれど、對馬の海にて暴風に遭ひ沈没す

右、以神龜年中、大宰府差筑前國宗像郡之百姓宗形部津麿、充對馬送粮船梶師也、于時、津麿詣於滓屋郡志賀村白水郎荒雄之許語曰、僕有小事、若疑不許歟、荒雄答曰、走雖異郡、同船日久、志篤兄弟、在於殉死、豈復辭哉、津麿曰、府官差僕充對馬送粮船梶師、容齒衰老、不堪海路、故來祖候、願垂相替矣、於是荒雄許諾、遂從彼事、自肥前國松浦縣美禰良久崎發船、直射對馬渡海、登時忽天暗冥、暴風交雨、竟無順風、沈沒海中焉、因斯妻子等不勝懷慕、裁作此歌、或云、筑前國守山上憶良臣、悲感妻子之傷、述志而作此歌、

天平元年（七二九）

四月五日、筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣鳥麻呂、神齋に供奉すべき狀を奏し、外從五位下を授けられ、物を賜はる

〔續日本紀〕^十

聖武天皇

天平元年四月乙丑、筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣鳥麻呂奏可供奉神齋之狀、授外從五位下、賜物有數、

八月五日、詔して、諸國の天神地祇は長官をして致祭せしめ給ふ

〔續日本紀〕^十

聖武天皇

天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎親王等諸王等諸臣等百官人等天下公民衆聞宣、^{○中略}又諸大陵差使奉幣、其改諸陵司爲寮、增員加秩、又諸國天神地祇者、宜令長官致祭、若有限外應祭山川者聽祭、即免祝部今年田租、又在近江國紫鄉山寺者入官寺之例、

天平二年（七三〇）

閏六月十七日、霹靂により畿内七道の諸社に奉幣す

〔續日本紀〕^十

聖武天皇

天平二年閏六月庚子、緣去月霹靂、勅新田部親王、奉神祇官卜之、乃遣使奉幣於畿内七道諸社、以禮謝焉、

十月二十九日、渤海の信物を諸國の名神社に奉る

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平二年冬十月庚戌、遣使奉渤海信物於諸國名神社、

十一月、大伴坂上郎女、大宰府より歸京の際、宗像郡名兒山を越え、歌を詠す

〔萬葉集〕^六 雜歌 冬十一月、大伴坂上郎女發帥家上道、超筑前國宗形郡名兒山之時、作歌一首

963 大汝 小彥名能 神社者 名着始鷄目 名耳乎 名兒山跡負而 吾戀之 千重之一重裳 奈

具佐米七國

大國主命

大汝 ^(大國主命) 少彥名の 神こそは 名づけ始めけめ 名のみを 名兒山と負ひて わが戀の 千

重の一重も 慰めなくに

天平四年(七三二)

正月二十日、角朝臣家主を遣新羅使に任ず、尋で二月二十七日、角朝臣ら拜朝す

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平四年正月甲子、^(二十日)○中以從五位下角朝臣家主爲遣新羅使、

二月庚子、遣新羅使等拜朝、^(二十七日)

七月五日、旱により、天神地祇名山大川に祈雨奉幣し、賑給を加へ大赦す

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平四年秋七月丙午、^(五日)令兩京四畿內及二監依內典法以請雨焉、詔曰、從春

亢旱、至夏不雨、百川減水、五穀稍彫、實以朕之不德所致也、百姓何罪樵萎之甚矣、宜令京及諸國天神地祇名山大川、自致幣帛、又審錄冤獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒及鰥寡惇獨不能自存者、仍加賑給、其可赦天下、

八月十一日、遣新羅使ら歸國す

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平四年八月辛巳、遣新羅使從五位下角朝臣家主等還歸、

天平二年(七三〇) — 天平四年(七三二)

天平四年（七三二）—天平五年（七三三）

一一八

八月十七日、多治比真人廣成を遣唐大使に、中臣朝臣名代を副使に任ず、仍て九月四日、近江・丹波・播磨・備中等の國に、遣唐使のため船四隻を建造せしむ

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平四年八月丁亥^{（十七日）}、以從四位上多治比真人廣成爲遣唐大使、從五位下中臣朝臣名代爲副使、判官四人、錄事四人、

九月甲辰^{（四日）}、遣使于近江、丹波、播磨、備中等國、爲遣唐使造船四艘、

天平五年（七三三）

三月二十一日、遣唐大使多治比真人廣成ら拜朝す、尋で閏三月二十六日、廣成らに節刀を授く、仍て四月三日、遣唐使船四隻、難波津より進發す

〔續日本紀〕^{十一} 聖武天皇 天平五年三月戊午^{（二十一日）}、遣唐大使從四位上多治比真人廣成等拜朝、

閏三月癸巳^{（十六日）}、遣唐大使多治比真人廣成辭見、授節刀、

夏四月己亥^{（三日）}、遣唐四船自難波津進發、

〔扶桑略記〕^六 聖武天皇 天平五年癸酉七月庚午日^{（六日）}、始令備孟蘭盆供於大膳職、遣唐大使多治比廣

成、副使中臣名代、乘船四艘、惣五百九十四人渡海、沙門榮叡普昭法師等、隨使入唐、

〔唐大和上東征傳〕

鑒眞は楊州江陽縣の人

大和上、諱鑒眞、楊州江陽縣人也、俗姓淳于、齊大夫髡之後、其父先就楊州大雲寺智滿禪師受戒、學禪門、大和上年十四、隨父入寺、見佛像感動心、因請父求出家、父奇其志許焉、是時大周則天長安元年有詔、於天下諸州度僧、便就智滿禪師、出家爲沙彌、配住大雲寺、後改爲龍興寺、唐中宗孝和聖皇帝神龍元年、從道岸律師受菩薩戒、景龍元年、杖錫東都、因入長安、其二年三月廿八日、於西京實際寺、登壇受具足戒、荊州南泉寺弘景律師爲和上、巡遊二京、究學三藏、後歸淮南、教授戒律、江淮之間、獨爲化主、於是興建佛事、濟化^{（群）}郡生、其事繁多、不可

榮叡・普照、丹墀廣成に従ひ入唐留學す

楊州大明寺の鑒眞に佛法東流を請ふ

三月、遣唐大使多治比廣成、筑紫に至る、筑前守山上憶良、之を餞す

具載、日本國天平五年歲次癸酉、沙門榮叡・普照等、隨聘唐大使丹墀真人廣成、至唐國留學問、是歲唐開元廿一年也、唐國諸寺三藏大德皆以戒律爲入道之正門、若有不持戒者、不齒於僧中、於是方知本國無傳戒人、仍請東都大福光寺(抄)砂門道瑤律師、附副使中臣朝臣名代之船、先向本國令去、擬爲傳戒者也、榮叡・普照留學唐國、已經十載、雖不待使、而欲早歸、於是請西京安國寺僧道抗・澄觀、東都僧德諱・高麗僧如海、又請得宰相李林甫之兄林宗之書、與楊州倉曹李湊、令造大舟、備糧送遣、又與日本同學僧玄朗・玄法二人、俱下至楊州、是歲唐天寶元載冬十月、(本)日本(七四)天平十四年歲次辛巳也時大和上在楊州大明寺、爲衆僧講律、榮叡・普照師至大明寺、頂禮大和上足下、具述本意曰、佛法東流、至日本國、雖有其法、而無傳法人、本國昔有聖德太子曰、二百年後、聖教興於日本、今鍾此運、願和上東遊興化、大和上答曰、昔聞、南岳惠思禪師遷化之後、託生倭國王子、興隆佛法、濟度衆生、又聞、日本國長屋王、崇敬佛法造千袈裟、來施此國大德衆僧、其袈裟緣上繡著四句曰、山川異域、風月同天、寄諸佛子、共結來緣、以此思量、誠是佛法興隆有緣之國也、今我同法衆中、誰有應此遠請、向日本國傳法者乎、(略)我即去耳、(略)

※〔萬葉集〕五 好去好來詞一首反詞二首
雜歌

894 神代欲理 云傳久良久 虛見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言靈能 佐吉播布國等

加多利繼 伊比都賀比計理 今世能 人母許等期等 目前爾 見在知在 人佐播爾 滿旦播

阿禮等母 高光 日御朝廷 神奈我良 愛能盛爾 天下 奏多麻比志 家子等 撰多麻比天

勅旨反云大命 戴持旦 唐能 遠境爾 都加播佐禮 麻加利伊麻勢 宇奈原能 邊爾母奧爾母

天平五年（七三三）

神豆麻利 宇志播吉伊麻須 諸能 大御神等 船舶爾反云布奈能閉爾 道引麻遠志 天地能 大御神

等 倭 大國靈 久堅能 阿麻能見虛喻 阿麻賀氣利 見渡多麻比 事畢 還日者 又更

大御神等 船舶爾 御手打掛亘 墨繩遠 播倍多留期等久 阿遲可遠志 智可能岬欲利 大

伴乃 御津濱備爾 多太泊爾 美船播將泊 都々美無久 佐伎久伊麻志亘 速歸坐勢

神代より 言ひ傳て來らく そらみつ 倭の國は 皇神の 嚴しき國 言靈の 幸はふ國

と 語り繼ぎ 言ひ繼がひけり 今の世の 人も悉 目の前に 見たり知りたり 人多に

滿ちてはあれども 高光る 日の朝廷 神ながら 愛の盛りに 天の下 奏し給ひし 家

の子と 撰び給ひて 勅旨反して、大命といふ 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣され 罷り坐せ

海原の 邊にも奥にも 神づまり 領き坐す 諸の 大御神たち 船舶に反して、ふなと云ふ 導

き申し 天地の 大御神たち 倭の 大國靈 ひさかたの 天の御空ゆ 天翔り 見渡し

給ひ 事了り 還らむ日は またさらに 大御神たち 船舶に 御手うち懸けて 墨繩を

延へたる如く あちかをし 値嘉の岬より 大伴の 御津の濱邊に 直泊てに 御船は泊

てむ 恙無く 幸く坐して 早歸りませ

反 謠

895 大伴乃 御津松原 可吉掃亘 和禮立待 速歸坐勢

大伴の御津の松原かき掃きてわれ立ち待たむ早歸りませ

896 難破津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣亘 多知婆志利勢武

難波津に御船泊てぬと聞え來ば紐解き放けて立走りせむ

海原の邊にも奥にも神づまり、領き坐す諸の大御神たち

値嘉の岬

天平五年三月一日、良宅對面、獻三日、山上憶良

謹上 大唐大使卿記室

笠朝臣金村、入唐使に贈る
歌一首

※〔萬葉集〕

八
春相聞

天平五年癸酉春閏三月、笠朝臣金村贈入唐使詞一首并短詞

1453 玉手次 不懸時無 氣緒爾 吾念公者 虛蟬之 世人有者 大王之 命恐 夕去者 鶴之妻

喚 難波方 三津埼從 大舶爾 二梶繁貫 白浪乃 高荒海乎 嶋傳 伊別往者 留有 吾
者幣引 齋乍 公乎者將待 早還萬世

玉禪 懸けぬ時無く 息の緒に わが思ふ君は うつせみの 世の人なれば 大君の 命
かしこみ 夕されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大船に 眞楫繁貫き 白波の
高き荒海を 島傳ひ い別れ行かば 留まれる われは幣引き 齋ひつつ 君をば待たむ
はや還りませ

反 詞

1454 波上從 所見兒嶋之 雲隱 穴氣衝之 相別去者

波の上ゆ見ゆる小島の雲隱りあな息づかし相別れなば

1455 玉切 命向 戀從者 公之三舶乃 梶柄母我

たまきはる命に向ひ戀ひむゆは君がみ船の楫柄にもが

入唐使に贈る歌

※〔萬葉集〕

九
相聞

贈入唐使詞一首

○年未詳なれども参考
のため姑くこゝに掲ぐ、

天平五年（七三三）

天平五年（七三三）

一二二

海神のいづれの神に祈らむ

1784 海若之 何神乎 齋祈者歟 往方毛來方毛 舶之早兼

海若のいづれの神を祈らばか行くさも來さも船は早けむ

右一首、渡海年記未詳

入唐使の母の、子に贈る歌

＊〔萬葉集〕

九相聞

天平五年癸酉、遣唐使舶發難波入海之時、親母贈子詞一首并短詠

1790 秋葉子乎 妻問鹿許曾 一子二 子持有跡五十戸 鹿兒自物 吾獨子之 草枕 客二師往者

竹珠乎 密貫垂 齋戸爾 木綿取四手而 忌日管 吾思吾子 眞好去有欲得

秋萩を 妻問ふ鹿こそ 獨子に 子持てりといへ 鹿兒じもの わが獨子の 草枕 旅に

し行けば 竹珠を しじに貫き垂り 齋瓮に 木綿取り垂でて 齋ひつつ わが思ふ吾子

眞幸くありこそ

反 詠

1791 客人之 宿將爲野爾 霜降者 吾子羽裏 天乃鶴群

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群

入唐使に贈る歌一首

＊〔萬葉集〕

十九 天平五年贈入唐使歌一首并短歌 作主未詳

4245 虛見都 山跡乃國 青丹與之 平城京師由 忍照 難波爾久太里 住吉乃 三津爾舶能利

直渡 日入國爾 所遣 和我勢能君乎 懸麻久乃 由と志恐伎 墨吉乃 吾大御神 舶乃倍

爾 宇之波伎座 舶騰毛爾 御立座而 佐之與良牟 礪乃埜と 許藝波底牟 泊と爾 荒風

難波に下り住吉の御津に船
乗る
住吉の大御神

浪爾安波世受 平久 率而可敞理麻世 毛等能國家爾

そらみつ 大和の國 あをによし 平城の都ゆ 押し照る 難波に下り 住吉の 御津に
船乗り 直渡り 日の入る國に 遣はさる わが背の君を 懸けまくの ゆゆし畏き 住
吉の わが大御神 船の舳に 領き坐し 船艫に 御立いまして さし寄らむ 磯の崎崎
漕ぎ泊てむ 泊泊に 荒き風 波に遇はせず 平けく 率て歸りませ 本の國家に

反 詞

4246 奥浪 邊波莫越 君之船 許藝可敞里來而 津爾泊麻泥

沖つ波邊波な越しそ君が船漕ぎ歸り來て津に泊つるまで

八月、
貢す 日本國使真人廣成、入唐朝

〔冊府元龜〕^{九七一 外臣部} 開元二十一年八月、日本國朝賀使真人廣成與倭從五百九十、舟行遇

風飄至蘇州、刺使錢惟正、以聞詔通書舍人韋景、先往蘇州宣慰焉、

菩提僊那

※〔南天竺波羅門僧正碑并序〕 于時聖朝通好、發使唐國、使人多治比真人廣成・學問僧理鏡、仰

其芳譽、要請東歸、僧正感其懇志、無所辭請、以大唐開元十八年十二月十三日、與同伴林邑僧

佛徹・唐國僧道璿、隨船泛海、及于中路、忽遭暴風、波濤注日、陰暄迷天、計命忽若贅旒、去

死猶其一分、舉船惶遽、不知所爲、乃端仰一心、入禪觀佛、少選之間、風定波息、衆咸嘆其奇

異、以天平八年五月十八日、得到筑紫大宰府、^{○上}下略

天平五年（七三三）

一二四

普照

洛陽に至り奏勅受戒す

＊〔日本高僧傳要文抄〕三

又云、

高僧沙門釋普照傳朱

釋普照者、住興福寺、爲日本戒未具、以天平年、勅入唐請傳

戒律師僧、唐開元二十一年、至洛陽、奏勅受戒、勅福先寺定賓律師、爲照等受戒、以草繫爲和

上、讚護鵝阿闍梨、觀生威儀師、步影七尊證受戒畢、勅每載施絹二十五匹、四時別給時服月料、

仍預隨駕、普照榮叙訴曰、我等爲佛法來急請傳戒僧、至安國寺請鑒眞和上弟子宰相兄家僧道航、

諮宰相、宰相言、但云送功德往天台、陸行恐損、從海道去、若得風便即去、縱颺却還、只向天

台、行文的據、即下楊洲、執宰相書、楊洲造船、仍請得楊洲龍興寺鑒眞和上并門徒十八人道俗

八十六人、被惡人言、僧俗四散、普照入獄百餘日、奏勅下楊洲、著僧還國、理合其宜、委楊洲

造船送、照叙議曰、我等爲請大德、今勅送我四人、空歸何益、私逃見眞和上、和上曰、舊船及

物不用、別以正爐錢八十貫買得軍舟一隻、海中載糧、并以水手十八人、入海不剋、四度造船、

一度落大陽十四日、三日渡蛇海、五日飛鳥海、三日飛魚海、又四金魚邊船、々夫夜來告、有神

人金甲叶船、水米俱盡、人垂欲死、至岸過崗、過一池清淨涼冷、飲足運上船、明日更取水、只

見林修聳天後、漸々還北、隨使船前後殄亡三十六人、退止二百八十餘、但普照、鑒眞、思託、

攸到爲期、自至聖朝合國僧不伏、無戒不知傳戒來由、僧數不足、先於維摩堂已具敍竟、從此已

後伏受戒、其中志忠、靈福、賢璟引占察經許自誓受戒、便將瑜伽論決擇分第五十三卷詰云、諸

戒容自誓受、唯聲聞律儀不容自受、若容自者如是律儀都無軌範、志忠、賢璟等杜口無對、備以

衣鉢受戒、將知合國僧徒身佩戒香、並是普照、僧々身上四萬二千福河、日夜恆流皆由普照、戒

光遍日本國界、皆清淨開佛菩提門、出僧尼智惠、皆由普照、不以爲德、反以爲讎、普照不請得大

唐僧來、合國僧尼身上無戒不銷信施、身壞命終不生善道、如今合國僧尼日々禮拜普照猶不能報、

神人金甲船を守る

自古至今、大唐學生普照第一、何以故、由持律師具足故、即得受戒故即有結界、由結界故其地不壞、縱使三災互起、十方俱空、界地常在、金剛成於土臺、皆是普照功、自餘傳法無如是、○下略

*〔續日本紀〕二十七 天平（七六六）神護二年二月甲午、授正六位上白猪與呂志女從五位下、入唐學問僧

普照之母也、

榮叡

*〔日本高僧傳要文抄〕三 又云、高僧沙門釋榮叡傳（榮）釋榮叡者、美濃人也、氏族未詳、住興福寺、機機神叡、論辯

難當、瑜伽唯識爲業、日本戒律未具、受舍人王請、入唐、請傳戒律師僧、奏勅發遣、至洛陽、奏勅大福先寺大德定賓兼十德受戒畢、預隨駕長安、叡照議曰、本爲請傳戒律師僧、不可空度時日、長安請僧不得、下至楊洲請得鑒眞和上及諸門人、數度入海不剋、於一時入海颺落大海、經十四日水盡人垂欲死、至十二日朝榮叡顏色怡悅、肌澤神愈、普照即問、衆人並大辛苦、叡上座何獨悅樂、榮叡即說、適來夢見二ヶ官人、請叡受戒畢、叡即云、貧道比患渴甚辛苦、如今欲得水飲、彼官即喚人取水、々々如乳、飲異常甘美、叡更云、叡船上三十餘人之多、日欲得水、與船上人、彼官即喚兩箇老人處分、汝等大須早事送水向船、唯此境界少時合有水來、好好作唯擬受水、至日申時西南天邊極目見一白物、看似於鶴、榮叡曰、水來水來、准擬受水、近見是雲覆於船上、散雨少時、人々各得一升餘水飲之、至十三日酉時還從西南上雲起來覆船上、人人各得二升許水、後至大岸庚洲右脇而終、願生知足、榮叡志求傳戒至死、又感神龍施水、今編入高僧傳、錄、以呈萬代、文

天平五年（七三三）

一二六

平群廣成、大使多治比真人
廣成に隨ひて入唐す

＊〔續日本紀〕^{十三} 聖武天皇 天平十一年十一月辛卯、平群朝臣廣成拜朝、初廣成、天平五年隨大使多

治比真人廣成入唐、六年十月事畢却歸、○下十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜朝、上其王啓并方

物、其詞曰、欽茂啓、山河杳絕、國土復遙、佇望風猷、唯增傾仰、伏惟、天皇聖叡、至德遐暢、

奔葉重光、澤流萬姓、欽茂忝繼祖業、濫惣如始、義洽情深、每脩隣好、今彼國使朝臣廣業等、

風潮失便、漂落投此、每加優賞、欲待來春放廻、使等食前、苦請乃年歸去、訴詞至重、隣義非

輕、因備行資、即爲發遣、仍差若忽州都督胥要德等充使、領廣業等令送彼國、并附大蟲皮熊皮

各七張、豹皮六張、人參三十斤、蜜三斛進上、至彼請檢領、

己卯、外從五位下平郡朝臣廣成授正五位上、自餘水手已上、亦各有級、正六位上禰仁傑外從五

位下、

〔正倉院文書〕^{續修} 十三

略○上

是歲、山背國愛宕郡某郷計帳に、
戸口宗方君族入鹿らの名見ゆ

戸主從八位下吳原忌寸五百足戸

去年帳定良口參拾參人

帳後新附貳人^{綠女}

今年計帳定見良大小口參拾伍人<sup>男十七
女十八</sup>

不課口貳拾伍人

男漆人大會人一
小子五 耆老一

女拾八人丁女七
老女一
綠女四 年八十歲一

課口拾人

見不輸參人少丁

見輸漆人正丁

輸調

戶主吳原五百足

戶主五百足、年伍拾參歲、正丁 右頰黑子、右大舍人、

母粟田忌寸宅賣、年捌拾貳歲、耆女 右目上黑子

男吳原忌寸鎌麻呂、年參拾陸歲、正丁 右頰黑子、侍、

男吳原忌寸鈐麻呂、年參拾歲、正丁 額黑子

男吳原忌寸倭麻呂、年貳拾陸歲、正丁 右頰黑子

男吳原忌寸東人、年拾捌歲、少丁 无印

男吳原忌寸弟鎌、年拾捌歲、少丁 上脣黑子

男吳原忌寸真鎌、年拾參歲、小子 右頰黑子

男吳原忌寸鎌主、年漆歲、小子

女吳原忌寸御宅賣、年參拾陸歲、丁女 頤黑子

女吳原忌寸木村賣、年貳拾陸歲、丁女 右目黑子

天平五年（七三三）

女吳原忌寸東方賣、年拾陸歲、小女 右鼻邊黑子

女吳原忌寸眞蟲賣、年拾伍歲、小女 无印

女吳原忌寸弟蟲賣、年拾壹歲、小女 左頰黑子

女吳原忌寸蟲名賣、年伍歲、小女

孫吳原忌寸豐嶋、年伍歲、小子

孫女吳原忌寸清刀自賣、年參歲、綠女

孫女吳原忌寸眞清賣、年貳歲、綠女 生益、上件三口鈔萬呂男女

孫女吳原忌寸大成賣、年參歲、綠女 倭萬呂女

弟吳原忌寸右麻呂、年參拾漆歲、正丁 右頰黑子

姉吳原忌寸刀自賣、年陸拾壹歲、老女 頤黑子

男櫟井朝臣牛甘、年參拾歲、正丁 左目下黑子

女櫟井朝臣刀自賣、年參拾陸歲、丁女 右目尻黑子

女櫟井朝臣奈等賣、年參拾歲、丁女 左目上黑子

姉吳原忌寸黑賣、年伍拾漆歲、丁女 右頰黑子

女鱷部連白刀自賣、年參拾漆歲、丁女 无印

依當直時賣、年陸拾貳歲、老女 和銅五年逃

宇治部廣津賣、年參拾陸歲、丁女 上脣黑子

宗方君族入鹿

戸宗方君族入鹿、年漆拾歳、耆老 左頬黒子

宗方君族弟桑

男宗方君族弟桑、年貳拾參歳、正丁 額疵

宗方君族小桑

男宗方君族小桑、年貳拾歳、少丁 右目本黒子

宗方君族愛賣

孫女宗方君族愛賣、年貳歳、緑女 生益

丸部安太、年肆拾玖歳、正丁 右頬黒子

男丸部酒麻呂、年拾歳、小子 右目尻黒子

男丸部茂麻呂、年伍歳、小子

戸主依當忌寸麻呂戸○下略

○山城國愛宕郡某郷計帳の年月、天平五年に比する説あり、姑くこゝに掲ぐ、

天平六年（七三四・開元二十二
年）

四月十二日、使を畿内七道の諸國
に遣し、地震に破損せる神社を檢
看せしむ

〔續日本紀〕十一 聖武天皇

天平六年夏四月戊戌、（七日）地震、壞天下百姓廬舍、壓死者多、山崩川壅、地

往々圻裂不可勝數、

（十二日）癸卯、遣使畿内七道諸國、檢看被地震神社、

是月、日本國使入唐朝貢す

〔冊府元龜〕

九七一 外臣部
朝貢四

（七三四）開元二十二年四月日本國遣使來朝、獻美濃絶二百匹・水織絶二百疋、

＊〔冊府元龜〕

九七一 外臣部
朝貢四

（七三五）開元二十三年三月、日本國遣使獻方物、

天平五年（七三三）—天平六年（七三四）

天平六年（七三四）—天平七年（七三五）

一三〇

十一月二十日、遣唐大使多治比真人廣成・入唐僧玄昉ら、多禰島に歸着す

玄昉、靈龜二年入唐す

〔續日本紀〕

十一
聖武天皇

天平六年十一月丁丑、入唐大使從四位上多治比真人廣成等來著多禰嶋、

＊〔續日本紀〕

十六
聖武天皇

天平十八年六月己亥、僧玄昉死、玄昉俗姓阿刀氏、

七
靈龜二年入唐學問、

唐天子尊昉、准三品、令着紫袈裟、天平七年隨大使多治比真人廣成還歸、賣經論五千餘卷及諸佛像來、皇朝亦施紫袈裟着之、尊爲僧正、安置內道場、自是之後、榮寵日盛、稍乖沙門之行、時人惡之、至是死於徙所、世相傳云、爲藤原廣嗣靈所害、

天平七年（七三五）

三月十日、遣唐大使唐より歸朝し、節刀を進む、尋で入唐留學生吉備眞備、唐禮・太衍曆經等を獻ず、また入唐使奏大麻呂、問答六卷を獻ず

〔續日本紀〕

十二
聖武天皇

天平七年三月丙寅、

入唐大使從四位上多治比真人廣成等自唐國至、進節

刀、

夏四月辛亥、

二十六
（吉備）

入唐留學生從八位下道朝臣眞吉備獻唐禮一百卅卷、太衍曆經一卷、太衍曆立成

十二卷、測影鐵尺一枚、銅律管一部、鐵如方響寫律管聲十二條、樂書要錄十卷、絃纏漆角弓一

張、馬上飲水漆角弓一張、露面漆四節角弓一張、射弓箭廿隻、平射箭十隻、

五月庚申、

五
（五日）

天皇御北松林覽騎射、入唐廻使及唐人奏唐國新羅樂持槍、五位已上賜祿有差、

壬戌、

七
（七日）

入唐使獻請益秦大麻呂門答六卷、

＊〔扶桑略記〕

六
聖武天皇

天平七年三月丙寅日、入唐大使從四位上多治比真人廣成等自唐國歸朝、

唐帝、廣成に國書を與ふ

＊〔文苑英華〕

四七一

勅日本國王書

前人

中臣名代

廣成、林邑に漂着す

下道眞備

その受けるところの業、衆藝に涉り窮め、大唐これを惜んで歸朝を許さず

玄昉同じく歸朝す

初日本國王^(全カ)主明樂美御德彼禮義之國、神靈所扶滄溟、往來未嘗爲患、不知去歲何負幽明、丹墀

眞人廣城^{集作成}下同等入朝、東歸初出江口、雲霧斗暗所向迷方、俄遭惡風、諸船漂^{集作}蕩、其後一船

在越州界、卽眞人廣城尋已發歸計當至國一船漂入南海、卽朝臣名代艱虞備至性命僅存、名代未

發之間、又得廣州表奏朝臣廣城等漂^{集作}飄、至林邑國既在異域^{集作}國、言語不通並被劫掠、或殺或賣、

言念災患所不忍聞、然林邑諸國比常朝貢、朕已勅、安南都護、令宣勅告示、見在者令其送來、

待至之日、當存撫發遣、又一船不知所所在、永用疚懷、或已達本^{集作}蕃有來人可具奏、此等災變

良不可測、卿等忠信則爾何負神明、而使彼行人罹其凶害想、卿聞此當用驚嗟、然天壤悠悠各有

命也、冬中甚冷^{集作中}冬甚寒卿及首領百姓並平安、好今朝臣名代還一一令口、具遣書指不多及、

＊〔扶桑略記〕^六 聖武天皇 天平七年四月^(二十六日)辛亥日、入唐留學生從八位下々道朝臣眞備獻唐禮一百卅卷、

大衍曆經一卷、大衍曆立成十二卷、測影鐵尺一枚、樂書要錄十卷、馬上飲水漆角弓一張、并種

々書跡、要物等、不能具載、留學之間歷十九年、凡所傳學、三史五經、名刑算術、陰陽曆道、

天文漏刻、漢音書道、祕術雜占、一十三道、夫所受業、涉窮衆藝、由是太唐留惜、不許歸朝、

或記云、爰吉備竊封日月、十箇日間天下令閤怪動、令占之處、日本國留學人不能歸朝、以祕術

封日月、勅令免宥、遂歸本朝、

又沙門玄昉同以歸朝、持度經論章疏五千餘卷并佛像等、悉獻太政官、天皇尊之榮寵日盛、百官

欽仰、四海歸依、

天平七年（七三五）

天平七年（七三五）

一三二

※〔扶桑略記〕^六 聖武天皇 ^{（七三六）}

天平八年丙子二月丁巳日、入唐學問僧玄昉法師、施封一百戶、田一十町、

扶翼童子八人、律師道慈法師、扶翼童子六人、

※〔民經紀〕^{（一二三）} 寬喜四年三月十六日丁酉 略中

紛失像 略中

所殘像

唐本 先聖先師已下七十子

吉備眞備、歸朝して、大宰府學業院に、その將來せる孔子像を安置す

顏回像の頸、切り失はる

此事、吉備大臣渡唐第二度之時、給弘文館本、歸朝之間忘件本不入于船、而孔子於海中飛俄入船中、隨身置大宰府學業院云々、經信卿爲大宰帥之時、初開見學業院之日、顏回影頸切明白也、經信卿召學業院耆老等、問顏回頸切失子細之處、耆老云、件影者吉備大臣自唐渡來、先奉安置此院、數日之後欲奉渡皇城之處、海中物鳴、大臣驚怪之間、奉入孔子櫓自然發解成鬱、計其數一鋪已以不足、是以大驚、如本歸學業院、奉尋之處、如本令懸給、歸上之時如初、驚又發見、如初歸懸、仍被取入于船中、第二度能令封納之處、經二日於海中又歸失、仍歸見之處、顏回頸件度切失云々、大臣其時成怪、以百濟繪師、於學業院奉圖、以新本渡大學寮云々、

※〔日本三代實錄〕^{十二} 清和天皇 ^{（八六六）} 貞觀八年二月廿一日丁卯、左中辨正五位下丹墀眞人貞峯等賜姓多治

眞人、先是、貞峯等上表曰、因土命氏、百王之彝規、分姓成親、千古之茂典、姓乖其本、何記

多治比廣成、入唐に際し丹
堀に改む、歸朝後、舊姓
を用ふ

袁晉卿、使に隨つて來朝す

八月十二日、大宰府管内に疫死す
るもの多し、仍て部内神祇に奉幣
し、民のために祈禱せしむ

皇流、氏失其初、誰知天應、私檢古記、檜隈廬入野宮御宇宣化天皇惠波皇子、惠波皇子生十市
王、十市王生多治比古王、此王生產之夕、忽多治比花飛浮湯沐釜、以斯冥感、名多治比古王、
成長之後、固執謙退、奏請求姓、因賜姓多治比公、便以名爲姓、存其舊意、飛鳥淨御原天皇十
三年十一月一日定八姓十三氏、是時多治比古男左大臣正二位志摩公賜姓真人、志摩真人、是貞
峯之高祖父也、(七三四)天平六年、遣唐使正三位行中納言兼皇太子傳式部卿多治比真人廣成入唐之日、
改作丹堀、復命之後、猶用舊姓、傳來百年、無心變改、(八三三)天長九年四月廿五日、木工頭從五位上
多治比真人貞成等奏請、改多治比三字、爲丹堀兩字、當于此時、貞峯等、身非氏長、不預私議、
心懷不穩、無敢駁論、夫物貴不失真、理則容因實、豈偏賞入唐之新文、訛所生之舊字乎、加之、
竊案文辭、情思義理、丹堀真人、是涉忌諱、伏願、以古多治字、換今丹堀姓、但緣煩文、請省
比字、雖除一字、稱謂不變、然則存先祖之感生、貽孫謀於不朽、不勝懇款之至、拜表以聞、詔
許之、

＊〔續日本紀〕三十五 寶龜九年十二月庚寅、(十八日)玄蕃頭從五位上袁晉卿賜姓清村宿禰、晉卿唐人
光仁天皇

也、天平七年隨我朝使歸朝、時年十八九、學得文選爾雅音、爲大學音博士、於後歷大學頭安房
守、

〔續日本紀〕十二 天平七年八月乙未、勅曰、如聞、比日大宰府疫死者多、思欲救療疫氣、
聖武天皇以濟民命、是以、奉幣彼部神祇、爲民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺、讀金剛般若經、仍遣使賑

天平七年（七三五）

天平七年（七三五）—天平八年（七三六）

一三四

給疫民、并加湯藥、又其長門以還諸國守若介專齋戒道饗祭祀、

天平八年（七三六）

二月二十八日、阿倍朝臣繼麻呂を遣新羅大使に任ず、尋で繼麻呂ら拜朝し、六月、筑紫より入海す

〔續日本紀〕

^{十二}聖武天皇

天平八年二月戊寅、以從五位下阿倍朝臣繼麻呂、爲遣新羅大使、

夏四月丙寅、

^{十七日}

遣新羅使阿倍朝臣繼麻呂等拜朝、

遣新羅使の歌

〔萬葉集〕

^{十五}

天平八年丙子夏六月、遣使新羅國之時、使人等各悲別贈答、及海路之上慟旅陳

思作歌、并當所誦詠古歌 一百四十五首

贈答歌十一首

秦問滿歌一首

暫還私家陳思歌一首

臨發之時歌三首

乘船入海路上作歌八首

當所誦詠古歌十首

備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首

風速浦船泊之夜作歌二首

安藝國長門嶋船泊磯邊作歌五首

從長門浦船出之夜仰觀月光作歌三首

古挽詞

丹比大夫悽愴亡妻挽歌一首并短調一首

屬物發思歌一首并短調二首

周防國玖河郡麻里布浦行之時作歌八首

過大嶋鳴門而經再宿之後、追作歌二首

熊毛浦船泊之夜作歌四首

佐婆海中、忽遭逆風、漂流、著豐前國下毛郡分間浦、追怛艱難作歌八首

至筑紫館遙望本鄉悽愴作歌四首

七夕仰觀天漢、各陳所心作歌三首

海邊望月作歌九首

到筑前國志摩郡之韓亭作歌六首

引津亭船泊之作歌七首

肥前國松浦郡狛嶋船泊之夜作歌七首

挽詞

到壹岐嶋雪連宅滿死去之時作歌一首并短調二首

葛井連子老作歌一首并短調二首

六鯖作歌一首并短調二首

到對馬嶋淺茅浦船泊之時作歌三首

竹敷浦船泊之時作歌十八首

天平八年（七三六）

廻來筑紫海路入京、到播磨國家嶋作歌五首

○中略

遣新羅使人等、悲別贈答、及海路慟情陳思、并當所誦之古歌

3578 武庫能浦乃 伊里江能渚鳥 羽具久毛流 伎美乎波奈禮旦 古非爾之奴倍之

武庫の浦

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて戀に死ぬべし

3579 大船爾 伊母能流母能爾 安良麻勢婆 羽具久美母知旦 由可麻之母能乎

大船に妹乗るものにあらませば羽ぐくみ持ちて行かましものを

3580 君之由久 海邊乃夜杼爾 奇里多と婆 安我多知奈氣久 伊伎等之理麻勢

君が行く海邊の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

3581 秋佐良婆 安比見牟毛能乎 奈爾之可母 奇里爾多都倍久 奈氣伎之麻佐牟

秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ

3582 大船乎 安流美爾伊太之 伊麻須君 都追牟許等奈久 波也可敞里麻勢

大船を荒海に出します君恙むことなく早歸りませ

3583 眞幸而 伊毛我伊波伴伐 於伎都奈美 知敞爾多都等母 佐波里安良米也母

眞幸くて妹が齋はば沖つ波千重に立つとも障あらめやも

3584 和可禮奈波 宇良我奈之家武 安我許呂母 之多爾乎伎麻勢 多太爾安布麻旦爾

別れなばうら悲しけむ吾が衣下にを着ませ直に逢ふまでに

3585 和伎母故我 之多爾毛伎餘等 於久理多流 許呂母能比毛乎 安禮等可米也母

吾妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐を吾解かめやも

3586 和我由惠爾 於毛比奈夜勢會 秋風能 布可武會能都奇 安波牟母能由惠

わが故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ

3587 多久夫須麻 新羅邊伊麻須 伎美我目乎 家布可安須可登 伊波比旦麻多牟

枿衾新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ

3588 波呂波呂爾 於母保由流可母 之可禮杼毛 異情乎 安我毛波奈久爾

はろばろに思ほゆるかも然れども異しき心を吾が思はなくに

右十一首、贈答、

3589 由布佐禮婆 比具良之伎奈久 伊故麻山 古延旦會安我久流 伊毛我目乎保里

夕さればひぐらし來鳴く生駒山越えてそ吾が來る妹が目を欲り

右一首、秦間滿、

3590 伊毛爾安波受 安良婆須敵奈美 伊波禰布牟 伊故麻乃山乎 故延旦會安我久流

妹に逢はずあらば爲方無み石根踏む生駒の山を越えてそ吾が來る

右一首、甞還私家陳思、

3591 妹等安里之 時者安禮杼毛 和可禮旦波 許呂母旦佐牟伎 母能尔會安里家流

妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにそありける

3592 海原爾 宇伎禰世武夜者 於伎都風 伊多久奈布吉會 妹毛安良奈久爾

海原に浮寝せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ妹もあらなくに

3593 大伴能 美津爾布奈能里 許藝出而者 伊都禮乃思麻爾 伊保里世武和禮

大伴の御津に船乗る

天平八年（七三六）

一三八

大伴の御津に船乗り漕ぎ出てはいづれの島に廬せむわれ

右三首、臨發之時作歌、

3594 之保麻都等 安里家流布禰乎 思良受之亘 久夜之久妹乎 和可禮伎爾家利

潮待つとありける船を知らずして悔しく妹を別れ來にけり

3595 安佐妣良伎 許藝亘天久禮婆 牟故能宇良能 之保非能可多爾 多豆我許惠須毛

武庫の浦

朝びらき漕ぎ出て來れば武庫の浦の潮干の潟に鶴が聲すも

3596 和伎母故我 可多美爾見牟乎 印南都麻 之良奈美多加彌 與曾爾可母美牟

印南都麻

吾妹子が形見に見むを印南都麻白波高み外にかも見む

3597 和多都美能 於伎津之良奈美 多知久良思 安麻乎等女等母 思麻我久流見由

わたつみの沖つ白波立ち來らし海人娘子ども島隠る見ゆ

3598 奴波多麻能 欲波安氣奴良之 多麻能宇良爾 安佐里須流多豆 奈伎和多流奈里

多麻の浦

ぬばたまの夜は明けぬらし多麻の浦に求食する鶴鳴き渡るなり

3599 月餘美能 比可里乎伎欲美 神嶋乃 伊素末乃宇良由 船出須和禮波

神島

月よみの光を清み神島の磯廻の浦ゆ船出すわれは

3600 波奈禮蘇爾 多亘流牟漏能木 宇多我多毛 比左之伎時乎 須疑爾家流香母

離磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも

3601 之麻思久母 比等利安里宇流 毛能爾安禮也 之麻能牟漏能木 波奈禮亘安流良武

しましくも獨りあり得るものにあれや島のむろの木離れてあるらむ

右八首、乗船入海路上作哥、

當所誦詠古調

3602 安乎爾餘志 奈良能美夜古爾 多奈妣家流 安麻能之良久毛 見禮杼安可奴加毛

あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも

右一首、詠雲、

3603 安乎楊疑能 延太伎里於呂之 湯種蒔 忌忌伎美爾 故非和多流香母

青楊の枝きり下し齋種蒔きゆゆしき君に戀ひわたるかも

3604 妹我素旦 和可禮旦比左爾 奈里奴禮杼 比登比母伊毛乎 和須禮旦於毛倍也

妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れておもへや

3605 和多都美乃 宇美爾伊旦多流 思可麻河伯 多延無日爾許曾 安我故非夜麻米

わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ吾が戀止まめ

飾磨川

右三首、戀歌、

3606 多麻藻可流 乎等女乎須疑旦 奈都久佐能 野嶋我左吉爾 伊保里須和禮波

野嶋が崎

玉藻刈る處女を過ぎて夏草の野嶋が崎に廬すわれは

柿本朝臣人麿歌曰、敏馬乎須疑旦、又曰、布禰知可豆伎奴

敏馬

3607 之路多倍能 藤江能宇良爾 伊射里須流 安麻等也見良武 多妣由久和禮乎

藤江の浦

白桮の藤江の浦に漁する海人とか見らむ旅行くわれを

柿本朝臣人麿歌曰、安良多倍乃、又曰、須受吉都流 安麻登香見良武

天平八年（七三六）

3608 安麻射可流 比奈乃奈我道乎 孤悲久禮婆 安可思能門欲里 伊敝乃安多里見由

天離る鄙の長道を戀ひ來れば明石の門より家のあたり見ゆ

柿本朝臣人麿歌曰、夜麻等思麻見由

3609 武庫能字美能 爾波餘久安良之 伊射里須流 安麻能都里船 奈美能字倍由見由

武庫の海

武庫の海のにはよくあらし漁する海人の釣船波の上ゆ見ゆ

氣比の海

柿本朝臣人麿歌曰、氣比乃字美能、又曰、可里許毛能 美太禮亘出見由 安麻能都里船
3610 安胡乃字良爾 布奈能里須良牟 乎等女良我 安可毛能須素爾 之保美都良武賀

阿胡の浦

阿胡の浦に船乗りすらむ娘子らが赤裳の裾に潮滿つらむか

網の浦

柿本朝臣人麿歌曰、安美能字良、又曰、多麻母能須蘇爾

七夕歌一首

3611 於保夫禰爾 麻可治之自奴伎 宇奈波良乎 許藝亘天和多流 月人乎登祐

大船に眞楫繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人壯子

右、柿本朝臣人麿歌、

備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首

備後國水調郡長井浦に船泊す

3612 安乎爾與之 奈良能美也故爾 由久比等毛我母 久左麻久良 多妣由久布禰能 登麻利都尋

武仁 旋頭歌也

あをによし奈良の都に行く人もがも草枕旅行く船の泊告げむに

右一首、大判官、

風速の浦に船泊す

3613 海原乎 夜蘇之麻我久里 伎奴禮杼母 奈良能美也故波 和須禮可禰都母

海原を八十島隠り來ぬれども奈良の都は忘れかねつも

3614 可敞流散爾 伊母爾見勢武爾 和多都美乃 於伎都白玉 比利比旦由賀奈

歸るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな

風速浦船泊之夜作歌二首

3615 和我由惠仁 妹奈氣久良之 風早能 宇良能於伎敞爾 奇里多奈妣家利

わが故に妹嘆くらし風早の浦の沖邊に霧たなびけり

3616 於伎都加是 伊多久布伎勢波 和伎毛故我 奈氣伎能奇里爾 安可麻之母能乎

沖つ風いたく吹きせば吾妹子が嘆の霧に飽かましものを

安藝國長門の島に船泊す

安藝國長門嶋船泊儀邊作歌五首

3617 伊波婆之流 多伎毛登杼呂爾 鳴蟬乃 許惠乎之伎氣婆 京師之於毛保由

石走る瀧もとどろに鳴く蟬の聲をし聞けば都し思ほゆ

右一首、大石蓑鷹、

3618 夜麻河伯能 伎欲吉可波世爾 安蘇倍杼母 奈良能美夜故波 和須禮可禰都母

山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも

3619 伊蘇乃麻由 多藝都山河 多延受安良婆 麻多母安比見牟 秋加多麻氣旦

磯の間ゆ激つ山川絶えずあらばまたもあひ見む秋かたまけて

3620 故悲思氣美 奈具左米可禰旦 比具良之能 奈久之麻可氣爾 伊保利須流可母

天平八年（七三六）

戀繁み慰めかねてひぐらしの鳴く島陰に廬するかも

3621 和我伊能知乎 奈我刀能之麻能 小松原 伊久與乎倍呂加 可武佐備和多流

わが命を長門の島の小松原幾代を経てか神さびわたる

長門の浦を船出す

從長門浦船出之夜、仰觀月光作歌三首

3622 月餘美乃 比可里乎伎欲美 由布奈藝爾 加古能己惠欲妣 宇良未許具可聞

月よみの光を清み夕風に水手の聲呼び浦廻漕ぐかも

3623 山乃波爾 月可多夫氣婆 伊射里須流 安麻能等毛之備 於伎爾奈都佐布

山の端に月かたぶけば漁する海人の燈火沖になづさふ

3624 和禮乃未夜 欲布禰波許具登 於毛敝禮婆 於伎敝能可多爾 可治能於等須奈里

われのみや夜船は漕ぐと思へれば沖邊の方に楫の音すなり

古挽詞一首并短詞

3625 由布左禮婆 安之敝爾佐和伎 安氣久禮婆 於伎爾奈都佐布 可母須良母 都麻等多具比呂

和我尾爾波 之毛奈布里曾等 之路多倍乃 波禰左之可倍呂 宇知波良比 左宿等布毛能乎

由久美都能 可敝良奴其等久 布久可是能 美延奴我其登久 安刀毛奈吉 與能比登爾之呂

和可禮爾之 伊毛我伎世呂思 奈禮其呂母 蘇呂加多思吉呂 比登里可母禰牟

夕されば 葦邊に騒き 明け來れば 沖になづさふ 鴨すらも 妻と副ひて わが尾には

霜な降りそと 白梶の 羽さし交へて 打ち拂ひ さ寝とふものを 行く水の 還らぬ如

く 吹く風の 見えぬが如く 跡も無き 世の人にして 別れにし 妹が着せてし なれ

衣 袖片敷きて 獨りかも寝む

反歌一首

3626 多都我奈伎 安之敵乎左之亘 等妣和多類 安奈多頭多頭志 比等里佐奴禮婆

鶴が鳴き葦邊をさして飛び渡るあなたづたづし獨りさ寝れば

右、丹比大夫悽愴亡妻歌、

屬物發思謠一首并短謠

3627 安佐散禮婆 伊毛我手爾麻久 可我美奈須 美津能波麻備爾 於保夫禰爾 眞可治之自奴伎

可良久爾々 和多理由加武等 多太牟可布 美奴面乎左指天 之保麻知亘 美乎妣伎由氣婆

於伎敵爾波 之良奈美多可美 宇良未欲理 許藝亘和多禮婆 和伎毛故爾 安波治乃之麻波

由布左禮婆 久毛爲可久里奴 左欲布氣亘 由久敵乎之良爾 安我已許呂 安可志能宇良爾

布禰等米亘 宇伎禰乎詞都追 和多都美能 於枳敵乎見禮婆 伊射理須流 安麻能乎等女波

小船乘 都良々爾宇家里 安香等吉能 之保美知久禮婆 安之辨爾波 多豆奈伎和多流 安

左奈藝爾 布奈亘乎世牟等 船人毛 鹿子毛許惠欲妣 柔保等里能 奈豆左比由氣婆 伊敵

之麻婆 久毛爲爾美延奴 安我毛敵流 許己呂奈具也等 波夜久伎亘 美牟等於毛比亘 於

保夫禰乎 許藝和我由氣婆 於伎都奈美 多可久多知伎奴 與會能未爾 見都追須疑由伎

多麻能宇良爾 布禰乎等杼米亘 波麻備欲里 宇良伊蘇乎見都追 奈久古奈須 禰能未之奈

可由 和多都美能 多麻伎能多麻乎 伊敵都刀爾 伊毛爾也良牟等 比里比登里 素亘爾波

伊禮亘 可敵之也流 都可比奈家禮婆 毛亘禮杼毛 之留思乎奈美等 麻多於伎都流可毛

御津の濱

敏馬

明石の浦

家島

多麻の浦

朝されば 妹が手に纏く 鏡なす 御津の濱びに 大船に 眞楫繁貫き 韓國に 渡り行か
むと 直向ふ 敏馬をさして 潮待ちて 水脈びき行けば 沖邊には 白波高み 浦廻より
漕ぎて渡れば 吾妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ さ夜ふけて 行方を知らに
吾が心 明石の浦に 船泊めて 浮寝をしつつ わたつみの 沖邊を見れば 漁する 海人
の娘子は 小船乗り つららに浮けり 曉の 潮満ち来れば 葦邊には 鶴鳴き渡る 朝風
に 船出をせむと 船人も 水手も聲よび 鳩鳥の なづさひ行けば 家島は 雲居に見え
ぬ 吾が思へる 心和ぐやと 早く来て 見むと思ひて 大船を 漕ぎわが行けば 沖つ波
高く立ち来ぬ 外のみに 見つつ過ぎ行き 多麻の浦に 船を停めて 濱びより 浦磯を見
つつ 泣く兒なす 哭のみし泣かゆ 海神の 手纏の玉を 家裏に 妹に遣らむと 拾ひ取
り 袖には入れて 返し遣る 使無ければ 持てれども 驗を無みと また置きつるかも

反歌二首

3628 多麻能宇良能 於伎都之良多麻 比利敏禮杼 麻多會於伎都流 見流比等乎奈美

多麻の浦の沖つ白珠拾へれどまたそ置きつる見る人を無み

3629 安伎左良婆 和我布禰波旦牟 和須禮我比 與世伎旦於家禮 於伎都之良奈美

秋さらばわが船泊てむ忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波

周防國玖珂郡麻里布の浦を
過ぐ

周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首

3630 眞可治奴伎 布禰之由加受波 見禮杼安可奴 麻里布能宇良爾 也杼里世麻之乎

眞楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦にやどり爲ましを

粟島

3631 伊都之可母 見牟等於毛比師 安波之麻乎 與會爾也故非無 由久與思乎奈美

いつしかも見むと思ひし粟島を外にや戀ひむ行くよしを無み

3632 大船爾 可之布里多旦天 波麻藝欲伎 麻里布能宇良爾 也杼里可世麻之

大船に戕舸振り立てて濱清き麻里布の浦にやどりか爲まし

3633 安波思麻能 安波自等於毛布 伊毛爾安禮也 夜須伊毛禰受旦 安我故非和多流

粟島の逢はじと思ふ妹にあれや安眠も寝ずて吾が戀ひ渡る

3634 筑紫道能 可太能於保之麻 思末志久母 見禰婆古非思吉 伊毛乎於伎旦伎奴

筑紫道の可太の大島しましくも見ねば戀しき妹を置きて來ぬ

3635 伊毛我伊敞治 知可久安里世婆 見禮杼安可奴 麻里布能宇良乎 見世麻思毛能乎

妹が家道近くありせば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを

3636 伊敞妣等波 可敞里波也許等 伊波比之麻 伊波比麻都良牟 多妣由久和禮乎

家人は歸り早來といはひ島齋ひ待つらむ旅行くわれを

3637 久左麻久良 多妣由久比等乎 伊波比之麻 伊久與布流末旦 伊波比伎爾家牟

草枕旅行く人をいはひ島幾代經るまで齋ひ來にけむ

大島の鳴門

過大鳴鳴門而經再宿之後、追作歌二首

3638 巨禮也己能 名爾於布奈流門能 宇頭之保爾 多麻毛可流登布 安麻乎等女杼毛

これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども

右一首、田邊秋庭、

3639 奈美能宇倍爾 宇伎禰世之欲比 安杼毛倍香 許己呂我奈之久 伊米爾美要都流

波の上に浮寝せし夜何と思へか心悲しく夢に見えつる

熊毛の浦に船泊す

熊毛浦船泊之夜作歌四首

3640 美夜故邊爾 由可牟船毛我 可里許母能 美太禮旦於毛布 許登都晝夜良牟

都邊に行かむ船もが刈薦の亂れて思ふ言告げやらむ

右一首、羽栗、

3641 安可等伎能 伊敵胡悲之伎爾 宇良未欲理 可治乃於等須流波 安麻乎等女可母

曉の家戀しきに浦廻より楫の音するは海人娘子かも

3642 於枳敵欲理 之保美知久良之 可良能宇良爾 安佐里須流多豆 奈伎旦佐和伎奴

沖邊より潮満ち來らしからの浦に求食する鶴鳴きて騒きぬ

からの浦

3643 於吉敵欲里 布奈妣等能煩流 與妣與勢旦 伊射都氣也良牟 多婢能也登里乎

一云、多妣能夜杼里乎 伊射都氣夜良奈

沖邊より船人のぼる呼び寄せていざ告げ遣らむ旅の宿を

一に云はく、旅のやどりをいざ告げやらな

佐婆海中、忽遭逆風漲浪漂流、經宿而後、幸得順風、到着豊前國下毛郡分間浦、於是追

佐婆の海に逆風に遭ひ漂流するも、豊前國下毛郡分間浦に到着す

但艱難、悽惻作歌八首

3644 於保伎美能 美許等可之故美 於保夫禰能 由伎能麻爾末爾 夜杼里須流可母

大君の命恐み大船の行きのまにまにやどりするかも

右一首、雪宅麿、

3645 和伎毛故波 伴也母許奴可登 麻都良牟乎 於伎爾也須麻牟 伊敵都可受之且

吾妹子は早も來ぬかと待つらむを沖にや住まむ家つかずして

3646 宇良未欲里 許藝許之布禰乎 風波夜美 於伎都美字良爾 夜杼里須流可毛

沖つ御浦

浦廻より漕ぎ來し船を風早み沖つ御浦にやどりするかも

3647 和伎毛故我 伊可爾於毛倍可 奴婆多末能 比登欲毛於知受 伊米爾之美由流
吾妹子が如何に思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる

3648 宇奈波良能 於伎敵爾等毛之 伊射流火波 安可之且登母世 夜麻登思麻見無
海原の沖邊にともし漁る火は明してともせ大和島見む

3649 可母自毛能 宇伎禰乎須禮婆 美奈能和多 可具呂伎可美爾 都由曾於伎爾家類
鴨じもの浮寝をすれば蜷の腸か黒き髪に露を置きにける

3650 比左可多能 安麻且流月波 見都禮杼母 安我母布伊毛爾 安波奴許呂可毛
ひさかたの天照る月は見つれども吾が思ふ妹に逢はぬ頃かも

3651 奴波多麻能 欲和多流月者 波夜毛伊且奴香文 宇奈波良能 夜蘇之麻能字倍由 伊毛我安
多里見牟 旋頭調也

ぬばたまの夜渡る月は早も出でぬかも海原の八十島の上ゆ妹が邊見む

筑紫館に至る

至筑紫館遙望本郷、悽愴作歌四首

3652 之賀能安麻能 一日毛於知受 也久之保能 可良伎孤悲乎母 安禮波須流香母

天平八年（七三六）

志賀の海人の一日もおちず焼く鹽の辛き戀をも吾はするかも

3653 思可能宇良爾 伊射里須流安麻 伊敝妣等能 麻知古布良牟爾 安可思都流字乎

志賀の浦

志賀の浦に漁する海人家人の待ち戀ふらむに明し釣る魚

3654 可之布江爾 多豆奈吉和多流 之可能宇良爾 於枳都之良奈美 多知之久良思母

一云、美知之伎奴良思

かしふ江

かしふ江に鶴鳴き渡る志賀の浦に沖つ白波立ちし來らしも

一に云はく、滿ちし來ぬらし

3655 伊麻欲理波 安伎豆吉奴良之 安思比奇能 夜麻末都可氣爾 日具良之奈伎奴

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ

七夕仰觀天漢、各陳所思作歌三首

3656 安伎波疑爾 比保敝流和我母 奴禮奴等母 伎美我美布禰能 都奈之等理呂婆

秋萩ににほへるわが裳濡れぬとも君が御船の綱し取りてば

右一首、大使、

3657 等之爾安里呂 比等欲伊母爾安布 比故保思母 和禮爾麻佐里呂 於毛布良米也母

年にありて一夜妹に逢ふ彥星もわれにまさりて思ふらめやも

3658 由布豆久欲 可氣多知與里安比 安麻能我波 許具布奈妣等乎 見流我等母之佐

夕月夜影立ち寄り合ひ天の河漕ぐ舟人を見るが羨しさ

海邊望月作歌九首

3659 安伎可是波 比爾家爾布伎奴 和伎毛故波 伊都登加和禮乎 伊波比麻都良牟

秋風は日にけに吹きぬ吾妹子は何時とかわれを齎ひ待つらむ

大使之第二男、

3660 可牟佐夫流 安良都能左伎爾 與須流奈美 麻奈久也伊毛爾 故非和多里奈牟

神さぶる荒津の崎に寄する波間無くや妹に戀ひ渡りなむ

右一首、土師稻足、

3661 可是能牟多 與世久流奈美爾 伊射里須流 安麻乎等女良我 毛能須素奴禮奴

一云、安麻乃乎等賣我 毛能須蘇奴禮濃

風のむた寄せ來る波に漁する海人娘子らが裳の裾濡れぬ

一に云はく、海人の娘子が裳の裾濡れぬ

3662 安麻能波良 布里佐氣見禮婆 欲會布氣爾家流 與之惠也之 比等里奴流欲波 安氣婆安氣

奴等母

天の原ふり放け見れば夜そ更けにけるよしゑやし獨り寝る夜は明けば明けぬとも

右一首、旋頭歌也、

3663 和多都美能 於伎都奈波能里 久流等伎登 伊毛我麻都良牟 月者倍爾都追

わたつみの沖つ繩海苔來る時と妹が待つらむ月は經につつ

3664 之可能宇良爾 伊射里須流安麻 安氣久禮婆 宇良未許具良之 可治能於等伎許由

志賀の浦に漁する海人明け來れば浦廻漕ぐらし楫の音聞ゆ

3665 伊母乎於毛比 伊能禰良延奴爾 安可等吉能 安左宜理其問理 可里我禰會奈久

妹を思ひ眠の寝らえぬに曉の朝霧隠り雁がねそ鳴く

3666 由布佐禮婆 安伎可是左牟思 和伎母故我 等伎安良比其呂母 由伎亘波也伎牟

夕されば秋風寒し吾妹子が解き洗ひ衣行きて早着む

3667 和我多妣波 比左思久安良思 許能安我家流 伊毛我許呂母能 阿可都久見禮婆

わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば

筑前國志麻郡韓亭に船舶す

到筑前國志麻郡之韓亭船舶泊經三日、於時夜月之光皎と流照、奄對此華旅情悽噎、各陳心

緒聊以裁歌六首

3668 於保伎美能 等保能美可度登 於毛敝禮杼 氣奈我久之安禮婆 古非爾家流可母

大君の遠の朝廷

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば戀ひにけるかも

右一首、大使、

3669 多妣爾安禮杼 欲流波火等毛之 乎流和禮乎 也末爾也伊毛我 古非都追安流良牟

旅にあれど夜は火ともし居るわれを闇にや妹が戀ひつつあるらむ

右一首、大判官、

3670 可良等麻里 能許乃宇良奈美 多々奴日者 安禮杼母伊敝爾 古非奴日者奈之

能許の浦

韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日は無し

3671 奴婆多麻乃 欲和多流月爾 安良麻世婆 伊敝奈流伊毛爾 安比亘許麻之乎

ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて來ましを

引津亭に船泊す

可也の山

3672 比左可多能 月者弓利多里 伊刀麻奈久 安麻能伊射里波 等毛之安敞里見由

ひさかたの月は照りたりいとまなく海人の漁火はともし合へり見ゆ

3673 可是布氣婆 於吉都思良奈美 可之故美等 能許能等麻里爾 安麻多欲曾奴流

風吹けば沖つ白波恐みと能許の亭に數多夜そ寝る

引津亭船泊之作歌七首

3674 久左麻久良 多婢乎久流之美 故非乎禮婆 可也能山邊爾 草乎思香奈久毛

草枕旅を苦しみ戀ひ居れば可也の山邊にさ男鹿鳴くも

3675 於吉都奈美 多可久多都日爾 安敞利伎等 美夜古能比等波 伎吉弓家牟可母

沖つ波高く立つ日にあへりきと都の人は聞きてけむかも

右二首、大判官、

3676 安麻等夫也 可里乎都可比爾 衣弓之可母 奈良能彌夜故爾 許登都尋夜良武

天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ

3677 秋野乎 爾保波須波疑波 佐家禮杼母 見流之留思奈之 多婢爾師安禮婆

秋の野をにははす萩は咲けれども見るしるし無し旅にしあれば

3678 伊毛乎於毛比 伊能禰良延奴爾 安伎乃野爾 草乎思香奈伎都 追麻於毛比可禰弓

妹を思ひ眠の寝らえぬに秋の野にさ男鹿鳴きつ妻思ひかねて

3679 於保夫禰爾 眞可治之自奴伎 等吉麻都等 和禮波於毛倍杼 月曾倍爾家流

大船に眞楫繁貫き時待つとわれは思へど月を經にける

天平八年（七三六）

3680 欲乎奈我美 伊能年良延奴爾 安之比奇能 山妣故等餘米 佐乎思賀奈君母

夜を長み眠の寝らえぬにあしひきの山彦響めさ男鹿鳴くも

肥前國松浦郡泊島の亭に船泊す

肥前國松浦郡泊島亭泊之夜、遙望海浪、各慟旅心作歌七首

3681 可敞里伎呂 見牟等於毛比之 和我夜度能 安伎波疑須と伎 知里爾家武可聞

歸り來て見むと思ひしわが屋外の秋萩薄散りにけむかも

右一首、秦田麿、

3682 安米都知能 可未乎許比都と 安禮麻多武 波夜伎萬世伎美 麻多婆久流思母

天地の神を祈ひつつ吾待たむ早來ませ君待たば苦しも

右一首、娘子、

3683 伎美乎於毛比 安我古非萬久波 安良多麻乃 多都追奇其等爾 與久流日毛安良自

君を思ひ吾が戀ひまきはあらたまの立つ月毎に避くる日もあらじ

3684 秋夜乎 奈我美爾可安良武 奈會許と波 伊能禰良要奴毛 比等里奴禮婆可

秋の夜を長みにかあらむ何そこば眠の寝らえぬも獨り寝ればか

3685 多良思比賣 御舶波呂家牟 松浦乃宇美 伊母我麻都倍伎 月者倍爾都と

神功皇后の御船

足姫御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は經につつ

3686 多婢奈禮婆 於毛比多要呂毛 安里都禮杼 伊敞爾安流伊毛之 於母比我奈思母

旅なれば思ひ絶えてもありつれど家にある妹し思ひがなしも

3687 安思必寄能 山等妣古由留 可里我禰波 美也故爾由加波 伊毛爾安比呂許禰

壹岐嶋に到る

あしひきの山飛び越ゆる雁がねは都に行かば妹に逢ひて來ね

到壹岐嶋、雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌一首并短詩

3688 須賣呂伎能 等保能朝廷等 可良國爾 和多流和我世波 伊敞妣等能 伊波比麻多禰可 多

太未可母 安夜麻知之家牟 安吉佐良婆 可敞里麻左牟等 多良知禰能 波と爾麻乎之且

等伎毛須疑 都奇母倍奴禮婆 今日可許牟 明日可蒙許武登 伊敞妣等波 麻知故布良牟爾

等保能久爾 伊麻太毛都可受 也麻等乎毛 登保久左可里且 伊波我禰乃 安良伎之麻禰爾

夜杼理須流君

天皇の 遠の朝廷と 韓國に 渡るわが背は 家人の 齋ひ待たねか 正身かも 過しけ

む 秋さらば 歸りまさむと たらちねの 母に申して 時も過ぎ 月も經ぬれば 今日

か來む 明日かも來むと 家人は 待ち戀ふらむに 遠の國 いまだも着かず 大和をも

遠く離りて 石が根の 荒き島根に 宿りする君

反歌二首

3689 伊波多野爾 夜杼里須流伎美 伊敞妣等乃 伊豆良等和禮乎 等波婆伊可爾伊波牟

石田野に宿りす

石田野に宿りする君家人のいづらとわれを問はば如何に言はむ

3690 與能奈可波 都禰可久能未等 和可禮奴流 君爾也毛登奈 安我孤悲由加牟

世の中は常かくのみと別れぬる君にやもとな吾が戀ひ行かむ

右三首、挽歌、

3691 天地等 登毛爾母我毛等 於毛比都と 安里家牟毛能乎 波之家也思 伊敞乎波奈禮且 奈

天平八年（七三六）

美能宇倍由 奈豆佐比伎爾旦 安良多麻能 月日毛伎倍奴 可里我禰母 都藝旦伎奈氣婆
多良知禰能 波々母都末良母 安佐都由爾 毛能須蘇比都知 由布疑里爾 己呂毛旦奴禮旦
左伎久之毛 安流良牟其登久 伊侶見都追 麻都良牟母能乎 世間能 比登乃奈氣伎波 安
比於毛波奴 君爾安禮也母 安伎波疑能 知良敵流野邊乃 波都乎花 可里保爾布伎旦 久
毛婆奈禮 等保伎久爾敵能 都由之毛能 佐武伎山邊爾 夜杼里世流良牟

天地と 共にもがもと 思ひつつ ありけむものを はしけやし 家を離れて 波の上ゆ
なづさひ來にて あらたまの 月日も來經ぬ 雁がねも 續ぎて來鳴けば たらちねの 母
も妻らも 朝露に 裳の裾ひづち 夕霧に 衣手濡れて 幸くしも あるらむ如く 出で見
つつ 待つらむものを 世間の 人の嘆は 相思はぬ 君にあれやも 秋萩の 散らへる野
邊の 初尾花 假廬に葺きて 雲離れ 遠き國邊の 露霜の 寒き山邊に 宿りせるらむ

反歌二首

3692 波之家也思 都麻毛古杼毛母 多可多加爾 麻都良牟伎美也 之麻我久禮奴流

はしけやし妻も子どもも高高に待つらむ君や鳥隠れぬる

3693 毛美知葉能 知里奈牟山爾 夜杼里奴流 君乎麻都良牟 比等之可奈之母

黃葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも

右三首、葛井連子老作挽歌、

3694 和多都美能 可之故伎美知乎 也須家口母 奈久奈夜美伎旦 伊麻太爾母 毛奈久由可牟登
由吉能安末能 保都手乃宇良敵乎 可多夜伎旦 由加武土須流爾 伊米能其等 美知能蘇良

壹岐の卜部、鹿肩を焼き占ふ

治爾 和可禮須流伎美

わたつみの 恐き路を 安けくも 無く悩み來て 今だにも 喪無く行かむと 壹岐の海
人の 上手の卜部を かた焼きて 行かむとするに 夢の如 道の空路に 別れする君

反歌二首

3695 牟可之欲里 伊比祁流許等乃 可良久爾能 可良久毛已許爾 和可禮須留可聞

昔より言ひける言の韓國の辛くも此處に別れするかも

3696 新羅奇敞可 伊敞爾可加反流 由吉能之麻 由加牟多登伎毛 於毛比可禰都母

新羅へか家にか歸る壹岐の島行かむたどきも思ひかねつも

右三首、六鯖作挽歌、

對馬の淺茅の浦に到り船泊す

到對馬嶋淺茅浦船泊之時、不得順風、經停五箇日、於是瞻望物華、各陳慟心作詞三首

3697 毛母布禰乃 波都流對馬能 安佐治山 志具禮能安米爾 毛美多比爾家里

百船の泊つる對馬の淺茅山時雨の雨にもみたひにけり

3698 安麻射可流 比奈爾毛月波 亘禮と杼母 伊毛曾等保久波 和可禮伎爾家流

天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ來にける

3699 安伎左禮婆 於久都由之毛爾 安倍受之亘 京師乃山波 伊呂豆伎奴良牟

秋されば置く露霜に堪へずして都の山は色づきぬらむ

竹敷の浦に船泊す

竹敷浦船泊之時、各陳心緒作歌十八首

3700 安之比奇能 山下比可流 毛美知葉能 知里能麻河比波 計布仁聞安流香母

天平八年（七三六）

あしひきの山した光る黄葉の散りの亂ひは今日にもあるかも

右一首、大使、

3701 多可之伎能 母美知乎見禮婆 和藝毛故我 麻多牟等伊比之 等伎曾伎爾家流

竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ來にける

右一首、副使、

3702 多可思吉能 宇良未能毛美知 和禮由伎亘 可敞里久流末但 知里許須奈由米

竹敷の浦廻の黄葉われ行きて歸り來るまで散りこすなゆめ

右一首、大判官、

3703 多可思吉能 宇敞可多山者 久禮奈爲能 也之保能伊呂爾 奈里爾家流香聞

竹敷のうへかた山は紅の八入の色になりけるかも

右一首、小判官、

3704 毛美知婆能 知良布山邊由 許具布禰能 爾保比爾米但亘 伊但亘伎爾家里

黄葉の散らふ山邊ゆ漕ぐ船のほひに愛でて出でて來にけり

3705 多可思吉能 多麻毛奈婢可之 已藝但奈牟 君我美布禰乎 伊都等可麻多牟

竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君が御船をいつとか待たむ

右二首、對馬娘子名玉槻、

3706 多麻之家流 伎欲吉奈藝佐乎 之保美亘婆 安可受和禮由久 可反流左爾見牟

玉敷ける清き渚を潮満てば飽かずわれ行く還るさに見む

右一首、大使、

3707 安伎也麻能 毛美知乎可射之 和我乎禮婆 宇良之保美知久 伊麻太安可奈久爾

秋山の黄葉を挿頭しわが居れば浦潮満ち來いまだ飽かなくに

右一首、副使、

3708 毛能毛布等 比等爾波美要繙 之多婢毛能 思多由故布流爾 都奇會倍爾家流

物思ふと人には見えじ下紐の下ゆ戀ふるに月そ經にける

右一首、大使、

3709 伊敞豆刀爾 可比乎比里布等 於伎敞欲里 與世久流奈美爾 許呂毛亘奴禮奴

家づとに貝を拾ふと沖邊より寄せ來る波に衣手濡れぬ

3710 之保非奈婆 麻多母和禮許牟 伊射遊賀武 於伎都志保佐爲 多可久多知伎奴

潮干なばまたもわれ來むいざ行かむ沖つ潮騒高く立ち來ぬ

3711 和我袖波 多毛登等保里亘 奴禮奴等母 故非和須禮我比 等良受波由可自

わが袖は手本とほりて濡れぬとも戀忘れ貝取らずは行かじ

3712 奴婆多麻能 伊毛我保須倍久 安良奈久爾 和我許呂母亘乎 奴禮亘伊可爾勢牟

ぬばたまの妹が乾すべくあらなくにわが衣手を濡れていかにせむ

3713 毛美知婆波 伊麻波宇都呂布 和伎毛故我 麻多牟等伊比之 等伎能倍由氣婆

黄葉は今はうつろふ吾妹子が待たむといひし時の經ゆけば

3714 安伎佐禮婆 故非之美伊母乎 伊米爾太爾 比左之久見牟乎 安氣爾家流香聞

秋されば戀しみ妹を夢にだに久しく見むを明けにけるかも

3715 比等里能未 伎奴流許呂毛能 比毛等加婆 多禮可毛由波牟 伊敝杼保久之旦

獨りのみきぬる衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして

3716 安麻久毛能 多由多比久禮婆 九月能 毛美知能山毛 宇都呂比爾家里

天雲のたゆたひ來れば九月の黃葉の山もうつろひにけり

3717 多婢爾旦毛 母奈久波也許登 和伎毛故我 牟須妣思比毛波 奈禮爾家流香聞

旅にても喪無く早來と吾妹子が結びし紐はなれにけるかも

廻來筑紫海路入京、到播磨國家嶋之時作歌五首

筑紫に歸り來て、海路入京
す
播磨國家島に到る

3718 伊敝之麻波 奈爾許會安里家禮 宇奈波良乎 安我古非伎都流 伊毛母安良奈久爾

家島は名にこそありけれ海原を吾が戀ひ來つる妹もあらなくに

3719 久左麻久良 多婢爾比左之久 安良米也等 伊毛爾伊比之乎 等之能倍奴良久

草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の經ぬらく

3720 和伎毛故乎 由伎旦波也美武 安波治之麻 久毛爲爾見延奴 伊敝都久良之母

吾妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家つくらしも

3721 奴婆多麻能 欲安可之母布禰波 許藝由可奈 美都能波麻末都 麻知故非奴良武

ぬばたまの夜明しも船は漕ぎ行かな御津の濱松待ち戀ひぬらむ

3722 大伴乃 美津能等麻里爾 布禰波旦々 多都多能山乎 伊都可故延伊加武

大伴の御津の泊に歸着す

大伴の御津の泊に船泊てて龍田の山を何時か越え行かむ

八月二十三日、遣唐副使中臣朝臣名代ら、唐人・波斯人を率ゐて拜朝す

〔續日本紀〕^{十二} 聖武天皇 天平八年八月庚午、入唐副使從五位上中臣朝臣名代等率唐人三人波斯人一人拜朝、

十一月三日、遣唐副使中臣朝臣名代らを昇敘す

〔續日本紀〕^{十二} 聖武天皇 天平八年十一月戊寅、天皇臨朝、詔授入唐副使從五位上中臣朝臣名代從

四位下、故判官正六位上田口朝臣養年富、紀朝臣馬主並贈從五位下、准判官從七位下大伴宿禰首名、唐人皇甫東朝、波斯人李密翳等授位有差、

是歲、伊豫國正稅帳に大唐使中臣朝臣の名見ゆ

〔正倉院文書〕^{墨芥三十九}

（總目裏書）

封十二 封十三

○紙面ニ「伊豫國印」五アリ、

漆把貳分半 ^{神龜二年二千八百廿七束 四年二千冊二束 五年二百十四束七把二分半}

郡司 ^{正八位上凡直宅麻呂 少領從八位上警首石前 主帳少初位下物部荒人}

便付介外從五位下勳十二等紀朝臣必登進上、以解、

天平八年八月六日正七位下行目勳十二等文忌寸應養

上行守勳十二等中臣朝臣大唐使 外正七位上行椽置始連稻足

大唐使中臣朝臣

○下ノ一切、本掛本國印關ケタリ、

天平八年（七三六）

天平八年（七三六）

一六〇

西第一板倉 八尺四寸、廣二丈二尺八寸、高一丈二尺四寸 收納稻壹萬陸仟捌伯捌拾陸束漆把貳分半 天平六年下盡

第二板倉 長二丈五尺九寸、廣一丈五尺三寸、高九尺六寸 收納稻參仟捌伯壹拾貳束 神龜元年

○紙面ニ「伊豫國印」二十三アリ、

郡司 大領正八位上凡直廣田主帳大初位下大伴首大山

年定正稅穀 陸仟肆伯陸拾玖斛伍斗

直拾參束陸把

出舉貳萬參伯束 春九千九百束夏一萬四百束

借貸壹萬束

遺陸萬肆仟壹伯壹拾參束陸把 ○下略

是歲、薩摩國正稅帳に遣唐使第二船供給類稻の名見ゆ

〔正倉院文書〕

正集 四十三 薩麻國正稅帳 字面ニ「薩麻國印」アリ

〔薩麻國天平八年正稅目錄帳從八位上行目吳原忌寸百足〕

斗 八升 斛別入一升、

定實壹仟貳伯玖拾肆斛捌斗貳升 不動

籾振量定粟穀肆伯參拾陸斛玖斗參升 振入卅九斛七斗二升九夕

定實參伯玖拾漆斛貳斗玖合壹夕

穎稻參萬漆仟陸伯漆束捌把拾分把之玖

穎粟參仟參伯貳拾陸束陸把拾分把之壹

繡壹仟貳伯陸拾壹斛養老四年

鹽漆斛漆斗參升玖夕

酒肆拾伍斛伍斗伍升漆合

雜用穎稻肆仟漆伯貳拾漆束捌把拾分把之肆○中略

目以上二人從參拾人
史生廿五人

往來驛使合頭壹拾人（壹脫カ）
一人七日、二人三日、四人一日、從壹拾肆人七人七日、三人三日、四人一日、惣單陸拾陸人從冊一人食稻貳拾

貳束參把（頭人別四把）
從人別三把酒貳斗參升一十五人別一升

往來傳使合頭肆拾貳人一人五十八日、三人從玖人六人二日、惣單壹伯壹拾肆人從頭一百二人食稻肆拾肆束

陸把（頭一人六把、一百一人別四把）
從一十二人別三把酒捌斗貳升參合別一升一十五合、一十六人

新任國司史生正八位上勳十二等韓柔受郎（從二人）起七月廿七日盡十月廿九日合玖拾貳日、單壹

伯捌拾肆人、食稻漆拾參束壹把（自七月廿七日至八月廿九日合卅三日、依國司部內巡行食法、月別充廿五束）酒貳斗陸升肆合

運府甘葛煎擔夫參人十九日惣單伍拾漆人 食稻壹拾漆束肆把（三人九日、人別日四把）

運府兵器料鹿皮擔夫捌人十九日惣單壹伯伍拾貳人 食稻肆拾陸束肆把（八人十日、人別日四把、人別日三把）

運府筆料鹿皮擔夫貳人十九日惣單參拾捌人 食稻壹拾壹束陸把（二百十日、人別日四把、人別日二把）

兵器料
筆料

十四人
別二把

天平八年（七三六）

天平八年（七三六）

一六二

遣唐使第二船供給穎稻及び酒

國司年料壹仟伍伯束

遣唐使第二船供給穎稻漆拾伍束陸把

酒伍斛參斗

疾病人壹伯肆拾捌人給藥酒漆斗參升貳合卅人、別六合、八十人、別五合、卅八人、別四合、

釀酒料稻貳伯參拾捌束 得酒壹拾漆斛

出舉壹萬壹伯束死伯姓一十一人免給稻一百卅五束

定納本玖仟玖伯陸拾伍束 利肆仟玖伯捌拾貳束伍把 合壹萬肆仟玖伯肆拾漆束伍把

國司借貸肆仟玖伯束

遺壹萬漆仟捌伯捌拾束拾分把之伍

酒貳拾玖斛貳斗捌升

天平四年未償壹仟玖伯捌拾玖束伍把死伯姓二人免給稻五十一束

徵納壹仟玖伯參拾捌束伍把

都合簸振量定稻穀壹仟肆伯貳拾肆斛參斗振入一百廿九斛四斗八升、斛別入一斗、

定實壹仟貳伯玖拾肆斛捌斗貳升動不

簸振量定粟穀肆伯參拾陸斛玖斗參升振入卅九斛七斗二升九夕

定實參伯玖拾漆斛貳斗玖合壹夕

穎稻參萬玖仟陸伯陸拾陸束拾分把之伍

穎粟參仟參伯貳拾陸束陸把拾分把之壹

繡壹仟貳伯陸拾壹斛養老四年

鹽漆斛漆斗參升玖夕

酒肆拾陸斛貳斗捌升

甕壹拾漆口大甕一口 中甕七口 小甕九口

正倉玖間並構木倉 借屋壹間

合壹拾間不動一間 動用一間 繡納一間

死馬皮參領 賣直稻參拾束領別一十束

(七三)
天平四年未償壹仟貳伯肆拾伍束伍把死伯姓一人 免給稻五十一束

徵納壹仟壹伯玖拾肆束伍把

都合撥振量定稻穀參伯玖拾壹斛振入卅五斛五斗 四升五合

定實參伯伍拾伍斛肆斗伍升伍合動用

穎稻壹萬漆仟陸伯壹拾肆束玖把

正倉伍間並構木倉 借屋壹間

合陸間動用一間 穎稻納伍間

大領外從六位下薩麻君福志麻呂

少領外正七位下勳八等前君乎佐

主政外少初位薩麻君宇志(マ)

天平八年(七三六)

天平九年（七三七）

一六四

主帳外少初位上勳十二等肥君廣龍

主帳外少初位下勳十等會縣主麻多略○下

天平九年（七三七）

正月二十七日、遣新羅使大判官壬生使主宇太麻呂ら歸朝して、新羅の禮を失して使の旨を受けざることを奏す、尋で、遣新羅副使大伴宿禰三中ら拜朝す

〔續日本紀〕

十二
聖武天皇

天平九年春正月辛丑、遣新羅使大判官從六位上壬生使主宇太麻呂、少判

官正七位上大藏忌寸麻呂等入京、大使從五位下阿倍朝臣繼麻呂泊津嶋卒、副使從六位下大伴宿禰三中染病不得入京、

二月己未、

遣新羅使奏新羅國失常禮不受使旨、於是召五位已上并六位已下官人惣冊五人于內裏、

令陳意見、

三月壬寅、

遣新羅使副使正六位上大伴宿禰三中等冊人拜朝、

〔續日本紀〕

十二
聖武天皇

天平九年四月癸亥、大宰管内諸國、疫瘡時行、百姓多死、詔奉幣於部内諸社以祈禱焉、又賑恤貧疫之家、并給湯藥療之、

四月十九日、大宰府管内に疫瘡流行し、死する者多きを以て、部内の諸社に奉幣し、賑恤を行ふ

〔續日本紀〕

十二
聖武天皇

天平九年八月甲寅、詔曰、朕君臨宇内稍歷多年、而風化尙擁、黎庶未安、通且忘寐、憂勞在茲、又自春已來災氣遽發、天下百姓死亡實多、百官人等闕卒不少、良由朕之不德致此災殃、仰天慚惶、不敢寧所、故可優復百姓使得存濟、免天下今年租賦及百姓宿負公私

八月十三日、詔して諸國の驗有る神の、未だ幣帛に預らざるものを、悉く供幣の例に入る

稻、公稻限八年以前、私稻七年以前、其在諸國能起風雨爲國家有驗神未預幣帛者、悉入供幣之例、給大宮主御巫、坐摩御巫、生嶋御巫及諸神祝部等爵、

十一月三日、使を遣し、畿内七道に諸神社を造らしむ

〔續日本紀〕

十一
聖武天皇

天平九年十一月癸酉、遣使于畿内及七道、令造諸神社、

是歳、豊後國正税帳に遣新羅使料の名見ゆ

〔正倉院文書〕

正集
四十二

豊後國正税帳 字面ニ「豊後國印」アリ

〔豊目表書〕
「豊後國天平九年正税帳守外從五位下楊胡史眞身」
○正税帳ノ字面ニ「豊後國印」ニアリ、

都合壹拾玖間 不動五間 備倉三間
動用三間 穎稻納八間

大領外正七位上勳九等日下部連吉嶋

少領外從七位上勳十等日下部君大國

主帳外少初位上勳十等日下部君死

球珠郡

天平八年定正税稻穀壹萬漆仟貳佰貳拾斛陸斗捌升貳合貳夕 ○中略

甕陸口 大甕二口 中甕一口
小甕二口

醬壹拾貳斛伍斗

甕肆口 小甕

定實陸拾漆斛捌斗伍升伍合

穎稻壹拾貳萬陸仟伍佰捌束壹把玖分

天平九年（七三七）

天平九年（七三七）

一六六

糴壹仟參伯伍拾貳斛參斗漆升

酒貳拾貳斛貳斗玖升捌合

醬伍斛漆斗

酢漆斛伍斗

雜用捌伯參拾玖束漆把穀卅九斛六斗
類稻四百卅三束七把

酒肆斗玖升陸合

依五月十九日 恩勅、賑給高年并鰥寡之徒合玖拾玖人、振量米籴稻穀參拾玖斛陸斗、人別四斗

國司巡行部內合 壹拾肆度、惣單壹伯壹拾捌人、上參拾捌人目以上廿五人
史生十三人從捌拾人、食稻參

拾玖束貳把上人別四把
從人別三把酒參斗伍升肆合目以上人別一升
史生人別八合

參度正稅出舉并收納一度守一人、從三人、并四人五日、
度緣一人、從二人、并三人六日、單參拾捌人、上壹拾壹人緣以上從貳拾漆人、

參度賑給貧病人并高年之徒一度守一人、從三人、一度緣一人、從二人、
史生一人、從一人、并九人並二日、單壹拾捌人、上陸人緣以上四人
史生二人從

壹拾貳人、

府使

壹度隨府使賑給貧病人守一人、從三人、史生二人、
并六人三日、單壹拾捌人、上陸人守三人、
史生三人從壹拾貳人、

紫草園

壹度蒔營紫草園守一人、從三人、
并四人二日、單捌人、上貳人守從陸人、

壹度責計帳手實史生一人、從一人、
并二人三日、單陸人、上參人史生從參人、

壹度隨府使檢按紫草園守一人、從三人、
并四人一日、單肆人、上壹人守從參人、

壹度收庸史生一人、從一人、
并二人三日、單陸人、上參人史生從參人、

壹度檢田熟不史生一人、從一人、
并二人二日、單肆人、上貳人史生從貳人、

遣新羅使料春稻

壹度堀紫草根守一人、從三人、并四人二日、單捌人、上貳人守從陸人、
壹度問伯姓消息守一人、從三人、并四人二日、單捌人、上貳人守從陸人、
往來傳使合頭參人二人三日從漆人六人三日惣單貳拾陸人頭七人、從十九人食稻捌束伍把頭四把、從三把酒陸升貳合三人別、八合

遣新羅使料春稻貳佰伍拾陸束

新釀酒壹拾斛料稻壹佰肆拾束斛別十四束、略○下

天平十年（七三八）

二月十九日、筑紫宗形神主外從五位下宗形朝臣鳥麻呂、外從五位上に昇敘せらる

天平十一年（七三九）

十月二十七日、遣唐判官平群朝臣ら、歸朝し入京す

〔續日本紀〕十三 聖武天皇 天平十一年十月丙戌、入唐使判官外從五位下平郡朝臣廣成、并渤海客等入京、

十一月三日、遣唐判官平群朝臣廣成拜朝す

蘇州より入海するも惡風に遭ひ崑崙國へ漂着

〔續日本紀〕十三 聖武天皇 天平十一年十一月辛卯、平郡朝臣廣成拜朝、初廣成、天平五年隨大使多治眞人廣成入唐、六年十月事畢却歸、四船同發從蘇州入海、惡風忽起彼此相失、廣成之船一百一十五人漂着崑崙國、有賊兵來圍遂被拘執、船人或被殺或迸散、自餘九十餘人着瘴死亡、廣成等四人僅免死得見崑崙王、仍給升糧安置惡處、至七年、有唐國欽州熟崑崙到彼、便被偷載、出來既歸唐國、逢本朝學生阿倍仲滿、便奏得入朝、請取渤海路歸朝、天子許之、給船糧發遣、十年

天平九年（七三七）—天平十一年（七三九）

三月、從登州入海、五月到渤海界、適遇其王大欽茂差使、欲聘我朝、即時同發、及渡沸海、渤海一船遇浪傾覆、大使胥要德等冊人沒死、廣成等卒遺衆到著出羽國、

十二月二十一日、平群廣成、正五位上に昇敘せらる

〔續日本紀〕^{十三} 聖武天皇 天平十一年十二月己卯、外從五位下平郡朝臣廣成授正五位上、自餘水手已上、亦各有級、正六位上禰仁傑外從五位下、

天平十二年（七四〇）
正月十三日、正六位上宗形朝臣赤麻呂、外從五位下に昇敘せらる

〔續日本紀〕^{十三} 聖武天皇 天平十二年正月庚子、天皇御中宮、授從四位下鹽燒王從四位上、无位奈良王、守部王並從四位下、^{略中}正六位上大伴宿禰三中、宗形朝臣赤麻呂、紀朝臣可比佐、大伴宿禰犬養、車持朝臣國人並外從五位下、

三月十五日、紀朝臣必登を遣新羅大使となす、四月二日、拜辭す、

〔續日本紀〕^{十三} 聖武天皇 天平十二年三月辛丑、以外從五位下紀朝臣必登爲遣新羅大使、

夏四月戊午、遣新羅使等拜辭、

九月二十一日、使船、長門國來泊を報ずるによつて、勅して物資を長門國に留置す、十月十五日、遣新羅使紀朝臣必登ら歸朝す

九月乙巳、勅大將軍大野朝臣東人等曰、得奏狀、知遣新羅使船來泊長門國、其船上物者便藏當國、使中有人可採用者、將軍宜任用之、

十月戊辰、遣新羅國使外從五位下紀朝臣必登等還歸、

十一月二十一日、宗形朝臣赤麻呂、外從五位上に昇敘せらる

〔續日本紀〕^{十三} 聖武天皇 天平十二年十一月甲辰、詔陪從文武官、并騎兵及子弟等、賜爵人 一級、但騎兵父官者、雖不在陪從、賜爵二級、^{略中}外從五位下菅生朝臣古麻呂、紀朝臣鹿人、宗形朝

臣赤麻呂、引田朝臣蟲麻呂、物部依羅朝臣人會、高麥太、大藏忌寸廣足、倭武助、村國連子蟲並外從五位上、

天平十三年（七四一）
正月十一日、伊勢大神宮及び七道諸社に奉幣して、恭仁京遷都を告げ給ふ

〔續日本紀〕^{十三} 天平十三年正月癸巳、遣使於伊勢大神宮及七道諸社、奉幣以告遷新京之狀也、
（恭仁京）

是歲、藤原廣嗣の靈威現るるにより、吉備眞備、宗像郡に下向し、宗像社より圓座御幣を受け、怨心を和らげしと傳ふ

〔松浦廟宮先祖次第本緣起〕

○上次還來松浦橘浦、彼御忌日、十月十五日也、其遺體三箇日、懸虛流電、鎮落之所、今鏡宮也、抑廟靈非愚、只

依朝祈神冥愍趣也、何因名稱鏡宮、（電歟）雷光照耀、夜之如晝、如此之間、勅使頓滅、二三人、洛下

外鏡、奉見其影、奉聞其名、醉氣迷神、死亡甚滋、臣下公卿、妖死又多、諸卿朝議、眞吉備朝

臣外、誰人奉祈鎮哉、槐林同門學館契深、況又祭祀祈鎮、其能尤勝者、以眞吉備朝臣、所被擇

遣也、奉宣旨以後、令修降伏邪惡之法、途中每宿、勤仕河臨解除之祓、又從筑前國宗像郡、以

圓座四枚宛著手足、御幣負背、匍匐參來、高聲唱中、一日爲師、終身爲父、一字千金、二世恩

重、依聞此唱、忿心急和影、談存生沒後之事等、不敢致害、兼所思計眞吉備勸使下也、我心平和也云々而問道鏡僧正、崛

請有驗名僧、登大和國高山、一向勤修北斗七星之法、於殿上宮中所々、令修調伏之法、又依託

宣、以右近同立檜木、造立同身六尺彌勒佛像一體、又書寫金泥法華經一部、託宣云、以雷電檜木、仍以彼引導佛可被造云々

件本令乃以二十口僧爲使、奉擔伴佛經、其料夫六十人也、於斯勅使眞吉備朝臣以天平十七年、造

立廟殿二字、奉令鎮坐兩所廟、以即建立神宮知識無怨寺、奉安置佛經、以彼廿口僧、定置祈願

圓座四枚、手足につけ御幣を背負ふ

天平十二年（七四〇）—天平十三年（七四一）

天平十四年（七四二）—天平十七年（七四五）

一七〇

住寺之僧、以持夫六十人、分置宮寺雜掌人、御幕寺三十人、寺家雜役三十人、至于彼遠忌日者、晝則披存時持佛法華經、講說一乘妙義、夜傳菩薩三聚淨戒、被加行府御誦經、

天平十四年（七四二・景德元年・天寶元年）

〔三國史記〕新羅本紀 九 元年冬十月、日本國使至、不納、

十月、日本國使新羅に至るも納めず
是歲、日本國使入唐す

〔新唐書〕二〇二 文藝傳 蕭穎士傳 天寶初、（七四二）倭國遣使入朝、

○遣使のこと詳らかならざるも姑くこゝに掲ぐ、

天平十七年（七四五）

正月七日、外從五位上宗形朝臣赤麻呂、外正五位上に昇敘せらる

〔續日本紀〕十六 聖武天皇 天平十七年春正月乙丑、天皇御大安殿、宴五位已上、詔授從四位上大伴宿禰牛養從三位、略外從五位上宗形朝臣赤麻呂外正五位上、略中茨田宿禰弓束並外從五位下、宴

訖賜祿有差、百官主典已上、於朝堂賜饗、祿亦有差、

五月八日、諸國の神社に奉幣して雨を祈る

〔續日本紀〕十六 聖武天皇 天平十七年五月乙丑、略中自四月不雨、不得種藝、因以奉幣諸國神社祈雨焉、

六月十四日、筑前國宗形郡大領外從八位上宗形朝臣興呂志、外從五位下に昇敘せらる

〔續日本紀〕十六 聖武天皇 天平十七年六月庚子、筑前國宗形郡大領外從八位上宗形朝臣興呂志授外從五位下、

十一月十日、經師等調度充帳に大唐使の名見ゆ

〔正倉院文書〕續々修 四十四帙十

十七年十一月十日所請物

大設若料 麻被五條 彈子室日三百二十差羽二羽 十三日麻被三條

橡淨衣六領一領蘇比色也一領四領返上訖

阿刀息人給一領者山 机廿八前金塗

代野中借也 長席三枚

由可一口

折薦薑七十八枚

研

十八年正月十一日請凡紙百五十張宮一切經式等料

（紙繼目）

天平十七年十二月二日新參入經師小長谷眞弓文忌寸公麻呂二人各給淨衣一具給袴橡（橡下同ジ）單衣抹袵湯帳袵及筆墨直

錢一人各百十文一筆每六十文一墨每五十文

又古來小僧 吳原生人 忍坂成萬呂 山部花 忍海新次○中略

十八日川村福物彌勒經三卷用紙廿四卷別八枚寫忍海廣次也、十九日優婆塞司佐伯若子紙百六十張爲粧潢、

即秦小廣也、同日參入舍人大伴連蓑麻呂也、廿日借充麻被二條一條者充丹比道成廿五日皆返上、廿六日返上鬼室

子東人麻被一條也、錦部東人返上筆二管墨半延也、式一枚下纏一丸也、

大唐使を召す

〔異筆〕「天平十八年正月七日召大唐使已訖也、」

＊〔懷風藻〕 從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂、四首、

天平年中、石上朝臣乙麻呂入唐大使を拜すも遂に往かず

石上中納言者、左大臣第三子也、地望清華、人才穎秀、雍容間雅、甚善風儀、雖勗志典墳、亦頗愛篇翰、嘗有朝譚、飄寓南荒、臨淵吟澤、寫心文藻、遂有銜悲藻兩卷、今傳於世、天平年中、

天平十七年（七四五）

詔簡入唐使、元來此舉難得其人、時選朝堂、無出公右、遂拜大使、衆僉悅服、爲時所推、皆此類也、然遂不往、其後授從三位中納言、自登台位、風采日新、芳猷雖遠、遺列蕩然、時年若干、
○遣唐大使拜任の年月未詳なれど、姑くこゝに掲ぐ、

天平十九年（七四七）
七月七日、名山に奉幣し、諸社に雨を祈る

〔續日本紀〕^{十七} 聖武天皇 天平十九年秋七月辛巳、詔曰、自去六月、京師亢旱、由是、奉幣帛名山祈雨諸社、至誠無驗、苗稼焦凋、此蓋朕之政教不德於民乎、宜免左右京今年田租、

天平勝寶元年（七四九）
二月二十二日、陸奥國より始めて黄金を貢するにより、畿内七道の諸社に奉幣して、之を告げ給ふ

〔續日本紀〕^{十七} 聖武天皇 天平勝寶元年二月丁巳、陸奥國始貢黄金、於是、奉幣以告畿内七道諸社、

天平勝寶二年（七五〇）
八月二十八日、造東大寺司解に宗形船依の名見ゆ

〔正倉院文書〕 丹裏古文書

略○上

（右裏） ○コノ一通、本文抹殺ニカ、ル、

刑部臣白萬呂^{日廿} 宗形船依^{日廿}

大膳職膳部穴人國足^{日卅} 位子柿本船長^{日廿八}

白鳥斐他人^{日廿九} 雜使高善君足^{日十二} 土師宿禰國足^{日廿七}

池上眞人廣成^{日廿四} 漆部廣直^日 古頼比蟲萬呂^{日十七}

高吉人^{日十五} 額田吉國^{日廿六} 日置部臣船守^{日卅}

日置部君鯛萬呂^{日卅} 晉太郎東人^{日卅} 輕部田萬呂^{日廿五}

略

略

略

九月二十四日、藤原朝臣清河を遣唐大使に、大伴宿禰古麻呂を遣唐副使に任ず

天平勝寶三年(七五一)
二月十七日、遣唐使雜色人百十三人に位を授く

四月四日、伊勢大神宮・畿内七道の諸社に奉幣して、遣唐使の平安を祈らせ給ふ

十一月七日、吉備朝臣眞備を遣唐副使となす

藤原清河

幡磨直子蟲日廿

沙宅行金日廿五

笏原部眞須萬呂日十九

三間名久須萬呂日十九

以前、官人舍人并諸内人等、八月中上日如前、以解、

天平勝寶二年八月廿八日史生葛野

(藤原)
「知事若倭朝臣」判官巨萬朝臣「大山」

〔續日本紀〕十八
孝謙天皇 天平勝寶二年九月己酉、任遣唐使、以從四位下藤原朝臣清河爲大使、從五位下大伴宿禰古麻呂爲副使、判官主典各四人、

〔續日本紀〕十八
孝謙天皇 天平勝寶三年二月庚午、遣唐使雜色人一百一十三人、敍位有差、

〔續日本紀〕十八
孝謙天皇 天平勝寶三年夏四月丙辰、遣參議左中辨從四位上石川朝臣年足等、奉幣帛於伊勢太神宮、又遣使奉幣帛於畿内七道諸社、爲令遣唐使等平安也、

〔續日本紀〕十八
孝謙天皇 天平勝寶三年十一月丙戌、以從四位上吉備朝臣眞備爲入唐副使、

*〔日本紀略〕桓武
天皇 延曆廿二年三月丁巳、(六日)
詔曰入唐大使贈從二位藤原朝臣河清、銜命先朝修聘

唐國、既而歸舳迷津漂蕩、物故於他鄉、可贈正二位、河清、贈太政大臣房前之第四子也、本名

天平勝寶二年(七五〇) — 天平勝寶三年(七五一)

天平勝寶三年（七五一）

一七四

天平勝寶四年入唐、天平寶字三年、朝衡らと歸途につくも安南に漂泊す

清河、唐改爲河清、天平勝寶四年、以參議民部卿爲聘唐大使、天寶十二載與留學生朝衡同舟歸朝、海路逢風漂泊安南、天平寶字三年、遣散位助外從五位下高元度等於唐國迎河清、唐朝亂故、元度等久不得朝見、勅云、河清是本國貴族、朕所鍾愛、故且留之、不許放還、待國家寧定、差使發遣、元度等經年不歸、本朝爲怪、宜取南路早歸命、於是河清悲傷流涕、遂以大曆五年正月薨、時年七十三、贈潞洲大都督、

吉備眞備

靈龜二年入唐留學、天平七年歸朝す、天平勝寶四年、入唐副使として入唐す

※〔續日本紀〕^{三十三} 寶龜六年十月壬戌、前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備薨、右衛士少尉^{光仁天皇}

下道朝臣國勝之子也、靈龜二年、年廿二、從使入唐、留學受業、研覽經史、該涉衆藝、我朝學生播名唐國者、唯大臣及朝衡二人而已、天平七年歸朝、授正六位下、拜大學助、高野天皇師之、受禮記及漢書、恩寵甚渥、賜姓吉備朝臣、累遷、七歲中、至從四位上右京大夫兼右衛士督、十一年、式部少輔從五位下藤原朝臣廣嗣、與玄昉法師有隙、出爲大宰少貳、到任即起兵反、以討玄昉及眞備爲名、雖兵敗伏誅、逆魂未息、勝寶二年左降筑前守、俄遷肥前守、勝寶四年爲入唐副使、廻日授正四位下、拜大宰大貳、建議創作筑前國怡土城、寶字七年、功夫略畢、遷造東大寺長官、八年仲滿謀反、大臣計其必走、分兵遮之、指麾部分甚有籌略、賊遂陷謀中、旬日悉平、以功授從三位勳二等、爲參議中衛大將、神護二年、任中納言、俄轉大納言、拜右大臣、授從二位、先是、大學釋奠、其儀未備、大臣依稽禮典、器物始修、禮容可觀、又大藏省雙倉被燒、大臣私更營構、于今存焉、寶龜元年、上啓致仕、優詔不許、唯罷中衛大將、二年累抗啓乞骸骨、許之、薨時年八十三、遣使弔賻之、

天平勝寶四年（七五二）
正月二十五日、山口忌寸人麻呂を
遣新羅使となす

三月三日、遣唐使ら拜朝す、尋で
閏三月九日、遣唐副使以上を内裏
に召し、大使藤原朝臣清河に節刀
を授け、各昇叙す

〔續日本紀〕^{十八} 孝謙天皇 天平勝寶四年正月癸卯、以正七位下山口忌寸人麻呂爲遣新羅使、

〔續日本紀〕^{十八} 孝謙天皇 天平勝寶四年三月庚辰、遣唐使等拜朝、

閏三月丙辰、召遣唐使副使已上於内裏、詔給節刀、仍授大使從四位上藤原朝臣清河正四位下、
副使從五位上大伴宿禰古麻呂從四位上、留學生无位藤原朝臣刷雄從五位下、

※〔帝王編年記〕^{十一} 聖武天皇 今年、弓削道鏡法師初參内、行如意輪法、遣唐大使參議從四位上藤原

遣唐使數惣六百四人

朝臣清河、<sup>淡海公孫、贈太政大臣
房前三男、於彼朝薨</sup>副使從四位上大伴宿禰古麿、吉備朝臣眞吉備、惣使六百四人、乗船
四艘、

光明皇后、大使藤原清河に
御歌を賜ふ

※〔萬葉集〕 十九 春日祭神之日、^{（光明皇后）}藤原太后御作歌一首、即賜入唐大使藤原朝臣清河

4240 大船爾 眞梶繁貫 此吾子乎 韓國邊遣 伊波敏神多智

大船に眞楫繁貫きこの吾子を韓國へ遣る齋へ神たち

大使藤原朝臣清河歌一首

4241 春日野爾 伊都久三諸乃 梅花 榮而在待 還來麻泥

春日野に齋く三諸の梅の花榮えてあり待て還り來るまで

大納言藤原家餞之入唐使等宴日歌一首即主人卿作之

天平勝寶四年（七五二）

天平勝寶四年（七五二）

一七六

4242 天雲乃 去還奈牟 毛能由惠爾 念會吾爲流 別悲美

天雲の去き還りなむもの故に思ひそわがする別れ悲しみ

民部少輔多治真人土作歌一首

4243 住吉爾 伊都久祝之 神言等 行得毛來等毛 舶波早家无

住吉に齋く祝が神言と行くとも來とも船は早けむ

大使清河の歌

大使藤原朝臣清河歌一首

4244 荒玉之 年緒長 吾念有 兒等爾可戀 月近附奴

あらたまの年の緒長くわが思へる兒らに戀ふべき月近づきぬ○中略

阿倍朝臣老人遣唐時、奉母悲別歌一首

4247 天雲能 曾伎敝能伎波美 吾念有 伎美爾將別 日近成奴

天雲の遠隔の極わが思へる君に別れむ日近くなりぬ

右件歌者、傳誦之人、越中大目高安倉人種麿是也、但年月次者隨聞之時載於此焉、

○阿倍老人の傳、詳らかならず、姑くこゝに掲ぐ、

※〔萬葉集〕 十九 （天平勝寶四年） 閏三月、於衛門督大伴古慈悲宿禰家、餞之入唐副使同胡麿宿禰等歌二首

4262 韓國爾 由伎多良波之氏 可敝里許牟 麻須良多家乎爾 美伎多旦麻都流

韓國に行き足はして歸り來む大夫建男に御酒たてまつる

右一首、多治比真人鷹主壽副使大伴胡麿宿禰也、

4263 梳毛見自 屋中毛波可自 久左麻久良 多婢由久伎美乎 伊波布等毛比氏作者未詳

梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて
右伴歌傳誦、大伴宿禰村上同清繼等是也、

勅從四位上高麗朝臣福信、遣於難波、賜酒肴入唐使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌
4264 虛見都 山跡乃國波 水上波 地往如久 船上波 床座如 大神乃 鎮在國會 四船 能倍奈
と良倍奈

平安 早渡來而 還事 奏日爾 相飲酒會 斯豐御酒者

大神の鎮むる國

そらみつ 大和の國は 水の上は 地行く如く 船の上は 床に坐る如 大神の 鎮むる
國そ 四の船 船の舳並べ 平安けく 早渡り來て 返言 奏さむ日に 相飲まむ酒そ
この豐御酒は

反歌一首

4265 四船 早還來等 白香着 朕裳裙爾 鎮而將待

四の船はや還り來と白香著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ
右、發遣勅使、并賜酒樂宴之日月未得詳審也、

※〔太平廣記〕二四三 李邕治生編

日本國使、海州に到着するも、刺史李邕、船中の國信物を奪ひ、船を沈む

唐江夏李邕之爲海州也、日本國使至海州、凡五百人、載國信有十船、珍貨數百萬見之、舍於館、厚給所須禁其出入、夜中盡取所載而沈其船、旣明、諷所館人白云、昨夜海潮大至、日本國船盡漂失、不知所在、於是以其事奏之、勅下、邕令造船十艘善水者五百人、送日本使至其國、

天平勝寶四年（七五二）

天平勝寶四年（七五二）

一七八

邕既具舟及水工、使者未發、水工辭邕、邕曰、日本路遙海中風浪、安能却返、前路任汝便宜從事、送人喜行數日、知其無備、夜盡殺之遂歸、邕又好客、養亡命數百人、所在攻劫、事露則殺之、後竟不得死且坐其酷濫也、出紀簡

○李邕、天寶中海州の太守たり（新唐書二〇二列傳六、蓋し、日本國使は藤原清河ならん、

行賀入唐留學す、時に年二十五、住唐三十一年

＊〔扶桑略記〕

抄二
桓武天皇

（八〇三）

延暦廿二年癸未二月己未日、大僧都行賀遷化、春秋七十有五也、俗姓上

毛野公、大和國廣瀨郡人也、生年十五出家、廿受具足戒、廿五被宛入唐留學、學唯識法花兩宗、住唐卅一年、歸來之日、歷試身才、東大寺明一難問宗義、頗有所塞、明一卽罵云、費糧兩國、學植膚淺、何違朝寄、不實歸乎、法師大愧、涕泣滂沱、久在他鄉、頻忘言語、長途一躓、豈妨千里之行、深林枯枝、何薄萬畝之影、有法花經疏弘贊略、唯識僉議等冊餘卷、是則行賀法師之筆削也、又寫得持來聖教要文五百餘卷、聖朝深喜弘益、授以僧統、詔付門徒卅人、令傳其業矣、

膳大丘遣唐使に隨ひ入唐留學す

＊〔續日本紀〕

二十九
稱徳天皇

（七六〇）

（三十日）

神護景雲二年七月辛丑、大學助教正六位上膳臣大丘言、大丘天平勝寶四

年、隨使入唐、問先聖之遺風、覽膠庠之餘烈、國子監有兩門、題曰文宣王廟、時有國子學生程賢告大丘曰、今主上大崇儒範、追改爲王、鳳德之徵、于今至矣、然准舊典、猶稱前號、誠恐乖崇德之情、失致敬之理、大丘庸闇、聞斯行諸、敢陳管見以請明斷、勅號文宣王、

十一月十七日、僧法榮、優婆塞と

〔正倉院文書〕

續修
十八

して宗形部岡足を貢進す

僧法榮解 貢優婆塞事

宗形部岡足年十七

荒城郷戸主宗形朝臣人君

右人、筑前國宗像郡荒城郷戸主宗形朝臣人君戸口

天平勝寶四年十一月十七日僧「法榮」

「四年十二月十七

五年正月廿七二月廿七三月廿九四月廿五五月廿七六月廿五七月廿三」

天平勝寶五年（七五三・天寶十二載・景德十二年）

二月九日、小野朝臣田守を遣新羅大使に任ず
三月、倭國唐に入貢す

〔續日本紀〕

十九 孝謙天皇

天平勝寶五年二月辛巳、以從五位下小野朝臣田守爲遣新羅大使、

〔舊唐書〕

一九九 東夷傳 倭國傳

（七五三）
天寶十二年、又遣使貢、

＊〔冊府元龜〕

九七一 外臣部 朝貢四

天寶十二載三月、○中日本等國渤海並遣使賀正、

八月、日本國使新羅に至る

〔三國史記〕

新羅本紀 九 景德王

（七五三）
十二年秋八月、日本國使至、慢而無禮、王不見之、乃廻、

＊〔續日本紀〕

二十三 淳仁天皇

（十六日）
天平寶字四年九月癸卯、新羅國遣級浪金貞卷朝貢、使陸奥按察使從四位

下藤原惠美朝臣朝獯等問其來朝之由、○中新羅既無言信、又闕禮義、棄本行末、我國所賤、又

王子泰廉入朝之日、申云、每事遵古述、將供奉、其後遣小野田守時、彼國闕禮、故田守不行使

禮を闕く
天平勝寶四年（七五二）—天平勝寶五年（七五三）

事而還歸、王子尙猶无信、况復輕使、豈足爲據貞卷曰、田守來日、貞卷出爲外官、亦復賤人不知細旨、於是、告貞卷曰、使人輕微不足賓待、宜從此却廻、報汝本國、○下略

天平勝寶六年（七五四）

正月十六日、遣唐副使大伴古麻呂ら、唐僧鑑眞を随へ歸朝す、尋で十七日、大宰府、入唐副使吉備眞備の船益久嶋に來着の由を奏す

〔續日本紀〕^{十九} 孝謙天皇 天平勝寶六年正月壬子、^{十六日}○中 入唐副使從四位上大伴宿禰古麻呂來歸、唐僧

鑑眞、法進等八人隨而歸朝、

正月癸丑、^{十七日}大宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船、以去年十二月七日來着益久嶋、自是

之後、自益久嶋進發、漂蕩着紀伊國牟漏埤、

正月三十日、遣唐副使大伴古麻呂、唐朝正月朝賀の狀を奏す

正月丙寅、^{三十日}副使大伴宿禰古麻呂自唐國至、古麻呂奏曰、大唐天寶十二載、歲在癸巳正月朔癸卯、

百官諸蕃朝賀、天子於蓬萊宮含元殿受朝、是日、以我次西畔第二吐蕃下、以新羅使、次東畔第

一大食國上、古麻呂論曰、自古至今、新羅之朝貢大日本國久矣、而今列東畔上、我反在其下、

日本國使の席、新羅使の下位にあるを見て、古麻呂その不合理を論じ、新羅との席を改めさす

義不合得、時將軍吳懷實見知古麻呂不肯色、即引新羅使、次西畔第二吐蕃下、以日本使次東畔

第一大食國上、

※〔勝寶感神聖武皇帝菩薩傳〕^{○上} 又發使入唐、使至長安、拜朝不拂塵、唐主開元天地大寶聖武

朝衡に命じ、日本使に府庫の一切を披見せしむ

應道皇帝云、彼國有賢主君、觀其使臣趨揖有異、即加號日本爲有義禮儀君子國、復元日拜朝賀

正、勅命日本使可於新羅使之上、又勅命朝衡領日本使、於府庫一切處遍有、至彼披三教殿、初

禮君主教殿、御座如常莊飾、九經三史、架別積載厨龕、次至御披老君之教堂、閣少高顯、御座

莊嚴少勝、厨別龕函盈滿四子太玄、後至御披釋典殿宇、顯教嚴麗殊絕、龕函皆以雜寶廁填、檀

大使清河以下に官職を授く

沈異香莊校御座、高廣倍勝於前、以雜寶而爲燭臺、々下有巨鼈、戴以蓬萊山、上列仙宮靈宇戴寶樹地、悉々紅梨寶莊飾樹花中、一々花中各有一寶珠、地皆砌以文玉、其殿諸雜木盡鉗沈香、御座及案經架寶莊飾盡諸工巧、皇帝又勅、摸取有義禮儀君子使臣大使副使影、於蕃藏中以記送遣、大使藤原清河、拜特進、副使大伴宿禰胡萬、拜銀青光祿大夫光祿卿、副使吉備朝臣眞備、拜銀青光祿大夫祕書監及衛尉卿、朝衡等致設也、開元皇帝御製詩、送日本使五言日下非殊俗、天中嘉會朝、朝餘懷義遠、矜爾畏途遙、漲海寬秋月、歸帆駛夕颺、因驚彼君子、王化遠昭々、特差鴻臚大卿蔣挑挽送至揚洲看取、發別牒淮南、勅處致使魏方進、如法供給送遣、其大使私請揚洲龍興寺鑒眞和上等渡海、將傳戒律、自勝寶六年二月四日至聖朝、勅安置東大寺、

※〔帝王編年記〕

十一
聖武天皇

(七五三)
天平勝寶五年癸巳、

副使大伴宿禰古麿、竊請揚州龍興寺和上鑒眞、大唐修

律師

門流 同船而歸、已上出天長二年八月官符

是本朝戒律之始也、

※〔扶桑略記〕

抄二
孝謙天皇

天平勝寶六年甲午正月十六日壬子、

遣唐副使從四位上大伴宿禰胡麿奏達、

鑒眞和上到竹志大宰府、二月一日到于難波、

※〔遣教經跋語〕

唐清信弟子陳延昌莊嚴此大乘經典、附日

(大伴古麻呂)
本使國子監大學朋古滿、於彼流傳、

(七三四)
開元廿二年二月八日從京發記、

大乘經典を大伴古麻呂に附す

天平勝寶六年(七五四)

古麻呂、ひそかに鑑眞を自船に納め出航す

第一第二船、沖繩島に到る

十二月六日、第一船座礁し動かず、第二船は益救を経て薩摩國秋妻屋浦に著く

※〔唐大和上東征傳〕（天平勝寶五年）十一月十日丁未夜、大伴副使竊招和上及衆僧、納己舟、惣不令知、十三日、

普照師從越州餘姚郡來、乘吉備副使舟、十五日壬子、四舟同發、有一雉、飛第一舟前、仍下訂

留、十六日發、廿一日戊午、第一第二兩舟、同到阿兒奈波嶋、（沖繩）々在多禰嶋南西、第三舟昨夜已

泊同處、十二月六日南風起、第一舟著石不動、第二舟發向多禰去、七日至益救嶋、十八日自益

救發、十九日風雨大發、不知四方、午時、浪上見山頂、廿日乙酉午時、第二舟著薩摩國阿多郡

秋妻屋浦、廿六日辛卯、延慶師引和上入大宰府、天平勝寶六年甲午正月十二日丁未、副使從四

位上大伴宿禰胡滿麻呂奏、大和上到竺志大宰府、二月一日到難波、唐僧崇道等迎慰供養、

※〔續日本紀〕二十四 淳仁天皇 天平寶字七年五月戊申、（七六三） 癸卯朔（六日）大和上鑒眞物化、和上者楊州龍興寺之大德也、

天寶二載、榮叡・普照、和

上に東遊を請ふ

楊州より入海するも難破し榮叡を失ひ、和上、悲泣し失明す

博涉經論、尤精戒律、江淮之間獨爲化主、天寶二載、留學僧榮叡（音照）業行等白和上曰、佛法東流至

於本國、雖有其教無人傳授、幸願、和上東遊興化、辭旨懇至、諮請不息、乃於楊州買船入海、

而中途風漂、船被打破、和上一心念佛、人皆賴之免死、至於七載更復渡海、亦遭風浪漂着日南、

時榮叡物故、和上悲泣失明、勝寶四年、本國使適聘于唐、業行乃說以宿心、遂與弟子廿四人、

寄乘副使大伴宿禰古麻呂船歸朝、於東大寺安置供養、于時有勅、校正一切經論、往々誤字諸本

皆同、莫之能正、和上諳誦多下雌黃、又以諸藥物令名眞僞、和上一々以鼻別之、一無錯失、聖

武皇帝師之受戒焉、及皇太后不忿、所進醫藥有驗、授位大僧正、俄以綱務煩雜、改授大和上之

號、施以備前國水田一百町、又施新田部親王之舊宅以爲戒院、今招提寺是也、和上預記終日、

至期端坐、怡然遷化、時年七十有七、

＊〔扶桑略記〕

孝謙天皇

天平勝寶六年正月丙寅日、

(略)

入唐副使從四位上大伴宿禰古鷹自唐國至、竊

請楊洲龍興寺和尚鑒眞僧法進等八人、并率其弟子廿四人、同船歸朝、上沙門思託所撰延曆僧錄云、

鑒眞和尚持律弟子五人將來、傳弘戒律、上鑒眞和尚、大唐開元廿一年、時歲四十六、淮南江左

淨持戒律者、唯大和上獨秀无倫、道俗歸心、仰爲受戒大法師、凡前後講大律并疏冊遍、講律鈔

七十遍、講輕重儀十遍、講羯磨疏十遍、具修三學、博達五乘、外秉威儀、內求奧理、講授之閑、

造立寺舍、供養十方衆僧、造佛菩薩像、其數無量、縫衲袈裟千領、布袈裟二千餘領、供送五臺山

僧、設無遮大會、開悲田而救濟貧病、設敬田而供養三寶、寫一切經三部各一萬一千卷、前後度

人授戒、略計過四萬有餘、唐天寶二載癸未、留學僧榮叡、業行等白鑒眞和尚言、佛法東流至日

本國、雖有其教、无人傳授、幸願和上東遊興化、辭旨懇至、諮請不息、乃於楊洲買船入海、而

中途風漂、船被打破、和上一心念佛、人皆賴之免死、至于天寶七載戊子、更復渡海、亦遭風浪、

漂着日南、時榮叡物故、和上悲泣失明、至同天寶九載庚寅、和上到於明州阿育王寺、時和尚執

普照法師之手、悲泣而曰、爲傳戒律發願、眼光暗昧、爰有胡人言、我能治目、遂加療治、眼全

失明矣、至唐天寶十二載癸巳十月五日壬申、日本國使大使藤原朝臣清河、副使大伴宿禰胡萬呂、

副使吉備朝臣眞備等來、至延光寺、白和上言、弟子早知和上五遍渡海向日本國將欲傳教、今親

奉顏色、頂禮歡喜、弟子等先錄和上尊名并持律弟子五僧、已奏聞主上、向日本傳戒、主上要令

將道士去、日本君王先不崇道士法、便奏留春桃原等四人令住學道士法、時楊州道俗皆云、和上

天寶二載、出帆するも風浪
にあひ遭難す

天寶七載再び出帆するも、
また日南に漂着す

天寶十二載十月、日本國使
藤原清河ら和上に東遊を請
ふ

天寶十二載十月二十九日、
和上、江頭より乗船す

十一月十日、副使古麻呂、
ひそかに和上らを己の船に
納む

欲向日本國、由是龍興寺防護甚固、无由進發、時有仁幹禪師從務洲來、密知和上欲出、備具船
舫於江頭相待、和上於天寶十二載十月廿九日戌時、從龍興寺出、至江頭乘船下、時有廿四沙彌、
悲泣趁來、白和上言、大和上今向海東、重覲無由、我今者最後、請預結緣、乃於江邊爲廿四沙
彌授戒訖、乘船下至蘇洲黃泗浦、相隨弟子楊州白塔寺僧法進、泉州超功寺僧曇靜、臺州開元寺
僧思託、楊州興雲寺僧義靜、衢州靈耀寺僧法載、寶州開元寺僧法成等一十四人、乘船向日本國、
亦被風漂、遂着唐界、由是衆僧惣下船留、十一月十日丁未夜、大伴副使竊招和上及衆僧、納置
己舟、總不令知、傳天平勝寶六年甲午正月十六日壬子遣唐副使從四位上大伴宿禰胡麿奏達、鑒
眞和上到竹志太宰府、二月一日到于難波、唐僧崇道等迎慰供養、四日入京、勅遣正四位下安宿
王於羅城門外迎拜慰勞、引入東大寺、安置供養、和上持來天台止觀等文書十餘部、二百九十餘
卷、菩提子三斗、王右將軍眞跡行書一帖、天竺朱和等雜書五十帖、阿育王塔樣金銅塔一基、如
來肉舍利三千粒、花嚴經八十卷、大佛名經十六卷、四分律一部六十卷、六妙門一卷、明了論一
卷、其書太多、由煩不注、香藥等多、凡和尚持度其員甚多、不能具載、已上出本傳等

＊〔類聚三代格〕二
經論并法會請僧事

太政官符

應定正月金剛明會聽衆及四天王法隆兩寺安居講師事

右太政官去延曆廿一年正月十三日下治部省符傳、（八〇二）右大臣宣、奉勅、如聞、三論法相、彼此角

爭、阿黨朋肩、欲專己宗、更相抑屈、恐有所絕、自今以後、正月齋會等、宜均請諸宗、勿聽偏阿、

鑒眞、天台法門を將來す

周知諸寺、分業競學、又案天長元年六月廿三日下同省符傳、得前越中守從五位上登美眞人藤津解僞、四天王法隆等寺者、是聖德太子所建立焉、太子生而聰叡、崇好釋教、自製法華維摩勝鬘等經疏、爲諸道俗平等開說、昔隋開皇年中有思禪師、常願言、我沒後必生東國、流傳佛法、其後有聖德太子、遣小野妹子於隋國取持經錫鉢於衡山、時人皆謂、是思禪師之應化也、夫天台宗者、元天台山智者大師受思禪師所傳之教也、去天平勝寶五年十二月、入唐副使從四位上伴宿禰胡滿竊請楊州龍興寺和上鑒眞、同船而歸、于時和上天台法門將來、今太子所製經疏等、與彼宗觸類皆同、望請、件兩箇寺安居、寺別永請天台宗僧、令講法華經并宗法門者、右大臣宣、奉勅、依請者、其正月御齋會聽衆僧二人、并兩箇寺安居講師僧二人、每年錄名、申送別當、更將牒知僧綱、

天長二年二月八日

三月十七日、大宰府、入唐第一船の消息を奏す

〔續日本紀〕^{十九} 天平勝寶六年三月丙午、遣使奉唐國信物於山科陵、
孝謙天皇

癸丑、

大宰府言、遣使尋訪入唐第一船、其消息云、第一船舉帆指奄美嶋發去、未知其着處、

四月七日、入唐廻使大伴宿禰古麻呂・吉備朝臣眞備らを昇敍す、尋で十八日、大宰府、入唐第四船の薩摩國石籬浦に來泊せる由を注進す

〔續日本紀〕^{十九} 天平勝寶六年四月壬申、入唐廻使從四位上大伴宿禰古麻呂、吉備朝臣眞備並正四位下、判官正六位上大伴宿禰御笠、巨萬朝臣大山並從五位下、自餘使下二百廿二人亦各有差、

四月癸未、^{十八日}大宰府言、入唐第四船判官正六位上布勢朝臣人主等來泊薩摩國石籬浦、

天平勝寶六年（七五四）

天平勝寶六年（七五四）—天平寶字二年（七五八）

七月十三日、入唐判官布勢朝臣人主を昇敘す

〔續日本紀〕^{十九} 孝謙天皇 天平勝寶六年七月丙午、授入唐判官正六位上布勢朝臣人主從五位下、以

從五位上中臣朝臣清麻呂爲左中辨、○下略

十一月十一日、大唐學問生船連夫子に外從五位下を授くるも、受けず

〔續日本紀〕^{十九} 孝謙天皇 天平勝寶六年十一月辛未、大唐學問生无位船連夫子授外從五位下、辭而不受、以出家故也、

※〔冊府元龜〕^{九七一} 外臣部 朝貢四 天寶十四載六月、日本國七月黑衣并遣使貢獻、

○遣使のこと詳らかならず、姑くこゝに掲ぐ、

天平寶字二年（七五八）
三月十六日、遣唐使船播磨・速鳥に、從五位下を賜ふ

〔續日本紀〕^{二十} 孝謙天皇 天平寶字二年三月丁亥、船名播磨、速鳥並敍從五位下、其冠者、各以錦造、入唐使所乘者也、

〔正倉院文書〕^{續々修} 四十三帙六

略○上

六月二十一日、寫千卷經所錢并紙衣等納帳に宗形若萬呂の名見ゆ

案主建部廣足

佐伯「里足」

二日下錢四百九文^{百十一文書依二百卅果直} 十文^{百廿文筆三管直} 五文^{百五十文墨五庭直} 茶七把直

又下錢五百六十文 索餅三百二葉直

主典安都宿禰

案主建部廣足

佐伯「里足」
略○中

又下紙五十張 裏料充付宗形若萬呂綾部忍國

主典安都宿禰

案主建部廣足

佐伯「里足」
略○下

○題籤及び裏書に天平寶字二年六月廿一日の日付見ゆるにより、便宜こゝに掲ぐ、
○以下宗形若萬呂の史料一括こゝに掲ぐ、

※〔正倉院文書〕 續々修
八帙二

(題籤)

(表)「裝潢紙上帳」 (裏)「一千四百卷經」

天平寶字二年七月八日

天平寶字二年七月

若穴人百村

繼○中
略

天平寶字二年(七五八)

千手千眼并新絹索藥師經裝
潢紙上帳

天平寶字二年（七五八）

端切

一八八

宗形若萬呂

打

※〔正倉院文書〕續々修二十六帙八

千手千眼并新絹索藥師經校帳

天平寶字二年七月八日

合校生

宗形若萬呂

上馬廿 八月十五日百廿八十七日百卅四廿日百卅四廿一日百六十七廿四日二百廿四廿六日四百九十六廿

八日二百五十六又廿六廿九日三百五十二卅日八十一（朱）「已上二千十八」九月一日九十六又十三（朱）「合二千一百

冊七」又冊八（朱）○下略

※〔正倉院文書〕小杉本繪佛外三

東寺寫經所解

東寺寫經所解 申請經師等布施物事

合奉寫經貳仟肆佰卷

金剛般若經壹仟卷

千手千眼經壹仟卷

新絹索經壹拾部貳伯捌拾卷

藥師經壹伯貳拾卷

用紙參萬伍仟捌伯貳拾張

校紙漆萬壹仟陸伯肆拾張依二校所乘

裝潢紙參萬漆仟貳拾張○中略

從八位上神門諸上 寫紙二百八張 (朱)「付樣井馬廿」 布五端八尺四寸

從七位上張布特磨 寫紙三百七十張 布九端一丈五寸 「付宗形若萬呂」

從八位上萬昆神惠 寫紙三百六十八張 布九端八尺四寸

從八位將軍水通 題四百卷 寫紙四百七十四張 ○中略

裝潢八人

右大舍人上從七位能登忍人 造紙三千二百廿張 布八端一丈八尺九寸

大初位下荆嶋足 造紙四千六百七十張 布十一端二丈一尺

大初位下若穴人百村 造紙八千六百七張 布廿一端二丈一尺五寸

坤宮官舍人從八位下宗形若磨 造紙三千二百張 布八端 ○中略

以前、依坤宮官少疏從六位上池原君粟守等高丘連比良麻呂去六月十六日宣并四去七月六日宣、奉寫二千四百卷經經師等布施物所請如前、以解、

宗形若麻呂

次官從五位下高麗朝臣

天平寶字二年(七五八)

天平寶字二年九月五日主典正八位上安都宿禰

造東寺司解案

※〔正倉院文書〕續々修
十八帙三裏

略○上

〔二〕 准錢二貫四百卅六文白繩二匹別七百五十文調綿十屯別七十文
唐綿三屯別六十五文 錢五十一文

若倭部國梓 寫紙五百卅二張 布十三端一丈二尺六寸○中

張布持萬呂 寫紙三百七十張 布九端一丈五寸〔付宗形
若萬呂〕

准錢二貫四百八文白繩二匹別七百五十文調綿十屯別七十文
唐綿三屯別六十五文 錢十三文○中

宗形若萬呂

裝潢宗形若萬呂 造紙三千二百張 布八端

准錢二貫八十文白繩二匹別七百五十文
調綿八屯別七十文 錢廿文○中

能登忍人 造紙三千二百廿張 布八端二尺○中

以前、依坤宮官少疏從六位上高丘比良萬呂去六月十六日、并池原粟守等去七月四日宣、奉寫經師等布施物、所請如前、以解、

天平寶字二年九月五日主典安都宿禰（維足）

次官高麗朝臣（大山）

※〔正倉院文書〕續々修
二十七帙三

裝潢石田部島足手實

石田部嶋足解 申作用紙事

宗形若萬呂

東寺寫經所解

宗形部若麻呂

合二度 此中
（異筆下同シ）
「表紙二百五十」
端作經四百卷用紙四千八百張

都合用紙一萬二千五百五十六張
「八百六張」
「定三千二百卅九布八端」
「定二千八百布七端」

寶字二年十一月二日 略○中

〔宗刑若萬呂〕
（朱）（彩）
一千六百八十定二百 布二丈一尺

＊〔正倉院文書〕
續々修
十八帙六裏書

東寺寫經所解 申九月上日事

合壹拾壹人
二人右大舍人 七人宮舍人
二人散位

宗形部若麻呂
上日壹拾捌
夕壹拾 佐伯里足
上日貳拾玖
夕貳拾漆

山弟麻呂
上日貳拾漆
夕貳拾參 十市倭麻呂
上日壹拾
夕伍

三國廣山
上日貳拾玖
夕貳拾漆 田邊岡麻呂
上日貳拾
夕漆

岐淨人
上日貳拾
夕漆 大原國持
上日貳拾玖
夕貳拾漆

文岡主
上日參拾
夕貳拾壹 安宿主麻呂
上日壹拾漆
夕壹拾

宮門日野麻呂
上日貳拾玖
夕貳拾漆

右、起九月一日盡卅日、
（等カ）
校生并雜使□上日如件、今注狀以解、

天平寶字二年九月卅日主典安都宿禰雄足

天平寶字二年（七五八）

天平寶字二年（七五八）

＊〔正倉院文書〕續々修
四十五帙

東寺寫經所解

東寺寫經所解 申請經師等布施物事

合奉寫金剛般若經壹仟貳佰卷

用紙壹萬肆仟肆佰張

校紙貳萬捌仟捌佰張依二按

裝橫紙壹萬伍仟張六百張標紙一萬
四千四百張

題經壹仟貳佰卷

惣應賜布施布〔異筆〕「四百卅八端一丈二尺」○中略

裝潢四人

右大舍人從七位下能登忍人

造紙〔朱〕二千一百四千張
布〔朱〕五十端〔七十一文〕「二丈二尺」
〔異筆〕「未二端」

大初位下若宋人百村

造紙〔朱〕五千二百四千張
布〔朱〕三十端〔異筆〕「未三端」
〔異筆〕「未二端」

內史局裝潢无位石田嶋足

造紙〔朱〕二千八百三千張
布七端二丈一尺

〔宗刑若萬呂〔朱〕形付伊波太嶋足〕

造紙〔朱〕二百
布〔朱〕錢一百卅六文二丈一尺

散位大初位下阿刀水通

造紙四千張
布十端

〔大友路萬呂〔朱〕〕

造紙〔朱〕七百
布〔朱〕錢二百一文一端三丈二尺

以前、依坤宮官少䟽從六位上池原君粟守宣去八月十六日宣、奉寫金剛般若經一千二百卷經師等布施物、所請
如前、以解、

宗形若萬呂

天平寶字二年十一月三日主典正八位上安都宿禰〔異字〕〔遼東寺司〕

次官從五位下高麗朝臣

八月十九日、伊勢大神宮及び諸國の神社に奉幣して、淳仁天皇即位を告げ給ふ

〔續日本紀〕二十一 淳仁天皇 天平寶字二年八月戊午、遣攝津大夫從三位池田王、告齋王事、于伊勢太神宮、又遣左大舍人頭從五位下河內王、散位從八位下中臣朝臣池守、大初位上忌部宿禰人成等、奉幣帛於同太神宮、及天下諸國神社等、遣使奉幣、以皇太子即位故也、〔淳仁天皇〕

天平寶字三年（七五九）

正月三十日、迎入唐大使使に高元度を任ず、尋で二月朔日、高麗國王、前年入唐の藤原清河を、日本國使と共に迎へんことを奏す

〔續日本紀〕二十二 淳仁天皇 天平寶字三年正月丁酉、授正六位上高元度外從五位下、爲迎入唐大使使、〔三十日〕

二月戊戌朔、賜高麗王書曰、天皇敬問高麗國王、使揚承慶等遠涉滄海、來弔國憂誠表慰懃、深增酷痛、但隨時變禮、聖哲通規、從吉履新、更无餘事、兼復所貽信物、依數領之、即因還使、相酬土毛絹冊疋、美濃純卅疋、絲二百絢、綿三百屯、殊嘉爾忠、更加優、賜錦四疋、兩面二疋、纈羅四疋、白羅十疋、彩帛卅疋、白綿一百帖、物雖輕鈔、寄思良深、至宜並納、國使附來、无船駕去、仍差單使送還本蕃、便從彼鄉達於大唐、欲迎前年入唐大使藤原朝臣河清、宜知相資、餘寒未退、想王如常、遣書指不多及、

二月十六日、高麗國使揚承慶、迎入唐大使使高元度と共に歸國す

〔續日本紀〕二十二 淳仁天皇 天平寶字三年二月癸丑、揚承慶等歸蕃、高元度等亦相隨去、

六月十六日、無位宗形王、從四位下を授けらる

〔續日本紀〕二十二 淳仁天皇 天平寶字三年六月庚戌、帝御內安殿、喚諸司主典已上、詔曰、現神大八
天平寶字二年（七五八）—天平寶字三年（七五九）

天平寶字三年（七五九）—天平寶字四年（七六〇）

一九四

洲所知倭根子天皇詔旨止宣詔乎親王々臣百官人等天下公民衆聞食宣、○中略從三位船王、池田王並授三品、正四位上諱從三位、從五位下御方王、御使王、无位林王、笠王、宗形王並從四位下、從五位下河內王從五位上、正四位下紀朝臣飯麻呂、藤原朝臣眞楯並正四位上、○下略

十月十八日、迎藤原清河使判官內藏全成ら、渤海國使高南申と共に對馬に歸着す、唐の安祿山・史思明の亂により、その害を恐れるの故なり、迎入唐大使中、大使高元度ら十一人のみ唐に赴くを報ず

〔續日本紀〕二十二 天平寶字三年十月辛亥、迎藤原河清使判官內藏忌寸全成、自渤海却廻、海中遭風、漂着對馬、渤海使輔國大將軍兼將軍玄菟州刺史兼押衙官開國公高南申相隨來朝、其中臺牒曰、迎藤原河清使惣九十九人、大唐祿山先爲逆命、思明後作亂常、内外騷荒、未有平殄、即欲放還、恐被害殘、又欲勒還慮違隣意、仍放頭首高元度等十一人、往大唐迎河清、即差此使、同爲發遣、其判官全成等並放歸鄉、亦差此使、隨往、通報委曲、

天平寶字四年（七六〇）
正月五日、渤海國使高南申、在唐せる藤原清河の上表・貢物を獻ず、仍て二月二十日、在唐の大使藤原清河を文部卿となす

〔續日本紀〕二十二 天平寶字四年正月丁卯、帝臨軒、渤海國使高南申等貢方物、奏曰、國王大欽茂言、爲獻 日本朝遣唐大使特進兼祕書監藤原朝臣河清上表并恆貢物、差輔國大將軍高南申等、充使入朝、詔曰、遣唐大使藤原河清久不來歸、所鬱念也、而高麗王差南申令賁河清表文入朝、王之款誠、實有嘉焉、
二月辛亥、○中略在唐大使正四位下藤原朝臣河清爲文部卿、從五位下高圓朝臣廣成爲少輔、從五位下石川朝臣人成爲仁部少輔、○下略

三月十三日、諸國の祝部等をして

〔續日本紀〕二十二 天平寶字四年三月甲戌、詔曰、比來、（光明皇后）皇太后御體不豫、宜祭天神地祇、

皇太后の御不豫御平復を禱らしむ

諸祝部等各禱其社、欲令聖體安穩平復、是以、自太神宮禰宜内人物忌、至諸社祝部、賜爵一級、普告令知之、

天平寶字五年（七六一）

八月十二日、迎藤原河清使高元度、唐國より歸る、唐國の送使沈惟岳らを大宰府に安置す

〔續日本紀〕

二十三
淳仁天皇

天平寶字五年八月甲子、迎藤原河清使高元度等至自唐國、初元度奉使之日、取渤海道、隨賀正使揚方慶等、往於唐國、夏畢欲歸、兵仗樣、甲冑一具、代刀一口、槍一竿、矢二隻分付元度、又有内使、宣勅曰、特進祕書監藤原河清、今依使奏、欲遣歸朝、唯恐殘賊未平、道路多難、元度宜取南路先歸復命、即令中謁者謝時和押領元度等向蘇州、與刺史李岫平章、造船一隻長八丈、并差押水手官越州浦陽府折衝賞紫金魚袋沈惟岳等九人水手、越州浦陽府別將賜緣陸張什等卅人送元度等歸朝、於大宰府安置、

〔續日本紀〕

二十三
淳仁天皇

天平寶字五年冬十月辛酉、遣從五位上上毛野公廣濱、外從五位下廣田連

十月十日、上毛野公廣濱らを安藝國に遣し、遣唐使船四隻の建造を命ず、尋で二十二日、仲真人石伴を遣唐大使に、石上朝臣宅嗣を副使に任ず

小床、六位已下官六人、造遣唐使船四隻於安藝國、仰東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等道諸國、貢牛角七千八百隻、初高元度自唐歸日、唐帝語之曰、屬祿山亂離、兵器多亡、今欲作弓、交要牛角、聞道、本國多有牛角、卿歸國、爲求使次相贈、故有此儲焉、

〔續日本紀〕

二十二
淳仁天皇

十月癸酉、以右虎賁衛督從四位下仲真人石伴爲遣唐大使、上總守從五位上石上朝臣宅嗣爲副使、十一月癸未、授迎藤原河清使外從五位下高元度從五位上、其錄事羽栗翔者留河清所而不歸、

天平寶字六年（七六二）

〔續日本紀〕

二十四
淳仁天皇

天平寶字六年正月戊子、以信部少輔從五位下紀朝臣牛養爲兼少納言、從

天平寶字四年（七六〇）——天平寶字六年（七六二）

正月九日、從四位下宗形王、右大舍人頭に任ぜらる

五位上阿倍朝臣毛人為左中辨、從四位下石川朝臣豐成爲右大辨、從五位上大伴宿禰家持爲信部大輔、外從五位下忌部連黑麻呂爲內史局助、從四位下宗形王爲右大舍人頭、從五位下淡海真人三船爲文部少輔、從五位下中臣朝臣伊加麻呂爲禮部少輔、○下略

三月朔日、遣唐副使石上朝臣宅嗣を罷め、藤原朝臣田麻呂を副使となす、尋で四月十七日、遣唐使船一隻に乗り、安藝國より難波江口に到り坐礁破壊す、仍て遣唐使を罷め、送唐人使となし、中臣朝臣鷹主を任ず

〔續日本紀〕^{二十四} 天平寶字六年三月庚辰朔、遣唐副使從五位上石上朝臣宅嗣罷、以左虎賁衛督從五位上藤原朝臣田麻呂爲副使、

四月丙寅、遣唐使駕船一隻自安藝國到于難波江口、着灘不浮、其桅亦復不得發出、爲浪所搖、船尾破裂、於是、擲節使人限以兩船、授判官正六位上中臣朝臣鷹主從五位下爲使、賜節刀、正六位上高麗朝臣廣山爲副、

七月、送唐人使中臣朝臣鷹主ら、便風なく渡海し得ず、仍て八月九日、送客使らは入京するを聽し、水手は歸郷せしむ

〔續日本紀〕^{二十四} 天平寶字六年七月、是月送唐人使從五位下中臣朝臣鷹主等、風波無便不得渡海、

八月乙卯、勅、唐人沈惟岳等着府、依先例、安置供給、其送使者、海陸二路量便咸令入京、其水手者、自彼放還本郷、

十一月二十六日、天下の神祇に奉幣す、尋で二十八日、天下の群神に奉幣す

〔續日本紀〕^{二十四} 天平寶字六年十一月庚寅、遣參議從三位武部卿藤原朝臣巨勢麻呂、散位外從五位下土師宿禰犬養、奉幣于香椎廟、以爲征新羅調習軍旅也、^{十六日}
庚子、奉幣及弓矢於天下神祇、^{二十六日}

(二十八日)
壬寅、遣使奉幣於天下群神、

天平寶字七年(七六三)
正月九日、在唐大使藤原朝臣清河
を常陸守に任ず

〔續日本紀〕^{二十四} 天平寶字七年正月壬子、^{略中}在唐大使仁部卿正四位下藤原朝臣清河爲兼常
陸守、

十月六日、遣唐留學生高内弓・學
問僧ら、送渤海使板振鎌束の船に
て歸朝す

〔續日本紀〕^{二十四} 天平寶字七年十月乙亥、左兵衛正七位下板振鎌束至自渤海、以擲人於海、
勘當下獄、八年之亂、獄囚充滿、因其居住移於近江、初王新福之歸本蕃也、駕船爛脆、送使判
官平群蟲麻呂等慮其不完、申官求留、於是、史生已上皆停其行、以修理船、使鎌束便爲船師、
送新福等發遣、事畢歸日、我學生高内弓、其妻高氏、及男廣成、綠兒一人、乳母一人、并入
唐學問僧戒融、優婆塞一人、轉自渤海相隨歸朝、海中遭風所向迷方、柁師水手爲波所沒、于
時鎌束議曰、異方婦女今在船上、又此優婆塞異於衆人、一食數粒、經日不飢、風漂之災未必不
由此也、乃使水手、撮内弓妻并綠兒乳母優婆塞四人、舉而擲海、風勢猶猛、漂流十餘日、着隱
岐國、

〔正倉院文書〕<sup>續修
別集五</sup>

十二月三十日、大宰帥藤原惠美朝
臣眞先宅、造東大寺司に宛て宗形
石麻呂、上日三十日の旨を牒す

大宰帥宅牒 ^{造東大寺司}

銅工 宗形石麻呂上日冊

牒件人十二月上日勘注、申送如前、以牒

天平寶字六年(七六二) — 天平寶字七年(七六三)

天平寶字七年（七六三）—神護景雲元年（七六七）

一九八

天平寶字七年十二月卅日

知宅事大帥家職分資人高來造廣人

天平寶字八年（七六四）
正月七日、在唐大使藤原清河を從三位に敘す

〔續日本紀〕^{二十五} 天平寶字八年正月乙巳、授正三位文室真人淨三從二位、在唐大使正四位下藤原朝臣清河從三位、

天平神護元年（七六五）
正月七日、諸國の神祝に各位一階を加ふ

〔續日本紀〕^{二十六} 天平神護元年春正月己亥、改元天平神護、勅曰、朕以眇身、忝承寶祚、無聞德化、屢見紆曲、又疫癘荐臻、頃年不稔、傷物失所、如納深隍、其賊臣仲麻呂外戚近臣、先朝所用、得堪委寄、更不猜疑、何期包藏禍逆之意、而鳩毒潛行於天下、犯怒人神之心、而怨氣感動於上玄、幸賴神靈護國風雨助軍、不盈旬日、咸伏誅戮、今元惡已除、同歸遷善、洗滌舊穢、與物更新、宜改年號、以天平寶字九年、爲天平神護元年、其諸國神祝宜各加位一階、其從去九月十一日至十八日、職事及諸司番上、六位已下供事者、宜亦加一階、唯正六位上依例賜物、其京中年七十已上者賜階一級、布告遐邇、知朕意焉、

十一月五日、使を遣し、諸國の神社を修造せしむ

〔續日本紀〕^{二十六} 天平神護元年十一月壬戌、遣使修造神社於天下諸國、

神護景雲元年（七六七）

八月四日、是より先、筑前國宗形郡大領外從六位下宗形朝臣深津、僧壽應の勸めにより、同郡金埵に船瀬を築造す、是日、深津、その

〔續日本紀〕^{二十八} 神護景雲元年八月辛巳、筑前國宗形郡大領外從六位下宗形朝臣深津授外從五位下、其妻无位竹生王從五位下、並以被僧壽應誘造金埵船瀬也、

功により外從五位下に昇彼せられ、
その妻無位竹生王も從五位下を授
けらる

※〔萬葉集〕七
雜歌

1230 千磐破 金之三埼乎 過輶 吾者不忘 壯鹿之須賣神

ちはやぶる金の岬を過ぎぬともわれは忘れし志賀の皇神

神護景雲三年（七六九）
二月十六日、諸社に神服を奉る

〔續日本紀〕^{二十九} 神護景雲三年二月乙卯、奉神服於天下諸社、以大炊頭從五位下掃守王、
^{稱德天皇} 左中辨從四位下藤原朝臣雄田麻呂、爲伊勢太神宮使、每社男神服一具、女神服一具、其太神宮
及月次社者、加之以馬形并鞍、

寶龜元年（七七〇）
三月四日、前年（神護景雲三年十
一月十二日）到着の新羅使金初正
ら、在唐大使藤原清河・朝衡の書
を持ち來る

〔續日本紀〕^{三十} 寶龜元年三月丁卯、初問新羅使來由之日、金初正等言、在唐大使藤原河
^{稱德天皇}

清、學生朝衡等、屬宿衛王子金隱居歸郷、附書送於郷親、是以、國王差初正等、令送河清等書、
又因使次、便貢土毛、又問、新羅貢調、其來久矣、改稱土毛、其義安在、對言、便以附貢、故
不稱調、至是、遣左大史外從五位下堅部使主人主、宣告初正等曰、前使貞卷歸國之日、所仰之
政、曾無申報、今亦徒持私事參來、所以、此度不預賓禮、自今以後、宜如前仰、令可申事人入
朝者、待之如常、宜以此狀告汝國王知、但進唐國消息、并在唐我使藤原朝臣河清等書、嘉其勤
勞、仰大宰府安置饗賜、宜知之、賜國王祿絕廿五疋、絲一百紵、綿二百五十屯、大使金初正已
下各有差、

寶龜元年（七七〇）—寶龜二年（七七二）

1100

十月朔日、大神宮を始め諸社の禰宜等に位一階を賜ふ

〔續日本紀〕^{三十一} 光仁天皇

寶龜元年冬十月己丑朔、即天皇位於大極殿、改元寶龜、詔曰、天皇我詔旨

勅命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食宣、掛母恐俊奈良宮御宇倭根子天皇去八月爾此食國

天下之業乎拙劣朕爾被賜而仕奉止負賜授賜止勅天皇詔旨乎頂爾受被賜恐美受被賜懼進母不知爾退不

知爾恐美坐止久勅命乎衆聞食宣、然此乃天日嗣高御座之業者天坐神地坐祇乃相宇豆奈比奉相扶奉事爾

依志且此座者平安御坐且天下者所知物爾在良志止所念行須、又皇坐而天下治賜君者賢臣能人乎得而志

天下乎平安治物爾在良志止聞看行須、故是以大命坐勅久、朕雖拙弱親王始而王臣等乃相穴奈比奉相扶

奉事尔依而志此之負賜授賜食國天下之政者平安仕奉倍之止所念行須、故是以衆淨明心正直言以而

食國政奏比天下公民乎惠治倍之止奈母所念行須勅天皇命衆聞食宣、辭別 詔、今年八月五日肥後國葦北

郡人日奉部廣主賣獻白龜、又同月十七日同國益城郡人山稻主獻白龜、此則並合大瑞、故天地貺

大瑞者受被賜歡受被賜可貴物爾在、是以改神護景雲四年爲寶龜元年、又仕奉人等中爾志何仕奉

狀隨且一二人等冠位上賜比治賜布、又大赦天下、又天下六位已下有位人等給位一階、大神宮始且

諸社之禰宜等給位一階、又僧綱始且諸寺師位僧尼等爾御物布施賜布、又高年人等養賜、又困乏人

等惠賜布、又孝義有人等其事免賜、又今年天下田租免賜止宣天皇勅衆聞食宣、

〔續日本紀〕^{三十一} 光仁天皇

寶龜二年三月壬戌、令天下諸國祭疫神、

寶龜二年（七七二）
三月五日、諸國をして疫神を祭らしむ

十一月朔日、入唐使船四隻を安藝國に於て建造せしむ

〔續日本紀〕^{三十一} 光仁天皇

寶龜二年十一月癸未朔、遣使造入唐使船四艘於安藝國、

寶龜三年（七七二）
正月三日、無位宗形王、從五位下
を授けらる

寶龜四年（七七三）
七月十日、諸國をして疫神を祭ら
しむ

寶龜五年（七七四）
三月四日、新羅國使金三玄ら大宰
府に到る、在唐大使藤原河清の書
持來るも、前禮に違ふにより之を
放還す

寶龜六年（七七五）
四月七日、河内・攝津の鼠害によ
り、諸國の群神に奉幣す

〔續日本紀〕<sup>三十二
光仁天皇</sup> 寶龜三年春正月甲申、天皇臨軒、渤海國使青綬大夫壹萬福等貢方物、復
无位粟田朝臣深見本位從四位下、授從五位上河内王正五位下、從五位下大田王從五位上、无位
三方王、宗形王並從五位下、從五位上甘南備真人伊香、佐伯宿禰助、佐伯宿禰眞守、巨勢朝臣
公成、大藏忌寸麻呂、佐伯宿禰三方並正五位下、從五位下大伴宿禰不破麻呂、石川朝臣名繼、
路真人鷹養、安曇宿禰石成、大伴宿禰形見並從五位上
略○下

〔續日本紀〕<sup>三十二
光仁天皇</sup> 寶龜四年秋七月癸未、祭疫神於天下諸國、

〔續日本紀〕<sup>三十三
光仁天皇</sup> 寶龜五年三月癸卯、○中是日、新羅國使禮府卿沙浪金三玄已下二百卅五人、
到泊大宰府、遣河内守從五位上紀朝臣廣純、大外記外從五位下內藏忌寸全成等、問其來朝之由、
三玄言曰、奉本國王教、請修舊好每相聘問、并將國信物及在唐大使藤原河清書來朝、問曰、夫
請修舊好每相聘問、乃似亢禮之隣、非是供職之國、且改貢調稱爲國信、變古改常、其義如何、
對曰、本國上宰金順貞之時、舟楫相尋、常脩職貢、今其孫邕、繼位執政、追尋家聲、係心供奉、
是以、請修舊好每相聘問、又三玄本非貢調之使、本國便因使次、聊進土毛、故不稱御調、敢陳
便宜、自外不知、於是、勅問新羅入朝由使等曰、新羅元來稱臣貢調、古今所知、而不率舊章、
妄作新意、調稱信物、朝爲修好、以昔准今、殊無禮數、宜給渡海料、早速放還、

〔續日本紀〕<sup>三十三
光仁天皇</sup> 寶龜六年四月己巳、河内、攝津兩國有鼠食五穀及草木、遣使奉幣於諸國

寶龜三年（七七二）—寶龜六年（七七五）

寶龜六年（七七五）

1101

群神、

四月十日、勝寶四年の入唐使第四船の梶師川部酒麻呂を、外從五位下に敘す

〔續日本紀〕

三十三
光仁天皇

寶龜六年四月壬申、授川部酒麻呂外從五位下、酒麻呂肥前國松浦郡人也、

勝寶四年、

（七五二）

爲入唐使第四船柁師、歸日海中順風盛扇、忽於船尾失火、其炎覆艦而飛、人皆惶遽、

不知爲計、時酒麻呂廻柁、火乃傍出、手雖燒爛、把柁不動、因遂撲滅、以存人物、以功授十階、補當郡員外主帳、至是授五位、

六月十九日、佐伯宿禰今毛人を遣唐大使に、大伴宿禰益立・藤原朝臣鷹取を副使に任じ、安藝國に於て使船四隻を建造せしむ

〔續日本紀〕

三十三
光仁天皇

寶龜六年六月辛巳、以正四位下佐伯宿禰今毛人を遣唐大使、正五位上大

伴宿禰益立、從五位下藤原朝臣鷹取爲副、判官錄事各四人、造使船四隻於安藝國、

八月二十九日、羽栗翼を遣唐准判官となす

〔續日本紀〕

三十三
光仁天皇

寶龜六年八月庚寅、授遣唐錄事正七位上羽栗翼外從五位下、爲准判官、

伊與部家守、遣唐學問生となる

〔日本紀略〕

桓武
天皇

（八〇〇）

延曆十九年十月庚辰、

（十五日）

外從五位下伊與部家守卒、寶龜六年兼補遣唐、習五

經大義并切韻說文字、歸來之日、任直講、尋轉助教、大臣奏令講公羊穀梁三傳之義、云々、文宣王享座、諸儒所說不同、仍據勘經義及大唐所行、具錄奉進、定南面畢、

明經請益生伊與部連家守、三傳を讀習して還る

〔令集解〕

十五
學令

凡經、周易、尚書、周禮、儀禮、々記、毛詩、春秋左氏傳、各爲一經、或云、總

在跡

記背、孝經、

論語、

學者兼習之、

穴云、公羊傳、穀梁傳不載令、與唐已殊也、但於今讀、此臨時行事耳、古記云、問、注文

選爾雅亦讀、未知、必令讀以不、答、任意耳、不必令讀、下條、孝經論語皆須兼通、即文

永忠

善議

選爾雅、不合試策也、延曆十七年三月十六日官符云、應以春秋公羊穀梁二傳、各爲一經、教授學生事、右得式部省解傳、案學令云、教授正業、左傳、服虔杜預注者、上件二傳、棄而不取、是以古來學者未習其業、而以去寶龜七年、遣唐使明經請益直講博士正六位上伊與部連家守讀習還來、仍以延曆三年申官、始令家守講授三傳、雖然未有下符、難輒爲例、自此厥後二三學生、有受其業、即以彼傳冀預出身、今省欲試、恐違令條、將從抑止、還借業絕、竊檢唐令、詩書易三禮三傳、各爲一經廣立學官、望請、上件二傳、各准小經、永聽講授以弘學業、仍請官裁者、大納言從三位神主宣、奉勅依請、

※〔元亨釋書〕

十六力遊

釋永忠、京兆人、姓秋篠氏、寶龜之初、入唐留學、延曆之季隨使歸、涉經

論、解音律、善攝威儀、齋戒無缺、桓武帝勅主梵釋寺、弘仁七年四月滅、歲七十四、遺表上唐所得律呂旋宮圖、日月圖、各二卷、律管十二枚、塤一枚、

※〔日本後紀〕

二十二嵯峨天皇

弘仁三年八月戊申

(二十三)

傳燈大法師善議卒、本姓惠賀連、河內國錦部郡人也、

法師入唐學問、道慈大德之入室也、少捐塵事、早結道遊、天資秀異、氣稟冲和、能持梵甲、志願傳燈、是以三論之家、許號法將、中道之理、流布國家、則伊人之力也、才位不愜、桃李成蹊、千歲之名、是謂不朽、道極如休、忽歸大暮、人之云亡、衆生不幸矣、時年八十四、

○入唐年不明につき姑くこゝに掲ぐ、

寶龜七年(七七六)

四月十五日、遣唐大使佐伯今毛人宿禰に節刀を賜ふ

〔續日本紀〕

三十四光仁天皇

寶龜七年四月壬申、御前殿賜遣唐使節刀、詔曰、天皇我大命_{良麻}遣唐國使

人爾詔大命_平聞食止宣、今詔、佐伯今毛人宿禰、大伴宿禰益立二人、今汝等二人_乎遣唐國者今始

且遣物_爾波不在、本利自朝_{與(行カ)}使其國_爾遣之其國_與進渡_里、依此且使次止遣物會、悟此意且其人等乃和美安美

應爲久相言部、驚呂_{驚呂之}驚岐_之事行會_{奈世}、亦所遣使人判官已下死罪已下有犯者順罪且行止之_且節刀給止詔大命

寶龜六年(七七五) — 寶龜七年(七七六)

乎聞食止宣、事畢、賜大使副使御服、賜前入唐大使藤原河清書曰、汝奉使絕域、久經年序、忠誠遠著、消息有聞、故今因聘使、便命迎之、仍賜緇一百匹、細布一百端、砂金大一百兩、宜能努力、共使歸朝、相見非賒、指不多及、

八月一日、天下の群神に奉幣す

〔續日本紀〕三十四
光仁天皇 寶龜七年八月丙辰朔、遣使奉幣於天下群神、其天下諸社之祝、不勤酒掃、

以致焦穢者、收其位記與替、

（八日）
癸亥、山背國乙訓郡人外從五位下羽栗翼賜姓臣、

閏八月六日、遣唐使船、信風の期を失して博多大津に歸り、大宰府に留りて、來夏を待たんことを請ふ、勅して之を聽す

〔續日本紀〕三十四
光仁天皇 寶龜七年閏八月庚寅、先是、遣唐使船到肥前國松浦郡合蠶田浦、積月餘日、不得信風、既入秋節、彌違水候、乃引還於博多大津、奏上曰、今既入於秋節、逆風日扇、臣等望、待來年夏月、庶得渡海、是日勅、後年發期一依來奏、其使及水手並宜在彼待期進途、

十一月十五日、遣唐大使佐伯宿禰今毛人、歸京して節刀を進む

〔續日本紀〕三十四
光仁天皇 寶龜七年十一月己巳、遣唐大使佐伯宿禰今毛人自大宰還而進節刀、副使大伴宿禰益立、判官海上真人三狩等、留府待期、時人善之、

十二月十四日、遣唐副使大伴宿禰益立を停めて、小野朝臣石根・大神朝臣末足を副使となす

〔續日本紀〕三十四
光仁天皇 寶龜七年十二月丁酉、停遣唐副使大伴宿禰益立、以左中辨兼中衛中將鑄錢長官從五位上小野朝臣石根、備中守從五位下大神朝臣末足並爲副使、

是歲、宗像社を造營すとの説あり

〔宗像社造營代々流記〕

人皇三十九代光仁天皇御宇寶龜七年^{丙辰}、癸^イ所社被改御時御門御夢想白衣美女告云、

樽見山、宗像田嶋我が屋敷、
家造らして給へ、君さかえ
させむ

多^ル海山宗像田嶋我屋敷家造四手田部君作賀^サ咲^セ佐^サ禰^ミ、

寶龜八年（七七七）

正月三日、遣唐副使小野朝臣石根を兼ねて播磨守となす

〔續日本紀〕^{三十四} 寶龜八年正月丙辰、以內臣從二位藤原朝臣良繼爲內大臣、遣唐副使左中辨從五位上小野朝臣石根爲兼播磨守、

二月六日、遣唐使、春日山下に於て天神地祇を拜す、副使小野朝臣石根、祭祀を修す

〔續日本紀〕^{三十四} 寶龜八年二月戊子、遣唐使拜天神地祇於春日山下、去年風波不調、不得渡海、使人亦復頻以相替、至是副使小野朝臣石根重脩祭祀也、

四月十七日、遣唐大使佐伯宿禰今毛人ら辭見す、大使佐伯宿禰今毛人、羅城門に到り、病と稱して留る、仍て二十二日、遣唐副使小野石根先發し、大使の事を代行せしむ

〔續日本紀〕^{三十四} 寶龜八年四月戊^{十七日}戌、遣唐大使佐伯宿禰今毛人等辭見、但大使今毛人到羅城門、稱病而留、
癸卯、^略是日、遣唐大使佐伯宿禰今毛人與病進途、到攝津職、積日不損、勅副使石根、持節先發、行大使事、即得順風、不可相待、遣石中辨從四位下石川朝臣豐人、宣詔使下曰、判官已下犯死罪者、聽持節使頭專恣科決、

六月朔日、勅して、遣唐副使小野朝臣石根らを先發せしむ

〔續日本紀〕^{三十四} 寶龜八年六月辛巳朔、勅遣唐副使從五位上小野朝臣石根、從五位下大神朝臣末足等、大使今毛人、身病彌重、不堪進途、宜知此狀、到唐下牒之日、如借問無大使者、

寶龜七年（七七六）—寶龜八年（七七七）

寶龜八年（七七七）—寶龜九年（七七八）

二〇六

量事分疏、其石根者著紫、猶稱副使、其持節行事一如前勅、

十月十三日、從五位下宗形王、右大舍人頭に任ぜらる

〔續日本紀〕

三十四
光仁天皇

寶龜八年冬十月辛卯、正四位上藤原朝臣家依爲參議正五位下高賀茂朝臣

諸雄爲神祇大副、參議正四位上藤原朝臣是公爲兼左大辨、春宮大夫左衛士督侍從如故、正四位下田中朝臣多太麻呂爲右大辨、從五位上美和真人土生爲右少辨、中納言從三位物部朝臣宅嗣爲兼中務卿、從四位下鴨王爲左大舍人頭、從五位下宗形王爲右大舍人頭、從五位下藤原朝臣末茂爲圖書頭、從五位下百濟王仙宗爲助、○下略

寶龜九年（七七八・大曆十三年）正月、日本國使入唐朝貢す

〔冊府元龜〕

九七二
朝貢五

外臣部

大曆十三年正月、日本國遣使朝貢、

丹波國天田郡華浪山よりえし白鑄を唐にもたらし、揚州の鑄工に示し、その鈍隱なることを明らかにす

入唐准判官羽栗臣翼

※〔續日本紀〕^{二十七} 天平神護二年七月己卯、^{二十六日}散位從七位上昆解宮成得似白鑄者以獻、言曰、是丹波國天田郡華浪山所出也、和鑄諸器、不弱唐錫、因呈以眞白鑄所鑄之鏡、其後、授以外從五位下、復興役探之、單功數百、得十餘斤、或曰、是似鉛非鉛、未知所名、時召諸鑄工、與宮成雜而練之、宮成途窮无所施紆、然以其似白鑄固爭不肯伏、寶龜八年、入唐准判官羽栗臣翼賈之以示揚州鑄工、僉曰、是鈍隱也、此間私鑄濫錢者、時或用之、

三月二十七日、伊勢大神宮及び天下の諸神に奉幣して、皇太子の御不豫を告げ給ふ

〔續日本紀〕

三十五
光仁天皇

寶龜九年三月癸酉、大祓、遣使奉幣於伊勢大神宮及天下諸神、以皇太子

不平也、

四月十四日、宗形郡大領外從八位上宗形朝臣大德、外從五位下に昇敘せらる

〔續日本紀〕^{三十五} 寶龜九年四月庚寅、授筑前國宗形郡大領外從八位上宗形朝臣大德外從五位下、
光仁天皇

十月二十二日、遣唐使判官小野朝臣滋野の第三船、唐國押送使と肥前國松浦郡橘浦に歸着す

寶龜八年六月、入海す、七月揚州海陵縣に到り、寶龜九年正月長安城にて禮見す

九月九日、第三船歸路入海するも逆風に遭ふ

〔續日本紀〕^{三十五} 寶龜九年十月乙未、遣唐使第三船到泊肥前國松浦郡橘浦、判官勅旨大丞正六位上兼下總權介小野朝臣滋野上奏言、臣滋野等、去寶龜八年六月廿四日、候風入海、七月三日、與第一船同到揚州海陵縣、八月廿九日、到揚州大都督府、即依式例安置供給、得觀察使兼長史陳少遊處分、屬祿山亂、常館彫弊、入京使人、仰限六十人、以來十月十五日、臣等八十五人發州入京、行百餘里、忽據中書門下牒、擲節人數、限以廿人、臣等請、更加廿三人、持節副使小野朝臣石根、副使大神朝臣末足、准判官羽栗臣翼、錄事上毛野公大川、韓國連源等卅三人、正月十三日、到長安城、即於外宅安置供給、特有監使、勾當使院、頗有優厚、中使不絕、十五日、於宣政殿禮見、天子不御、是日、進國信及別貢等物、天子非分喜觀、班示群臣、三月廿二日、於延英殿、對見、所請並允、即於內裏設宴、官賞有差、四月十九日、監使揚光耀宣口勅云、今遣中使趙寶英等、將答信物、往日本國、其駕船者仰揚州造、卿等知之、廿四日、事畢拜辭、奏云、本國行路遙遠、風漂无准、今中使云往、冒涉波濤、萬一顛躓、恐乖王命、勅答、朕有少許答信物、今差寶英等押送、道義所在、不以爲勞、即賜銀錠酒、以惜別也、六月廿四日、到揚州、中使同欲進途、船難卒成、所由奏聞、便寄乘臣等船發遣、其第一第二船、並在揚子塘頭、第四船在楚州鹽城縣、九月九日、臣船得正南風、發船入海、行已三日、忽遭逆風、船着沙

寶龜九年（七七八）

寶龜九年（七七八）

二〇八

十月十六日、入海

上、損壞處多、竭力修造、今月十六日、船僅得浮、便即入海、廿三日、到肥前國松浦郡橘浦、但今唐客隨臣入朝、迎接祖供、令同蕃例、臣具牒大宰府、仰令准擬、其唐消息、今天子廣平王、名迪、年五十三、皇太子雍王、名适、年號大曆十三年、當寶龜九年、（七七）下略

十月二十五日、大宰府、遣唐使判官小野滋野到泊の由を奏す

〔續日本紀〕三十五
光仁天皇 寶龜九年十月庚子、（二十八日）勅大宰府、得今月廿五日奏狀、知遣唐使判官滋野等乘船到泊、其寄乘唐使者、府宜且遣使勞問、判官滋野者速令入京、

寶龜年中、甘南備高直、遣唐判官に任ず、歸朝の日、正五位下に昇敘せらる

＊〔續日本後紀〕五
仁明天皇 承和三年四月丙戌、（八三〇）
（十八日）散位從四位下甘南備真人高直卒、天淳名倉太玉敷（敬達）天皇之後、六世正五位下清野之第三子也、父清野、自文章生、任大內記、遷大學大允、寶龜年中、遣唐判官、兼播磨大掾、歸朝之日、敘正五位下任肥前守、遷兵部少輔武藏介、延曆十三年卒、高直身長六尺二寸、少爲文章生、能屬文、巧琴書、廿三年任少內記、大同元年歷大宰少監西海道觀察使判官、弘仁之初、頻遷左右近衛將監、六年敘從五位下、累任陸奥上野介、天長三年除常陸守、遭訪探使、緣前司犯、被停釐務、吏民感其德化、競遺資用、嵯峨太上天皇復垂眷憐、便以莊家物、任其所須、至六年、任攝津守、仁明天皇踐祚之初、敘正五位上、尋授從四位下、明年居親母喪、殆至滅性、不幾而卒、年六十二、

十一月十日、遣唐第四船、薩摩國甕嶋郡に歸着す

〔續日本紀〕三十五
光仁天皇 寶龜九年十一月壬子、遣唐第四船來泊薩摩國甕嶋郡、其判官海上真人三狩等漂着耽羅嶋、被嶋人略留、但錄事韓國連源等、陰謀解纜而去、率遺衆冊餘人而來歸、

十一月十三日、遣唐第二船、薩摩國出水郡に歸着す、第一船は難破す

主神津守宿禰國麻呂は艦に乘りて甌島に、判官大伴宿禰繼人らは舳にのりて天草郡に着す

〔續日本紀〕

三十五
光仁天皇

寶龜九年十一月乙卯、^{十三日}

第二船到泊薩摩國出水郡、又第一船海中々斷、舳

艫各分、主神津守宿禰國麻呂、并唐判官等五十六人、乘其艦而着甌島郡、判官大伴宿禰繼人、

并前入唐大使藤原朝臣河清之女喜娘等卅一人、乘其舳而着肥後國天草郡、繼人等上奏言、繼人

等去年六月廿四日、四船同入海、七月三日着泊揚州海陵縣、八月廿九日、到揚州大都督府、即

節度使陳少遊且奏且放、六十五人入京、十月十六日、發赴上都、至高武縣、有中書門下勅牒、

爲路次乏車馬、減却人數、定廿人、正月十三日、到長安、即遣內使趙寶英、將馬迎接、安置外

宅、三月廿四日、乃對龍顏奏事、四月廿二日、辭見首路、勅令內使揚光耀監送、至揚州發遣、

便領留學生起京、又差內使掖庭令趙寶英、判官四人、賁國土寶貨、隨使來朝、以結隣好、六月

廿五日、到惟楊、九月三日、發自揚子江口、至蘇州常耽縣候風、其第三船在海陵縣、第四船在

楚州鹽城縣、並未知發日、十一月五日、得信風、第一第二船同發入海、比及海中、八月初更、

十一月五日、鹽城縣より第一・第二船入海するも、八日、逆風に遭ひ漂流す

風急波高、打破左右棚根、潮水滿船、蓋板擧流、人物隨漂、無遺夕撮米水、副使小野朝臣石根

等卅八人、唐使趙寶英等廿五人、同時沒入、不得相救、但臣一人潛行着舳檻角、顧盼前後、生

理絕路、十一日五更、帆檣倒於船底、斷爲兩段、舳艫各去未知所到、卅餘人累居方丈之舳舉軸

欲沒、載纜枕拖得少浮上、脫却衣裳、裸身懸坐、米水不入口、已經六日、以十三日亥時漂着肥

後國天草郡西仲嶋、臣之再生、叙造所救、不任歡幸之至、謹奉表以聞、

＊〔津守氏古系圖〕

寶龜九年（七七八）

寶龜九年（七七八）—寶龜十年（七七九）

二一〇

津守國麿

遣唐神主

從六位上津守國麿

柏原天皇御世、讚岐國大目兼遣唐神主、再當社神主、少初位上八國一男○津守家譜ニ「孝謙天皇、神ノ時ナルベシ」ト考證ス、

十一月十八日、唐客を送るための船二隻の建造を、安藝國に命ず

〔續日本紀〕三十五 光仁天皇 寶龜九年十一月庚申、造船二艘於安藝國、爲送唐客也、

十二月十七日、布勢朝臣清直を送唐客使、甘南備真人清野・多治比真人濱成を判官に任ず

〔續日本紀〕三十五 光仁天皇 寶龜九年十二月己丑、以從五位下布勢朝臣清直爲送唐客使、正六位上甘南備真人清野、從六位下多治比真人濱成爲判官、正六位上大網公廣道爲送高麗客使、贈贈唐使趙寶英絶八十四匹、綿二百屯、

寶龜十年（七七九）
二月四日、故入唐大使藤原清河・副使小野石根を昇敘す

〔續日本紀〕三十五 光仁天皇 寶龜十年二月乙亥、贈故入唐大使從三位藤原朝臣清河從二位、副使從五位上小野朝臣石根從四位下、清河贈太政大臣房前之第四子也、（七五三）勝寶五年、爲大使入唐、廻日遭逆風漂着唐國南邊驩州、時遇土人、及合船被害、清河僅以身免、遂留唐國、不得歸朝、於後十餘年、薨於唐國、石根大宰大貳從四位下老之子也、（七七七）寶龜八年、任副使入唐、事畢而歸、海中船斷、石根及唐送使趙寶英等六十三人、同時沒死、故並有此贈也、

二月十三日、大宰少監下道朝臣長人を遣新羅使に任ず

〔續日本紀〕三十五 光仁天皇 寶龜十年二月甲申、以大宰少監正六位上下道朝臣長人爲遣新羅使、爲迎遣唐判官海上三狩等也、

二月二十三日、從五位下宗形王、紀伊守に任ぜらる

〔續日本紀〕

三十五
光仁天皇

寶龜十年二月甲午、以從五位上利波臣志留志爲伊賀守、從五位下田口朝臣祖人爲尾張介、從五位下藤原朝臣長山爲參河守、略中從五位下紀朝臣難波麻呂爲周防守、從五位下宗形王爲紀伊守、從五位下藤原朝臣大繼爲伊豫介、略下

三月十日、遣唐副使大神朝臣末足ら、唐國より歸る

〔續日本紀〕

三十五
光仁天皇

寶龜十年三月辛亥、遣唐副使從五位下大神朝臣末足等自唐國至、

四月二十一日、遣唐副使大神朝臣末足・判官小野朝臣滋野・大伴宿禰繼人ら昇敍す

〔續日本紀〕

三十五
光仁天皇

寶龜十年四月辛卯、領唐客使等奏言、唐使之行、左右建旗、亦有帶仗、行官立旗前後、臣等稽之古例、未見斯儀、禁不之旨、伏請處分者、唯聽帶仗、勿令建旗、又奏曰、往時遣唐使粟田朝臣眞人等發從楚州、到長樂驛、五品舍人宣勅勞問、此時未見拜謝之禮、又新羅朝貢使王子泰廉入京之日、官使宣命、賜以迎馬、客徒斂轡、馬上答謝、但渤海國使、皆悉下馬、再拜舞蹈、今領唐客、准據何例者、進退之禮、行列之次、具載別式、今下使所、宜據此式勿以違失、授遣唐副使從五位下大神朝臣末足正五位下、判官正六位上小野朝臣滋野、從六位上大伴宿禰繼人並從五位下、錄事正六位上上毛野公大川外從五位下、

〔續日本紀〕

三十六
光仁天皇

寶龜十年七月丁丑、大宰府言、遣新羅使下道朝臣長人等、率遣唐判官海

上眞人三狩等來歸、

七月十日、大宰府、遣新羅使下道朝臣長人、遣唐判官海上眞人三狩らを率ゐ歸朝の由を奏す
寶龜十一年(七八〇・建中元年)
正月五日、新羅使、御調を貢し、兼ねて元正を賀す、是時、遣唐判官海上三狩らを進む

〔續日本紀〕

三十六
光仁天皇

寶龜十一年正月辛未、新羅使獻方物、仍奏曰、新羅國王言、夫新羅者、

寶龜十年(七七九)―寶龜十一年(七八〇)

寶龜十一年（七八〇）

一一二

開國以降、仰賴聖朝世々天皇恩化、不乾舟楫、貢奉御調年紀久矣、然近代以來、境內奸寇、不獲入朝、是以謹遣薩食金蘭蔭、級食金巖等、貢御調兼賀元正、又訪得遣唐判官海上三狩等、隨使進之、又依常例進學語生、參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂宣勅曰、夫新羅國、世連舟楫供奉國家、其來久矣、而泰廉等還國之後、不修常貢、每事无禮、所以頃年返却彼使、不加接遇、但今朕時、遣使修貢兼賀元正、又搜求海上三狩等、隨來使送來、此之勤勞、朕有嘉焉、自今以後、如是供奉、厚加恩遇、待以常禮、宜以茲狀語汝國王、是日宴唐及新羅使於朝堂、賜祿有差、

二月、日本國使入唐朝貢す

〔舊唐書〕 十二 德宗本紀上
建中元年二月甲寅、日本國朝貢、

〔新唐書〕 二三〇 東夷傳
日本傳
建中元年、使者真人興能獻方物、真人蓋因官而氏者也、興能善書、其

紙似璽而澤、人莫識、

＊〔冊府元龜〕 九七二 外臣部
朝貢五
建中元年二月、日本國、七月、東爨・烏蠻・守愈等、十月、渤海並

遣使朝貢、

是歲、遣唐錄事羽栗臣翼、五紀曆

經を貢す

〔類聚三代格〕 十七
文書并印事

太政官符

應用長慶宣明曆經事

右陰陽頭從五位下兼行曆博士大春日朝臣眞野麿解狀稱、謹檢古記、豐御食炊屋姫天皇十年壬戌

冬十月百濟僧觀勒來貢曆術、而未行於世、高天原廣野姫天皇「天平寶字」四年庚寅冬十二月、

有勅始用元嘉曆、次用儀鳳曆、高野姫天皇天平寶字七年八月停儀鳳曆、用開元大衍曆、厥後寶

大衍曆を停めて、唯五紀曆經のみを用ふ

龜十一年遣唐使錄事內藥正從五位下羽栗臣翼貢寶應五紀曆經、申云、大唐今停大衍曆、唯用件

五紀曆經により曆を作るも、習學の人なきにより、なお大衍曆經を用ふ

眞野麿去齊衡三年申請可以五紀曆作曆之狀、而太政官四年正月十七日符傳、國家據大衍曆經作

曆尙矣、去聖已遠、義貴兩存、宜暫相副令作進者、依件符旨、大衍五紀相副作進二箇年也、去

貞觀元年渤海大使烏孝慎新貢長慶宣明曆經言、是大唐新用經也、眞野麿試加覆勘理當固然、仍

以件新曆、比校大衍五紀等兩經、且察天文、且參時候、兩經之術、漸似龜疎、令朔節氣、既有

相差、又勘大唐開成四年大中十二年等曆、不復與彼新曆相連、曆議曰、陰陽之運、隨動而差、

と而不已、遂與曆錯者、方今大唐開元以來三改曆術、而我國天平以降、猶用一經、靜言事理、

實不可然、望請、停舊用新、欽若天步、謹請 官裁者、右大臣宣、奉 勅、依請、

貞觀三年六月十六日

※〔日本三代實錄〕五 貞觀三年六月十六日己未、始頒行長慶宣明曆經、先是、陰陽頭從五

推古天皇十年觀勒始めて曆術を貢す

位下兼行曆博士大春日朝臣眞野麻呂奏言、謹檢、豐御食炊屋姫天皇十年十月、百濟國僧觀勒始

貢曆術、而未行於世、高天原廣野姫天皇四年十二月、有勅始用元嘉曆、次用儀鳳曆、高野姫天

寶龜十一年（七八〇）

寶龜十一年（七八〇）—天應元年（七八一）

二二四

遣唐使錄事從五位下行內藥
正

皇天平寶字七年八月、停儀鳳曆、用開元大衍曆、厥後、寶龜十一年、遣唐使錄事故從五位下行
（七八〇）
內藥正羽栗臣翼貢寶應五紀曆經云、大唐今停大衍曆、唯用此經、（七八一）天應元年、有勅令據彼經造曆
（七八一）
日、無人習學、不得傳業、猶用大衍曆經、已及百年、眞野麻呂、去齊衡三年、申請用彼五紀曆、
（八五六）
朝廷議云、國家據大衍曆經、造曆日尙矣、去聖已遠、義貴兩存、宜暫相兼不得偏用、貞觀元年、
（八五九）
渤海國大使烏孝慎新貢長慶宣明曆經云、是大唐新用經也、眞野麻呂試加覆勘、理當固然、仍以
彼新曆、比較大衍五紀等兩經、且察天文、且參時候、兩經之術、漸以龜疎、令朔節氣既有差、
又勘大唐開成四年、（八三九）大中十二年等曆、不復與彼新曆相連、曆議曰、陰陽之運、隨動而差、差而
不已、遂與曆錯者、方今大唐開元以來、三改曆術、本朝天平以降、猶用一經、靜言事理、實不
可然、請停舊用新、欽若天步、詔從之、

天應元年（七八一）
六月二十四日、送唐客使布勢朝臣
清直ら唐より歸朝し、節刀を進む

〔續日本紀〕三十六 桓武天皇 天應元年六月辛亥、送唐客使從五位下布勢朝臣清直等自唐國至、進使節
刀、

九月二十二日、送唐客使布勢朝臣
清直らを昇敘す

〔續日本紀〕三十六 桓武天皇 天應元年九月丁丑、略又授送唐客使從五位下布勢朝臣清直正五位下、判
官正六位上多治比眞人濱成、甘南備眞人淨野並從五位下、

是歲、田島の邊津宮に宗像三所大
神を合祀すと傳ふ

〔宗像大菩薩御緣起〕 一宗像三所大菩薩一所仁御遷座事
七戸神官之第一滋光大宮司之末葉、經數代後、當氏男大宮司之時代、光仁天皇八王四御宇八王五十或桓武天皇十九代

大宮司宗像氏男の屋敷に社を造る

鎮護國家の靈神

御宇天應元年(A)辛酉有御詫宣、虛空仁聲有云、爲示吾宗大神之居、號始此所於宗像畢、早氏男之屋敷仁造社、可崇吾、以汝開發田、爲當社領、而可致祭祀、卽以汝垂迹以來爲氏人、致子々孫々、

可執行社務、執印者任相傳之理、社務者不可有他家之望、若背此旨者、吾必去社、可住虛空矣、氏男驚此御音、卽點屋敷於社壇、以茅草葺之、奉崇三所之神明於一所之處仁、依光仁天皇歡夢之告、被造替嚴重之社以來、爲鎮護國家之靈神矣、

第二者 湍津姬、居左間 本地釋迦如來 小神織幡

第一者 田心姬、居中間 本地大日如來

第三者 市杵嶋姬、居右間 本地藥師如來 小神許斐

已上奉號惣社

第一者 居左間 本地大日如來 小神地主明神本地普賢

第二者 居中間 本地釋迦如來

第三者 居右間 本地藥師如來 小神所主明神本地文珠

已上奉號中殿

第一者 居左間 本地大日如來 小神浪折本地觀音

第三者 居中間 本地藥師如來 小神正三位(采)是志賀大明神云々本地文珠

第二者 居右間 本地釋迦如來 小神御鑑持本地毘沙門

已上奉號地主 小神上袴本地不動

宗像大神の託宣

如御詫宣、三神一所仁有遷座、此則居海邊、向異國事者、顯三神一躰俱躰俱用一致幽明靈德、

天應元年(七八一)

天應元年（七八一）—延曆元年（七八二）

二一六

盡未來際施本朝鎮護異國征罰之靈驗也矣、

關東御教書
當社垂迹、天應以後、五百
餘歲

〔宗像氏緒氏所藏文書〕

筑前國宗像社解進之、如狀者、造宇佐宮用途米事、當社垂跡天應以後五百餘歲之間、更不動仕之處、遠景朝臣宰府奉行之時、以新儀管内之庄園神社佛寺平均雖令支配、爲本家八條院御沙汰、被經奏聞、蒙免除畢、而今付數百人之使、令催促之間、有限本所御年貢、可及違亂□者、先例於致其勤者、不及對捍、至于爲新儀者、可被止彼責給之狀、依仰執達如件、

（二三）
嘉祿元年十二月二日

（北條泰時）
武藏守（花押）

（北條時房）
相模守（花押）

（藤原實賴）
前大宰少貳殿

延曆元年（七八二）
是歲、勅により、宗像宮を創造す
との説見ゆ

〔宗像宮創造記〕 宗像宮創造者人王四十一代光仁天王之御宇天應二年壬子以勅賜造宮其後醍醐天

王之御宇ニ御子中納言清氏仁内裏年中行事悉皆給テ宗像之社務職備畢、其已後者無絕事相續在之

御神之影向孝靈天王元年從出雲國息御嶋下向、經數千年宗像影向先室貴六岳垂跡、其時神祭樣

々成于今當社神拜遷留畢、仍御神領過分タリト云トモ今相違所々肥前國晴氣三百町豐前大豆俵四十町壹

岐嶋藥師丸貳十町當國古物神崎四十町西郷三百町稻元四十町須惠村三十町芹田五十町

已上八百二十町也

延曆二年（七八三）

二月二十九日、從五位下宗形王、從五位上に昇敘せらる

延曆三年（七八四）

四月二日、從五位上宗形王、大炊頭に任ぜらる

〔續日本紀〕

三十七
桓武天皇

延曆二年二月丙子、授從五位下宗形王從五位上、

〔續日本紀〕

三十八
桓武天皇

延曆三年夏四月壬寅、授正六位上上毛野公我人外從五位下、以外從五位下忌部宿禰人上、爲神祇大祐、從五位上上海上真人三狩爲右中辨、從五位下藤原朝臣是人爲中務少輔、從五位下石川朝臣魚麻呂爲左大舍人助、○中從五位下紀朝臣繼成爲大膳亮、從五位上宗形王爲大炊頭、從五位下山口王爲鍛冶正、從五位下川邊朝臣淨長爲主油正、○下

十二月六日、大祓により畿内七道の天神地祇に奉幣す

〔續日本紀〕

三十八
桓武天皇

延曆三年十二月癸酉、遣使畿内七道、大祓奉幣於天神地祇、

延曆七年（七八八）

二月二十二日、神祇官符により、宗像氏の中より、潔清廉貞、祭事に堪ふる者をもつて、神主に補し、六年を限りて交替せしむ

〔類聚三代格〕

七
郡司事

太政官符

應停筑前國宗像郡大領兼帶宗像神主夏、

右得大宰府解僞、當郡大領補任之日、例兼神主即敘五位、○中又案神祇官去延曆七年二月廿二

日符僞、自今以後簡擇彼氏之中潔清廉貞、堪祭夏者、補任神主、限以六年相替者、然則神主之

任既有其限、假使有才堪理郡兼帶神主、○中略

延曆十九年十二月四日

五月二日、伊勢神宮及び七道の名神に雨を祈る

〔續日本紀〕

三十九
桓武天皇

延曆七年五月己酉、詔群臣曰、宜差使祈雨於伊勢神宮及七道名神、是夕

延曆二年（七八三）—延曆七年（七八八）

延曆七年（七八八）—延曆九年（七九〇）

二一八

大雨、其後雨多、遠近周匝、遂得耕殖矣、

延曆九年（七九〇）

七月二十四日、從五位上宗形王、
讚岐守に任ぜらる

〔續日本紀〕

四十
桓武天皇

延曆九年秋七月戊子、從五位下紀朝臣皆麻呂爲少納言、從四位下石川朝

臣眞守爲右大辨、從五位上調使王爲左大舍人頭、○中略從五位下藤原朝臣今川爲伊勢守、從五位

上宗形王爲讚岐守、從五位下百濟王元信爲肥後介、

編年史料

(三)

平

安

時

代

延曆十三年（七九四）

三月四日、少僧都傳燈大法師位等定らを筑前宗像社他二社に遣し、神前に讀經せしめ、度僧を置く

九月二十八日、遷都及び征蝦夷のため、諸國名神に奉幣す

延曆十六年（七九七）

六月十八日、畿内七道諸國の名神に奉幣して、萬國の安寧を祈る

延曆十七年（七九八）

二月二十四日、宗像郡大領兼神主外從五位下宗像朝臣池作卒去す、爾來、適材なく供祭を闕く

三月十六日、宗像郡大領、譜第の選を永く停廢し、才能の仁を之に充つ

〔類聚國史〕

五神祇部五八幡大神

延曆十三年三月戊寅、遣少僧都傳燈大法師位等定等於豐前國八幡、筑前國宗形、肥後國阿蘇三神社讀經、爲三神度七人、

〔日本紀略〕

桓武天皇

延曆十三年九月戊戌、奉幣帛於諸國名神、以遷于新都、及欲征蝦夷也、

〔類聚國史〕

十一神祇部十一祈禱上

延曆十六年六月壬申、遣使奉幣畿内七道諸國名神、皇帝於南庭親臨發焉、以祈萬國安寧也、

〔類聚三代格〕

七郡司事

太政官符

應停筑前國宗像郡大領兼帶宗像神主夏

右得大宰府解僞、○中略大領兼神主外從五位下宗像朝臣池作十七年二月廿四日卒去、自爾以來頻

闕供祭、歷試才能未得其人、○中略居終身之職兼六年之任、事不穩便、謹請官裁者、右大臣宣僞、

奉勅、郡司神主職掌各別、莫令郡司兼帶神主、

（八〇〇）
延曆十九年十二月四日

〔類聚三代格〕

七郡司事

延曆十三年（七九四）—延曆十七年（七九八）

延曆十七年（七九八）

二二二

太政官符

應停筑前國宗像郡大領兼帶宗像神主夏、

右得大宰府解僞、當郡大領補任之日、例兼神主即敍五位、而今准去延曆十七年三月十六日 勅、

宗像郡大領補任の日、例により神主を兼ね、五位に敍す

譜第之選永從停廢、擢用才能、具有條目、○中略

延曆十九年十二月四日

難波朝廷、始めて諸郡を置く

*〔類聚國史〕^{十九 神祇部十九 國造} 延曆十七年三月丙申、^{（十六日）}詔曰、昔難波朝廷、始置諸郡、仍擇有勞、

補於郡領、子孫相襲、永任其官云々、宜其譜第之選、永從停廢、取藝業者聞堪理郡者爲之云々、其國造兵衛、同亦停止云々、^{（略）}事具郡司部

郡領の譜第は停廢に従ふ

*〔類聚國史〕^{十九 神祇部十九 國造} 延曆十七年四月甲寅、^{（四日）}勅、依去三月十六日勅云々、郡領譜第、既

從停廢、國造兵衛、同亦停止、但先補國造、服帶刀杖、宿衛之勞不可不矜、宜除國造之名、補兵衛之例、

九月七日、祈年の幣帛を奉るべき神社を定め、僻遠の諸國の神社には、當國の物を用ひて奉幣せしむ

〔類聚國史〕^{十 神祇部十 祈年祭} 延曆十七年九月癸丑、^{（七日）}定可奉祈年幣帛神社、先是、諸國祝等毎年入京、

各受幣帛、而道路僻遠、往還多難、今便用當國物、

○蓋し、國幣の制の起原なり、

十月十二日、官符を下し、出雲國造及び筑前國宗像神主の神事に托して、百姓の女子を娶り、神宮采女と號して妾となすことを禁ず

〔類聚三代格〕

神宮司神主禰宜事

太政官符

禁出雲國造託神事多娶百姓女子爲妾

右被^(神主)右大臣宣旨、奉勅、今聞、承前國造兼帶神主、新任之日即棄嫡妻、仍多娶百姓女子號爲

神宮采女、便娶爲妾、莫知限極、此是妄託神事、遂扇淫風、神道益世豈其然乎、自今以後不得

已むを得ざれば、國司、名を注し一女を卜定すべし

更然、若娶妾供神事不得已者、宜令國司注名密封卜定一女、不得多點、如違此制、隨事科處、筑前國宗像神主准此、

延曆十七年十月十一日^(二)

〔類聚國史〕

十九 神祇部十九 國造

延曆十七年十月丁亥^(十二日)、勅、國造郡領、其職各殊、今出雲筑前兩國、

慶雲三年以來、令國造帶郡領、託言神事、動廢公務、雖有其怠、無由勘決、自今以後、不得令

國造帶郡領、又國造兼帶神主、新任之日、例皆棄妻、取百姓女子、號爲神宮采女、便娶爲妾、

妄托神事、遂扇淫風、稽之國典、理合懲肅、宜國司卜定一女供之、

延曆十八年^(七九九)

四月十六日、大伴宿禰峰麻呂を遣新羅使に任ずるも、五月二十九日、遣新羅使を停む

〔日本後紀〕

八 桓武天皇

延曆十八年四月庚寅^(十六日)、從五位下中臣丸朝臣豐國爲齋宮頭、正六位上大伴

宿禰峰麻呂爲遣新羅使、正六位上林忌寸眞繼爲錄事、

五月壬申^(二十九日)、停遣新羅使、

延曆十七年^(七九八)—延曆十八年^(七九九)

延曆十九年（八〇〇）——延曆二十年（八〇一）

二二四

延曆十九年（八〇〇）

十二月四日、是より先、大宰府、宗像郡大領の宗像神主を兼帶することにつき、官裁を請ふ、是日、太政官符を下して、宗像郡大領の宗像神主を兼帶することを禁ず

〔類聚三代格〕

七
郡司事

太政官符

應停筑前國宗像郡大領兼帶宗像神主

右得大宰府解僞、當郡大領補任之日、例兼神主即敍五位、而今准去延曆十七年三月十六日 勅、

譜第之選永從停廢、擢用才能、具有條目、大領兼神主外從五位下宗像朝臣池作十七年二月廿四

日卒去、自爾以來頻闕供祭、歷試才能未得其人、又案神祇官去延曆七年二月廿二日符僞、自今

以後簡擇彼氏之中潔清廉貞、堪祭亶者、補任神主、限以六年相替者、然則神主之任既有其限、

假使有才堪理郡兼帶神主、居終身之職兼六年之任、亶不穩便、謹請官裁者、右大臣宣僞、奉勅、

郡司神主職掌各別、莫令郡司兼帶神主、

延曆十九年十二月四日

氏の中より潔清廉貞、祭事に堪る者を選びて神主に補任す

延曆二十年（八〇一）

八月十日、藤原葛野麻呂を遣唐大使に、石川道益を副使に任ず

〔日本紀略〕

桓武天皇

延曆二十年八月庚子、從四位下藤原葛野麿爲遣唐大使、從五位下石川道益爲

副、判官錄事各四人、

菅原清公

※〔續日本後紀〕

十二
仁明天皇

（八四二）

（十七日）

承和九年十月丁丑、文章博士從三位菅原朝臣清公薨、清公、故遠江介

從五位下古人之第四子也、父古人儒行高世、不與人同、家無餘財、諸兒寒苦、清公年少、略涉

經史、

（七八四）

延曆三年詔令陪東宮、弱冠奉試、補文章生、學業優長、舉秀才、十七年對策登科、除大

學少允、廿一年任遣唐判官、兼近江權掾、廿三年七月渡海到唐、與大使俱謁天子、得蒙顧盼、

延曆二十一年遣唐判官に任ず

二十四年七月歸朝し從五位下に敘せらる

(八〇五)

廿四年七月歸朝、敍從五位下、轉大學助、大同元年任尾張介、不用刑罰、施劉寬之治、弘仁三年秩滿入京、補左京亮、遷大學頭、四年任主殿頭、五年拜右少辨、轉左少辨、遷式部少輔、七年加從五位上、兼阿波守、九年有詔書、天下儀式、男女衣服、皆依唐法、五位已上位記、改從漢樣、諸宮殿院堂門閣、皆着新額、又肆百官舞踏、如此朝儀、並得關說、十年正月加正五位下、兼文章博士、侍讀文選、兼參集議之事、十二年敍從四位下、轉式部大輔、尋任左中辨、有不適意、求遷右京大夫、上從容問京職大夫官品、清公朝臣對曰、正五位官、即日改爲從四位官、左亦同之、十四年除彈正大弼、天長元年出爲播磨權守、不異左貶、時人憂之、二年八月公卿議奏、國之元老、不合遠離、更使入都、兼文章博士、三年三月亦遷彈正大弼、兼信濃守、復轉左京大夫、文章博士如故、八年正月授正四位下、承和二年兼但馬權守、侍讀後漢書、六年正月敍從三位、老病羸弱、行步多艱、勅聽乘牛車到南大庭梨樹底、斯乃稽古之力、非徇求所致、其後託病、漸絕入內、仁而愛物、不好殺伐、造像寫經、以此爲勤、恆服名藥、容顏不衰、薨時年七十三、

朝野鹿取遣唐准錄事に任ず

※〔續日本後紀〕

十三
仁明天皇

(八四三)

(十一日)

承和十年六月戊辰、參議從三位勳六等兼越中守朝野朝臣鹿取薨、鹿取

者、元大和國人、正六位上忍海原連鷹取之子也、叔父從六位上朝野宿禰道長爲子出身、延曆十一年自言歸父戶、追賜父鷹取姓宿禰、卽入京、少遊大學、頗涉史漢、兼知漢音、始試音生、任相摸博士、後登科爲文章生、自此累遷遣唐准錄事、大宰大典、式部錄、左大史、左近衛將監等職、弘仁二年恩勅、敍從五位下、以帝昔在藩之日侍講也、○下略

延曆二十年(八〇二)

延曆二十年（八〇二）—延曆二十二年（八〇三）

二二六

○公卿補任（天長十年）の朝野鹿取の官歴に、「延曆廿一四十五任遣唐錄事」と見ゆ、

紀夏井

園基を善くす

＊〔日本三代實錄〕^{十三} 貞觀八年九月廿二日甲子^{○中} 夏井者左京人、美濃守從四位下善岑之第三子也、夏井眉目疎朗、身長六尺三寸、性甚溫仁、雅有才思^{○中} 夏井兼能雜藝、尤善園基、伴宿禰少勝雄以善奕碁、延曆聘唐之日、備於使員、以碁師也、^{○下} 略

延曆二十二年（八〇三）

三月六日、藤原河清に正二位を贈る、尋で十四日、遣唐使に彩帛を賜ふ

〔日本紀略〕^{桓武} 延曆二十二年二月乙酉、賜遣唐大使已下水手已上物有差、^{（四日）}

三月丁巳、詔曰、入唐大使贈從二位藤原朝臣河清、銜命先朝修聘唐國、既而歸舳迷津漂蕩、

物故於他郷、可贈正二位、河清、贈太政大臣房前之第四子也、本名清河、唐改爲河清、天平勝

寶四年、以參議民部卿爲聘唐大使、天寶十二載與留學生朝衡^{（仲實）}同舟歸朝、海路逢風漂泊安南、天

平寶字三年、遣散位助外從五位下高元度等於唐國迎河清、唐朝亂故、元度等久不得朝見、勅云、

河清是本國貴族、朕所鍾愛、故且留之、不許放還、待國家寧定、差使發遣、元度等經年不歸、

本朝爲怪、宜取南路早歸命、於是河清悲傷流涕、遂以大曆五年正月薨、時年七十三、贈潞洲大

都督、

乙丑、賜遣唐使彩帛各有差、^{（十四日）}

己巳、遣唐使等於朝堂院拜朝、^{（十八日）}

三月十八日、遣唐使拜朝し、二十九日、賜餞、天皇、遣唐使に御製を賜ふ

庚辰、遣唐大使葛野麿、副使石川道益賜餞、宴設之事一依漢法、酒酣、上喚葛野麿於御床下賜酒、天皇歌云、許能佐氣波、於保邇波安良須、多比良可爾、何倍理伎未勢止、伊婆比多流佐氣、

四月二日、遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂に節刀を授く

四月十六日、遣唐使、難波津を進發するも暴風雨に遭ひ、沈溺する者多し

葛野麿涕淚如雨、侍宴群臣無不流涕、賜葛野麿御被三領、御衣一襲、金二百兩、道益御衣一襲、金一百五十兩、

四月壬午、遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麿、副使從五位上石川朝臣道益等辭見、即授節刀、詔曰云々、

癸卯、遣唐大使葛野麿言、今月十四日、於難波津頭始乘船、十六日進發、云々、廿一日暴雨疾風、沈石不禁、未初、風變打破舟、云々、其明經請益大學助教豐村家長、遂波沒不知所著、沈溺之徒不可勝數、云々、今遣右衛士少志日下三方、馳問消息、廻奏曲奏上、

乙巳、葛野麿等上表曰、云々、

戊申、遣典藥頭藤原貞嗣、造宮大工物部建麿等、理遣唐船并破損雜物、

五月辛未、遣唐使奉還節刀、以船舶損壞不得渡海也、

四月二十八日、藤原葛野麻呂の上奏により、藤原貞嗣らを遣し、遣唐船・破損雜物を修造せしむ
五月二十二日、船舶の損壞のため渡海し得ざるにより、遣唐使節刀を奉還す
七月、新羅、日本國と交聘結好す

〔三國史記〕新羅本紀十
四年秋七月、與日本國交聘結好、

閏十月二十三日、僧最澄、渡海平安を祈らんがため、大宰府龍門山寺に藥師佛像を造る

〔叡山大師傳〕延曆廿二年閏十月廿三日、於太宰府龍門山寺、爲四船平達、敬造白檀像藥師佛四軀、高六尺餘、其名號無勝土善名稱吉祥王如來、又講說法華涅槃華嚴金光明等大乘經、略下

※〔續日本後紀〕六
仁明天皇 承和四年十二月庚子、略中 大宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長大姫大目命、忍骨命、豐比咩命、惣是三社、元來是石山、而上木惣無、至延曆年中、遣唐請

延曆二十二年（八〇三）

延曆二十二年（八〇三）—延曆二十三年（八〇四）

二二八

最澄、香春岑神に祈る

益僧最澄躬到此山祈云、願緣神力、平得渡海、即於山下、爲神造寺讀經、爾來草木翳鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之災、郡司百姓就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祠、許之、

是歲、大宰府、消息を新羅に送り、遣唐使派遣の由を告ぐ

〔日本後紀〕^{十二}
桓武天皇 延曆廿三年九月己丑、遣兵部少丞正六位上大伴宿禰岑萬里於新羅國、太政官牒曰、遣使唐國、修聘之狀、去年令大宰府送消息訖、^{（八〇三）}
略

延曆二十三年（八〇四・哀莊王五年・貞元二十年）
三月五日、遣唐使拜朝す

〔日本後紀〕^{十二}
桓武天皇 延曆廿三年三月庚辰、遣唐使拜朝、

三月二十五日、遣唐大使藤原葛野麻呂ら、殿上にて賜餞す、二十八日、遣唐大使藤原葛野麻呂に節刀を授く

〔日本後紀〕^{十二}
桓武天皇 延曆廿三年三月庚子、^{（二十五日）}
略 是日、召遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂、副使從五位上石川朝臣道益等兩人、賜餞殿上、近召御床下、綸旨殷勤、特賜恩酒一杯寶琴一面、酣暢奏樂、賜物有差、
癸卯、授大使葛野麻呂節刀、
（二十八日）

是間、最澄、渡唐に際し、宗像孔大寺權現に參詣し、神明に圓戒を授くと傳ふ

〔宗像大菩薩御緣起〕

一孔大寺權現者、御垂迹之時代不知之、本地奉祕之、大宮司一人之外者、不相傳之、吉野象王^{イ藏}
權現土一跡異名之神明云、

彼山頂仁有大齋窟穴、仍號穴大寺、自彼穴神明或現白馬之形、或現大蛇之形、指出半身、祭禮於

鐘の岬の海上往復の者は乗船以前に參詣し祈誠を致す

七月、遣唐使船筑紫を發遣するも暴風に遭ふ、九月十八日、大伴宿禰岑萬里を新羅に遣し、遣唐使派遣の由を告ぐ

五月、日本國使新羅に黄金を進む

受^{玉惠}利、上古者、爲九州平均之役、致每年不闕之祭祠、爲諸國之順役、彼山頂穴口仁造高棚、其上

仁號生贄主、未開之女人於一人居置計利、然於七日中仁、靈神自彼穴乃口、指出半身、食^玉彼生贄、

其^{親類}患无限、昔祭禮時者、甌松原仁立甌、御供於調美^{惠天}、彼松原與穴大寺山中間、七八里之間、九州之

人民等、群集^{惠天}、至滿天彼山頂仁、立連天、傳供仁奉備之、仍昔者穴大寺^{土渡國}大事^{土書計利}、

然間靈驗異于他、無左右神前於通人无之、御前海^マ上於往覆之船、多令破損之間、此海上通人者、

先乘船以前仁令參詣、致祈誠云云、仍延曆廿一年^(三)壬^(甲)申^(申)最澄^(傳教大師)和尚、爲渡唐安船御祈禱、有參

詣、致顯密之法施、奉授圓戒於神明、自其時靈神改邪執、歸正理、自今以後者、嘗法花之法

味、不可食生贄、結緣繫屬衆生、悉可令度脫之由有誓、仍其年當日向國之順役、或人備鍾愛

之息女於彼生贄仁彼女人年來法花信仰之間、讀誦之處仁、白髮老翁出來^天聽聞之、其後蛇體之

靈神、雖出現^玉不食之、詫宣云、我依渡唐之比丘教戒、改邪執訖、自今以後者、留生贄、可

書寫讀誦法花經^{於云}、仍每年不闕仁祭禮之時、法花經一部、被書寫供養處也、

○大菩薩御緣起には延曆二十一年と記すも、二十三年の誤りにつき、こゝに掲ぐ、

〔三國史記〕^{新羅本紀十}五年、夏五月、日本國遣使、進黄金三百兩、^(八〇四)

〔日本後紀〕^{十二}延曆廿三年九月己丑、遣兵部少丞正六位上大伴宿禰岑萬里於新羅國、太^(十八日)

政官牒曰、遣使唐國、脩聘之狀、去年令大宰府送消息訖、時無風信、遂變炎涼、去七月初、四船入海、而兩船遭風漂廻、二船未審到處、卽量風勢、定着新羅、仍遣兵部省少丞正六位上

延曆二十三年（八〇四）

延曆二十三年（八〇四）

二三〇

大伴宿禰岑萬里等尋訪、若有漂着、宜隨事資給、令得還鄉、不到彼堺、冀遣使入唐、訪覓具報、

十二月、日本國使入唐朝貢す

〔舊唐書〕^{十三} 貞元二十年十二月、吐蕃・南詔・日本國竝遣使朝貢、
德宗本紀

〔舊唐書〕^{一九九} 貞元二十年、遣使來朝、留學生橘免勢・學問僧空海、
倭國傳

〔新唐書〕^{二三〇} 貞元末、其王曰桓武、遣使者朝、其學子橘免勢浮屠空海、願留肄業、
東夷傳 日本傳

〔冊府元龜〕^{九七二} 貞元二十年十二月、南詔・蠻彌臣國、日本・吐蕃並遣使來朝貢、
外臣部 朝貢五

橘逸勢

〔橘逸勢傳〕 贈從四位下橘朝臣逸勢者、正一位左大臣諸兄曾孫、右中辨從四位下入居男子也、爲性放誕、不抱細節、尤妙隸書、

唐中の文人、橘秀才と呼ぶ

延曆二十三年^{方貞元二十年}三月癸卯、從遣唐大使正四位上右大辨藤原朝臣葛野、汎渤海、留住唐國、曆訪明哲、受業學之、唐中文人呼爲橘秀才、大同元年^{方元和元年}八月□、從遣唐判官正六位上高階真人遠成歸朝、○下略

空海

〔續日本後紀〕^四 承和二年三月丙寅、大僧都傳燈大法師位空海終于紀伊國禪居、
仁明天皇

讚岐國多度郡人

惠果和尚に遇ひ眞言を學び、
祕密の門を啓き、大日の化
を弘む

五月十二日、空海、藤原葛
野麻呂の船に乗り出航す

七月六日、松浦郡田浦より
四船解纜す

勅遣内舍人一人、弔法師喪、并施喪料、後太上天皇有弔書曰、眞言洪匠、密教宗師、邦家憑其
護持、動植荷其攝念、豈圖崦嵫未逼、無常遽侵、仁舟廢棹、弱喪失歸、嗟呼哀哉、禪關僻在、
凶聞晚傳、不能使者奔赴相助茶毘、言之爲恨、悵悼曷已、思忖舊窟、悲涼可料、今者遙寄單書
弔之、著錄弟子、入室桑門、悽愴奈何、兼以達旨、法師者、讚岐國多度郡人、俗姓佐伯直、年
十五就舅從五位下阿刀宿禰大足、讀習文書、十八遊學槐市、時有一沙門、呈示虛空藏求聞持法、
其經說、若人依法、讀此眞言一百萬遍、乃得一切教法文義諳記、於是信大聖之誠言、望飛焰於
鑽燧、攀躋阿波國大瀧之嶽、觀念土左國室戸之崎、幽谷應聲、明星來影、自此慧解日新、下筆
成文、世傳、三教論、是信宿間所撰也、在於書法、最得其妙、與張芝齊名、見稱草聖、年卅一
得度、延曆廿三年入唐留學、遇青龍寺惠果和尚、稟學眞言、其宗旨義味莫不該通、遂懷法寶、
歸來本朝、啓祕密之門、弘大日之化、(八二四)天長元年任少僧都、七年轉大僧都、自有終焉之志、隱居
紀伊國金剛峯寺、化去之時年六十三、

＊〔扶桑略記〕

抄二
桓武天皇

延曆廿三年五月十二日、大安寺空海和尚、生年卅一、遂入唐志矣、附遣

唐大使越前太守正三位藤原朝臣賀能

本名葛野萬呂

乘船解纜、秋八月、到衡州岸、同十二月下旬、至上都

長安城、已當大唐貞元廿年、(八〇四)

依詔安置宣陽坊官宅、

＊〔日本高僧傳要文抄〕一

(弘法)

延曆二十三年甲申以右大辨兼越前大守藤原朝臣葛野麻呂後稱賀能、爲

遣唐大使、以發向之、

(弘法)

大師奉勅爲留學、其年六月同乘賀能船、七月六日發從肥前國松浦郡田浦、

延曆二十三年(八〇四)

延曆二十三年（八〇四）

二二二

八月十日、福州長溪縣に至る

四船解纜、次船傳教大師管清公同乗云々于時年三十一、彼海路行程三千里、而到蘇洲、揚洲者平易也、到衡洲、

福州者艱難也、大使船進行七百里、經三十四箇日、同年八月十日到福州長溪縣、略中

又云、唐帝尊重大師、賞賜無筭、禮遇尤深、大師甘心惜別、帝仍以菩提寶數珠給大師曰、爾以此爲朕代莫永忘、朕初謂留師、而今遙還東、欲待後紀、朕年既過半、願一期之後必值遇于師、又云、大同元年八月、趣於本郷、泛舶之日祈請發誓云、學教法祕密、若有感應地者、我斯三鈔

歸朝に際し、三鈔を授ず

飛到而點著、仍向日本之方投揚之、遙入空中、飛帆之後數遇漂蕩、發一願云、歸朝之日必爲增益諸天威光擁護國家利濟衆生、建立一禪院依法修行、願善神護念、早達本岸、忽有感應、波濤

漸定、金剛峰寺依其願所建立也

又云、於海上船中人云、日本國天皇崩、云々、側聞此言尋問、首尾都不分明、大師粗覺云、既而晏然歸朝、先聞天皇晏駕之實說、含悲歎著素服、略下

遣唐大使藤原葛野麻呂、福州の觀察使に書を與ふ

＊〔遍照發揮性靈集〕五 爲大使與福州觀察使書 一首

賀能啓、高山澹默、禽獸不告勞、而投歸、深水不言、魚龍不憚倦、而逐赴、故能、西羌梯險、貢垂衣君、南裔航深、獻刑厝帝、誠是、明知艱難之亡身、然猶、忘命德化之遠及者也、伏惟、大唐聖朝、霜露攸均、皇王宜宅、明王繼武、聖帝重興、掩頓九野、牢籠八紘、是以、我日本國、常見風雨和順、定知、中國有聖、剗巨輪於蒼嶺、摘皇花於丹墀、執蓬萊琛、獻崑崙玉、起昔迄今、相續不絕、故今、我國主、顧先祖之貽謀、慕今帝之德化、謹差太政官右大辨正三品兼行越前國大守藤原朝臣賀能等、充使、奉獻國信別貢等物、賀能等、忘身銜命、冒死入海、既辭本

中途に、暴風雨帆を穿ち梶を折る

波上に掣々として二月有餘、水盡き人疲る

獻ずる所の信物・印書を用ひず

州使、船上を檢括し、公私を計り數ふ、遇すること昔と異なる

建中以往の入朝使船、楊蘇に着し、漂蕩の苦無し

涯、比及中途、暴雨穿帆、戕風折柁、高波沃漠、短舟裔々、凱風朝扇、摧肝耽羅之狼心、北氣夕發、失膽留求之虎性、頻蹙猛風、待葬鼃口、攢眉驚汰、占宅鯨腹、隨浪昇沈、任風南北、但見天水之碧色、豈視山谷之白霧、掣掣波上、二月有餘、水盡人疲、海長陸遠、飛虛脫翼、泳水殺緒、何足爲喻哉、僅八月初日、乍見雲峯、欣悅罔極、過赤子之得母、越旱苗之遇霖、賀能等、萬冒死波、再見生日、是則、聖德之所致也、非我力之所能也、又大唐之遇日本也、雖云、八狄雲會、膝步高臺、七戎霧合、稽顙魏闕、而於我國使也、殊私曲成、待以上客、面對龍顏、自承鸞綸、佳問榮寵、已過望外、與夫瑣瑣諸蕃、豈同日而可論乎、又竹符銅契、本備奸詐、世淳人質、文契何用、是故、我國淳樸已降、常事好隣、所獻信物、不用印書、所遣使人、無有紆僞、相襲其風、于今無盡、加以、使乎之人、必擇腹心、任以腹心、何更用契、載籍所傳、東方有國、其人懇直、禮義之鄉、君子之國、蓋爲此歟、然今、州使責以文書、疑彼腹心、檢括船上、計數公私、斯乃、理合法令、事得道理、官吏之道、實是可然、雖然、遠人乍到、觸途、多憂、海中、之愁、猶委胸臆、德酒之味、未飽心腹、率然禁制、手足無厝、又建中以往、入朝使船、直着楊蘇、無漂蕩之苦、州縣諸司、慰勞慇懃、左右任使、不檢船物、今則、事與昔異、遇將望疎、底下愚人、竊懷驚恨、伏願垂柔遠之惠、顧好隣之義、縱其習俗、不怪常風、然則、涓涓百蠻、與流水、而朝宗舜海、喁喁萬服將葵藿、以引領堯日、順風之人、甘心輻湊、逐腥之蟻、悅意駢羅、今不任常習之小願、奉啓不宣、謹啓、

＊〔遍照發揮性靈集〕六 爲藤中納言大使願文

延曆二十三年（八〇四）

延曆二十三年（八〇四）

二三四

藤原葛野麻呂、海難に際し百八十七所の天神地祇に、神毎に金剛般若經一卷の寫經供養を立願す

某乙聞、智慧源極強名佛陀、軌持妙句假日達磨、智能圓故無所不爲、法能明故自他兼濟、五眼常鑒津涉溺子、六通自由拔拯樊籠、桓因所以憑念、摩醯歸之接足、不宰之功、何敢比喩之矣、弟子去延曆二十三年銜天命於大唐、遠涉鯨海、風波沃天、人力何計、自思不因冥護、寧得遂皇華之節乎、卽祈願、奉爲一百八十七所之天神地祇等、奉寫金剛般若經每神一卷、鐘谷感應、得果使乎之義、寤寐服思、食不甘味、雖然公私擾擾、遲延跼蹐、謹以弘仁四年十月二十五日奉寫供養竝以轉諷每卷一遍、伏願以此妙業崇彼神威、金剛慧日銷竭愛河、實相智杵摧碎邪山、自他平等、斷割妄執、怨親齊沐、轉禍爲福、三有六途、皆悉四恩、蚊行蟻動、何無佛性、遍灑平等之法雨、早熟妙覺之根果、

＊〔遍照發揮性靈集〕五 與福州觀察使入京啓 一首

空海、遣唐使に随ひ入京するを許されざるにより、福州觀察使に入京を請ふ

日本國留學沙門空海啓、空海才能不聞、言行無取、但知雪中枕肱、雲峯喫菜、逢時乏人、遽留學末、限以廿年、尋以一乘、任重人弱、夙夜惜陰、今承、不許隨使入京、理須左右、更無所求、雖然居諸不駐、歲不我與、何得厚荷國家之憑、空擲如矢之序、是故歎斯留滯、食早達京、伏惟中丞閣下、德簡天心、仁普近遠、老弱連袂、頌德溢路、男女携手、詠功盈耳、外示俗風、內淳眞道、伏願顧彼弘道、令得入京、然則早尋名德、速遂所志、今不任陋願之至、敢塵視聽、伏深戰越、謹奉啓以聞、謹啓、

貞元二十年十月日

（八〇四）
（福州觀察使）
中丞閣下

日本國學問僧空海啓

海中に惡風に遭ひ、最澄、所持の舍利を海龍王に施す

※〔日本高僧傳要文抄〕二 傳教大師

〔延暦〕

二十三年秋七月、上第二船、直指西方、於滄海中卒起黑風侵船異常、諸人懷悲無有恃生、於是和上發種々願起大悲心、所持舍利施海龍王、忽息惡風、始扇順風、未久着岸、名爲明州鄞縣、

此台州近境地也、天感人欲、泊船有便、聖風遠扇、往還無滯、略

大唐貞元廿年九月上旬船頭判官等上京、但和尚別向天台山、略同月下旬到台州天台山國清寺、

○中

最澄、副使菅原清公の第二船にて渡海す

※〔扶桑略記〕

抄二

桓武天皇

延暦廿三年秋七月、延暦寺最澄和尚、行年卅八、從遣唐副使菅原朝臣清

公、上第二船渡海、弘法大師傳云、五月十二日入唐、傳教大師傳云、秋七月直指西海、又官符文云、最澄和尚四月奉詔渡海、三文相違何於滄海中卒起黑風、諸人懷悲、无

有恃生、於是最澄和尚發大悲心、所持舍利施海龍王、忽息惡風、未久着岸、名爲明州、最澄和尚九月下旬到台州、天台國清寺衆僧遞來、各竭禮敬、頂戴隨喜、我道興隆、今當時矣、天台修禪寺座主僧道邃令寫天台法門、授與日本澄和上、邃和上親開心要、咸決義理、又於邃和上所、爲傳三學之道、願求三聚之戒、即邃和上照察丹誠、莊嚴道場、奉請諸佛、授與菩薩三聚大戒、又有付法佛隴寺僧行滿座主、見求法深心、自相語云、昔聞、智者大師告諸弟子等、吾滅後二百餘歲、始於東國興隆我法、聖語不朽、今遇此人矣、我所披閱法門、捨與日本國閼梨、將去海東、當紹傳燈、即行滿座主云、早年出家、誓學佛法、遂於毗陵、大曆年中、得值荆溪先師、訓物不揆、掃灑龜墳、修持院中、經今廿餘祀、忽逢日本國求法供奉大德最澄、法師不憚勞苦、遠涉滄

行滿に學ぶ

延暦二十三年（八〇四）

延暦二十三年（八〇四）

二三六

順曉より三部三昧耶圖樣契印法文道具等を授かる

海、早達郷關弘教門、又大唐貞元^{（八〇五）}廿一年四月上旬、和尚來到船所、更爲求真言向於越府龍興寺、幸得值遇泰岳靈巖山寺鎮國道場大德內供奉沙門順曉、々感信心之願、灌頂傳授三部三昧耶圖樣契印法文道具等、順曉闍梨付法書云、大唐國開元朝、大三藏婆羅門國王子、法號善无畏、從佛國大那蘭陀寺傳大法輪、至大唐國、付屬傳法弟子僧義林、亦是國師、大阿闍梨一百三歲、今在新羅國傳法、轉大法輪、又付大唐弟子僧順曉、是鎮國道場之阿闍梨、又付日本國供奉大德弟子最澄轉大法輪、僧最澄是第四付屬傳授、唐貞元^{（八〇五）}廿一年四月十九日書記、令佛法永々不絕、阿闍梨沙門順曉錄付最澄、^上已最澄和尚五月中旬上遣唐大使藤原賀能第一船、三寶護念、神祇冥護、海中無恙、遂歸本朝、^上已

＊〔顯戒論緣起〕上

僧最澄牒

日本國求法僧最澄

天台受具足戒僧義眞

牒、僧義眞去年十二月七日、於大唐台州唐興縣天台山國清寺受具足戒已畢、謹連台州公驗、請當州公驗印信、謹牒、牒件狀如前、謹牒、

^{（八〇五）}
貞元二十一年四月五日 求法僧最澄牒

任爲憑據、四月八日、明州刺史鄭審則給、

日本國入唐使

持節大使

持節大使從四位上行太政官右大辨兼越前守藤原朝臣葛野麿

准判官兼譯語

准判官兼譯語正六位上行備前掾笠臣田作

錄事

錄事正六位上行式部少錄兼伊勢大目助六等山田造大庭

錄事

錄事正六位上行太政官左少使常陸少目上毛野公穎人

僧最澄將來目錄

＊〔延曆寺文書〕

日本國求法僧最澄等勘定合疏記等壹佰貳部貳佰肆拾卷之中別絹圖壹卷但疏紙陸仟捌佰玖拾漆紙

妙法蓮華經玄義十卷 智者大師出 二百七十二紙

妙法蓮華經玄義釋十卷 荆溪和尚撰 三百四十三紙中略

右、件天台智者大師所釋大乘經等并所說教迹及第二第五六祖等傳記并別家抄等惣有百二十部三百四十五卷、除經教迹所用之紙八千五百三十二紙、最澄等深蒙郎中慈造、於大唐台州臨海縣龍興寺淨土院、依數寫取、勘定已畢、謹請當州印信、示後學者、求法有在、然則

郎中法施之德、永劫無窮、衆生法用之用、長夜不盡、願傳法高光、廻向使君、念念增福、刹那圓智、然後普及十方一切含識、俱乘一寶車、同遊八正路、怨親平等、自他俱也、

大唐貞元（八〇五）貳拾壹年歲次乙酉貳月朔辛丑拾玖日乙未

日本國比叡山寺求法僧 最澄 錄

求法譯語僧義真

日本國求法譯語僧 義真

求法儼從丹福成

日本國求法儼從 丹福成

勾當大唐天台山圓宗座主 西京和尚道邃

延曆二十三年（八〇四）

延曆二十三年（八〇四）

二三八

最澄闇梨形雖異域、性實同源、特稟生知、觸類懸解、遠求天妙旨、又遇龍象邃公、總萬行於一心、了殊途三觀、親承祕密、理絕名言、猶慮他方學徒、不能信受、處請當州印記、安可不任爲憑、大唐貞元廿一年二月廿日朝議持節台州諸軍事守台州刺史上柱國淳給書
（八〇五）
日本國入唐使

持節大使從四位上行太政官右大辨兼越前守藤原朝臣葛野麿

准判官兼譯語正六位上行備前掾 笠 臣田作

錄事正六位上行式部省少錄兼伊勢大目勳六等山田造大庭

錄事正六位上行太政官左少史兼常陸少目上毛野公穎人

「八紙」

「新度」

最澄目錄惣合二百三十部四百六十卷

日本國求法僧最澄目錄

惣合二百三十部四百六十卷

向台州求得求法門都合一百二十八部三百四十五卷名目具別錄

向越府取本寫取經并念誦法門部都合一百二部一百一十五卷

五佛頂轉輪王經五卷

一百張
○中略

眞言和上付法印信三鈷拔折羅一口

已上念誦供養具樣也、

右、件念誦法門等并念誦供養具樣等、向越府龍興寺、詣順曉和上所、卽最澄并義真逐和尙到湖鏡東峯山道場、和上導兩僧、治道場、引入五部灌頂曼荼羅壇場、現蒙授眞言法、又灌頂眞言水、便寫取上件念誦法門并供養具樣、勘定已畢、最澄等深蒙

郎中慈造、去年向台州、兩僧等受大小二乘戒、又寫取數百卷文書、今年進越府、二僧入五部灌頂壇、又抄取念誦法門、前後都惣二百三十部四百六十卷也、能事已畢、今歸本郷、今欲請當州印信、外方學徒等、將示求法元由矣、然則郎中傳法之功、攀福於現當、群生聽法之德、期果於妙覺、伏願

使君、近登三台位、遠證三點果、然後、堅通三界、橫撥十方、六道四生一切含靈、同入禪門、俱遊慧苑、信謗平等、自他得益歟、

大唐貞元(八〇五)貳拾壹年歲次乙酉五月朔己巳拾參日辛巳 日本國求法僧 最澄 錄

日本國求法譯語僧 義 眞

日本國求法僉從 丹福成

弘夫子云、吾聞、西方有聖人焉、其教以清淨無爲爲本、不染不著爲妙、其化人也、具足功德、乃爲圓明、最澄闍梨、性稟生知之才、來自禮義之國、萬里求法、視險若夷、不憚艱勞、神力保護、南登天台之嶺、西泛鏡湖之水、窺智者之法門、探灌頂之神祕、可謂法門龍象、青蓮出池、將此大乘、往傳本國、求茲印信、執以爲憑、咋者

陸台州已與題記、故具所睹、爰申直筆、大唐貞元廿一年五月十五日朝議郎使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國滎陽鄭審則書〇「明州之印」三アリ、

延暦二十三年（八〇四）

二四〇

日本國入唐使

日本國入唐使

持節大使從四位上行太政官右大辨兼越前守藤原朝臣「葛野磨」

准判官兼譯語正六位上行備前掾笠臣「田作」

錄事正六位上行式部省少錄兼伊勢大目勳六等山田造「大庭」

錄事正六位上行太政官左少史兼常陸少目上毛野公「穎人」

遣唐使印

○遣唐使以下ニ「遣唐使印」ニアリ、

最澄、目錄を上表す

進官錄上表

沙門最澄言、最澄聞、六爻探頤、局於生滅之場、百物正名未涉眞如之境、豈若隨他權教、開三乘於機門、隨自實教、示一乘於道場哉、然則圓教難說、演其義者天台、妙法難傳、暢其道者聖帝、伏惟

陛下纂靈出震、撫運登極、北蕃來朝、請賀正於每年、東夷北首、知歸德於先年、於是屬想圓宗、緬懷一乘、紹宣妙法、以爲大訓、由是妙圓極教、應聖機而興顯、灌頂祕法、感皇緣而圓滿、最澄奉使求法、遠尋靈蹤、往登台嶺、躬寫教迹、所獲經并疏及記等、總二百三十部四百六十卷、且見進經一十卷、名曰金字妙法蓮華經七卷・金字金剛般若經一卷・金字菩薩戒經一卷、金字觀無量壽經一卷・及天台智者大師靈應圖一張・天台大師禪鎮一頭・天台山香爐峯送檉及柏木文尺四枚・說法白角如意壹柄、謹遣弟子藏經奉進、但聖鑑照明二門圓滿、不任誠懇之至、奉表戰慄、謹言、

延曆二十四年七月十五日 沙門最澄上表

＊〔延曆寺文書〕

明州牒

明州 牒

〔廿二日、許〕

日本國求法僧最澄往天台山巡禮將金字妙法蓮花經等

金字妙法蓮花經一部八卷外標金字 无量義經一卷

觀普賢經一卷、已上十卷共一函盛封全、最澄稱是日本國春宮未封、未到不許開拆

屈十大德疏十卷 本國大德諍論兩卷 水精念珠十貫 檀龕水天菩薩一軀高一尺

右得僧最澄狀僞、惣將往天台山供養、

供奉僧最澄・沙彌僧義眞・從者丹福成

文書鈔疏及隨身衣物等、惣計貳佰餘斤、

天台山巡禮を志す

牒、得勾當軍將劉承規狀僞、得日本國僧最澄狀、欲往天台山巡禮、疾病漸可、今月十五日發、謹具如前者、使君判付司給公驗并下路次縣、給船及擔送過者、准 判者、謹牒、

（八〇四）
貞元廿年九月十二日史孫階牒

司戸參軍孫萬寶

「許」〇明州之印
四アリ、

延曆二十四年（八〇五・貞元二十一年）
二月、唐帝、日本國王並に妻への同賜品を遣す

〔舊唐書〕

十四
順宗本紀

（八〇五）
貞元二十一年二月甲寅、日本國王并妻、還蕃賜物遣之、

延曆二十三年（八〇四）――延曆二十四年（八〇五）

六月八日、遣唐使第一船、對馬嶋下縣郡に歸着す、十七日、遣唐使第二船、肥前國松浦郡に來到す

〔日本後紀〕^{十二} 延曆廿四年六月乙巳、遣唐使第一船到泊對馬嶋下縣郡、大使從四位上藤

桓武天皇

原朝臣葛野麻呂上奏曰、臣葛野麻呂等、去年七月六日、發從肥前國松浦郡田浦、四船入海、七日戌刻、第三第四兩船、火信不應、出入死生之間、掣曳波濤之上、都卅四箇日、八月十日到福州長溪縣赤岸鎮已南海口、時杜寧縣令胡延沂等相迎、語云、常州刺史柳冕、緣病去任、新除刺史未來、國家大平者、其向州之路、山谷嶮隘、擔行不穩、因廻船向州、十月三日到州、新除觀察使兼刺史閻濟美處分、且奏、且放廿三人入京、十一月三日臣等發赴上都、此州去京七千五百廿里、星發星宿、晨昏兼行、十二月廿一日到上都長樂驛宿、廿三日內使趙忠、將飛龍家細馬廿三匹迎來、兼持酒脯宣慰、駕即入京城、於外宅安置供給、特有監使、高品劉昂、勾當使院、第二船判官菅原朝臣清公等廿七人、去九月一日從明州入京、十一月十五日到長安城、於同宅相待、廿四日國信別貢等物、附監使劉昂、進於天子、劉昂歸來、宣勅云、卿等遠慕朝貢、所奉進物、極是精好、朕殊喜歡、時寒、卿等好在、廿五日於宣化殿禮見、天子不衙、同日於麟德殿對見、所請並允、即於內裏設宴、官賞有差、別有中使、於使院設宴、酣飲終日、中使不絕、頻有優厚、廿一年正月元日於含元殿朝賀、二日天子不豫、廿三日天子（順宗）雍王適崩、春秋六十四、廿八日臣等於亟天門立仗、始着素衣冠、是日太子即皇帝位、諒闇之中、不堪萬機、皇太后王氏、臨朝稱制、臣等三日之內、於使院朝夕舉哀、其諸蕃三日、自餘廿七日而後就吉、二月十日監使高品宋惟澄、領答信物來、兼賜使人告身、宣勅云、卿等銜本國王命、遠來朝貢、遭國家喪事、須緩々將息歸鄉、緣卿等頻奏早歸、因茲賜纒頭物、兼設宴、宜知之、却廻本鄉、傳此國喪、擬欲相見、

十一月二十四日、國信物等を唐帝に進む

唐帝德宗崩す

遣唐使人、唐朝の喪事に遭ふ

五月十八日、明州を解纜し
歸國の途につく

緣此重喪、不得宜之、好去好去者、事畢首途、勅令內使王國文監送、至明州發遣、三月廿九日、到越州永寧驛、越州即觀察府也、監使王國文、於驛館喚臣等、附勅書函、便還上都、越州更差使監送、至管內明州發遣、四月一日先是去年十一月爲廻船明州、留錄事山田大庭等、從去二月五日發福州、海行五十六日、此日到來、三日到明州郭下、於寺裏安置、五月十八日於州下鄞縣、兩船解纜、六月五日臣船到對馬嶋下縣郡阿禮村、其唐消息、今天子、諱誦、大行皇帝之男只一人而已、春秋卅五、有卅餘男子、○下略
甲寅、遣唐使第二船判官正六位上菅原朝臣清公、來到肥前國松浦郡鹿嶋、附驛上奏、事多不載、

七月朔日、遣唐大使藤原葛野麻呂、
節刀を進む

〔日本後紀〕

十三
桓武天皇

延曆廿四年秋七月戊辰朔、遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上節刀、

七月十四日、葛野麻呂ら、唐國答
信物を奉る

〔日本後紀〕

十三
桓武天皇

延曆廿四年七月辛巳、葛野麻呂等上唐國答信物、

七月十六日、大宰府、遣唐使第三
船、肥前國の孤島に漂着せる由を
奏す

〔日本後紀〕

十三
桓武天皇

延曆廿四年七月癸未、大宰府言、遣唐使第三船、今月四日發自肥前國松浦郡庇良嶋、指遠值嘉嶋、忽遭南風、漂著孤嶋、船居巖間、淦水盈溢、判官正六位上三棟朝臣今嗣等脫身就岸、官私雜物、不遑下收、射手數人、留在船上、纜絕船流、不知何去者、勅、使命以國信、爲重、船物須人力乃全、而今不顧公途、偏求苟存、泛船無人、何以能濟、奉使之道、豈其然乎、宜加科責、以峻懲沮、

延曆二十四年（八〇五）

延曆二十四年（八〇五）—大同元年（八〇六）

二四四

七月二十四日、親王參議らに唐國彩帛を賜ふ

〔日本後紀〕

^{十三}桓武天皇

延曆廿四年七月辛卯、賜親王已下參議已上及內侍唐國彩帛各有差、

七月二十五日、遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂らを昇敘す

〔日本後紀〕

^{十三}桓武天皇

延曆廿四年七月壬辰、^{二十五日}○中是日、遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂授從

三位、判官正六位上菅原朝臣清公從五位下、故副使從五位上石川朝臣道益贈從四位下、判官正六位上甘南備真人信影從五位下、道益者、從三位中納言石足之孫、從五位上人成之子也、略涉書記、頗有才幹、美於風儀、卒於大唐明州、朝廷惜之、卒時年卅三、^{二十七}甲午、獻唐國物于山科後田原崇道天皇三陵、^{（天智）（光仁）（平良）}

八月九日、最澄、殿上に於て悔過讀經す

〔日本後紀〕

^{十三}桓武天皇

延曆廿四年八月乙巳、是日、請入唐求法僧最澄於殿上、悔過讀經、最澄

獻唐國佛像、

八月十六日、故入唐副使石川道益に度僧一人を賜ふ

〔日本後紀〕

^{十三}桓武天皇

延曆廿四年八月壬子、賜正四位上藤原朝臣產子度二人、故入唐副使贈從四位下石川朝臣道益一人、

十月十九日、入唐留學生粟田飽田麻呂に、正六位上を授く

〔日本後紀〕

^{十三}桓武天皇

延曆廿四年十月甲寅、投入唐留學生无位粟田朝臣飽田麻呂正六位上、

大同元年（八〇六）哀莊王七年・

〔朝野群載〕

^{二十}異國

元和元年

正月二十八日、唐朝、日本國使大宰大監高階遠成を、中大夫試太子中允となす

異國賜本朝人位記

日本國判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成

右可中大夫試太子中允、餘如故、

日本國使判官

勅、日本國使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成等、奉其君長之命、趨我會同之禮、越溟波而萬里、獻方物於三際所宜褒弊、並錫班榮、可依前件、

(八〇六)
元和元年正月廿八日

中書令闕

中書侍郎平章事臣鄭綱宣

中書舍人臣盧景亮奉行

奉 勅如右、牒到奉行、

元和元年五月 日

檢校司空兼侍中使

黃門侍郎平章事黃裳

給事中登

月 日

侍都事

左司郎中

吏部尙書闕

吏部侍郎宗儒

吏部侍郎闕

大同元年 (八〇六)

大同元年（八〇六）

二四六

尙書左丞平章事左中書

告日本國使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成、奉勅如右、符到奉行、

員外郎次元 主事榮同

令史抵初

書令史

元和元年正月 日下

件正本在內記局、而近代納南所、當日本大同元年丙戌右

※〔舊唐書〕一九九上 倭國傳 東夷傳 元和元年、日本國使判官高階真人上言、（續免勢）前件學生、藝業稍成、願歸

本國、便請與臣同歸、從之、

※〔新唐書〕二二〇 日本傳 東夷傳 貞元末（八〇五）略歷二十餘年、使者高階真人來、請免勢等俱還、詔可、

〔三國史記〕新羅本紀十 哀莊王 七年春三月、日本國使至、引見朝元殿、

三月、日本國使新羅に至る

四月二十四日、攝津國住吉大神に、
遣唐使祈により從一位を授く
〔日本後記〕十三 桓武天皇 大同元年四月丁巳、攝津國住吉郡住吉大神奉授從一位、以遣唐使祈也、

十月二十二日、入唐僧空海歸朝す、
〔扶桑略記〕抄二 桓武天皇 延曆廿五年十月廿二日平城歸朝、付太宰大監高階遠成奏上請來法文之表、（空海）

遣唐判官大宰大監高階遠成に付して、請來法文の表を上る

准勅語即請來、爲教法可流布天下由、勅定已了、

＊〔大師御行狀集記〕第八代御弟子經範集記

着日本國岸條第卅七、

歸住筑前國、傳言種々也、

請來法文上表條第卅八、

錄曰、大同元年十月廿二日、附遣唐判官大監高階遠成上請來法文表云々、○下略

十二月十三日、遣唐判官高階遠成に従五位上を授く

〔類聚國史〕九十九職官四 大同元年十二月壬申、遣唐判官正六位上高階眞人遠成授從五位上、遠成率

爾奉使、不違治行、其意可矜、故復命之日特授焉、

是歲、諸國の神寺諸家の封戸を牒上す、宗像神は七十四戸なり

〔新抄格勅符第十卷抄〕

（寺之）神事諸家封戸 大同元年牒

神封部

合四千八百七十六戸

率河神 六戸 左京四戸 丹後國二戸

伊勢大神 一千百卅戸 ○中略

菅生神 一戸 河内國寶字八年 松尾神 四戸 山城二戸 因幡國二戸 神護景雲元年三年奉充

大同元年（八〇六）

大同元年（八〇六）—大同三年（八〇八）

大嶋神

大嶋神 一戸 近江國 神護景雲□寶元年奉充

奥津嶋神

奥津嶋神 一戸 奥石神 一戸 近江國 同年

花長神 一戸 美乃國 同年奉充 飯道神 一戸 近江國 寶龜二年奉充

甘南備神 一戸 山城國 同年奉充 麻氣神 一戸 丹波國 神護景雲四年奉充○中略

一大宰神封

大神神 六十二戸 筑前國 住吉神 卅六戸

宗像神七十四戸

阿曇神 八戸 宗像神 七十四戸 已上四社同國

八幡神 一千六百六十戸 可定千四百卅戸

田百冊六町九段二百冊四步 神田六町九段二百冊四步 位田百冊町

一品八幡大神 封八百戸 先奉四百廿戸 今加三百八十戸 位田八十町 先奉五十町 今加卅町

二品比咩神 六百戸 位田六十町

田嶋神

田嶋神 十六戸 肥前國 大社神 一戸 壹岐嶋

太祝詞神 二戸 對馬嶋 益救神 一戸 多爾嶋

大同二年（八〇七）
八月八日、神寶並に唐國信物を伊勢神宮に奉る

〔日本紀略〕 平城天皇 大同二年八月癸亥、遣使奉神寶并唐國信物於伊勢大神宮、

大同三年（八〇八・哀莊王九年）
二月、日本國使新羅に至る

〔三國史記〕 新羅本紀十 哀莊王（八〇八） 九年春二月、日本國使至、王厚禮待之、

大同四年（八〇九）

正月十八日、諸國名神に、大般若經一部を書寫奉讀せしむ

〔日本後紀〕

十七
平城天皇

大同四年正月乙未、令天下諸國爲名神寫大般若經一部、奉讀供養、安置國分寺、若无國分寺者、於定額寺、

四月十六日、勅して諸國神社修造の遅れを戒しめ、所在の長官をして專當せしめ給ふ

〔日本紀略〕

嵯峨
天皇

大同四年四月辛卯、勅、修造諸國神社之狀、宣勅先訖、而經涉年月、未加修造、自今以後、在所長官、專當其事、勸致修理、其料度者、以神稅宛、無封之社、宜用正稅、云々、

五月一日、諸國の天神地祇に奉幣し、即位の由を告ぐ

五月丙午朔、任官、始制、留五位已上不輸義倉者封祿、是日、遣使奉幣諸國天神地祇、爲即位也、

弘仁二年（八一二）

七月十七日、安藝國伊都岐嶋神等名神の例に預る

〔日本後紀〕

二十一
嵯峨天皇

弘仁二年七月己酉、安藝國佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神、並預名神例、兼四時幣、

※〔嚴島神社文書〕

安藝國嚴島社神主佐伯景弘解

安藝國伊津岐島社神主散位佐伯朝臣景弘解 申請官裁事

請殊蒙官裁、因准傍例、被下 宣旨、限永代令當國宰吏募重遷任功、修造當社神殿舍屋等狀、

一諸國神社國司募重任功造營例

伊勢國 多度社

守藤原朝臣資成募重任功、造進寶殿舍屋、調進御神寶御裝束等、

大同四年（八〇九）—弘仁二年（八一二）

弘仁二年（八一）

二五〇

（一六六）
永萬二年十二月廿四日 宣旨

駿河國 淺間社

守藤原朝臣爲保募重任功造進神殿舍屋等

（一六八）
仁安三年五月十一日 宣旨
略中

推古天皇丑之年、垂跡

り 佐伯鞍職の子孫、神主職た

右、景弘謹檢案内、當社者推古天皇丑之年、和光同塵垂跡以降、星霜歲重、感應日新、則是鎮護國家之仁祠、當國第一之靈社也、參詣之輩、必蒙眷顧、尊崇之人、專預冥助、因茲每有損色、國郡同心注進□破、被下 宣旨、所令修造也、但不愆其基址、尙立此海濱、然間當波易破、待風不全、爰景弘謹案事情、御垂跡之時、御託宣狀云、末代及破壞、令造改之日、先經上奏、輒莫進止、兼又以異姓他人不可爲神主、不可從神事、以佐伯鞍職子と孫と爲神主職、令遂造營者、彼鞍職者景弘之曩祖也、景弘者件鞍職之末孫也、且依爲重代之神主、且以爲譜第之氏人、件神殿并舍屋等偏勵私力、悉遂造畢、是則社家之力不幾、土木之功難成之故也、抑神殿之外舍屋、元是爲板葺、今皆改檜皮、加之神殿舍屋或增間數、或多新造、以金銅爲金物、施華麗加莊嚴、大厦之構不日終功、是依致信心、自可叶神慮者歟、勤勞已超前蹤、感應盍覃來葉、唯恐將來破損之時、自無人於修復、仍諸國神社、募重任功國司造營例、粗注大概載狀、古今准傍例、被下宣旨、自今以後、限未來際、當社破壞顛倒之時、隨社家申請、令當國宰吏、募重遷任功、遂其修造、然則國家泰平、彌撫明民、社壇靜謐、鎮祈天長、望 官裁、因准傍例、爲被下件 宣旨、注狀以解、

（一六八）
仁安三年十一月日

神主散位佐伯朝臣景弘

嚴島大明神、九州より遷り
給ふ
推古天皇端政五年癸丑

御賀島

内舍人佐伯鞍職

※〔長門平家物語〕

五 嚴島次第事

嚴島大明神と申は旅の神にまします、佛法興行のあるじ慈悲第一の

明神なり、娑竭羅龍王の娘八歳の童女には妹、神宮皇后にも妹、淀姫には姉なり、百王を守護

し、密教を渡さん謀に皇城をちかくとおぼして九州より寄給へり、その年記は推古天皇の御

宇端政五年癸丑九月十三日、○中略或日午の時ばかりに沖の方を見れば、くれなるの帆をひきた

る大船一艘出來、近づくを見れば、船にはあらず、瑠璃のつぼにありき、ぬさをつけて順風に

任せ、佐伯が舟に寄せたり、いかにと見る所に、壺の中よりめでたき貴女の十二重に成見え

給へるが、我は是西の國にありつるが、思ふ心ある故にはるかに遠旅せり○中略われ此所に住ま

んと思ふ、しかるべくは汝先達として此島を見せよと仰せられければ藏本仰に隨いて島廻りす、

○中略御覽んじて、あらいつくしと仰せられたりしをもていつくしまと號す、もとは御賀島と申

す、○上略

※〔源平盛衰記〕

十三 入道信嚴島并垂迹事

抑嚴島明神ト申ハ、推古天皇御宇癸丑端正五年十一月十二日、

内舍人佐伯鞍職ト云者、爲網鉤、恩賀島ノ邊ニ經回シケルニ、西方ヨリ紅ノ帆擧タル船見エ來

ル、船中ニ瓶アリ、瓶ノ内ニ鋒ヲ立テ赤幣ヲ付タリ、瓶内ニ三人ノ貴女アリ、其形端嚴ニシテ、

人類ニ不同、託宣シテ云、吾爲百王守護、離本所、近王城、御寶殿并廻廊百八十間造立シテ、

我ヲ嚴島大明神ト崇ベシ、○上略

弘仁二年（八一二）—弘仁四年（八一三）

二五二

九月二十三日、諸國神戸の百姓、供神の外、公役なきを以て、神社の破損を修理せしむ

〔類聚三代格〕^一 神社事

太政官符

應令神戸百姓修理神社事

右、奉勅、諸國神戸例多課丁、供神之外、不赴公役、宜役其身修理神社、隨破且修莫致大損、國司每年巡檢修造、若不遵改更致緩怠者、隨狀科祓、

弘仁二年九月廿三日

弘仁三年（八一二）
五月三日、有封の神社は神戸を以て修造せしむ

〔日本後紀〕^{二十二}

嵯峨天皇

弘仁三年五月庚申、^{略中}是日、制、有封神社者神戸修造、於無封社無人修理、自今以後、宜令禰宜祝等修造、每有小破、隨即修作、不得延怠使致大破、國司屢加巡檢、

若禰宜祝等、不勤修理、令致破壞者、並從解却、其有位者即追位記、白身者決杖一百、國吏不檢閱、有致破損者、選替之日、拘其解由、但遭風火非常等損、不堪修作者、言上聽裁、

七月朔日、疫旱あるにより、天下の名神に奉幣す

〔日本後紀〕^{二十二}

嵯峨天皇

弘仁三年秋七月丁巳朔、勅、頃者疫旱並行、生民未安、靜言于此、情切

納隍、但神明之道、轉禍爲福、庶馮祐助、除此災禍、宜走幣於天下名神、

弘仁四年（八一三）

十月三日、豐稔報賽のため、名神に奉幣す

〔日本紀略〕^{嵯峨}

天皇

弘仁四年冬十月壬午、奉幣於名神、報豐稔也、

是歲、宗像郡大領外正七位上宗形

〔類聚國史〕^{五十四}

節婦 人部

（八二八）

天長五年三月甲申、^{（二十八日）}

筑前國人難波部安良賣敍位二階、免戸田租、安良

朝臣秋足歿す

賣、父母共没、常拜塚塋、朝夕盡哀、又年十有六、嫁宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足、秋足死于今十五年、遠近聘之、誓死終志、本之名教、孝節可嘉、

弘仁五年（八一四）

六月一日、新撰姓氏錄を奏進す、中に宗形朝臣・宗形君の名見ゆ

〔新撰姓氏錄〕 右京神別下

地祇

宗形朝臣は吾田片隅命の後

なり

大神朝臣同祖、吾田片隅命之後也、

安曇宿禰

海神綿積豐玉彥神子穗高見命之後也、

〔新撰姓氏錄〕 河内國神別

地祇

宗形君は大國主命の六世の孫、吾田片隅命の後なり

宗形君

大國主命六世孫吾田片隅命之後也

安曇連

綿積神命兒穗高見命之後也

等禰直

椎根津彥命之後也、

弘仁五年（八一四）

右第十九卷

九月十五日、豐稔報賽のため名神に奉幣す

〔日本後紀〕二十四嵯峨天皇 弘仁五年九月戊子、奉幣明神、報豐稔也、

弘仁七年（八一六）
七月二十日、止風雨のため、畿内七道諸國の名神に奉幣す

〔類聚國史〕十一神祇部十一祈禱上 弘仁七年七月癸未、勅、風雨不時、田園被害、此則國宰不恭祭祀之所致也、今聞、今茲青苗滋茂、宜敬神道大致豐稔、庶俾嘉穀盈畝黎元殷富、宜仰畿内七道諸國、其官長清慎齋戒、奉幣名神、禱止風雨莫致漏失、

弘仁八年（八一七）
正月七日、正六位上宗形朝臣勝麿を外從五位下に昇敘す

〔類聚國史〕九十九職官 弘仁八年正月丁卯、○中略從六位上滋野宿禰貞道從五位下、正六位上宗形朝臣勝麿、内藏宿禰帶足、廣階連眞象、從六位下吉田宿禰書主外從五位下、

弘仁十一年（八二〇）
六月二十六日、名神に奉幣し雨を祈る

〔日本紀略〕嵯峨天皇 弘仁十一年六月丙申、走幣名神、祈雨也、

弘仁十二年（八二一）
八月三日、秋稼豐稔のため名神に奉幣す

〔類聚國史〕十一神祇部十一祈禱上 弘仁十二年八月丙寅、勅、今嘉穀垂穗、多稔方熟、恐風水爲災、致其傷害、宜奉幣名神、以護秋稼也、

弘仁十三年（八二二）
七月六日、諸國炎旱により、群神に奉幣せらる

〔日本紀略〕嵯峨天皇 弘仁十三年秋七月甲午、詔曰、云々、炎旱淹旬、走幣群神、朕并皇后服御物、宜從省撤、云々、

弘仁十四年（八二三）
五月朔日、諸國の名神に奉幣し、
即位の由を告ぐ

〔日本紀略〕淳和天皇 弘仁十四年五月甲寅朔、女敍位、又任官、奉幣山城國愛宕郡貴布禰神社、爲丘森雨也、詔、云々、皇妣（敏子）云々、降年不永、早從昇天、朕在幼稚、已違慈顧、追上徽號、爲皇太后、差使奉幣諸道名神、以皇帝始即位也、

天長元年（八二四）
五月二日、五畿七道の諸國名神に奉幣し、疫氣を謝す

〔日本紀略〕淳和天皇 天長元年五月庚戌、奉幣五畿七道諸國諸神、謝疫氣也、

八月朔日、止風雨のため名神に奉幣す

〔類聚國史〕十一 神祇部十一 祈禱上 天長元年八月丁丑朔、奉幣帛名神、祈除風雨損也、

天長四年（八二七）
五月二十一日、天下の名神に奉幣して雨を祈る

〔日本紀略〕淳和天皇 天長四年五月辛巳、遣使畿内七道諸國走幣祈雨、屈一百僧於大極殿轉讀大般若經三ヶ日、

天長五年（八二八）
正月七日、外從五位下宗形朝臣勝麿を外從五位上に昇敍す

〔類聚國史〕九十九 職官四 敍位四 天長五年正月甲子、御豐樂殿、授從三位春原朝臣五百枝正三位、從四位上藤原朝臣綱繼正四位下、○中略 外從五位下安野宿禰眞繼、百濟公綱繼、忠宗宿禰末繼從五位

下、外從五位下宗形朝臣勝麿外從五位上、正六位上安原宿禰諸勝、御野宿禰清庭、山邊公清野、刀岐直淨濱外從五位下、賜祿有差、

三月二十八日、故宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足の妻、難波部安良賣の貞節を褒賞し、位二階を敍し、且つ戸口の租を免す

〔類聚國史〕五十四 人部 節婦 天長五年三月甲申、筑前國人難波部安良賣敍位二階、免戸田租、安良

天長五年（八二八）—天長七年（八三〇）

二五六

賣、父母共没、常拜塚塋、朝夕盡哀、又年十有六、嫁宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足、秋足死于今十五年、遠近聘之、誓死終志、本之名教、孝節可嘉、

＊〔神社帳〕○宗像郡誌
上所收 若八幡宮 河東村大字山田字橋ノ前にあり

一、祭神 仲哀天皇 應神天皇 仁德天皇

一、由緒 創立年月不詳、宗像舊記ニハ山田若宮トアリ、或記ニ宗像朝臣秋足、宗像郡ヲ領セシ時、フカク尊信セシヨシ云傳ヘリ、例祭九月十九日、^{（八七）}明治五年十一月三日村社ニ被定、

一、境内神社四社

安良賣神社

安良賣神社 祭神 難波部安良賣 由緒、創立年月不詳、當社ハ宗像朝臣秋足カ妻難波部安良賣カ孝烈ヲ感スルノアマリ、村民等神ニ齋祀ル由、類聚國史曰、天長四年三月甲申筑前國難波部安良賣、敍位二級、免戸田租云々、

須賀神社 祭神 建速須佐之男神、由緒不詳、^{○下}略

〔日本紀略〕^{淳和}天長六年二月庚午、奉幣五畿七道諸國名神、祈春雨也、

天長六年（八二九）
二月二十日、五畿七道の名神に奉幣して雨を祈る

天長七年（八三〇）
七月十二日、攘災のため、五畿内七道諸國の名神に奉幣す

〔類聚國史〕^{十一 神祇部十一 祈禱上}天長七年七月甲申、遣使十八寺、令讀經、奉幣五畿内七道諸國名神、爲攘災也、

天長八年（八三一）
八月五日、防風雨のため名神に奉幣す

天長九年（八三二）
七月十五日、防風雨のため、五畿七道諸國の名神に奉幣す

天長十年（八三三）
三月八日、諸國の天神地祇に奉幣して、即位の事を告げ給ふ

六月八日、天下の神社寺院を修理す

閏七月朔日、洪水敗稼の攘防のため、諸國の名神に奉幣せしむ

承和元年（八三四）

正月十九日、藤原朝臣常嗣を持節大使に、副使に小野朝臣篁を任ず

二月二日、丹墀真人貞成を造船使長官に、朝原宿禰嶋主を次官とし、笠朝臣仲守・伴宿禰成益らを遣唐装束司に任ず

〔類聚國史〕

十一 神祇部十一
祈禱上

天長八年八月庚午、奉幣名神、爲防風雨之災也、

〔類聚國史〕

十一 神祇部十一
祈禱上

天長九年七月乙巳、奉幣五畿内七道諸國名神、防風雨也、

〔續日本後紀〕

一 仁明天皇

天長十年三月乙未、天皇始臨朝、○中是日、頒使諸國、奉幣天神地祇、以有即位事也、

〔續日本後紀〕

二 仁明天皇

天長十年六月癸亥、○中是日、爲聖體有間、使神祇伯從四位下大中臣朝臣淵魚、奉幣於賀茂大神、又令天下諸國、修理寺塔破壞者及神社、

〔續日本後紀〕

二 仁明天皇

天長十年閏七月乙卯朔、勅至于秋序、洪水敗稼、大風害物、古來尙在、宜令天下諸國、奉幣名神、豫爲攘防、勿損年穀、

〔續日本後紀〕

三 仁明天皇

承和元年正月庚午、○中是日、任遣唐使、以參議從四位上右大辨兼行相

事三人、

摸守藤原朝臣常嗣爲持節大使、從五位下彈正少弼兼行美作介小野朝臣篁爲副使、判官四人、錄

〔續日本後紀〕

三 仁明天皇

承和元年二月癸未、○中是日、任造船使、以正五位下丹墀真人貞成爲長

天長八年（八三一）——承和元年（八三四）

官、主稅助外從五位下朝原宿禰嶋主爲次官、且以左中辨從四位下笠朝臣仲守、右少辨從五位下伴宿禰成益、並爲遣唐裝束司、

五月十三日、遣唐大使藤原朝臣常嗣を兼ねて備中權守に任ず

〔續日本後紀〕^三 仁明天皇 承和元年五月癸亥、以遣唐大使參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼備中權守、右大辨如故、大工外從五位下三嶋公嶋繼爲造船次官、遣唐使判官錄事、及知乘船事等、兼外任者九人、

六月二十八日、祈雨のため、伊勢大神宮、及び畿内七道の名神に奉幣す

〔續日本後紀〕^三 仁明天皇 承和元年六月丙申、^{（十七日）}走幣群神、以祈甘雨、旱也、^{（二十八日）}丁未、奉伊勢大神宮及畿内七道名神幣、以祈雨也、

七月朔日、遣唐大使藤原朝臣常嗣を兼ねて近江權守となす

〔續日本後紀〕^三 仁明天皇 承和元年秋七月庚戌朔、以參議從四位上朝野宿禰鹿取爲左大辨、參議正四位下三原朝臣春上爲彈正大弼^{云々}、從四位下百濟王安義爲右兵衛督、丹後守如故^{云々}、遣唐大使參議右大辨從四位上藤原朝臣常嗣爲兼近江權守^{云々}、

八月四日、伴宿禰氏上を造船使長官となす

〔續日本後紀〕^三 仁明天皇 承和元年八月壬午、授无位益野女王從五位下、以右中辨正五位下伴宿禰氏上爲造船使長官、

八月十日、遣唐錄事・准錄事・知

〔續日本後紀〕^三 仁明天皇 承和元年八月戊子、^{（十日）}任遣唐錄事、准錄事、知乘船事各一人、以外從五

乗船事等を任ず、尋で十四日、遣唐都匠三嶋公嶋繼を兼ねて阿波權掾に任ず

位下三嶋公嶋繼爲造船都匠、
(十四日)
壬辰、以遣唐都匠外從五位下三嶋公嶋繼爲兼阿波權掾、准錄事兼外國介者一人、

菅原善主

聘唐使判官

藤原貞敏

聘唐使判官となるも固辭す

藤原貞敏

承和二年遣唐使准判官

※〔日本文德天皇實錄〕四 (八五二) 仁壽二年十一月己亥、(七日) 勸解由次官從五位下菅原朝臣善主卒、善主者、從三位清公第三子也、少而聰慧美容儀、頗有口辯、年廿三、奉文章生試及第、承和之初、拜彈正少忠、三年爲聘唐使判官、兼爲播磨權大掾、彈正少忠如故、復命之日敍從五位下、七年拜兵部少輔、明年出爲伊勢介、十四年爲越前介、後拜勸解由次官、病卒、時年五十、

※〔日本文德天皇實錄〕七 (八五五) 齊衡二年正月癸卯、(二十二日) 前山城守從五位下藤原朝臣松影卒、松影、刑部少輔從五位下星雄之子也、爲人嚴正、鬚眉如畫、起家補內舍人、(八三五) 承和元年爲聘唐使判官、兼山城權介、松影以母老、固辭再三請、許之、(略)

※〔日本三代實錄〕十四 (八六七) 貞觀九年十月四日己巳、從五位上行掃部頭藤原朝臣貞敏卒、貞敏者、刑部卿從三位繼彥之第六子也、少耽愛音樂、好學鼓琴、尤善彈琵琶、(八三五) 承和二年爲美作掾兼遣唐使准判官、五年到大唐、達上都、逢能彈琵琶者劉二郎、貞敏贈砂金二百兩、劉二郎曰、禮貴往來、請欲相傳、即授兩三調、二三月間、盡了妙曲、劉二郎贈譜數十卷、因問曰、君師何人、素學妙曲乎、貞敏答曰、是我累代之家風、更无他師、劉二郎曰、於戲昔聞謝鎮西、此何人哉、僕有一少女、願令薦枕席、貞敏答曰、一言斯重、千金還輕、旣而成婚禮、劉娘尤善琴箏、貞敏習

承和元年 (八三四)

承和元年（八三四）

二六〇

歸國に際し、紫檀紫藤琵琶各一面、贈らる

得新聲數曲、明年聘禮既畢、解纜歸鄉、臨別劉二郎設祖筵、贈紫檀紫藤琵琶各一面、是歲、大唐大中元年、本朝承和六年也、^{（八三九）}七年爲參河介、八年遷主殿助、少選遷雅樂助、九年春授從五位下、數歲轉頭、齊衡三年兼備前介、明春加從五位上、天安二年丁母憂解官、服闋拜掃部頭、貞觀六年兼備中介、卒時年六十一、貞敏无他才藝、以能彈琵琶、歷仕三代、雖无殊寵、聲價稍高焉、

＊〔日本三代實錄〕^{十一} 貞觀七年十月廿六日甲戌、雅樂權大允外從五位下和邇部宿禰大田麿

^{清和天皇}

良枝宿禰清上、聘唐使に従ひ入唐す

南海に漂着し、賊に殺さる

卒、大田麿者右京人也、吹笛出身、備於伶官、始師事雅樂權少屬外從五位下良枝宿禰清上、受學吹笛、清上特善吹笛、音律調弄皆窮其妙、見大田麿有氣骨可教習、因加意而教之、承和之初、清上從聘唐使、入於大唐、歸朝之日、舶遭逆風、漂墮南海賊地、爲賊所殺、本姓大戸者、河内國人也、^{○下}略

八月二十日、遣唐使に事力及び職田を賜ふ

〔類聚三代格〕^六 事力并交替丁事

太政官符

事力

應給遣唐使等兼國事力事

右檢案内、太政官去延曆廿一年六月廿七日下午民部省符傳、太政官去寶龜七年九月十五日下午同省

^{（八〇二）}

^{（七七六）}

符傳、使人兼國、爲優其身、宜給職田以助家業、但事力徵功、於事不穩、身不直國、不可宛行者、^{（神王）}右大臣宣、件人等奉使絕域、遙涉滄波、推其嶮難、事須優賞、宜給事力一同見任者、今被

〔請夏野〕
右大臣宣傳、宜准延曆例給之、

承和元年八月廿日

〔類聚三代格〕

十五
職田位田公廨田事

太政官符

職田

應給遣唐使等兼國職田事

右被右大臣宣傳、件人等奉使入唐、事須優給、宜准去延曆廿一年十一月廿四日符行之、

〔請夏野〕

承和元年八月廿日

承和二年（八三五）

正月七日、遣唐史生道公廣持に、
當道朝臣の姓を賜ふ

〔續日本後紀〕

四
仁明天皇

承和二年正月癸丑、○中略左京人遣唐史生道公廣持賜姓當道朝臣、和銅年
中、肥後守正五位下道君首名、治迹有聲、永存遺愛、廣持是首名之孫也、

正月十一日、遣唐副使小野朝臣篁

を兼ねて備前權守となす

〔續日本後紀〕

四
仁明天皇

承和二年正月丁巳、正三位源朝臣信爲近江守、左兵衛督如故、正四位
下源朝臣弘爲信濃守、宮内卿如故、從五位上小野朝臣篁爲備前權守、遣唐副使彈正少弼如故、
三品秀良親王爲大宰帥、彈正尹如故、

〔續日本後紀〕

四
仁明天皇

承和二年二月丁丑、以外從五位下長岑宿禰高名爲遣唐准判官、從七位
上松川造貞嗣爲錄事、從八位下大和真人耳主、大初位盧原公有守並爲譯語、

二月二日、長岑宿禰高名を遣唐准
判官に、松川造貞嗣を錄事に任ず

承和元年（八三四）―承和二年（八三五）

承和二年（八三五）

二六二

二月七日、遣唐使の錄事已上に度者を賜ふ

〔類聚三代格〕^二 年分度者事

太政官符

應賜遣唐使度者事

度者を以て使人に代りて精進せしむ

右彼使奏狀傳、渡海之際險難叵虞、雖皇德所覃自天祐之、而利涉之資、亦憑冥力、望請、錄事已上特賜度者、各代其身、以令精進者、被右大臣宣傳、奉勅、依請、

承和二年二月七日

三月十二日、大宰府の綿甲一百領・胄一百口・袴四百腰を、遣唐船不虞の備に充つ

〔續日本後紀〕^四 仁明天皇 承和二年三月丁巳、^{○中}仰大宰府、綿甲一百領、胄一百口、袴四百腰、充遣唐船不虞之備、

五月十三日、遣唐判官長岑宿禰高名を兼ねて美作權介に任ず

〔續日本後紀〕^四 仁明天皇 承和二年五月丁巳、以美作權掾外從五位下長岑宿禰高名轉任權介、遣唐判官如故、

七月二日、風雨の災を攘ふため、天下の名神に奉幣す

〔類聚國史〕^{十一} 神祇部十一 祈禱上 承和二年七月乙巳、走幣於天下名神、預攘風雨之災、

十月十六日、遣唐譯語盧原公有子に朝臣の姓を賜ふ、尋で十九日、藤原朝臣貞敏を遣唐准判官に任ず

〔續日本後紀〕^四 仁明天皇 承和二年十月丁亥、^{（十六日）}賜右京人遣唐譯語盧原公有子、^{（マ）}兄散位柏守等朝臣姓、春宮坊少屬佐太忌寸道成、兄散位道純等賜姓滋原宿禰、八多真人同族也、

十月二十七日、遣唐錄事松川造貞嗣に、高峰宿禰の姓を賜ふ

十一月二十日、遣唐使知乘船事香山連清貞に、宿禰の姓を賜ふ

十二月二日、遣唐大使藤原常嗣らに、遣唐使位を借す

〔承和三年（八三六）〕

正月二十五日、陸奥八溝黄金神に封戸二烟を充て、砂金を採得せしめ、遣唐の資に充つ

二月朔日、遣唐使のために、北野に天神地祇を祠る、尋で七日、遣唐使、賀茂社に奉幣す
二月九日、天皇、遣唐大使・副使を紫宸殿に引見し祿を賜ひ、尋で八省院に於て、遣唐使史生已下に位記を賜ふ

〔十九日〕
庚寅、以從六位下藤原朝臣貞敏爲遣唐准判官、

〔二十七日〕
戊戌、遣唐錄事松川造貞嗣、散位同姓家繼等賜姓高峰宿禰、其先高麗人也、

〔續日本後紀〕
〔四日〕
仁明天皇 承和二年十一月辛酉、遣唐使知乘船事從八位上香山連清貞、兄二人、改連賜宿禰、其先、百濟國人也、

〔續日本後紀〕
〔四日〕
仁明天皇 承和二年十二月壬申、借遣唐使位、大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位、副使從五位上小野朝臣篁正四位上、並大臣口宣、不授告身、

〔日本紀略〕
〔仁明天皇〕
承和二年十二月壬申、遣唐使等増位、

〔續日本後紀〕
〔五日〕
仁明天皇 承和三年正月乙丑、詔奉苑陸奥國白河郡從五位下勳十等八溝黄金神封戸二烟、以應國司之禱、令採得砂金、其數倍常能助遣唐之資也、

〔續日本後紀〕
〔五日〕
仁明天皇 承和三年二月庚午朔、廢務、爲遣唐使祠天神地祇於北野也、
〔七日〕
丙子、遣唐使奉幣賀茂大神社、

〔續日本後紀〕
〔五日〕
仁明天皇 承和三年二月戊寅、〔九日〕
天皇御紫宸殿、引見遣唐大使副使等、參議右近衛

承和二年（八三五）—承和三年（八三六）

承和三年（八三六）

二六四

大將橘朝臣氏公降殿宣詔其詞書笏無黃紙文々賜祿有差、大使綵帛百匹、賁布廿端、副使綵帛八十匹、賁布十端、判官并准判官各綵帛十五匹、賁布六端、錄事綵帛十匹、賁布四端、知乘船事、譯語、各綵帛五匹、賁布二端、還學僧各綵帛十匹、和泉國人遣唐使准錄事縣主益雄、父散位文貞等賜姓和氣宿禰、又改本居貫附右京二條二坊、
丙戌（十七日）、於八省院賜遣唐使史生已下將從已上位記、

四月十日、遣唐使、八省院にて朝拜す、尋で二十四日、遣唐大使藤原朝臣常嗣・副使小野朝臣篁らに饒宴を賜ふ

〔續日本後紀〕

五
仁明天皇

承和三年四月戊寅（十日）、遣唐使於八省院朝拜、天皇不御、例也、但大臣已

下參議以上各在其位、一如天皇視告朔之儀、

壬辰（二十四日）

天皇御紫宸殿、賜饒入唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁等、命五位已上、賦賜饒入唐使之題、于時大使常嗣朝臣欲上壽、先候進止、勅許訖、常嗣朝臣避座而進、喚采女二聲、采女擎御盃、來授陪膳采女、常嗣朝臣跪唱平、天皇爲之舉訖、行酒人進賜常嗣朝臣酒、卽跪受飲竟、降自南階、拜舞還座、既而群臣獻詩、別有御製、大使賜而入懷、退而拜舞、賜大使御衣一襲、白絹御被二條、砂金二百兩、副使御衣一襲、赤絹被二條、砂金百兩、各淵醉而罷、

〔續日本後紀〕

五
仁明天皇

承和三年四月甲午、頒奉幣五畿內七道名神、爲有遣唐使事也、

四月二十六日、遣唐使のために、五畿內七道の名神に奉幣す

〔續日本後紀〕

五
仁明天皇

承和三年四月丁酉（二十九日）、賜入唐使節刀、大臣口宣曰、天皇我大命止良萬遣唐國使人爾詔大命乎、衆聞食止詔布大使共稱唯今詔久藤原常嗣朝臣、小野朝臣篁、今汝等二人乎遣唐國者、

四月二十九日、遣唐使に節刀を賜ふ、尋で三十日、遣唐判官長岑宿禰高名に従五位下を授く

遣唐醫師朝原宿禰岡野

今始^且遣物^爾不在、本來朝使其國^爾遣之其國^{利與進渡}里、依此^氏使次止遣物會、悟此意^氏、其人等乃和美
安美應爲久相言部、驚^{呂之}事行會^{奈世}、亦所遣使人判官已下、有犯死罪已下者、順罪^氏行^止之節刀給^止、
詔大命^乎聞食止宣布、賜大使副使各御衣被、遣唐醫師山城國葛野郡人朝原宿禰岡野改本居、貫附
左京四條三坊、
戊戌、授遣唐判官外從五位下長岑宿禰高名從五位下、无位滋野朝臣繩子正五位下、无位菅野朝
臣淨子從五位下也、淨子是遣唐大使藤原朝臣常嗣母氏、故准舊例敘之、遣唐錄事高岑宿禰貞繼
改宿禰賜朝臣、其先高麗人也、

五月二日、遣唐副使小野朝臣篁の
請により、小野神に従五位下を授
く

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年五月庚子、授无位小野神從五位下、依遣唐副使小野朝臣篁申
也、山城國人遣唐史生大宅臣福主改臣賜朝臣、

五月九日、遣唐使の平安のため、
河内國河内郡從四位下比賣神に従
四位上を授く

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年五月丁未、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、常陸
國鹿嶋郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位、河内國河内郡從三位勳三等天兒屋根命正三位、從
四位下比賣神從四位上、其詔曰、皇御孫命^爾坐、四所大神^爾申給^{久波}、大神等^乎彌高^爾彌廣^爾仕奉
毛^{奈保}思食、是以件等冠^爾上獻狀^乎、中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼、內舍人正六位下藤原朝臣
千葛等^爾令捧持^氏、奉出事^乎申給^{久止}申、辭別^氏申給^久、神那我良母皇御孫之御命^乎、堅磐^爾常磐
爾護奉幸^爾奉給^部、又遣唐使參議正四位下藤原朝臣常嗣^乎、路間無風波之難^久、慈賜^比矜賜^天、平
久可太良可^爾歸之賜^{倍止}、稱辭竟奉^{久止}申、

承和三年（八三六）

五月十日、在唐中歿せる入唐使・留學生八人に贈位し、幽魂を慰む
藤原朝臣清河

安倍朝臣仲滿

石川朝臣道益

紀朝臣馬主

田口朝臣養年富

甘南備真人信影
紀朝臣三寅
掃守宿禰明

五月十二日、藤原朝臣助衛を攝津難波海口に派し、遣唐使發遣を慰勞す

〔續日本後紀〕

五 仁明天皇

承和三年五月戊申、便附聘唐使、贈遣往歲銜本朝命入唐使并留學等、

在彼身歿者八人位記、以慰幽魂、其詔詞曰、故入唐大使贈正二位藤原朝臣清河可贈從一品、昔膺帝簡、遠效皇華、不利歸帆、還苦漂梗、終在殊域、俄從闕川、睽彼云亡、良深嗟悼、宜加異代之寵、以申追遠之恩、故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正二品、身涉鯨波、業成麟角、詞峰聳峻、學海揚濤、顯位斯昇、英聲已播、如何不慈、莫遂言歸、唯有揆天之章、長傳擲地之響、追賁幽壤、既隆於前命、重敍崇班、俾洽於命詔、故入唐使贈從四品下石川朝臣道益可贈從四品上、忘軀徇節、奉使先朝、履義資忠、修聘唐國、路嘗艱苦、泊遭沈痾、未達於中京、奄淪於下窆、異言及此、追以悼傷、傳導靈芝、產于墳裏、蓋由幽感克致之歟、宜錫寵章式旌泉壤、故入唐判官贈從五品下紀朝臣馬主可贈從五品上、故入唐判官從五品下勳十二等田口朝臣養年富可贈從五品上、餘如故入唐判官從五品下甘南備真人信影可贈從五品上、故入唐判官贈從五品下紀朝臣三寅可贈從五品上、故入唐判官從五品下掃守宿禰明可贈從五品上、馬主以下至明五人位記、共用同詞、往參高選、出使大邦、俄淹泉臺、不歸本土、仁惻念舊、彝典无愆、義不忘勞、朝章斯在、宜申寵渥、用慰亡魂、
略○下

〔續日本後紀〕

五 仁明天皇

承和三年五月庚戌、

略中

是日、右近衛中將從四位下藤原朝臣助衛 勅語、

向攝津國難波海口、慰勞聘唐使發遣、其宣命曰、天皇詔旨良麻止宣大命乎聞食止宣、大使藤原常嗣

五月十三日、遣唐使、難波にて乗船し、翌十四日、解纜す

朝臣等、奉命且退罷以來、幾日母經須在禮旅情波遠志近志止不言苦止在良牟止所念行須、又遠出退須良在間波心母良慰米遣給、路間母無恙久珍重久、退出今日止乃已變顏容須世早還參來止之氏御酒肴賜止久勅大命乎聞食止宣、

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年五月辛亥十三日、右少辨藤原朝臣當道於濱頭稱揚太政官宣曰、遣唐

使判官以下、爲國家爾有犯事者、隨罪輕重、死罪以下科決止志大使主小使主爾節刀給部諸知此狀謹勤仕奉止宣、是日、使等駕船、

十四日壬子、四船共解纜發去、

五月十八日、大風のため、入唐船寄宿の攝津國輪田泊に田邊吉備成を遣して、その安危を問はしむ

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年五月丙辰、夜裏大風、暴雨交切、折樹發屋、城中人家不壞者希、斯時入唐使船寄宿攝津國輪田泊、遣看督近衛各一人於船處、河水氾溢不得通行、更遣左兵衛少志田邊吉備成問其安危、

五月二十二日、遣唐使のために、天智天皇・光仁天皇・桓武天皇・神功皇后らの御陵に奉幣し、その平安を祈る

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年五月庚申、爲遣唐使奉山階天智、田原光仁、柏原桓武、神功皇后等陵幣帛曰、天皇大命以、掛長岐山階御陵爾恐毛申賜止部白久、參議正四位下藤原朝臣常嗣等乎爲大使氏、遣唐國使人母止路間無風波之難久、慈賜比矜賜比平久可太良可爾志賜止志參議從四位上文室朝臣秋津、常陸權介正五位下永野王、內舍人正六位上良岑朝臣清風等乎差使氏、恐乎美毛申賜止久申、

承和三年（八三六）

二六八

閏五月八日、遣唐音聲長良校宿禰清上らを右京七條二坊に貫附す

遣唐畫師

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年閏五月丙子、^{○中}河内國人遣唐音聲長外從五位下良校宿禰清上、遣唐畫師雅樂答笙師同姓朝生、散位春道宿禰吉備成等改本居貫附右京七條二坊、

閏五月十三日、遣唐使扶助要請のため、新羅に紀三津を遣す

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年閏五月辛巳、恐遣唐使舶風濤或變漂着新羅境、所以太政官准

遣唐譯語紀朝臣春主

舊例、牒彼國執事省先告諭之曰、不渝舊好、鄰穆彌新、迺發皇華、朝章自遠、仍今遣使修聘巨唐、海晏當時、雖知利涉、風濤或變、猶慮非常、脫有使船漂着彼境、則扶之送過、不俾滯闕、因以武藏權大掾紀三津爲使、賁牒發遣、賜三津御被、是日、大安寺僧傳燈大法師位惠靈還俗、姓名紀朝臣春主、敍正六位上、爲遣唐譯語兼但馬權掾、

遣唐料雜物帛

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年閏五月壬午、^{（十四日）}○中 染作遣唐料雜物處、^{權用皇}后宮職 帛一匹、忽隨颼風飛

揚冊許丈、須臾墮侍從所、

遣唐留學僧常曉

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年閏五月丙申、^{（二十八日）}授遣唐留學元興寺僧傳燈住位常曉滿位、

七月十五日、五穀垂穗のため、五畿七道諸國の大神に奉幣し給ふ、是日、大宰府馳驛して、今月二日遣唐使四船發航の由を奏す

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年七月壬午、勅曰、方今時屬西成五穀垂穗、如有風雨愆序、恐損秋稼、宜令五畿内七道諸國奉幣名神、攘災未萌、其幣帛料用正稅、長官率僚屬、自親齋戒、祭如神在、必致徵應、大宰府馳驛言、今月二日遣唐使四船共進發畢、

七月十六日、疫癘間發するにより、五畿七道諸國司に令して、般若經を轉讀せしめ給ふ、是日、大宰府馳驛して、遣唐第一船及び第四船漂蕩の狀を奏す

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年七月癸未、復勅曰、如聞、諸國疫癘間發、夭死者衆、夫鎖災眚招福祐者、唯般若冥助、名神嚴力而已、宜令五畿內七道諸國司轉讀般若走幣名神、是日、大宰府馳驛、奏遣唐使第一第四兩船漂蕩却廻之狀、兩船密封奏、同共到來、

七月十七日、大使藤原朝臣常嗣らの乗船せる第一船・第四船を、再發の期まで府館に安置し修造せしむ

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年七月甲申、勅符大使藤原朝臣常嗣、判官菅原朝臣善主等、得今月六日九日二道飛驒奏狀、具知漂苦廻着肥前國也、使等忠貞之操、不敢告勞、蒙冒險難、廻涉蒼海、而事不諧偶、中路却廻、靖言念之、憂心何已、今案奏狀、兩船並已無完、必須改營、宜俟修造畢以遂渡海耳、第二第三等船、未知平不、鬱嗟乎懷、又勅符大宰大貳藤原朝臣廣敏等、得今月十日飛驒奏、知遣唐使第一第四船廻着肥前國之狀、使等不利西颿、漂廻嘗艱、宜安置府館、迄于更發、依舊供億、又案使等奏、兩船摧殘、更須改營、府宜便修造、令得渡海、其匠手者復將擇遣、又第二第三兩船、疑亦或廻着、宜值嘉嶋涯畔可着船處、爲置斥候、以備接援、如有漂着、亟以上奏、

〔日本紀略〕^{仁明天皇} 承和三年七月甲申、大使勅符藤原朝臣常嗣等云々、今案奏狀、兩船並已無完、必須改營、云々、其第二第三等船、未知平不、鬱嗟乎懷、

〔續日本後紀〕^五 仁明天皇 承和三年七月己丑、遣唐持節大使藤原朝臣常嗣等上表言、伏奉今月十七日^{二十二日} 承和三年(八三六)

承和三年（八三六）

二七〇

日璽書、精守飛越、手足未厝、知是、玄鑒無私、能照表裏、潢渥不匱、普霑巨細、臣常嗣等自營繕甫畢遠入大瀛、日夜漂簸、了無生賴、只待蕭鐔於水波、占殯墓於魚腹、而天不殲人、裁泊舊壤、臣等固雖萬禱靈祇再延瞬息、猶傷給詔未達心神半死、今特賫敕旨、慰喜非常、臣等願躬庸櫟、曷答重厚、更煩天覽、伏增跼焦、

圓仁同船

順風を得ず、徒らに二年を送る

＊〔慈覺大師傳〕 承和三年四月、楞嚴院制九條式○中略厥後、自難波離宮、與大使參議右大辨兼相模守藤原朝臣常嗣、相共上船、到大宰府、未得順風、徒送二年、五年六月十三日、上第一船、廿二日解纜進發、

＊〔常曉和尚請來目錄〕

常曉同行

常曉以去承和三年五月、銜命留學、遠期萬里之外、其年漂廻、四年亦不果渡海、五年六月進發、同年八月到淮南城廣綾館安置、○上略下略

七月二十日、大宰府馳驛して、遣唐第三船の水脚、對馬嶋南浦に漂着せる由を奏す

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年八月己亥、（二日）勅符遣唐大使藤原朝臣常嗣、省大宰府去月廿日飛驒奏言、第三船水脚十六人、編板如桴、駕之漂着對馬嶋南浦、其水脚等申云、舶實依數解散者、

翻水不收、悔而何及、言念災變、永用憫傷、

七月二十四日、大宰府馳驛して、

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年七月辛卯、大宰府馳驛、奏第二船漂廻之狀、（二十四日）

遣唐第二船小野朝臣篁の船、肥前國別島に漂着せる由を奏す

船破損し遊艇流失

八月朔日、大宰府馳驛して、遣唐第三船の水手等漂着の狀を奏す
筏を編みて漂着

八月二日、大宰府の奏により、遣唐使人等は入京、水脚等は歸郷せしめ、遣唐判官・錄事は府司と共に遣唐船を修造せしむ
使人等六百餘人供給に堪へず

八月四日、遣唐第三船の九人は肥前國に漂着す

八月八日、大宰府に命じて遣唐第二船の乗員存亡知れざる者多きをもつて、海邊・絶島へ漂着せる者を尋ね求めしむ

(二十五日) 壬辰、勅符副使小野朝臣篁、得今月八日飛驒奏狀、知歸着肥前國松浦郡別島也、近聞、第一第

四兩隻船、半路漂廻、疾壞未弭、尋省茲奏、轉以驚嗟、本謂忠貞必蒙利往、不知此行何負幽明、雖無巨災、艱虞足患、今案來奏、船舶有損、艤艇亦失、還大宰府、繕補其不完不足者、然後與持節使等、共果國命、

〔續日本後紀〕仁明天皇 承和三年八月戊戌朔、大宰府馳驛、奏遣唐使第三船水手等十六人駕編板漂着之狀、

〔續日本後紀〕仁明天皇 承和三年八月己亥、勅符遣唐大使藤原朝臣常嗣^{○中略}又案同府別奏言、彫弊未復、旱疫相仍、使人等六百有餘、不堪供給、伏望、准寶字寶龜例、使人入京、水脚還郷、又留判官錄事各一人、與府司共修造破船者、並依來奏、使等宜知此情、判官已下、至于水手、惣自舟途、入京還堵、脫有不欲更入都者、隨願駐之、但大使副使、去留任意、其緣修造事、應留判官并錄事者、任大使之簡定、

〔續日本後紀〕仁明天皇 承和三年八月辛丑、遣唐第三船人九人、駕桴漂着肥前國、

〔續日本後紀〕仁明天皇 承和三年八月乙巳、^(八日)勅曰、遣唐第三船、未遂利涉、半途漂損、纔乘桴所着使下之徒廿有五人、漂着之後、已經旬日、而判官・錄事・史生・知乘船事等惣一百餘人、未

知所去、存亡難量、宜仰大宰府、差海邊詣路之人、遣絕嶋無人之處、漂損人物一向尋覓、募以穀帛、

八月二十日、大宰府、僧眞濟らの、遣唐第三船漂蕩の狀を報ず

丁巳、二十日略中

是日、大宰府奏言、問遣唐第三船漂蕩之由、眞言請益僧眞濟等、僅作書答云、柁折棚落、潮溢人溺、船頭已下百冊餘人任波漂蕩、爰船頭判官丹墀文雄議云、我等空渴死船上、不如壞船作筏、各乘覓水、錄事已下爭放取舶板、造桴各去、自外無復所言、

八月二十五日、大宰府馳驛して、遣新羅使の發遣並に遣唐第三船對馬島に漂着せる由を奏す

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年八月壬戌、大宰府馳驛、奏遣新羅使進發、并遣唐第三船漂着對馬嶋上縣郡南浦、船上唯有三人之狀、

九月十五日、遣唐大使・副使等、大宰府より入京す

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年九月辛巳、遣唐大使副使等自大宰府入京、奉還節刀、

九月二十五日、伴宿禰氏上を修理遣唐舶使長官、三嶋公嶋繼を次官に任ず

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年九月辛卯、以右中辨正五位下伴宿禰氏上、爲修理遣唐舶使長官、大工外從五位下三嶋公嶋繼爲次官、

十月二十二日、遣新羅使紀三津、大宰府に歸る

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年十月戊午、遣新羅使紀三津還到大宰府、

十一月朔日、勅により、五畿七道の神社に法華經を讀ましむ

〔續日本後紀〕五 仁明天皇 承和三年十一月丙寅朔、勅、護持神道、不如一乘之力、轉禍作福、亦憑修善之功、宜遣五畿七道僧各一口、每國內名神社、令讀法華經一部、國司檢校、務存潔信、

必期靈驗、

十二月三日、遣新羅使紀三津、復命す

紀三津、使の旨を失ひ、新羅に誣劫せられ、歸國す
紀三津、通好と稱す

〔續日本後紀〕

五
仁明天皇

承和三年十二月丁酉、遣新羅國使紀三津復命、三津自失使旨、被新羅

誣劫歸來、何則所以遣三津於新羅者、遣唐四ヶ舶、今欲渡海、恐或風變漂着彼境、由是、准之故實、先遣告諭、期其接授、而三津到彼、失本朝旨、稱專來通好、似畏怯媚託、私自設辭、執事省疑與太政官牒相違、再三詰問、三津逾增迷惑、不能分疏、是則三津不文、而其口亦訥之所致也、故執事省牒中云、兩國相通、必無詭詐、使非專對、不足爲憑、但其牒中亦云、小野篁船帆飛已遠、未必重遣三津聘于唐國、夫修聘大唐、既有使頭、篁其副介耳、何除其實、輕舉其下、加以當爾之時、篁身在本朝、未及渡海、而謂帆飛已遠、斯並聞商帆浮說、妄所言耳、荷按滅耳、蓋在茲歟、又三津一介綠衫、孤舟是駕、何擬爲入唐使哉、如此異論、近于誣罔、斯事若只存大略、不詳首尾、恐後之觀者莫辨得失、因全寫執事省牒附載之、

新羅國執事省牒

新羅國執事省牒 日本國太政官

紀三津、詐りて朝聘を稱す

も、公牒を檢するに實に非ず

紀三津詐稱朝聘兼有贗書、及檢公牒假僞非實者、

牒、得三津等狀僞、奉本王命、專來通好、及開函覽牒、但云修聘巨唐、脫有使船漂着彼界、則扶之送過、無俾滯遏者、主司再發星使、設問丁寧、口與牒乖、虛實莫辨、既非交隣之使、必匪由衷之賂、事無據實、豈合虛受、且太政官印、篆跡分明、小野篁船帆飛已遠、未必重遣三津聘于唐國、不知嶋嶼之人、東西窺利、偷學官印、假造公牒、用備斥候之難、自逞白水之遊、然兩國相通、必無詭詐、使非專對、不足爲憑、所司再三請以正刑章用阻姦類、主司務存大體、舍過

承和三年（八三六）

貴功、恕小人荒迫之罪、申大國寬弘之理、方今時屬大和、海不揚波、若求尋舊好、彼此何妨、況貞觀中、高表仁到彼之後、惟我是賴、唇齒相須、其來久矣、事須牒太政官并牒青州、量事支給過海程糧、放還本國、請處分者、奉判准狀、牒太政官、請垂詳悉者、

承和四年（八三七）

二月朔日、遣唐使、天神地祇を山城國愛宕郡家門前に祠る、十三日、遣唐大使藤原朝臣常嗣、大宰權帥を兼任す

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和四年二月甲午朔、遣唐使祠天神地祇於當國愛宕郡家門前、諸司爲

之廢務、

〔十三日〕

丙午、授從五位下藤原朝臣高扶從五位上、以遣唐大使參議正四位下藤原朝臣常嗣爲兼大宰權帥、左大辨如故云々、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和四年三月戊辰、

略中

右京人遣唐知乘船事槻本連良棟、民部少錄同姓

豐額等、賜姓安埤宿禰、其先、出自後漢獻帝後也、

〔十一日〕

甲戌、賜餞入唐大使參議常嗣、副使篁、命五位以上、賦春晚陪餞入唐使之題、日暮群臣獻詩、

三月五日、遣唐知乘船事槻本連良棟、安埤宿禰の姓を賜はる
三月十一日、遣唐大使藤原常嗣・副使小野篁に賜餞、尋で、常嗣ら朝拜し、節刀を受く

副使同亦獻之、但大使醉而退出、

〔十三日〕

丙子、遣唐使朝拜、

〔十五日〕

戊寅、賜入唐使節刀、大臣口宣、詞同去年、大使進賜節刀、擎當于左肩退出、副使趨在大使前、

相連而退、

三月十九日、遣唐大使藤原常嗣、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和四年三月壬午、

〔十九日〕

遣唐大使藤原朝臣常嗣出自鴻臚、發向大宰府、

鴻臚館を出でて、大宰府に向ふ、
仍て伊勢大神宮に奉幣し給ふ、尋
で二十四日、遣唐副使、鴻臚館を
發して大宰府に向ふ

(二十二日)
乙酉、依遣唐使進發、差内匠頭正五位下楠野王等、奉幣於伊勢大神宮、是日、天皇不御大極殿、
雨也、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房率諸司行事也、
(二十四日)
丁亥、遣唐副使小野朝臣篁發自鴻臚、向大宰府、

五(四カ)月五日、遣唐第一船大平
良に、從五位下を授く

〔續日本後紀〕^六 仁明天皇 承和四年五月丁酉、授遣唐第一船其號大平良從五位下、

六月二十八日、風雨豫防のため、
五畿七道諸國の名神に奉幣す

〔續日本後紀〕^六 仁明天皇 承和四年六月己未、勅云々、宜遣使山城大和等、奉幣名山、以祈甘雨、
又勅、令五畿内七道諸國奉幣名神、豫防風雨、莫損年穀、

七月二十二日、大宰府馳驛して、
遣唐三船、肥前國松浦郡旻樂埵を
指して發航するも、逆風に遭ふを
奏す

〔續日本後紀〕^六 仁明天皇 承和四年七月癸未、大宰府馳傳言、遣唐三ヶ船、共指松浦郡旻樂埵發
行、第一第四船、忽遇逆風、流着壹伎嶋、第二船左右方便漂着值賀嶋、

八月二十日、大宰府、遣唐使三船
漂廻の狀を奏す

〔續日本後紀〕^六 仁明天皇 承和四年八月辛亥、大宰府奏遣唐使三ヶ船漂廻之狀、并上使等奏狀、
(二十日)
癸巳、勅使云々

九月二十一日、石川朝臣橋繼を修
理船使長官に、小野朝臣末嗣・長
岑宿禰高名を次官に任ず

〔續日本後紀〕^六 仁明天皇 承和四年九月辛巳、以從五位上藤原朝臣當道爲河内守、^{○中} 豐前守從五
位上石川朝臣橋繼爲修理船使長官、筑前權守從五位下小野朝臣末嗣、遣唐判官從五位下長岑宿
禰高名並爲次官、

承和四年(八三七)

承和五年（八三八・開成三年）

三月二十七日、大宰府の監以上をして、國毎に一人、國司講師を率ゐて、國分寺及び香椎・八幡・宗像等の神宮寺に於て、遣唐使の往還平安を祈らしむ

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年三月甲申、勅曰、遣唐使頻年却廻、未遂過海、夫冥靈之道、至信乃應、神明之德、修善必祐、宜令大宰府監已上、每國一人率國司講師、不論當國他國、擇年廿五以上精進持經心行無變者、度之九人、香裏宮二人、大臣一人、八幡大菩薩宮二人、宗像神社二人、阿蘇神社二人、於國分寺及神宮寺、安置供養、使等往還之間、專心行道、令得穩平云々、

四月五日、遣唐使進發の日より歸朝の日まで、五畿七道諸國に海龍王經を轉讀せしむ

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年四月壬辰、勅、自遣唐使進發之日、至歸朝之日、令五畿内七道諸國、讀海龍王經、

四月二十八日、使を遣し、遣唐使の出發遲怠を勘發せしむ

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年四月乙卯、勅遣唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁、使等本期鳳舉用涉鼃波、心事多睽、滯留逆旅、朕眷言艱節、憂念于懷、方今信風甫臻、嚴程已迫、如靡監何、因雲輶往、付之示意、仍遣從四位下右近衛中將藤原朝臣助、勘發之、是日、天皇遷御常寧殿、以避暑也、

五月三日、遣唐使の上奏により、五畿七道諸國に令して今月中旬より歸朝の日に至るまで、海龍王經と併せて大般若經を轉讀せしむ

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年五月己未、遣唐使上奏言、使等漂廻、嚴綸未允、雖風信之愆、乃是天時、而重行之累、類有冥妨、況巨海之程、艱處無測、不資靈祐、何以利征、請令諸國轉讀大般若經、是日、詔、令五畿内七道諸國、始自今月中旬、至使等歸朝之日、堅固講海龍王經、

相并轉讀大般若經、

六月十七日、遣唐第一・第四兩船、
博多津を發航す

二十三日、有救島に到る

二十八日、座礁難破す

〔入唐求法巡禮行記〕一 承和五年、六月十三日午時、第一第四兩船、諸使駕船、緣無順風、停宿三箇日、十七日夜半、得嵐風、上帆搖艫行、已時到志賀嶋東海、爲无信風、五箇日停宿矣、廿二日卯時、得良風進發、更不覓澳、投夜暗行、廿三日巳時、到有救嶋、東北風吹、征留執別、比至酉時、上帆渡海、東北風吹、入夜暗行、兩船火信相通、廿四日望見第四船在前去、與第一船、相去卅里許、遙西方去、大使始畫觀音菩薩、請益留學法師等、相共讀經誓祈、亥時、火信相通、其貌如星、至曉不見、雖有良巽風變、而无漂還之驚、大竹・蘆根・烏賊・貝等、隨瀾而流、下鉤取看、或生或枯、海色淺綠、人咸謂近陸地矣、申時大魚隨船遊行、廿七日平鐵爲波所衝、悉脫落、疲鳥信宿不去、或時西飛二三、又更還居、如斯數度、海色白綠、竟夜、令人登桅子、見山嶋、悉稱不見、廿八日早朝、鷺鳥指西北雙飛、風猶不變、側帆指坤、巳時至白水、其色如黃泥、人衆咸云、若是揚州大江流水、令人登桅子見、申云、從戌亥會、直流南方、其寬廿餘里、望見前路水還淺綠、暫行不久、終如所申、大使深怪海色還爲淺綠、新羅譯語金正南申云、聞導揚州掘港難過、今既踰白水、疑踰掘港歟、未時、海水亦白、人咸驚怪、令人上桅、令見陸嶋、猶稱不見、風吹不變、海淺波高、衝鳴如雷、以繩結鐵沈之、僅至五丈、經少時下鐵、試海淺深、唯五尋、大使等懼、或云、將下石停、明日方征、或云、須半下帆、馳艇、知前途淺深、方漸進行、停留之說、事似不當、論定之際、剋速酉戌、爰東風切扇、濤波高猛、船舶卒然趨昇海渚、乍驚落帆、桅角摧折兩度、東西之波、互衝傾舶、桅葉着海底、舶艫將破、仍截桅棄桅、

承和五年（八三八）

船即隨濤漂蕩、東波來、船西傾、西波來東側、洗流船上、不可勝計、船上一衆、憑歸佛神、莫不誓祈、人人失謀、使頭以下至于水手、裸身緊逼禪、船將中絕、遷走艫舳、各覓全處、結構之會、爲瀾衝咸皆差脫、左右欄端、結繩把牽、競求活途、淦水汎滿、船即沈居沙土、官私雜物、隨淦浮沈、廿九日曉、潮涸、淦亦隨竭、令人見底、悉破裂、沙埋擗杙、衆人設謀、今船已裂、若再逢潮生、恐增摧散歟、仍倒桅子、截落左右艫棚、於船四方建棹、結纜擗杙、亥時、望見西方、遙有火光、人々對之、莫不忻悅、通夜瞻望、山嶋不見、唯看火光、

（七月）

二日早朝、潮生、進去數百町許、西方見嶋、其貌如兩船雙居、須臾進去、即知陸地、流行未幾、遇兩潮洄洑、橫流五十餘町、船沈居泥、不前不却、爰潮水強過、掘決船邊之淤泥、々即逆沸、船卒傾覆、殆將埋沈、人人驚怕、競依船側、各各帶禪、處々結繩、繫居待死、不久之頃、舶復左覆、人隨右遷、隨覆遷處、稍速數度、又船底第二布材、折離流去、人々銷神、泣淚發願、當戌亥隅、遙見物隨濤浮流、人々咸曰、若是迎舶歟、疑論之間、逆風迎來、終知是船也、見小倉船一艘乘人、先日所遣、射手壬生開山・大唐人六人、趨至船前、爰錄事以下共問、大使所着之處、答云、未知所着之處、乍聞驚悲、涕淚難耐、即就其船、遷國信物、錄事一人・知乘船事二人・學問僧圓載等已下廿七人、同遷乘之、指陸發去、午時、到江口、未時、到揚州海陵縣白潮鎮桑田鄉東梁豐村に到る

大使の第一船の行方知れず

揚州海陵縣白潮鎮桑田鄉東梁豐村に到る

鎮桑田鄉東梁豐村、日本國承和五年七月二日、即大唐開成三年七月二日、雖年號殊、而月日共同、留學僧等到守捉軍中季賞宅停宿、聞大使以六月廿九日未時、離船、以後漂流之間、風強濤猛、怕船將沈、捨釘擲物、口稱觀音・妙見、意求活路、猛風時止、子時、流着大江口南、蘆原之邊、七月一日曉、潮落不得進行、令人登桅頭、看山間、南方遙有三山、未識其名、鄉里幽遠、

六月二十二日、勘發遣唐使藤原朝臣助、副使小野朝臣篁の病により進發不能の由を奏す

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年六月戊申、勘發遣唐使右近衛中將藤原朝臣助奏、副使小野朝臣篁依病不能進發、

七月五日、大宰府、遣唐使第一・第四船進發の由を奏す

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年七月庚申、大宰府奏、遣唐使第一・四船進發、

七月十七日、秋稼のため諸國の名神に奉幣す

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年七月壬申、分幣内外諸國名神、以祈秋稼也、

七月二十九日、大宰府、遣唐第二船進發の由を奏す

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年七月甲申、^(二十九日)_略 大宰府奏、遣唐第二船進發、

八月三日、遣唐使藤原常嗣の表奏到來す

〔續日本後紀〕^七 仁明天皇 承和五年八月戊子、^(三日)_略 是日、遣唐使表奏到來、其表曰、臣常嗣等言、伏奉四月廿八日勅書慰問、臣等捧戴顛倒、涯分不次、施無遠近、資生之道潛通、恩及客旅、感化之心更切、臣等自辭闕庭、載離寒暑、國命未宣、勞勤頻年、雖有一生、分當萬死、不憶、運

承和五年（八三八）

二八〇

闕三秋、嚴霜不行肅殺之命、天爲一物、偏恩曲煦埋枯之根、是知、臣等年齊柏寢、酬恩何期、紙罄蘭臺、書罪空滿、謹拜表以聞、

十二月十五日、是より先、小野篁、大使藤原常嗣と船を争ひ、遂に發航せざるの故をもつて、是日、隱岐國に逕流せらる

〔續日本後紀〕

七
仁明天皇

承和五年十二月己亥、天皇於清涼殿、修佛名懺悔、○中是日、勅曰、小

野篁、内含編旨、出使外境、空稱病故、不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死一等、處之遠流、仍配流隱岐國、初造船使造船之日、先自定其次第名之、非古例也、使等任之、各駕而去、一漂廻後、大使上奏、更復卜定、換其次第、第二船改爲第一、大使駕之、於是副使篁怨對、陽病而留、遂懷幽憤、作西道謠、以刺遣唐之役也、其詞牽輿多犯忌諱、嵯峨太上天皇覽之、大怒令論其罪、故有此竄謫、

※〔帝王編年記〕

十三
仁明天皇

（八三七）

承和四年丁巳、遣唐船四艘、乘人六百五十一人、從難波三津濱以三月

第一船大使藤原常繼

第二船副使小野篁

第三船判官長峯高名

第四船判官丹墀文雄

十五日賜宣命、以辰時解纜畢、第一船大使參議從四位上藤原朝臣常繼大納言小黒鷲孫中納言葛野鷹男、第二船副使刑部大輔正五位下小野朝臣篁、第三船判官正六位上長峯宿禰高名、第四船判官從六位上丹墀文雄、件四艘船從筑前國博多津同共入海、而遇逆風漂着智賀嶋、第一船破損殊甚、第二三船頗存全、第四船不知所到、判官文雄沒海無浮、見聞之人、無不呼悲、今三艘之船、更加修理、各又令乘、副使刑部大輔篁大怒心發、遂不預乘、仍坐違勅罪、配流隱岐國、是歲、慈覺大師入唐、

藤原常嗣

※〔續日本後紀〕

九
仁明天皇

（八四〇）

承和七年四月戊辰、

○中

參議左大辨從三位藤原朝臣常嗣薨、常嗣去延曆

遣唐大使を父子相襲ふ

廿年遣唐持節大使中納言正三位葛野麻呂第七子也、少遊大學、涉獵史漢、諳誦文選、又好屬文、兼能隸書、立性明幹、威儀可稱、弘仁十一年初任右京少進、尋遷式部大丞、十四年敍從五位下、出下野守、不之任、留任春宮亮、俄遷右少辨、天長元年遷式部少輔、尋兼勘解由次官、三年敍從五位上、五年敍正五位下、七年坐公事、左遷刑部少輔、八年敍從四位下、遷勘解由長官、九年兼下野守、累兼右大辨、加從四位上、承和元年改兼近江權守、尋遷左大辨、授正四位下、四年兼大宰權帥、五年夏六月奉修聘持節使入巨唐、六年八月至自大唐、近代父子相襲、預專對之選、唯一門而已、九月授從三位、薨時年卅五、

小野篁

副使の第二船をもつて大使の第一船となす

※〔日本文德天皇實錄〕四 仁壽二年十二月癸未、參議左大辨從三位小野朝臣篁薨、○中 承和元年

爲聘唐副使、○中 五年春、聘唐使等四舶次第泛海、○中 有詔、以副使第二舶、改爲大使第一舶、

篁抗論曰、朝議不定、再三其事、亦初定舶次第之日、擇取最者爲第一舶、分配之後、再經漂廻、

今一朝改易、配當危器、以己副利代他害損、論之人情、是爲逆施、旣無面目、何以率下、篁家

貧親老、身亦尪瘵、是篁汲水採薪、當致匹夫之孝耳、執論確乎、不復駕舶、近者、太宰鴻臚館、

有唐人沈道古者、聞篁有才思、數以詩賦唱之、每視其和、常美艷藻、六年春正月、遂以捍詔、

除名爲庶人、配流隱岐國、在路賦謫行吟七言十韻、文章奇麗、興味優遠、○下 略

長岑高名

※〔日本文德天皇實錄〕九 天安元年九月丁酉、正四位下右京權大夫兼山城守長岑宿禰高名卒、高

名者、右京人也、結童入學、年廿一、始爲文章生、少時養兄從五位下茂智麻呂、家貧無甌石之

承和五年（八三八）

承和五年（八三八）

二八二

承和元年二月遣唐使准判官に任ず

儲、專接文友、深結義兄、弘仁十二年春正月除式部少錄、頃之遷民部少錄、十三年除少內記、家途清貧、更望外吏、天長元年春正月除安房掾、立性清直、勤公忘私、七年春二月除右少史、九年春正月轉爲左少史、十年冬十一月轉爲左大史、^{（八三四）}承和元年春二月爲遣唐使准判官、二年春正月敍外從五位下、二月兼爲大膳亮美作權介、三年從大使參議正四位下藤原朝臣常嗣、乘第一船、船上雜事、大使委任、夏四月更於難波三津濱、追敍從五位下、邂逅屆大唐揚州海龍縣桑田鄉桑梓浦上、來朝長安、于時依無副使、被許上殿、^{（八三九）}承和六年歸于本朝、秋九月敍從五位上、爲次侍從、冬十月除伊勢權介、七年春正月敍正五位下、所行政事、頗合民望、八月別有勅、召爲嵯峨院別當、俄而除山城守、九年夏六月遷爲阿波守、遭嵯峨太上天皇晏駕、十年春正月轉除伊勢守、在任六年、政有能名、十五年春正月敍從四位下、嘉祥三年除播磨守、仁壽元年冬十一月敍從四位上、四年春正月敍正四位下、齊衡二年二月除右京權大夫、三年正月爲山城守、政用嚴明、百姓不擾、平生令子孫云、吾家清貧、曾無斗儲、至於瞑目之日、必從薄葬之義、卒於官、時年六十四、

良岑朝臣長松

南海の賊地に漂着するも、還るを得たり

善く琴を彈ず

＊〔日本三代實錄〕^{（三七六）}陽成天皇 元慶三年十一月十日乙丑、散位從四位上良岑朝臣長松卒、長松者、

大納言贈從二位安世之子也、承和之初爲常陸權大掾、俄遷爲伊豫掾、兼爲遣唐使准判官、聘禮既訖、歸船解纜、遭風漂墮南海賊地、殆致殞命、僅以得還、同七年授從五位下、數年拜侍從、尋加從五位上、遷丹波介、後進正五位下、俄而遷縫殿頭、遂至從四位下、未幾加從四位上、遷宮內大輔、累遷諸陵頭、武藏、大和、河內、山城等國守、長松無他才能、以善彈琴、配聘唐使、

卒時年六十六、

菅原梶成

醫術に達す

※〔日本文德天皇實錄〕五 仁壽三年六月辛酉、侍醫外從五位下菅原朝臣梶成卒、梶成、右京人

也、業練醫術、最解處療、承和元年從聘唐使渡海、朝廷以梶成明達醫經、令其請問疑義、五年

春解纜、着於唐岸、六年夏歸本朝、路遭狂飈、漂落南海、風浪緊急、鼓舶艫、俄而雷電霹靂、

桅子摧破、天晝黑暗、失路東西、須臾寄着、不知何一嶋、々有賊類、傷害數人、梶成殊祈願佛

神、儼得全濟、與判官良岑長松等合力、即採集破舶材木、造一船共載、爾時便風引舶、得着此

岸、朝廷嘉其誠節、十年爲鍼博士、次爲侍醫、卒於官、

卜部宿禰平麿

※〔日本三代實錄〕四十 陽成天皇 元慶五年十二月五日己卯、○中 從五位下行丹波介卜部宿禰平麿卒、平

麿者伊豆國人也、幼而習龜卜之道、爲神祇官之卜部、揚火作龜、決義疑多效、承和之初、遣使

卜術を善くす

聘唐、平麿以善卜術、備於使下、使還之後、爲神祇大史、嘉祥三年轉少祐、齊衡四年授外從五

位下、天安二年拜權大祐、兼爲宮主、貞觀八年遷參河權介、十年授從五位下、累歷備後丹波介、

卒時年七十五、

眞濟

※〔日本三代實錄〕四 清和天皇 貞觀二年二月廿五日丙午、僧正傳燈大法師位眞濟卒、眞濟者、俗姓

紀朝臣、左京人也、祖正五位下田長、父巡察彈正正六位上御園、眞濟少年出家、學大乘道、兼

通外傳、夙有識悟、從大僧都空海、受眞言教、大師海公鑒其器量、特加提誘、遂授兩部大法、

承和五年（八三八）

承和五年（八三八）—承和六年（八三九）

二八四

遣唐使に隨ひ、渡海するも
途中漂蕩す

爲傳法阿闍梨、眞濟時年廿五、時人奇之、眞濟入愛當護山高尾峰、不出十二年、嵯峨天皇聞其苦行、爲內供奉十禪師、承和之初、遣使聘唐、眞濟奉朝命、隨使渡海、中途漂蕩、船舶破裂、眞濟纔駕一筏、隨波而去、泛々然不知所到、凡在海上廿三日、其同乘者卅餘人、皆悉餓死、所活者眞濟與弟子眞然二人而已、眞濟唯佛是念、自然不飢、豈非如來冥護之所致哉、南嶋人遙望海中、每夜有光、怪而尋之、拯得着岸、皮膚腐爛、尸居不動、嶋人憐愍、收而養療、遂得歸本朝、仁明天皇擢爲權律師、文德天皇甚見尊重、爲權少僧都、未幾轉權大僧都、少頃爲僧正、於是、眞濟抗表請以僧正位讓先師空海、中心懇切、至于再三、天皇感激、贈空海法師以大僧正位、緇徒榮之、眞濟表請、建一重寶塔於高尾岑神護寺、造五大虛空藏菩薩像、安置塔中、置七口僧及度年分三人、春秋二季、永設法會、轉讀虛空藏十輪等經、以鎮護國家也、守其遺跡、至今修之、^{（八五八）}天安二年八月、文德天皇寢病、眞濟侍看病於冷然院、大漸之夕、時論嗽々、眞濟失志隱居、遷化時年六十一、

十二月、日本國使入唐朝貢す

〔舊唐書〕^{（八三三）} 開成三年十二月丙午、日本國貢眞珠・絹、
^{十七下} 文宗本紀下

眞珠・絹を貢す

＊〔冊府元龜〕^{（九七二）} 外臣部 開成三年十二月、日本國遣使朝貢進眞珠・絹、
^{朝貢五}

承和六年（八三九・開成四年）
閏正月、日本國使入唐朝貢す

〔舊唐書〕^{（八九九上）} 東夷傳 開成四年、又遣使朝貢、
^{倭國傳}

〔新唐書〕二二〇 東夷傳 日本傳 仁明直開成四年、復入貢、

※〔冊府元龜〕九七二 外臣部 朝貢五 開成四年閏正月南詔廻鵠日本群卿各遣使朝貢、

三月朔日、遣唐使歸朝の日まで、五畿七道諸國及び十五大寺に令して、大般若經及び海龍王經を轉讀せしむ、尋で、十六日、知乗船事・留學生等の逃亡せし者を佐渡國に還流す

〔續日本後紀〕八 仁明天皇 承和六年三月壬午朔、勅、遣唐三艘船、恐有風波之變、宜令五畿内七道諸國及十五大寺、轉讀大般若經及海龍王經、待使者歸朝、爲轉經之終、〔十六日〕丁酉、遣唐三箇船所分配、知乗船事從七位上伴宿禰有仁、曆請益從六位下刀岐直雄貞、曆留學生少初位下佐伯直安道、天文留學生少初位下志斐連永世等、不逐王命、相共亡匿、稽之古典、罪當斬刑、勅、特降死罪一等、配流佐渡國、

三月二十二日、遣唐大使藤原常嗣ら、歸朝のため乗船す

船上にて住吉大神をまつる

順風を得るため、住吉大神をまつる
住吉大神に禮し、海を渡る

〔入唐求法巡禮行記〕一 (八三九) 開成四年三月廿二日、早朝、沙金大二兩・大坂腰帶一、送與新羅譯語劉愼言、卯時、朝貢使出館、往船處、參軍已上、皆騎馬、退道人八人、巳時、解除、上船、祭住吉大神、請益僧等、駕第二船、船頭長岑判官、第一船節下、第三船菅判官、第四船藤判官、第五船伴判官、中丞差軍將、令監送九隻船、又有勅、轉牒海州・登州路次州縣支給、第一船水手甌稻益、緣在楚州館、逢史生越知貞原僉人飛喪、限月内、不許駕船、節下判令駕監送軍將船、酉時、動掉便發、出河、到大淮之南邊、停宿、○中 略
三月廿八日、天晴、巳時、爲得順風、祭住吉大神、午後、風變東南、夜頭風變西南、○中 略
四月十三日、早朝、潮生、擬發、緣風不定、進退多端、午後、風起西南、轉成西風、未時、潮

承和六年（八三九）

生、舶自浮流東行、上帆進發、從東海縣前、指東發行、上艇、解除、兼禮住吉大神、始乃渡海、風吹稍切、入海不久、水手一人、從先臥病、申終死去、裹之以席、推落海裏、隨波流却、海色稍清、夜頭風切、直指東行、○中略

卜部をして神々に祈禱せしめ、住吉大神・海龍王・主船の神に歸船の平安を祈る

四月十八日、改食法、日每人糲一升、水一升、東風不變、又此州但有粟、其粳米最貴云々、請益僧爲早到本國、遂果近年所發諸願、令卜部、祈禱神等、光珠一箇、祭施於住吉大神、水晶念珠一串、施於海龍王、剃刀一柄、施於主船之神、以祈平歸本國、

○以下、巡禮行記中、船上に住吉大神を祭る史料を便宜一括掲ぐ、

船上に天神地祇・住吉大神を祭る

＊〔入唐求法巡禮行記〕二 （八三九） 開成四年五月二日、西風吹、解纜出澳、爲風甚切、行路近磯、不能即

出、西時、風停、任流到海口停留、遣令汲水、日沒之時、於船上、祭天神地祇、亦官私絹・纈・鏡等奉上於船上住吉大神、丑時、水手一人自先沈病、將臨死、未死之前、纏裹其身、載艇送棄山邊、送人却來云、棄着岸上、病人未死、乞飯水、語云、我病若癒、尋村里去、船上之人、莫不惆悵、○中略

逆風に遭ひ船上の霹靂神・住吉大神を祭る

六月五日、遲明、懸帆進行、午後、到赤山西邊、潮逆暫停、俄爾之頃、又行、漸入山南、雲聚忽迎來、逆風急吹、張帆頓變、下帆之會、黑鳥飛來、遶船三廻、還居嶋上、衆人驚怪、皆謂是神靈、不交入泊、廻船却出、去山稍遠、繫居海中、北方有雷聲、掣雲鳴來、舶上官人驚怕殊甚、猶疑冥神不和之相、同共發願兼解除、祀祠船上霹靂神、又祭船上住吉大神、又爲本國八幡等大神及海龍王、并登州諸山神嶋神等、各發誓願、雷鳴漸止、風起東西、下碇繫居、此舶離陸日久、

不能過海、又不得入澳、經多日夜、漂蕩海裏、不任搖動、心力疲勞、

四月二十日、七道諸國の名神に、祈雨のため發幣す

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和六年四月辛未、一向令七道諸國奉幣名神、零致甘雨、

八月十三日、勅により、西成を期すため、内外諸國の神祇に奉幣す

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和六年八月壬戌、勅令内外諸國奉幣神祇、以期西成焉、

八月十四日、大宰大貳南淵永河ら飛驒して、遣唐錄事大神宗雄の來着の由を奏す、尋で二十四日、大宰府馳驛して、遣唐使藤原常嗣歸着の由を奏す

本船の不完全なるを嫌ひ、新羅船に駕して歸る

住吉神・氣比神に讀經奉幣して他使の平安を祈る

船歸着、

癸酉、○中大宰府飛驒、上奏入唐大使藤原朝臣常嗣等歸着之由、兼使等奏狀、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和六年八月甲戌、(二十五日)勅參議大宰權帥正四位下兼左大辨藤原朝臣常嗣、

大使藤原常嗣、七隻を率ゐて肥前生屬島に着す

大貳從四位上南淵朝臣永河等、得今月十九日奏狀、知遣唐大使藤原常嗣朝臣等率七隻船、廻着肥前國松浦郡生屬嶋、與先到錄事大神宗雄船、摠是八艘、宜依例勞來式寬旅思、但自陸入京事

承和六年(八三九)

承和六年（八三九）

二八八

須省約、何則時屬秋穫、恐妨民業、宜以大使常嗣朝臣爲第一般、令備後權掾伴須賀雄、知乘船事春道永藏兩人相隨之、其判官長岑宿禰高名、菅原朝臣善主、准判官藤原貞敏、錄事大神宗雄、准錄事高丘百興、讚岐權掾丹墀高主、知乘船事槻本良棟、深根文主、舌人大和耳主、陰陽師春苑玉成等十人、各造船聯次入都耳、就中如有大使常嗣朝臣引之共發者、任聽之、又信物要藥等、差檢掾使、取陸路遞運、自餘人物等、陸行水漕可有議定、宜待後勅、又未到第二船、并一隻船、復能覘候、來輒奏聞、

常曉和尚請來目錄

＊〔常曉和尚請來目錄〕

入唐學法沙門常曉言、常曉以去承和三年五月、銜命留學、遠期萬里之外、其年漂廻、四年亦不果渡海、五年六月進發、同年八月到淮南城廣綾館安置、孟冬使等入朝、常曉不得隨使入京、徒留館裏、空經多日、至于歲盡勅命未有受、則周遊郡內、訪擇師依、幸遇栖霞寺灌頂阿闍梨法號文璿和尚并華林寺三教講論大德元照座主、其文璿和尚則不空三藏弟子兼惠應阿闍梨付法人也、妙鈎經律、深通密藏法之棟梁國之所歸、同年臘月請節度使處分、配住栖霞寺、文璿和尚以爲師主、始學法儀、兼往花林寺、元照座主邊問本宗義、并得文書也、然大師尙佛法之流轉、歎生民之可拔、授我以金剛大法、許我以阿闍梨位也、膝步知未知、接足得不得、幸賴國家之大造大師之慈悲、學金剛海瑜伽、習大元帥祕法、斯法也則如來之肝心、衆生之父母、於國城壘、於人筋脈、是大元帥者、都內不傳於十供奉以外、諸州无出於節度宅以表、緣其靈驗不可思議也、諸佛菩薩金剛天等像雖在前來、此像未曾請來、今則大元帥諸身曼荼羅并諸靈像所要文書等請來見到、雖

大元帥祕法を習ふ

新羅賊

准判官藤原朝臣貞敏

云濤波猛沃、新羅賊畔、越彼厄難平達聖境、是則聖力所能也、伏惟 皇帝陛下、極德如天、佛日高轉、人之父佛之化、悲群生而濡足、助佛囑而垂衣、以陛下慈育効、祥靈像教、希自遠新來、恰似符契、非聖誰測矣、常曉本謂、果三十年、經歷漢里、求佛法來、幸護國家、而緣唐朝不聽留住、隨使廻歸、竊以一善此法教生而請來、不任一喜一懼之至、謹附准判官藤原朝臣貞敏、奉表以聞、并請來法門等目錄一通且以奉進、輕黷威嚴、伏增戰越、常曉誠恐誠惶謹言、

承和六年九月二日入唐學法沙門傳燈大法師位常曉上表

入唐學法沙門常曉

上新請來法門并佛像等事

百論疏一部三卷元康法師造

三論玄樞一部二卷元康法師造○中略

右道具、竝栖靈寺阿闍梨之所傳付也、

(八三八)

判官菅原善主の第四船にて入唐す

常曉去承和五年仲夏之月、隨入唐判官菅原朝臣善主、同上第四船發赴尸那、其六月到揚州着岸、八月下旬到淮南大都督府廣綾館安置、同年十二月住栖靈寺大悲、持念院、隨同寺灌頂阿闍梨文臻和尚、并華林寺三教講論大德元昭座主、顯密兩法頗以兼習、六年正月四日設二百僧齋、普供四衆、於此日諸寺大德綱維竝臨齋會、應供隨喜、常曉夜就師邊、受學瑜伽、晝周諸寺覓問法門、則喚即供奉李金等、圖繪大元帥將部曼荼羅等諸尊像、并寫文書、漸有次第、二月十九日受傳法阿闍梨位灌頂、於此日設大齋、普供大衆、留後判官藤原朝臣貞敏、別請丹墀真人高主・知乘安

承和六年（八三九）

承和六年（八三九）

二九〇

堀宿禰良棟等、同臨道場、拋花定本尊、受五智灌頂、廿一日准 勅離州、却赴本朝、常曉本業三論之枝、兼眞言之條、而才能不聞、言无取、逢時乏人遣留學眞、限以三十年、尋以一乘、任重人弱、夙夜慙慙、雖然國命難乖、忘視萬里、住心遠境、且頗受學顯密兩道、比未見及、太和有 勅、不聽留住、而隨使却廻、少間所成、些々法儀、注顯如件、

承和六年九月五日入唐學法沙門傳燈大法師位常曉上

九月十六日、遣唐持節大使藤原常嗣、歸京し節刀を進む、仍て十七日、常嗣らに纏頭物を賜ふ

〔續日本後紀〕

八
仁明天皇

承和六年九月甲午、遣唐持節大使參議正四位下行左大辨兼大宰權帥藤

原朝臣常嗣進節刀、

〔十七日〕

乙未、天皇御紫宸殿、右大臣從二位兼行皇太子傳藤原朝臣三守奏大唐勅書、獨召大使藤原朝臣常嗣、昇自東階、天顏咫尺、勅曰、遠涉危難之途、平安參來乎喜賜々々大坐、常嗣朝臣稱唯、拜舞庭中、更召殿上置酒焉、于時使旨及路中艱難、一々以聞、內侍持御被一條、御衣一襲佇立、大臣命常嗣朝臣云、今勅々汝衛國命、遠涉滄海、每聞險難、憐愍殊深、仍賜纏頭物、即稱唯、賜御衣被、拜舞退出、

※〔帝王編年記〕

十三
仁明天皇

承和六年己未、遣唐使等還來入朝、

〔續日本後紀〕

八
仁明天皇

承和六年九月辛丑、紀伊國人直講正六位上名草直豐成、少外記從六位上名草直安成等賜姓宿禰、兼貫附右京四條四坊、元右京人宗形橫根、娶紀伊國人名草直弟日之

九月二十三日、紀伊國人名草直豐成ら、宿禰の姓を賜はり、右京四條四坊に貫附さる

女、生男嶋守、養老五年冒母姓隸名草氏、嶋守即豐成之祖父也、

是日、令大宰府進上自大唐所奉請大元帥畫像、

九月二十八日、遣唐大使藤原朝臣常嗣從三位、判官長岑宿禰高名從五位上、判官菅原朝臣善主從五位下に昇敘せらる

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和六年九月丙午、詔曰、天皇我詔旨_止萬_皇宣大命乎衆聞_止與_宣、遣唐使藤原

常嗣朝臣等、朝乃遣乃道爾、遠路荒海乎歷苦美、大唐天子_毛止治勞禮、返事_毛早速申賜_利是爾念行_渡、

常嗣朝臣_我勤仕奉_禮留_勇止_索喜賜大坐須、故是以常嗣乎始天、水手_爾至_萬冠位上賜_比治賜不、在唐天

身罷_留判官藤原豐並_毛乎哀愍賜_比、追天冠位賜_久詔不天皇我大命乎衆聞食_止宣、授大使正四位下藤原

朝臣常嗣從三位、判官從五位下長岑宿禰高名從五位上、判官正六位上菅原朝臣善主從五位下、

贈在唐身亡判官正六位上藤原朝臣豐並從五位上、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和六年冬十月己酉朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、召散位從五位下伴

宿禰雄堅魚、

略中

亦令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏彈琵琶、群臣具醉、賜祿有差、

〔六日〕

甲寅、遣唐大使已下朝拜於八省院、無有天臨、唯大臣行事、例也、

〔九日〕

丁巳、遣唐使錄事正六位上山代宿禰氏益所駕新羅船一隻、歸着筑前國博多津、

〔十三日〕

辛酉、奉唐物於伊勢大神宮、

氏益新羅船に駕す

伊勢大神宮に唐物を奉る

十二月六日、入唐僧圓行歸來す、尋で請來の法門佛舍利等を上る

〔入唐五家傳〕

靈巖寺和尚傳

傳燈大法師位圓行、左京一條人也、

略中〔八三八〕

承和五年承入唐請益勅命渡海、初到唐禮賓院、是大唐

承和六年（八三九）

承和六年（八三九）—承和七年（八四〇）

二九二

開成三年也、（八三九）同十二月六日、歸來本朝、（八三九）即承和六年也、同廿九日、所請來法門一百廿三部、佛舍利三千粒等、公家奉進之、件舍利義真和尚并中天三藏難陀靈山大德等所授和尚也、大唐求法次第、具如請來目錄、仁壽二年三月六日寅冠遷化、春秋五十四、夏臘三十八、○下略

承和七年（八四〇）

三月三日、大宰府及び緣海諸國をして、未だ歸還せざる遣唐第二船のために、火を擧げて、之を候はしむ

四月八日、大宰府、遣唐知乗船事菅原梶成らの第二船、大隅國に漂着せる由を奏す

准判官良峯長松

四月二十一日、筑前國勳八等宗像神に、從五位下を授く

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年三月己卯、勅、遣唐三ヶ船、去年夏六月進發、今諸船廻來、稍經年月、伺候之事、恐有懈怠、宜命大宰府及緣海諸國、爲未廻來第二船、依例舉火候之、

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年四月癸丑、○中略大宰府上奏、遣唐知乗船事菅原梶成等所駕第二船廻着於大隅國、

（十五日）庚申、勅符大宰大貳從四位上南淵朝臣永河、少貳從五位下文屋朝臣眞屋等、得今月八日飛驒奏狀、知遣唐知乗船事菅原梶成等分駕一隻小船、廻着大隅國海畔、梶成等漂入異域、萬死更生、言念苦節、誠可矜恤、迄于入都、依舊勞來、量賜布帛、以資衣裳、又准判官良峯長松所駕之船、全否未期、鬱陶于懷、宜逾戒邊面、無絕候伺、若有來着、俾得安穩、

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年四月丙寅、奉授肥後國從四位下勳五等健磐龍神從四位上、餘如故、筑前國從五位下竈門神、筑後國從五位下高良玉垂神並從五位上、又、勳八等宗像神從五位下、餘如故、

六月三日、常曉の請により、山城國法琳寺に大元帥靈像を安置し、修法するを許す

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年六月丁未、入唐請益僧傳燈大法師位常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥、足修大法、望請、今般自大唐奉請太元帥靈像祕法安置此處、爲修法院、保護國家、不關講讀師之攝、許之、

六月五日、菅原梶成ら南海に漂着の際、得る所の兵器を獻す

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年六月己酉、○中遣唐第二船知乘船事正六位上菅原朝臣梶成等、海中遇逆風、漂着南海賊地、相戰之時、所得兵器、五尺鉾一枚、片蓋鞆横佩一柄、箭一隻、賈來獻之、並不似中國兵仗、

六月十五日、内外諸國の神祇に奉幣して、甘雨を祈請す

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年六月己未、奉幣於伊勢大神宮及賀茂上下、松尾等社、祈霽澤、又令内外諸國奉幣神祇、祈請甘雨、

六月十八日、大宰府馳驛して、遣唐第二船准判官良岑長松ら、大隅國に廻着せる由を奏す

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年六月壬戌、○中大宰府馳驛奏、遣唐第二船准判官從六位下良岑朝臣長松等廻着大隅國、

六月二十九日、勅により五畿七道の名神に、風雨豫防のため奉幣す
七月二十六日、出羽國飽海郡大物忌神に、遣唐使第二船南海漂着時の神助により、從四位下を授け奉る

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年六月癸酉、勅、頃者澍雨頻降、嘉穀滋茂、如有風災、恐損農業、宜令五畿内七道諸國、奉幣於名神、豫防風雨焉、

〔續日本後紀〕九 仁明天皇 承和七年七月己亥、奉授出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位

承和七年（八四〇）

二九四

下、餘如故、兼宛神封二戸、詔曰、天皇我詔旨爾坐、大物忌大神爾申賜波、頃皇朝爾緣有物怪天下、詢爾、大神爲崇賜利倍、加以、遣唐使第二船人等廻來申久、去年八月爾南賊境爾漂落氏相戰時、彼衆我寡兵力甚不敵利、儼而克敵留、似有神助止申、今依此事氏臆量爾、去年出羽國言上留、大神乃於雲裏氏、十日間作戰聲後爾石兵零止利申之、月日、與彼南海戰間、正是符契利、大神乃威稜令遠被太事乎、且奉驚異、且奉歡喜、故以從四位爵乎奉授、兩戸之封奉宛乎、申賜止波久申、

〔類聚三代格〕

五 加減諸國官員并廢置事

九月二十三日、大宰府の大主城一員を廢して、主厨・主船の二員をおく

太政官謹奏

廢品官一員

大主城一員正七位上官

右檢案内、依去弘仁十四年正月廿九日論奏、停主厨・主船、始置主城二員、而今得大宰府解

傳、自停主厨以來、例貢御贊并諸供具事、觸類多闕、望請、省主城置主厨、令各得其所者、伏望、省大主城、永定一員、但官位爲正八位上官、

置品官二員

主厨一員正八位上官

右、製令之日、壁置主厨、所掌之職、最在蕃客、加以供御之儲不可闕乏、而依同前論奏、既從停止、伏望、依彼府解、更置件職、

主船一員正八位下官

遣唐廻使の乗る新羅船は府衙に於て授く

右創法之時、置主船吏、而依同前論奏、既從停廢、如今得彼府解傳、案警固式云、簡練舟楫備於不虞者、加以年中例貢絹綿并御贄別貢等物每年有數、仍常雇民船多費正稅、又遣唐廻使所乘之新羅船、授於府衙、令傳彼樣、是尤主船之所掌者也、其大唐通事有職無掌、望請、更置主船、俾兼通事、即宛徭人、令護其舟、然則公家無損職掌有勲者、伏望、更置伴官令攝兩職、以前大宰大貳從四位上南淵朝臣永河等所請如件、夫觀時革制爲政之要樞、論代立規濟民之本務、是以明王馭俗術非一途、哲后治邦豈拘膠柱、臣等商量廢置如右、伏聽 天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

承和七年九月廿三日

九月二十六日、入唐廻使判官已下水手已上の三百九十一人に加階す

〔續日本後紀〕

九
仁明天皇

承和七年九月戊戌、定入唐廻使判官已下水手已上三百九十一人之等第、

九階十二人、八階卅九人、七階五十九人、六階百廿九人、五階百卅四人、四階二人、三階一人、不加階五人、

承和八年（八四一）

正月二十三日、遣唐陰陽師春苑宿禰玉成、在唐中得し難義書一卷を、陰陽寮諸生に傳學せしむ

〔續日本後紀〕

十
仁明天皇

承和八年正月甲午、遣唐陰陽師兼陰陽諸益正八位上春苑宿禰玉成、在

唐間得難義一卷、令陰陽寮諸生傳學、

七月二十一日、勅により、五畿七道の名神に嘉穀の奠幣をなす

〔續日本後紀〕

十
仁明天皇

承和八年七月己丑、勅、令五畿内七道諸國、奠幣名神、務祈嘉穀、

承和七年（八四〇）―承和八年（八四一）

承和九年（八四二）——承和十二年（八四五）

二九六

承和九年（八四二）

二月四日、伊勢大神宮及び諸社に、祈年の奉幣をし給ふ

〔續日本後紀〕

十一
仁明天皇

承和九年二月己巳、遣使奉幣伊勢大神宮及諸社、祈年也、

七月三日、崇あるにより、筑前國宗像神等の諸社に、使を遣して奉幣せしむ

〔續日本後紀〕

十二
仁明天皇

承和九年秋七月乙未、遣使於筑前國宗像神、竈門神、肥後國健甞龍神等諸社奉幣、緣有祟也、

九月二十日、來年、疫氣あるにより、防災のため伊勢大神宮に奉幣し、兼ねて天下の名神に奠幣し給ふ

〔續日本後紀〕

十二
仁明天皇

承和九年九月辛亥、勅、去四月四日御卜曰、來年春夏間、可有疫氣、宜奉幣於伊勢大神宮、兼奠幣於天下名神、防災於未然、

承和十年（八四三）

七月十日、百穀祈請のため、天下の名神に奉幣し給ふ

〔續日本後紀〕

十三
仁明天皇

承和十年秋七月戊子朔丁酉、奉幣於天下名神、令祈百穀、

十二月九日、入唐留學僧圓載弟子仁好・順昌ら、長門國へ歸着す

〔續日本後紀〕

十三
仁明天皇

承和十年十二月癸亥、入唐留學天台宗僧圓載之弟子仁好・順昌、與新羅人張公靖等廿六人、來着於長門國、

承和十一年（八四四）

七月二日、圓仁・圓載に旅資として黄金を賜ふ

〔續日本後紀〕

十四
仁明天皇

承和十一年七月壬午朔癸未、○中略又勅曰、在唐天台請益僧圓仁、留學僧圓載等、久遊絕域、應乏旅資、宜附圓載僦從僧仁好還次、賜各黄金二百小兩者、所司准勅、分付如前云々、

承和十二年（八四五）

〔續日本後紀〕

十五
仁明天皇

承和十二年五月丙辰、勅、比者涉旬不雨、新苗將燠、時當播殖、恐妨農

五月十日、五畿七道諸國の名神に甘雨祈請のため、奉幣し給ふ

九月二十六日、筑前國宗形郡權主工從八位上難波部主足に美努宿禰の姓を賜ひ、河内國若江郡に貫す

承和十四年（八四七）

七月八日、圓載の弟子仁好ら唐より來着す、尋で九月十八日、慧雲、孔雀等を獻す

十月二日、遣唐天台請益僧圓仁ら唐より歸着す

業、而今嘉雨稍降、井邑赴農、不知畿外之國、如渥潤何、宜仰五畿內七道諸國、奉幣於名神、兼每社零、令祈甘雨、若有雨降過度、應致淫害、復須奉幣祈止如初儀、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和十二年九月庚午、筑前國宗形郡人權主工從八位上難波部主足、改本姓賜美努宿禰、貫河内國若江郡、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和十四年七月辛未、天台留學僧圓載僉從仁好及僧惠萼等至自大唐、

上奏圓載之表狀、唐人張友信等冊七人同乘而來着、

〔十八日〕九月庚辰、入唐求法僧慧雲獻孔雀一、鸚鵡三、狗三、

〔續日本後紀〕

仁明天皇

承和十四年十月甲午、遣唐天台請益僧圓仁及弟子二人唐人冊二人到自大唐、

＊〔入唐求法巡禮行記〕

四 會昌七年

〔八四七〕歲次丁卯

正月中、改爲大中元年、張大使、從去年冬造船、至今年

二月功畢、專擬載圓仁等、發送歸國、

諛により文登縣界より渡海歸國の事ならず

閏三月十日、聞、入新羅告哀兼弔祭冊立等副使試太子通事舍人賜緋魚袋金簡中、判官王朴等、到當州牟平縣南界乳山浦、上船過海、有人讒佞張同十將、遣國章擬發送遠國人、貪造船、不來迎接天使云々、副使等、受其讒言深怪、牒、舉國制、不許差船送客過海等、張大使、不敢專拒、

承和十二年（八四五）―承和十四年（八四七）

承和十四年（八四七）

二九八

神御井

仍從文登界、過海歸國之事、不成矣、商量往明州、趁本國神御井等船歸國、緣目下无船往南、將十七端布、雇新羅人鄭客車、載衣物、傍海望密州界去、閏三月十二日出行、主人張大使、二十里相送、始別、十七日、朝到密州諸城縣界、大朱山駿馬浦、遇新羅人陳忠船、載炭、欲往楚州、商量船脚、價絹五疋定、

六月五日、楚州に到る

五月五日、上船候風、九日發、緣風變東南、去大朱山不遠、於瑯琊臺與齋堂與嶋中間拋石住、經四宿、十三日夜發、十四日黃昏、到海州界東海山田灣浦、泊船候風、十八日發到中路、風變无定、飄流終日竟夜、十九日飄到海中鎰脚嶋邊、泊船、艱苦、廿三日得東北風、此夜欲二更、却到東海山、過夜、廿四日早發、三更到淮水海住、緣逆風猛浪、不獲入淮、路糧罄盡、栖屑无極、

春大郎
神一郎

六月一日、風波稍靜、趁潮漸入淮、五日得到楚州新羅坊、惣管劉愼言專使迎接、兼令國頭一人、般運衣籠等、便於公廨院安置、訪知明州本國人、已發去、料前程趁彼船、的不及、仍囑劉大使、謀請從此發送歸國、九日得蘇州船上唐人江長、新羅人金子白・欽良暉・金珍等書云、五月十一日、從蘇州松江口發、往日本國、過廿一日、到萊州界崋山、諸人商量、日本國僧人等、今在登州赤山、便擬往彼相取、往日臨行、以遇人說、其僧等、已往南州、趁本國船去、今且在崋山相待、事須廻棹來云々、書中又云、春大郎、神一郎等、乘明州張支信船歸國也、來時得消息、已發也、春大郎本擬雇此船歸國、大郎往廣州後、神一郎、將錢金、付張支信訖、仍春大郎、上明州船發去、春大郎兒宗健兼有此々々物、今在此船云々、又金珍等付囑楚州惣管劉愼言云、日本國僧人、到彼中、即發遣交來云々、十日、便船往崋山、修書狀、付送金珍等處、報消息、特令相待、其後却擬向崋山渡海、排比路糧、楚州劉惣管每事勾當、前惣管薛詮及登州張大使舍弟

雄萬

九月二日、赤山浦より渡海

武州泥浦に船泊す

張從彥及孃皆送路、十八日晚際、乘楚州新羅坊王可昌船、三更後發、十九日立秋、始喫同廿六日到岬山南杵家莊、訪金珍船、其船已往登州赤山浦訖、見留書云、專在赤山相待、既如此、不免向乳山、趁逐彼船、廿七日修書付崔家船、報楚州劉惣管訖、更雇船主王可昌船、望乳山去、廿八日發、到田橫嶋、无風信、經十五日發不得、

七月十三日、遣丁雄萬、兼雇一人、從陸路、令向赤山、已來、尋訪金珍等船、十九日得風信發、廿日、到乳山長淮浦、得見金珍等船、便載人物、上船便發、廿一日到登州界泊船、勾當新羅使同十將張詠、來船上相看、船上衆人、於此糴糧、擬從此渡海、

八月九日、得張大使送路信物、數在別、十五日剃頭、再披縮服、廿四日祭神、九月二日、午時從赤山浦渡海、出赤山莫瑯口、向正東行、一日一夜、至三日平明、向東望見新羅國西南之山、風變正北、側帆向東南行、一日一夜、至四日曉、向東見山嶋、段々而接連、問楫工等、乃云、是新羅國西熊州西界、本是百濟國之地、終日向東南行、東西山嶋聯翩、欲二更、到高移島、泊船、屬武州西南界、嶋之西北、去百里許、有黑山、々體東西漸長、見說百濟第三王子、逃入避難之地、今有三四百家、在山中住、五日風變東南、發不得、到三更、得西北風發、六日卯時、到武州南界黃茅嶋泥浦泊船、亦名丘草嶋、有四五人在山上、差人取之、其人走藏、取不得處、是新羅國第三宰相放馬處、從高移島到此丘草嶋、山嶋相連、向東南、遙見耽羅嶋、此丘草嶋、去新羅陸地、好風一日得到、少時守嶋一人、兼武州太守家捉鷹人二人、來船上、語話云、國家安泰、今有唐勅使、上下五百餘人、在京城、四月中、日本國對馬百姓六人、因釣魚、漂到此處、武州收將去、早聞奏訖、至今勅未下、其人今在武州囚禁、待送達本國、其六人中一人病死矣、

承和十四年（八四七）

船衆、鏡などを捨て、祭神に風を求む

九月八日、風信なしと雖も出航す

肥前鹿嶋に到り泊す

鴻臚館に入る

圓仁ら入京の太政官符來る

筑紫大山寺にて、圓仁、金剛般若經を轉讀す

筑前名神に五百卷轉讀す

六日、七日、无風信、八日聞惡消息、異常驚怕、无風發不得、船衆捨鏡等、祭神求風、僧等燒香、爲當嶋土地及大人小人神等念誦、祈願平等得到本國、卽在彼處、爲此土地及大人小人神等、轉金剛經百卷、至五更、雖无風而發去、纔出浦口、西風忽至、便上帆向東行、似有神理相扶、從山島裏行、南北兩面山嶋重々而泰然、日欲已時到鴈嶋、暫歇、是新羅南界內家放馬之山、近東有黃龍寺莊、往々有人家二三所、向西南望見耽羅嶋、午後風信更好、發船從山嶋裏行、到新羅國東南、出到大海、望東南行、十日平明、向東遙見對馬嶋、午時、前路見本國山、從東至西南、相連而分明、至初夜、到肥前國松浦郡北界鹿嶋泊船、十一日平旦、筑前國丹判官家人大和武藏共嶋長來相見、粗知國中事宜、十五日到橘浦、十七日到博太西南能舉嶋下泊船、十八日到鴻臚館前、十九日入館住、

十月六日、借得官庫絹八十疋・綿二百屯、給船上肆拾肆人冬衣、六日、生料米十碩送來、依國府、從十月一日始充行、十九日、太政官符來太宰府、圓仁五人、速令入京、唐人金珍等冊四人、仰太宰府、量加支給者、官符在別、廿六日不獲入京之狀、出於府衙、

十一月七日、叡山上座仲曉、師僧慈叡、僧玄皎到來、云特來迎接、十四日得太政官十月十三日符、有優給唐客金珍等事、廿五日小野少貳入京、便上道訖、於大納言宅奉啓、伴右中辨・小野宰相宅、皆有狀、竝付小野少貳訖、廿八日於大山寺、始入唐時所祈金剛般若五仟卷、皆先馳使、奉送綵帛、同日、早朝一時發遣綵帛使訖、便轉經、同日、爲竈門大神、轉一千卷、廿九日午前爲住吉大神、轉五百卷、午後、爲香椎名神、轉五百卷、

十二月一日、午前、爲筑前名神、轉經五百卷、午後、爲松浦少貳靈、轉五百卷、二日爲香春名

神、轉一千卷、三日爲八幡菩薩、轉一千卷、觀音寺講師、每事相助、轉經僧布施白綿貳佰屯、十四日、午後、南忠闇梨來、

圓仁

俗姓壬生氏

※〔日本三代實錄〕

八
清和天皇

(八六四)

貞觀六年正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大師位圓仁卒、圓仁、

十五歳で叡山の最澄に學ぶ

七月二日、楊州に着く

遣唐使に辭して獨り下船す

俗姓壬生氏、下野國都賀郡人也、當產時有紫雲、見其家上、家人無見、于時有僧、名曰廣智、國人號廣智菩薩、廣智覩望雲氣、乃知起於檀越壬生氏家、甚以奇之、祕而不言、誠其父母、善能愛養、久而圓仁喪父、隨母育長、年甫九歲、付託廣智菩薩、圓仁幼而警俊、風貌溫雅、其兄以外典教之、然猶心慕佛道、嘗登經藏、誓探得觀世音經、心甚歡喜、遂拋俗書、受學經論、俄而通涉諸部、領悟大旨、夢見一大德、顏色清朗、長六七尺、卽就其邊、瞻仰禮拜、大德含咲、摩頂語話、傍有人、問云、汝知大德否、答云不知、傍人云、此是叡山大師也、大同末年、隨緣入京、適登叡山、謁覲最澄大師、瞻視顏貌、一如昔夢、最澄大師含咲語話、如夢所見、竊自知之、不向人說、圓仁于時年十五矣、最澄大師教以止觀、弘仁十三年六月、最澄大師遷化、圓仁齡始滿卅、身羸眼暗、知命不久、因而尋叡山北極幽谷、結草爲庵、消三四年、闔山僧衆苦勸云、吾師爲法早可入唐、尋而官補請益、(八三八)承和五年發、七月二日著大唐楊州海陵縣、(八三八)開成三年七月二日到楊州、同年十月、國使入京、圓仁苦請留住楊府、意在巡禮天台及五臺等諸聖跡、李相公德裕聞奏、有勅不許巡禮、四年國使聘禮既畢、還向本朝、圓仁相隨上船、圓仁心謂、遠渡滄溟、本爲求法、仍辭國使、獨身下船、弟子惟正、惟曉俱留住沙石之上、海賊十餘人忽然出來、顏色非常、意在要物、圓仁與惟正等俱語云、我死只在茲、不如捨物專任彼賊、卽捨隨身物、着身衣

承和十四年(八四七)

判官良岑長松の歸國の船に
乗し、登州に漂着す

開成五年、五臺山に入る

服皆悉與之、最後授銚子、賊即云、和尚若捨銚子、客中無此器、辛苦無極矣、賊乃發慈心、語云、和尚如今有何所要、答、都無所要、但欲得到村里、賊即差一人、隨逐圓仁、令送村里、纔至人舍、賊即逃隱不見、當此之時、殆沒賊手、僅免虎口、更歸海州、刺史處分、配住本國第二船、船頭判官良岑長松同船解纜、待風而發、逆風忽起、到著登州堺、圓仁下船、登赤山法華院、送過冬月、登州十將押衙張詠來到山院、語云、詠昔到那國、甚蒙國恩、故來奉問、若有所要、冀莫形迹、圓仁答云、無他所要、但意樂欲得入國內巡禮聖跡、押衙答云、和尚莫愛、詠將滿此要、數日文登縣牒將來云、日本國僧等、今須任意巡禮諸聖跡、押衙即副使送縣家、々々與縣牒、付送青州、^{（八四〇）}開成五年、入五臺山、禮拜聖跡、謁諸大德、主人意謂、客僧若是文殊歟、客僧忽疑、主人皆是文殊歟、如是相疑、共增恭敬、圓仁住大華嚴寺涅槃院、經過一夏、垂至北臺、雲霧滿山、徑路難尋、霧氣開霽、乃看路前、見一師子、其形甚可怖畏、圓仁却走二三里許、經於小時、更復進路、見彼師子猶在前路、蹲居不動、更復却走二三里許、彌增驚恐、數刻之後亦漸進行、師子猶在不去、遙見人來、即便起立入重霧中、無復所見、凡五臺多傳天台教法、有志遠和尚、玄鑒和尚、各年及八十、盛傳摩訶止觀并玄疏等、學徒數百矣、圓仁夏中隨遠和尚、稟學止觀、寫得天台教迹等卅七卷、至秋七月、巡禮南臺、至黃昏時、忽見聖燈、一燈之光普照五臺、一々分明、至五更聖燈滅不現、其年八月、到長安城、禮拜大興善寺翻經院元政阿闍梨、屈請以爲師、始學金剛界大教、數月受五瓶灌頂、被許傳法也、明年向青龍寺、禮拜義真阿闍梨、屈請爲師、入胎藏灌頂道場、始習學毘盧遮那經中眞言印契、并眞言教中微細儀式、凡住長安六年之間、求得念誦教法經論章疏等五百五十九卷、胎藏金剛界兩部大曼荼羅、及諸尊曼荼羅、壇樣、高僧眞影、

長安に住すること六年

承和十四年九月歸朝

延曆寺座主

舍利并道具等廿一種、後隨青龍寺阿闍梨、學悉地大教、得值南天竺寶月三藏、學西天悉曇、聲韻分明、千古所疑、一時氷釋、兼巡城中、遍謁衆德、到街東大安國寺、謁侃阿闍梨、向街西淨影寺、見惟謹阿闍梨、不惜玄祕、各爲指授、遇會昌天子毀滅佛法、經歷三年、旣絕歸思、俄而軍裏下牒云、外國僧等宜早歸本貫、因得出城、纔至城門、大理寺卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之、朝議郎守尙書職方郎中上柱國賜緋銀魚袋楊魯士、左神策軍押衙銀青光祿大夫檢校國子祭酒殿中監察侍御史上柱國史李元佐等、及衆官禮拜所持之教法、押衙等引諸官人迎待門前、特致勞問、僉云、我國佛法旣已滅盡、佛法隨和尚東去、自今以後、若有求法者、必當向日本國也、得到登州押新羅使張詠宅、安存優厚、經兩三年、不得歸國、夢達摩和尚、寶志和尚、南岳天台六祖大師、并日本國聖德太子、行基和尚、叡山大師等、俱共來集、語云、吾等爲護汝令到日本國、故到此間、語竟即起、前後圍繞、向東相送、其年春遇本國船、爲風所扇、到登州堺、覓問法師、即乘其船、還至本朝、承和十四年九月還此土聞奏天子、請奉爲國家修灌頂、每年永修鎮護聖境、詔依請焉、嘉祥二年五月於延曆寺、始修灌頂、官給一千僧供料、用內藏寮物、勅遣參議從四位下守右大辨伴宿禰善男檢校、而飲誓水者一千餘人、同年七月 詔以圓仁爲內供奉十禪師、三年三月天皇崩、四月皇太子即皇帝位、圓仁上奏言、除災致福、熾盛光華佛頂、是爲最勝、是故唐朝內道場中、恆修此法、爲鎮國基、街西街東諸內供奉持念僧等、互相爲番、奉祈寶祚、今須建立持念道場護摩壇、奉爲陛下、應修其法、唐國街東青龍寺裏、亦建立皇帝本命道場、令勤修眞言祕法、詔曰、朕特發心願、於彼峯建立惣持院、興隆佛法、於是、勅惣持院安置十四僧、永令修法、仁壽四年四月 勅以圓仁爲延曆寺座主、齊衡三年三月天皇屈圓仁於冷然院、受兩部灌

承和十四年（八四七）

承和十四年（八四七）—承和十五年（八四八）

三〇四

頂、^{（八五八）}天安二年八月天皇崩、十二月皇太子履祚、明年天皇屈圓仁於內裏、受菩薩戒、貞觀二年五

月淳和太后請諸寺名德於院裏、六ヶ日間、講法華經、解坐之後、請留圓仁、受菩薩大戒、奉太

后法名稱良祚、三年六月太皇太后^{（明子）}藤原氏、請僧綱名僧於五條宮、四ヶ日間、講法華經、太后受

菩薩大戒、三昧耶戒、及壇灌頂、行大乘布薩、遷化之時、年七十二、天下道俗、知與不知、莫

不哀惜焉、勅遣少納言良岑朝臣經世、贈法印大和尚位、八年追諡曰慈覺、勅遣少納言良岑朝臣

經世、就山宣制焉、圓仁性寬柔、慈悲甚深、喜怒不形于色、嘗患身羸、蟄居叡山北極草菴、夢

從天送藥、形如甜瓜、半片噉之、其味如蜜、傍有人、語云、此是卅三天不死妙藥、覺後口裏餘

味、飲之三過、與夢中噉、其味不異、經旬日知身健眼明、圓仁在此、心無染着、得絕攀緣、又

行路之時、目無邪視、路傍左右、時有遇者、直置而去、不知有人、於向行方、適有相遇、乃揖

而前、其專心無餘執、皆此類矣、圓仁身遊上邦、足歷靈窟、趁衆德而演其說、稟微旨而記於心、

傳將真教、弘闡殊旨、宜彼西人謂法東去、雖復數遇難危、然而每得免脫、自非被佛護念導利群

生、豈能與於斯者哉、又天台宗之傳於本朝也、昔聖德太子迎前身舊讀之經於南岳、鑒真高僧賣

止觀教法而來自西唐、先師最澄奉 詔越海、造道邃和尙而受微言、從順曉闇梨而學悉地、所求

法文二百餘卷、圓仁資新來之祕教、廣舊傳之宗門、雖發源於懸水、而鼓濤於浮天、人能弘道、

信而有徵歟、

性寬柔にして慈悲甚だ深し

承和十五年（八四八・大中二年）
三月二十六日、圓仁ら歸朝す

〔續日本後紀〕

^{十八} 仁明天皇

承和十五年三月乙酉、天台宗入唐請益僧圓仁、將弟子僧性海惟正等、
去年十月駕新羅商船、來著鎮西府、是日歸朝、遣中使慰勞、各施御被、

是月、日本國王子入唐し、方物を貢す

〔舊唐書〕^{十八下} 宣宗本紀 大中二年三月己酉、日本國王子入朝、貢方物、王子善菴、帝令待詔顧師言與之對手、

六月五日、留學僧圓載の願により、留住の延期を聽し、旅資として黄金を下賜す

〔續日本後紀〕^{十八} 仁明天皇 承和十五年六月壬辰、^{略中}是日、太政官牒、送在唐天台宗留學問僧圓載、其辭曰、奉勅、省圓載表款、容服變更、心事艱阻、然自強不息、乞留數年、凡人心也、皆戀鄉土、非敦求法、誰樂遠徧、事須遂其實歸、不厭年深、又風潮萬里、賣獻遠臻、物豈在奇、唯嘉乃情、宜因于遠成等還次、令知此意、裁賜金物以充旅資者、准 勅、聽更住數年、兼賜黄金一百小兩、宜領之、

六月十日、雨害防止のため、五畿七道諸國の名神に奉幣し給ふ

〔續日本後紀〕^{十八} 仁明天皇 承和十五年六月丁酉、勅曰、陰陽寮申云、今茲秋雨應爲害者若不豫防、恐損年穀、宜令五畿内七道諸國、奉幣於名神、以防止雨害、

嘉祥元年(八四八) 七月十七日、大宰府、白龜を獻ずるにより、五畿七道の神祇に奉告す

〔續日本後紀〕^{十八} 仁明天皇 嘉祥元年七月甲戌、勅曰、頃者大宰府進白龜、檢之圖典、實合大瑞、自非神明靈應之化、豈獨致希代之貺、宜奠幣五畿内七道諸國天神地祇、賀彼賽報、

十一月二日、山城國無位櫟谷神、從五位下に敍せらる

〔續日本後紀〕^{十八} 仁明天皇 嘉祥元年十一月戊午、奉授筑後國正五位下高良玉垂神從四位下、山城國无位櫟谷神從五位下、

承和十五年(嘉祥元年・八四八)

嘉祥二年（八四九）
二月二十五日、疫癘・洪水護防のため、五歳七道の名神に奉幣せしむ

〔續日本後紀〕^{十九} 仁明天皇 嘉祥二年二月庚戌、大宰府言、對馬嶋司解僞、此嶋居海中、地近新羅、若有機急者、何以備不虞望請、停史生一員、置弩師一員、依請許之、陰陽寮言、今年疫癘可滋、又四五月應有洪水者、勅、頃來染疫之人、往々夭亡、夫護防之恃、實賴冥威、存濟之方、亦期梵力、宜令五歳内七道諸國、奉幣名神、兼復於國分二寺及定額寺、一七ヶ日、晝轉經王、夜禮觀音、如法修行、必呈靈感、

嘉祥三年（八五〇）
二月十五日、圓仁、仁壽殿に於て、文殊八字法を修す

〔續日本後紀〕^{二十} 仁明天皇 嘉祥三年二月甲子、請名僧六十口於紫宸殿、限三ヶ日、轉讀大般若經、又請天台宗座主前入唐請益傳燈大法師位圓仁及定心院十禪師等於仁壽殿、令修文殊八字法、

七月二十六日、宗形朝臣豐子、從五位下に敘せらる

〔日本文德天皇實錄〕^二 嘉祥三年七月辛丑、授從三位藤原朝臣貞子正三位、无位望子女王從四位下、從四位下廣井女王從四位上、從四位上當麻真人浦蟲正四位下、從五位下菅原朝臣閑子、安倍朝臣鳳子、甘南備真人伊勢子、安倍朝臣殿子、石川朝臣普子等並從五位上、外從五位下綾公姑繼、宗形朝臣豐子、无位藤原朝臣宜子、笠朝臣西子等並從五位下、外從五位下神門臣富繼外正五位下、

七月二十九日、筑前國織幡神に從五位下を授く

〔日本文德天皇實錄〕^二 嘉祥三年七月甲辰、授筑前國織幡神從五位下、

八月五日、文德天皇、即位の由を五畿七道の諸神に告げ給ふ

〔日本文德天皇實錄〕二 嘉祥三年八月庚戌、遣使五畿七道、班幣諸神、告以即位之由、大祓於建禮門前、以遣使也、

九月二十六日、五畿七道の名神に班幣して、賀瑞の由を告ぐ

〔日本文德天皇實錄〕二 嘉祥三年九月庚子、遣侍從從五位上嶋江王向伊勢大神宮、神祇大副從五位下中臣朝臣逸志向賀茂大神社、神祇權少祐正六位上占部業基向尾張大神社、告以賀瑞之由、大祓於建禮門前、以遣使也、又下知五畿七道諸國、班幣名神、同告賀瑞之由、

十月七日、筑前國宗像神、從五位上に昇敘せらる

〔日本文德天皇實錄〕二 嘉祥三年十月辛亥、進山城國稻荷神階授從四位上、授攝津國廣田神從五位下、進大和國大和大國魂神階授從二位、石上神、及大神大物主神、葛木一言主神等並正三位、夜岐布山口神從五位下、河內國恩智大御食津彥命神、恩智大御食津姬命神等並正三位、丹比神從五位上、伊勢國阿耶賀神從五位上、尾張國熱田神正三位、越前國氣比神正二位、筑前國宗像神從五位上、竈門神正五位上、筑後國高良玉垂命神從四位上、肥後國健甞龍命神正三位、伊豆國三嶋神從五位上、

是歲、留學僧圓載を傳燈大法師に任ず

僧圓載僧位記

〔行歷抄裏文書〕

唐留學僧圓載

右可傳燈大法師位

勅、久在神州勤求聖道、音塵渺邈、歲月崢嶸、念其艱苦、有軫冲襟、宜假風信於躋行、寄寵章

嘉祥三年（八五〇）

嘉祥三年（八五〇）—仁壽二年（八五二）

三〇八

於坏度、主者施行、

嘉祥三年 月 日

仁壽元年（八五一）

正月二十七日、詔して、天下の諸神を正六位上に敍し給ふ

〔日本文德天皇實錄〕三 仁壽元年正月庚子、詔、天下諸神、不論有位無位、敍正六位上、

〔類聚三代格〕一

神敍位并託宣事

太政官符

應國內諸神不論有位無位敍正六位上事、

右太政官去年十二月廿八日下五畿内七道諸國符傳、右大臣宣、奉勅、特有所思、天下大小諸

（藤原房）

神、或本預官社、或未載公簿、有位更增一階、無位新敍六位、唯大社并名神雖云無位奉授從五位下者、而今推量、六位之中其階有四、至于奉行必應有疑、宜除奉授從五位之外、不論有位無位共敍正六位上、

（八五）
嘉祥四年正月廿七日

仁壽二年（八五二）

四月八日、使を遣して、五畿七道の名神に奉幣し給ふ

〔日本文德天皇實錄〕四

仁壽二年四月甲辰、遣使者、向五畿七道諸國、奉名神幣、

（八四）

庚戌、修仁王會起自宮城、及于諸國、設百高座、一日二時講演經王、

十月五日、地震により、中臣・忌

〔日本文德天皇實錄〕四

仁壽二年十月丁卯、地震、遣中臣忌部兩氏人向五畿七道諸神社奉幣、

部兩氏人を遣して、五畿七道の諸神社に奉幣し給ふ

賽宿禰也、

仁壽三年（八五三・大中七年）

二月三日、筑前國宗像神、正五位下に昇敘せらる

四月、日本國王子入唐朝貢す

〔日本文德天皇實錄〕五 仁壽三年二月癸亥、加筑前國宗像神正五位下、

〔冊府元龜〕九七二 外臣部 朝貢五

（八五三） 大中七年四月、日本國遣王子來朝獻寶器音樂、帝謂宰執曰近者黃河清、今又日本國來朝、朕媿德薄何以堪之、因賜百僚宴陳百戲、以禮之、

齊衡元年（八五四）

四月三日、傳燈大法師智戒らを、七道名神の諸社に遣し、大般若經を轉讀、民福を祈らしむ

〔日本文德天皇實錄〕六 齊衡元年四月丁巳、遣傳燈大法師位智戒、興智、眞秀、傳燈法師位

明昭、玄永、傳燈滿位僧基藏、基秀、向七道諸國名神社、轉讀般若、祈民福也、

十二月十三日、賀瑞により、諸國の諸神に奉幣し給ふ

〔日本文德天皇實錄〕六 齊衡元年十二月甲子、詔諸國、奉諸神幣、告以賀瑞之由、

齊衡三年（八五六）

八月五日、伯耆國宗形神、從五位上に敘せらる

〔日本文德天皇實錄〕八 齊衡三年八月乙亥、伯耆國伯耆神、大山神、國坂神並加正五位下、

倭文神、宗形神、大帶孫神並從五位上、

天安元年（八五七）

二月十七日、使を遣し、内外諸名神社に賀瑞を告げ、宣制す

〔日本文德天皇實錄〕九 天安元年二月乙酉、遣使内外諸名神社、賀木連理白鹿等之瑞、宣制

曰、天皇我詔旨止、掛畏^支諸大神乃廣前爾、恐^美美^美申賜^へ申久、維齊衡三年十月廿日爾、公卿奏久、

常陸國木連理乎獻、同年十二月十三日爾、美作國白鹿^乎獻^{良久}奏^世利、如是^支嘉瑞波、聖皇乃御世爾、

仁壽二年（八五二）—天安元年（八五七）

天安元年（八五七）—天安二年（八五八）

三一〇

天地乃示賜^{布物止奈}聞食須、是薄德乃能令感致^{波爾}非須、掛畏岐皇大神乃慈賜比示賜^{留毛奈利}爲^{天奈}貴喜比受賜利、御代乃名乎改天、天安元年止爲留事乎、申賜爾差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持天奉出須、此狀乎神^{奈可}聞食天、風雨乃災無久、天下饒足^{女之}天皇朝廷乎、今毛今毛彌益々爾、常盤爾堅盤爾、夜守利日守^{利爾}護賜^止、恐見恐^{見毛}申賜^{波久}申、

十月二日、筑前國正四位下勳八等宗像神、正三位に昇敘せらる

天安二年（八五八）

閏二月二十六日、筑前國正四位下勳八等田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、並に正三位に昇敘せらる

〔日本文德天皇實錄〕十 天安二年閏二月戊午、在筑前國正四位下勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神並授正三位、

○行文異なるも前年と重複す、恐らく衍ならん、

四月十日、諸名神に奉幣す

〔日本文德天皇實錄〕十 天安二年四月辛丑、於冷泉院南路大祓、爲遣諸名神社奉幣帛之使也、
略○下

四月十一日、諸大神社に奉幣し、天下平安を祈る

〔日本文德天皇實錄〕十 天安二年四月壬寅、^{略○中}是日遣從四位下右近衛中將源朝臣興、散位時宗王、從四位上伊豫守春澄朝臣善繩、從五位下右馬助藤原朝臣廣基、陰陽頭從五位上藤原朝臣三藤、散位從五位下源朝臣双、從四位下忠貞王、侍從輔世王、民部大輔藤原朝臣仲統、雅樂頭從五位下源朝臣舒、縫殿頭伴宿禰須賀雄、散位從四位下棟貞王、從五位下源朝臣包、從四位上

越中守源朝臣啓、從五位下源朝臣同、高橋朝臣淨野等於諸大神社、宣命曰、天皇我詔旨止、恐

美恐_美申給_倍申久、御心爾有所念行爾依_{天那}差使_天、宇豆乃大幣帛乎令捧持_{天奉}出須、此狀乎聞食_天、

安幣乃足幣止受賜_天、天皇乎寶位無動久、常磐_爾堅磐_爾護賜_比助賜_比、思食須御志_乎如御意爾果之幸倍

賜_比、天下平安爾護給_比矜給_倍止、恐_美恐_美申給_{波久}止、申、

※〔日本紀略〕_{文德}天皇天安二年四月壬寅、_(八五八)_(十一日)空中有聲如雷、是日、遣使等於諸名神社奉幣、宣命云々、

貞觀元年(八五九)

正月二十七日、筑前國正三位勳八等田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、並に從二位に昇敘せらる。京畿七道の諸神二百六十七社に進階敘位を行ふ。

〔日本三代實錄〕_二

清和天皇

貞觀元年正月廿七日甲申、京畿七道諸神進階及新敘、惣二百六十七

社、_{○中}山城國正二位勳二等松尾神從一位、葛野月讀神、平野今木神並正二位、_{○中}平野從四位

下久度古開神、_{○中}近江國從二位勳一等比叡神正二位、從五位上勳八等伊香神從四位下、從五

位下伊富岐神、佐久奈度神、水口神、川田神、三上神、奥津嶋神、小比叡神並從五位上、_{○中}安

藝國正五位下伊都岐嶋神、從五位上速谷神並從四位下、從五位下多家神從五位上、_{○中}筑前國

正三位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神並從二位、正五位下竈門神、從五位下筑紫神並

從四位下、從五位下織幡神、志賀海神、美奈宜神並從五位上、无位住吉神從五位下、筑後國正

三位高良玉垂命神從二位、從四位下豐比咩神從四位上、肥前國從五位下田嶋神從四位下、肥後

國從二位勳五等健磐龍命神正二位、從四位下阿曾比咩神從四位上、_{○下}略

二月一日、清和天皇、即位の由を、
五畿七道の諸神に告げ給ふ

〔日本三代實錄〕二 清和天皇 貞觀元年二月丁亥朔、停釋奠之禮、諒闇也、遣使伊勢國大神宮及五
畿七道、班幣諸神、告以即位之由、

二月二十七日、五畿七道に下知し、
諸神社を修理せしむ

〔日本三代實錄〕二 清和天皇 貞觀元年二月廿七日癸丑、下知五畿七道諸國、令修理諸神社、宜自
今以後、官長專當、年中修理色目、付朝集使言上、

二月三十日、筑前國從二位勳八等
田心姫神・湍津姫神・市杵嶋姫神、
並に正二位に昇敘せらる、是日、
太政大臣藤原良房東京一條第の宗
像三神を正二位に敘す

〔日本三代實錄〕二 清和天皇 貞觀元年二月三十日丙辰、○中 筑前國從二位勳八等田心姫神、湍津姫
神、市杵嶋姫神並授正二位、太政大臣東京一條第從二位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫
神並授正二位、此六社居雖異、實是同神也、

三月二十六日、安藝國伊都岐嶋中
子天神、從五位下に敘せらる

〔日本三代實錄〕二 清和天皇 貞觀元年三月廿六日壬午、授上野國正六位上波已曾神從五位下、安
藝國正六位上大麻天神、伊都岐嶋中子天神、水分天神、天社天神並從五位下、

七月十三日、奉幣使發遣につき、
大赦を行ふ

〔日本三代實錄〕三 清和天皇 貞觀元年七月十三日丙寅、大赦於建禮門前、以明日將發奉諸神社幣
并財寶使也、

十月七日、畿内畿外の諸國に奉幣
して、風雨の災なきの神恩を報賽
し給ふ

〔日本三代實錄〕三 清和天皇 貞觀元年十月七日己丑、畿内畿外諸國、遣使班幣於天神地祇、去九
月祈無風雨之災、誠有感徹、歲以有年、仍賽之、

十月二十八日、鑄錢司、新鑄錢を
諸名神社並に諸山陵に奉る

〔日本三代實錄〕^三 貞觀元年十月廿八日庚戌、^{略中}是日、鑄錢司進新鑄錢、奉諸名神社并
諸山陵、及頒賜親王已下各有差、

貞觀二年（八六〇）
二月八日、肥前國田嶋神を從四位
上に敘す

〔日本三代實錄〕^四 貞觀二年二月八日己丑、進肥前國從四位下田嶋神階加從四位上、授
從五位上荒穗天神正五位下、從五位下豫等比咩天神、久治國神、天山神、志々岐神、溫泉神並
從五位上、正六位上金立神從五位下、

貞觀三年（八六一）
二月七日、遣唐使者、攝津國住吉
神社に向ひ神寶を奉る

〔日本三代實錄〕^五 貞觀三年二月七日辛亥、遣唐使者向攝津國住吉神社、奉神寶、
○遣使のこと詳らかならず、姑くこゝに掲ぐ、

貞觀五年（八六三）
三月四日、神恩報賽のため、勅に
より七道諸國の名神に奉幣し給ふ

〔日本三代實錄〕^七 貞觀五年三月四日丙寅、勅班幣七道諸國名神、今春咳嗽流行、人多
疫死、仍禱名社神明、有感、因以賽之、

七月四日、諸名神社に班幣す

〔日本三代實錄〕^七 貞觀五年七月四日甲午、祠廣瀨龍田神、分遣使者、班幣諸名神社、

貞觀六年（八六四・景文王四年）
正月七日、伊勢大神宮以下諸社の
禰宜に、位一階を賜ふ

〔日本三代實錄〕^八 貞觀六年春正月七日甲午、天皇御前殿覽青馬、賜宴群臣、奏樂賜祿
如常、詔曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨^{良萬}止、宣勅乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止
貞觀元年（八五九）—貞觀六年（八六四）

貞觀六年（八六四）——貞觀七年（八六五）

三一四

宣、天皇幼少^{止伊倍}久御坐^{止伊倍}、親王等乎始天、王等臣等乃相穴^{奈比}奉利相扶奉^{爾依天}、食國之内無事久平^{介久}、御冠加賜^比、人止成賜^努、此慶乎天下國內止共^{爾可爲止奈}所念行須、凡爲人子者有悅事時^{爾波}、必先都於夜乎崇飭^{毛乃止}聞行須、故是以皇太后乎大皇太后^爾、皇太夫人乎皇太后^{爾上}奉利崇奉^留、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等^爾給位一階級、正六位上量賜物、又諸寺僧尼乃滿位以上^爾加位一階、若大法師位^{爾奈良半}、廻授弟子一人、又天下僧尼乃年八十已上^爾施物^{太萬}、又五位已上子孫年廿已上敍當陰階、又天下爲父後者、六位已下敍爵一級、唯正六位上^{爾波}廻授一子、无子者^{爾波}量賜物、又京官主典已上加賜帛絮、

四月、日本國使新羅に至る

〔三國史記〕^{新羅本紀十一} 四年夏四月、日本國使至、^{景文王}

七月十七日、五畿七道諸國の大小諸神に奉幣す

〔日本三代實錄〕^九 貞觀六年七月十七日辛丑、頒下五畿七道諸國、班幣境内大小諸神、爲穀祈也、

十月十一日、太政大臣藤原良房第内の宗像三女神に、位一階を進め從一位に敍す

〔日本三代實錄〕^九 貞觀六年十月十一日甲子、坐太政大臣東京第正二位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神、並進階級、加從一位、

貞觀七年（八六五）
二月十日、詔により、五畿七道の大小の諸社の長官に潔齋して奉幣

〔日本三代實錄〕^十 貞觀七年二月十日壬戌、^略是日、太政官頒下 詔書於五畿七道曰、今稽 詔書、每寺薰修、每社走幣、賴茲冥祐、防彼咎徵、又鰥寡孤獨不能自存者、量加優賑、

せしむ

四月二日、近江國奥嶋神の託宣あり

四月十七日、内藏頭從五位上藤原朝臣安方を、太政大臣の東京一條第の宗像社に遣し、楯・鉾・鞍を奉獻して、寶祚の安泰と國家の無事を祈らしむ

神功皇后

使得支濟、又天安二年以往租稅未納、皆勿詭責、一從蠲除、夫佛法所崇、尤在誠信、神明所感、寔是資潔清、今須國司講師相共齋戒、從符到日一七箇日、於國分寺及有供定額寺、令轉讀金剛般若經、讀經之間、禁斷殺生、又國內所有大小諸社長官、躬親潔齋奉幣、其幣料用正稅、又鰥寡孤獨不能自存者、以救急義倉內、國司相量給之、○下略

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀七年四月二日壬子、元興寺僧傳燈法師位賢和奏言、久住近江國

野州郡奥嶋、聊構堂舍、嶋神夢中告曰、雖云神靈、未脫蓋纏、願以佛力、將增威勢、擁護國家、安存鄉邑、望請、爲神宮寺、叶神明願、詔許之、

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀七年四月十七日丁卯、雷雨、諸衛陣於殿庭、○中遺從五位下行木

工權助和氣朝臣彝範、向石清水八幡大菩薩宮、奉楯矛并御鞍、告文云、天皇我詔旨度、掛畏岐石清水爾坐八幡大菩薩乃廣前爾申給止申久、新宮構造天波、楯梓及種々神財可奉出、而神財波且奉出已止畢太利、楯梓并御鞍等乎奈利介、此乎今造饒天、禮代大幣帛乎令捧持天、使木工權助從五位下

和氣朝臣彝範差天奉出給布、但御鞍波三具奈毛奉出須倍加利介、然乎申傳大留人奈毛誤天、二具乎令造天

因天一具乎波大菩薩爾奉利、一具乎波卜定天大帶命爾奉留、但比咩大神乃御料波今使造天後爾、吉日

良辰爾奉出牟、此狀乎平介久聞食天、天皇朝廷乎實位無動久、堅石常石爾、夜守日守爾護幸倍賜比、

天下國家無事久護助給倍止、恐美恐美毛申賜止波久申、參議從四位下守右大辨兼行播磨權守大枝朝臣

音人向平野社、内藏頭從五位上藤原朝臣安方向太政大臣東京第社、並奉楯梓御鞍等、告文同石

貞觀七年（八六五）

貞觀七年（八六五）—貞觀八年（八六六）

三一六

清水、

五月二十五日、五畿七道諸神社の祝部に、白丁を補するを停む

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀七年五月廿五日乙巳、略中是日、制、五畿七道諸神社祝部、停補

白丁、以八位已上及年六十已上人充之、先是置者、令終其身、自今以後、立爲恆例、

貞觀八年（八六六）

三月八日、大安寺僧傳燈法師位一如を遣し、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後等の諸神社に於て、讀經せしむ

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀八年三月八日甲申、勅遣大安寺僧傳燈法師位一如於筑前、筑後、

豊前、豊後、肥前、肥後等國諸神社讀經、

四月十四日、應天門の炎上により、五畿七道の諸社に奉幣せしむ

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀八年四月十四日戊子、勅、去閏三月十日夜、應天門及東西樓觀、

忽有火災、皆悉灰燼、求之著龜、猶見火氣、自非神助、災何消伏、宜令五畿七道奉幣境内諸神、仍須長官潔齋、躬向社頭、敬以奉進、必致如在、

六月九日、五畿七道に祈雨奉幣し、兼ねて金剛般若經を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀八年六月九日壬午、令五畿七道奉幣境内諸神兼轉讀金剛般若經、

旱也、

七月三日、祈雨のため、宮城及び五畿七道の諸神に奉幣し給ふ

〔日本三代實錄〕

清和天皇

貞觀八年七月三日乙巳、班幣宮城中及京畿七道諸神、黑馬一疋奉大

和國丹生川上雨師神、並以祈雨也、

七月十六日、天下水害多く、五畿七道の諸神に奉幣して、金剛般若經を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕十三
清和天皇 貞觀八年七月十六日戊午、陰陽寮言、天下可憂水疫、是以令五畿七道、頒幣國內諸神、轉讀金剛般若經、

十一月十七日、新羅寇賊防止のため、大宰府及び能登・因幡等の國府をして、諸神に奉幣し、健兒統領選士等に訓練を加へしむ

〔日本三代實錄〕十三
清和天皇 貞觀八年十一月十七日戊午、○中勅曰、迺者怪異頻見、求之著龜、新羅賊兵常窺間隙、災變之發唯緣斯事、夫攘災未兆、遏賊將來、唯是神明之冥助、豈云人力之所爲、宜令能登、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門、大宰等國府、班幣於邑境諸神、以祈鎮

護之殊効、又如聞、所差健兒、統領、選士等、苟預人流、曾無才器、徒稱爪牙之備、不異螳螂之衛、況復可教之民、何禦非常之敵、亦夫十步之中必有芳草、百城之內寧乏精兵、宜令同國府等、勤加試練必得其人、

貞觀九年（八六七）
十月十三日、安藝國伊都岐嶋神等に位階一階を加ふ、中に伊都嶋宗形小專神あり

〔日本三代實錄〕十四
清和天皇 貞觀九年十月十三日戊寅、勅加松尾神社封二戸、授安藝國從四位下伊都岐嶋神、速谷神並從四位上、從五位上安藝都彥神正五位下、正六位上生石神從五位上、正六位上伊都嶋宗形小專神、楹櫓神並從五位下、

十一月十三日、疫癘風雨の災豫防に神恩あるにより、報賽のため、五畿七道の諸社に班幣す

〔日本三代實錄〕十四
清和天皇 貞觀九年十一月十三日戊申、○中去春神祇官陰陽寮言、可慎疫癘風雨之災、祈禱神明、豫防災變、今秋頗有年、由是、班幣五畿七道諸社以賽焉、

〔類聚三代格〕一
神社事

貞觀八年（八六六）—貞觀九年（八六七）

貞觀十年（八六八）—貞觀十一年（八六九）

貞觀十年（八六八）

六月二十八日、大和國城上郡宗像神社は封戸神田なきにより、筑前の祖神の封物をもつて、神舎の修理料に充てしむ

宗像郡金埜

太政官符

應宛行宗像神社修理料賤代徭丁事、

從良賤十六人、正丁、在筑前國宗像郡金埜

宛行徭丁「十」^{（衍カ）}八人、大和國城上郡四人、高市郡二人、十市郡二人、

右得彼社氏人從五位下守右少辨兼大學頭高階真人忠峯等解狀備、件神坐大和國城上郡之内、與坐筑前國宗像郡從一位勳八等宗像大神同神也^{○中}唯筑前社有封戸神田、大和社未預封例、因茲

忠峯等始祖太政大臣淨廣壹高市皇子命、分氏賤年輸物令修理神舎、以爲永例而年代久遠、物情解體、氏衰路遙、不堪催發、須依貞觀十「八」^{（八七〇）}^{（衍カ）}年六月廿八日格、申請祖神封物、以宛修理料、

略^{○中}

^{（八九三）}
寬平五年十月廿九日

閏十二月十日、山城國櫟谷神に正五位下を授く

〔日本三代實錄〕^{十五}
清和天皇

貞觀十年閏十二月十日己亥、遣使於攝津國廣田、生田神社奉幣^{○中}授

山城國從五位下櫟谷神正五位下、

貞觀十一年（八六九）

三月三日、疫病防止のため、五畿七道の諸神に班幣し、并せて、金剛般若・摩訶般若經等を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕^{十六}
清和天皇

貞觀十一年三月三日辛酉、^{○中}先是、陰陽寮言、今年夏季、當有疾病、

至是、勅令五畿七道諸國、班幣境邑諸神、并轉讀金剛般若摩訶般若等經、限三日訖、轉經之間、禁斷殺生、

十二月十七日、勅により五畿七道の諸神に班幣せしむ

〔日本三代實錄〕^{十六} 貞觀十一年十二月十七日庚子、^略是日、勅命五畿七道諸國、班幣境内諸神、豫防後害、

貞觀十二年（八七〇）

二月十五日、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄を遣して、宗像大神他三社に奉幣し、新羅船入寇に對して鎮護を祈らしむ

新羅賊船、那珂郡荒津に到り、豐前國貢調船の絹綿を奪ふ
宇佐宣命

〔日本三代實錄〕^{十七} 貞觀十二年二月十五日丁酉、勅遣從五位下行主殿權助大中臣朝臣

國雄、奉幣八幡大菩薩宮、及香椎廟、宗像大神、甘南備神、告文曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏

八幡大菩薩乃廣前爾申賜倍申久、去年六月以來、大宰府度々言上^{多良}、新羅賊船二艘、筑前國那珂

郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪^{天逃退}、又廳樓兵庫等上爾依有大鳥之怪^{天卜求}

爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水乃災在天、舍宅悉仆顛利、人民多流亡^多、如

此之災古來未聞^止故老等毛申止言上^{多利}、然間爾陸奧國又異常^留地震之災言上^{太利}、自餘國々毛又頗有件

災止言上^{多利}、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止久^支世時與^利相敵比來^多、而今入來境内天、奪取調物天、

无懼憚之氣、量其意況爾、兵寇之萌自此而生加、我朝久無軍旅天專忘警備^{多利}、兵亂之事尤可愼恐、

然我日本朝波、所謂神明之國^{利奈}、神明之助護賜波、何乃兵寇加可近來^支、況掛毛畏岐大菩薩波、我朝

乃顯祖止御座天、食國乃天下護賜比助賜布、然則他國異類乃加侮致亂^{倍岐}事乎、何聞食天驚賜比拒却介

賜^波在平、故是以從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天奉出須、此狀乎平久聞食天、假令時

世乃禍亂^{止之}、上件寇賊之事在^倍岐物^{止那利}、掛畏岐大菩薩、國內乃諸神^{多知}、唱導^{岐比}未發向之前爾沮拒

排却賜倍、若賊謀已熟^天兵船必來^{久在}波、境内爾入賜^{須之}、遂還漂沒^{米賜比}、我朝乃神國止畏憚^{利來}留禮故

實乎澆^多之失^比賜^{奈布}、自此之外爾假令^{止之}夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之事、

疫癘飢饉之事爾至^{萬天}、國家乃大禍、百姓乃深憂止^{良牟}可在^{乎波}、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天下無

貞觀十一年（八六九）—貞觀十二年（八七〇）

香椎宣命

躁驚久、國內平安爾鎮護利救助賜比、皇御孫命乃御體乎常磐堅磐爾與天地日月共爾夜守晝守爾護幸倍
矜奉給倍、恐美毛申賜止久、又曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐香椎廟乃廣前爾申賜止申久、去年六月
以來、大宰府度々言上多良、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎
掠奪天逃退利、又廳樓兵庫等上爾依有大鳥之怪天下求爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾
地震風水乃災在天、舍宅悉仆顛利、人民多流亡利、如此之災比古來未聞止故老等毛申止言上利、然間
爾陸奧國又異常留地震之災言上多利、自餘國々毛又頗有件災止言上利、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止
久岐世時利與敵比來多、而今入來境內天奪取調物利、無懼沮之氣、量其意況爾兵寇之萌自此而生加、
我朝久无軍旅天、專忘警備利多、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波所謂神明之國利、神明之助護利賜
波、何兵寇可近來岐、況亦彼新羅人乃相敵比來介留事波、掛畏岐御廟乃威德爾依天降伏訖賜天、若干
乃代時乎歷來太、而今如此爾狎侮氣色乎露出事波、最是御廟乃聞驚岐怒恚利賜物奈、故是以、從五位
下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天、禮代乃太幣帛乎令捧持天奉出須、此狀乎平氣聞食天、假令
時世乃禍亂止之、上件寇賊之事在倍物奈利、掛畏岐御廟、國內乃諸神乎、唱導岐賜天、未發向之前爾沮拒
排却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來久倍在波、境內爾入賜須之、逐還漂沒米賜天、我朝乃神國止畏憚禮來留禮
故實乎澆多之失比賜布奈、自此之外爾假令止之、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之
事、疫癘飢饉之事爾至爾、國家乃大禍、百姓乃深憂止可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天
下無躁驚久、國內平安爾鎮護利救助賜比、天皇朝廷乎寶位无動久、常磐堅磐爾夜守晝守爾護幸倍矜
奉給倍、恐美毛申賜止久、又曰、天皇我詔旨止掛畏岐宗像大神乃廣前爾申賜止申久、去年六月以來、
大宰府度々言上多良、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪天

宗像宣命

日本朝は神明の國

宗像大神、新羅征伐のをり、
神助を加へ給ふ

逃退^{利太}、又廳樓兵庫等上^爾依有大鳥之怪^天卜求^爾、隣國乃兵革之事可在止^卜申^利、又肥後國^爾地震
風水之災在天、舍宅悉仆^利、人民多流亡^{利多}、如此之災比古來未聞^止、古老等毛申止言上^{利多}、然間^爾、
陸奥國又異常^{留那}地震之災言上^{利多}、自餘國々毛、又頗有件災止言上^{利多}、傳聞、彼新羅人波、我日本朝
止久^岐世時^{利與}相敵^{比來多}、而今入來境內^天、奪取調物^{利天}、無懼沮之氣、量其意況^爾兵寇之萌自此而生
加、我朝久无軍旅^天、專忘警備^{利多}、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波所謂神明之國^{利那}、神明乃助護
利賜波、何乃兵寇加可近來^岐、亦我皇大神波^{（宗像大神）}、掛毛畏^{岐大帶日姬乃}、彼新羅人乎降伏賜時^爾、相共加
力倍賜^天、我朝乎救賜^{比守賜奈}、而今如此^爾狎侮氣色乎露出事^{波乎}、最是皇大神乃聞驚^{岐怒志利賜倍物奈}
故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使^天、禮代乃大幣帛乎令捧持^天奉出給布、此狀乎
平^介聞食^天、假令時世乃禍亂^{止之}、上件寇賊之事在^{倍物奈利}、掛畏皇大神、國內乃諸神^{太知}唱導^{岐賜比}
未發向之前^爾沮拒排却賜^倍、若賊謀已熟^天、兵船必來^{久倍}在波、境內^爾入賜^{波須}、逐還漂沒^{米賜比}、我
朝乃神國止^{憚良來禮}、故實乎澆^多之失賜^{布奈}、自此之外^爾假令^{止之}、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之
事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事^{爾萬天}、國家乃大禍、百姓乃深憂^{止之}、可在^{遠波}、皆悉未然之外^爾拂
却銷滅之賜^天、天下无躁驚久國內平安^{爾鎮護利救助賜比}、天皇朝廷乎寶位无動、常磐堅磐^爾夜守晝
守^{爾護幸倍矜奉給倍}、恐^{美恐美}申賜^{波久}、又曰、天皇我詔旨止甘南備神乃廣前^爾申賜^倍、去年六
月以來、大宰府度々言上^{久多良}、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津^爾到來^天、豐前國貢調船乃絹綿乎
掠奪逃退^{利多}、又廳樓兵庫等上^爾、依有大鳥之怪^天卜求^爾、隣國乃兵革之事可在止^卜申^利言上^{利多}、件事
毛思^{保可}憂歎^岐御坐之間^爾、又言上^{久多良}、新羅寇賊調兵裝船^天、我朝之地乎掠侵^{爾將來須}、皇神乃託宣
在利、又被敍位^{牟太萬}止願^{布止}言上^{利多}、依此^天、從五位下乃御位記^{爾禮代乃幣帛乎令副捧天奉出給布}、今毛今

貞觀十二年（八七〇）

毛國家乎慙勸爾助守坐天、如此岐災難止在倍事乎未然爾警悟志排鎮坐天、彌高彌廣爾榮飭利崇奉止申給止宣布天皇我詔旨乎申、又遣使於諸山陵、告可禦新羅寇賊之狀、參議正四位下行皇太后宮大夫藤原朝臣良世、從五位上行下野權守紀朝臣有常告深草山陵、參議正四位下行右衛門督兼讚岐權守源朝臣生、右兵庫頭從五位下久賀朝臣三常告田邑山陵、參議正四位下行右兵衛督源朝臣勤、侍從從五位下藤原朝臣高範告楯列山陵、告文准八幡大菩薩宮、

〔日本三代實錄〕

十八
清和天皇

貞觀十二年十一月十七日乙丑、略○中

是日、分遣使者諸社、奉鑄錢司及

十一月十七日、葛野鑄錢所近くの
宗像・櫛谷・清水・堰・小杜五神
に、新貨幣の豐足を祈る

宗像神

葛野鑄錢所新鑄錢、賀茂御祖別雷兩社使前安藝介從五位下大中臣朝臣是直、松尾社使神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善、稻荷社使神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道、石清水社使主水佑正六位上大中臣朝臣坂田麿、平野社使神祇少副正六位上大中臣朝臣有本、梅宮社使大監物從五位下橘朝臣茂生、春日社使雅樂少允從七位上大中臣朝臣冬名、大原野社使主水正六位上大中臣朝臣鹿主、又近於葛野鑄錢所宗像、櫛谷、清水、堰、小杜五神、奉鑄錢所新鑄錢、告文曰、天皇我詔旨止、宗像神乃前爾申賜止倍申久、依年序漸積貨幣已賤天、改饒益神寶爲貞觀永寶、常乃鑄錢司路遠妨多爾依天、加太部加太部於山城國葛野郡天令鑄作、今神社件鑄錢所爾近久坐須、仍所鑄作之早穗廿文乎左馬助從五位下多治真人藤吉乎差使天令捧持天奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安天、貨幣豐足之米賜止申賜止倍申、又曰、天皇我詔旨止、堰神乃前爾申賜止倍申久、依年序漸積貨幣已賤天、改饒益神寶、爲貞觀永寶、常乃鑄錢司路遠妨多爾依天、加太部加太部於山城國葛野郡天令鑄作、今神社件鑄錢所爾近久坐須、仍所鑄作之早穗十五文乎、左馬助從五位下多治真人藤吉乎差使天、

令捧持天奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安^{天志}、貨幣豐足^之賜^止申^{賜波久}、櫟谷、清水、小社神告^(社カ)文准此、

貞觀十三年(八七一)
四月三日、肥前國宗形天神に従五位下を授く

〔日本三代實錄〕^{二十} 貞觀十三年四月三日己卯、授下總國正五位下意富比神正五位上、石見國從五位下大歲神、大原神並從五位上、山城國正六位上澄水神、市河神、出羽國利神、伯耆國勝宿禰神、石見國霹靂神、國府中神、肥前國宗形天神並從五位下、

六月十日、諸神社に班幣し雨を祈る

〔日本三代實錄〕^{二十} 貞觀十三年六月十日乙酉、自朔不雨、至是、班幣諸神社、祈雨也、是日無雲而雷、

閏八月七日、大暴風雨により諸神社に止雨を祈請す

〔日本三代實錄〕^{二十} 貞觀十三年閏八月七日庚戌、雷、大雨、諸衛陣於殿前、河水暴溢、京師道橋流損者衆、壞人廬舍不知其數、頒遣使者班幣諸神社、請止雨、

十二月十四日、災疫豫防のため、五畿七道の諸神に班幣し、國分二寺に經を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕^{二十} 貞觀十三年十二月十四日乙卯、陰陽寮言、明年當有天行之災、又古老言、今年衆木冬華、昔有此異、天下大疫、勅令五畿七道諸國、頒幣境內諸神、於國分二寺、轉經、禱冥助於佛神、銷凶札於未萌、十五日丙辰、分遣使諸山陵奉荷前幣、

貞觀十五年（八七三）——貞觀十八年（八七六）

三二四

貞觀十五年（八七三）

二月二十三日、災疫豫防のため、五畿七道の諸神に班幣し、國分寺定額寺に於て經を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕

二十三
清和天皇

貞觀十五年二月廿三日戊午、陰陽寮言、今茲天行應慎、稼穡不登、

以歲當三合也、詔五畿内七道諸國、班幣境内名神、并於國分及諸定額寺、限以三日、晝則轉經、夜則禮懺、薰修之間、禁斷殺生、國司講師齋潔至誠、祈佛神之冥助、消災疫於未然焉、

九月十六日、肥前國田嶋神・志々支神・宗形神等の神位を昇授す

〔日本三代實錄〕

二十四
清和天皇

貞觀十五年九月十六日戊寅、授肥前國從四位上田嶋神正四位下、從五位上志々支神、豫等比咩神並正五位下、從五位下宗形神從五位上、正六位上白角折神、葛木一言主神、溫知神並從五位下、

貞觀十七年（八七五）

十二月十三日、水旱・疾疫・兵喪・火災の豫攘のため、五畿七道の名神に奉幣し、國分寺・定額寺に於て金剛般若經を轉讀せしむ

〔日本三代實錄〕

二十七
清和天皇

貞觀十七年十二月十三日壬戌、勅令五畿七道諸國、奉幣境内名神及國分二寺諸定額寺、屈僧七口、限以三日、晝轉金剛般若經、夜念藥師觀音號、明年當三合、豫攘除水旱疾疫兵喪火災、

貞觀十八年（八七六）

三月九日、大宰權帥在原行平の起請により、壹岐嶋水田一百町を公營して對馬嶋年糧に充て、肥前國松浦郡庇羅・值嘉兩郷を以て二郡を建て、值嘉嶋を置く

〔日本三代實錄〕

二十八
清和天皇

貞觀十八年三月九日丁亥、參議大宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事、其一事、請營壹岐嶋水田一百町、使宛對馬嶋年糧曰、檢文簿、六國一年所漕運對馬嶋年糧穀二千斛、運賃并雜用料穀額三萬四千五十束、就中筑前、筑後、肥前、豐前、豐後等國各三百廿斛、肥後國四百斛、運賃穀一萬七十四束、并綱丁挾抄水手百六十五人、徭丁稻三千二百八十束、凡厥所費、大略如件、而往古以來、全到者寡、年中漂五六之三、四、以故、運輸之國、人物徒盡、檢領之嶋、糧儲常空、壹岐嶋司并習俗人民等皆申云、壹岐嶋者、肥前國味旦發程、入夜

本朝入唐使等、值嘉島を經
歴せざるはなし

着岸、對馬嶋與壹伎嶋、又亦如之、其潮落潮來、不似他處、而陸地人民、不詳波程、故蕩沒連
踵、溺死不絕者、今謹檢故實、延曆以往、件年粮初、從六ヶ國、遞送於壹岐嶋、壹岐嶋受領、
轉送於對馬嶋、而大同以來已停廢、伏以、古人遠圖、深達物理、但令六國漕運、猶未由救弊、
因檢文簿、壹伎嶋課丁二千餘人、並是半輸者也、千人貢御油、千人進府儲油并雜穀等、又同嶋
水田六百十六町、而沒八十六步、就中除百姓口分田并雜職田等之外、死者口分并疫死口分、國
造田等一百餘町也、今商量、役千人丁、營百町田、其勢易於反掌、停進府之雜物、運對馬嶋年
糧事、又便於人民、假令停壹岐嶋所進雜油并雜穀等、令進六國、停六國所運年粮、令營壹伎嶋
田、相折利害、所返納稻二萬九千六百卅餘束、卽其支度用途載在別紙、但反經之可否、利害難明、
因召彼嶋守賀茂直峯并練事書生等、令陳利害、勘署已訖、其二事、請合肥前國松浦郡庇羅・值
嘉兩鄉、更建二郡、號上近下近、置值嘉嶋曰、檢案內、元有九國三嶋、至于天長元年、停多嶺
嶋、隸大隅國、是只貢百領鹿皮、費三萬六千餘束稻之故也、今件二鄉、地勢曠遠、戶口殷阜、又
土產所出、物多奇異、而徒委郡司、恣令聚斂、彼土之民、厭私求之苛、切欲貢輸於公家、惣是
國司難巡檢、鄉長少權勢之所致也、加之地居海中、境隣異俗、大唐新羅人來者、本朝入唐使等、
莫不經歷此嶋、府頭人民申云、去貞觀十一年、新羅人掠奪貢船絹綿等日、其賊同經件嶋來、以
此觀之、此地是當國樞轄之地、宜擇令長、以慎防禦、又去年或人民等申云、唐人等必先到件嶋、
多採香藥、以加貨物、不令此間人民觀其物□、又其海濱多奇石、或鍛練得銀、或琢磨似玉、唐
人等好取其石、不曉土人、以此言之、不委以其人之弊、大都皆如此者也、望請、合件二鄉、更
建二郡、號上近下近、便爲值嘉嶋、新置嶋司郡領、任土□貢、但其俸料舉定正稅公廩之間、令

貞觀十八年（八七六）

兼任肥前國權官、於是、公卿奏議曰、臣聞、聖人濟世、以便物爲先、明王馭民、以制宜爲貴、今行平所請上件二條、漸欲省風浪運漕之費、存封疆任土之規、有以詳矣、臣等伏以商量、營水田充年糧事、頗乖仍舊謀、合權宜、請試許二年、先明息耗、合兩鄉號一嶋事、苟謂利公、豈期膠柱、請隨其所陳、將以改置、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

六月八日、肥前國田嶋神、正四位下に昇敘せらる

〔日本三代實錄〕

二十九
清和天皇

貞觀十八年六月八日癸丑、授參河國從四位下知立神、祗鹿神並從四位上、從五位上狹投神、赤孫神並正五位下、肥前國從四位上田嶋神正四位下、從五位上志々岐神正五位下、正六位上神嶋神、鳴神、銀山神並從五位下、

〔日本三代實錄〕

二十九
清和天皇

貞觀十八年八月廿五日己巳、分遣中臣齋部兩氏六位已下、班幣五畿七道諸國境内神社、以神祇官陰陽寮言猶亦見火災之氣也、

八月二十五日、火災豫防のため、中臣・齋部の氏人六位已下を五畿七道の諸神社に遣し、班幣せしむ

十月五日、五畿七道諸國に班幣し、兵火あるべきを告ぐ

〔日本三代實錄〕

二十九
清和天皇

貞觀十八年十月五日戊申、○中是日、分遣使者於五畿七道諸國、班幣境内諸神、以下筮告可有兵火也、告文曰、天皇我詔旨止、畿内畿外乃諸名神乃廣前爾申給止久申久、去四月十日爾、八省院乃大極殿爾火災事在天、東西兩樓并廊百餘間一時爾燒盡利、因茲天令卜求爾、今亦火災兵事等可在止卜申利、其後爾城外爾處々爾着火無止留事在利、如是般災波、皇神達乃厚護爾依天防拂止、念行天、禱申給布事乎天神地祇平久聞食天、若惡人乃國家乎亡止謀留事、皇神達早顯出給部、若天火波、如是災乎未然之外爾拂却給部、此狀乎爲令申爾、差使天奉出須、皇神達此狀乎平久聞

食天、自今以後波、諸種々災皆悉銷拂給天、天皇乃御體乎、常磐堅磐爾護給幸給比、風水乃災不起、天下平安爾五穀豐登之給部申給止久申、

元慶元年（八七七）

二月二十七日、陽成天皇の即位により、大中臣・齋部兩氏の六位已下を五畿七道の諸國に遣し、諸社に奉幣せしむ

九月二十五日、大嘗會により、中臣・齋部兩氏人を五畿七道諸國に遣し、天神地祇三千一百三十四神に奉幣せしむ

十二月八日、大宰府、資財・蕃客・遣唐使留置・返上等の四箇帳を奏し、貢綿一千百五十二屯を砂金五百七十二兩に相博して、永貯となさんことを請うて聽さる

十二月十五日、筑前國織幡神を正五位下に敍す

遣唐留學僧道照

〔日本三代實錄〕^{三十}陽成天皇 元慶元年二月廿七日己巳、分遣大中臣齋部兩氏六位已下於五畿七道諸國、班幣境内神社、緣 天皇即位也、

〔日本三代實錄〕^{三十二}陽成天皇 元慶元年九月廿五日癸亥、^{略中}分遣中臣齋部兩氏人於五畿七道諸國、班幣境内天神地祇三千一百卅四神、緣供奉大嘗會也、

〔日本三代實錄〕^{三十二}陽成天皇 元慶元年十二月八日甲戌、先是、大宰府言、資財、蕃客、遣唐使留置、返上等四箇帳、貢綿千一百五十二屯、徒積庫底、將致腐損、請相博沙金五百七十二兩、以爲永貯、至是許之、

〔日本三代實錄〕^{三十二}陽成天皇 元慶元年十二月十五日辛巳、授筑前國從五位下織幡神正五位下、正六位上天照神從五位下、

十六日壬午、以禪院寺爲元興寺別院、禪院寺者、遣唐留學僧道照、還此之後、^{（天智天皇元）}壬戌年三月創建於本元興寺東南隅、和銅四年八月移建平城京也、道照法師本願記曰、眞身舍利、一切經論、安置一處、流通萬代、以爲一切衆生所依之處焉、

貞觀十八年（八七六）—元慶元年（八七七）

元慶二年（八七八・憲康王四年）
三月九日、五畿七道の名神に奉幣し、宿禰を賽す

〔日本三代實錄〕三十三
陽成天皇 元慶二年三月九日乙巳、地震、是日、分遣使者、奉幣馬於賀茂御祖別雷、松尾、石清水、稻荷、住吉、平野、大原野、梅宮、及班幣五畿七道諸名神、賽舊禰也、告文曰、天皇我詔旨止、掛長岐平野大神乃廣前爾恐美恐毛申賜倍止申久、去秋御躰不豫爾御坐之時、去八月十九日爾祈申久之、御躰平安爾護助奉賜比、寶位無動久御坐賜波禮代大幣爾御馬牽副天奉出止祈申之、祈申毛驗久、平安爾護助奉賜倍利、因茲今所祈申乃大幣帛爾、御馬令牽副天、參議正四位下行左大辨兼左近衛中將近江權守源朝臣舒乎差使呂奉出須、此狀乎平久聞食天、天皇朝廷乎、今毛今毛常磐堅磐爾護幸倍奉賜比、天下平安爾五穀豐登之賜止倍、恐美恐毛申賜止波久申、自餘社告文並准此、

八月、日本國使新羅に至る

〔三國史記〕新羅本紀十一
憲康王 四年八月、日本國使至、王引見於朝元殿、

十二月十五日、備後國隱岐島神に従五位下を授く

〔日本三代實錄〕三十四
陽成天皇 元慶二年十二月十五日丙子、授備後國无位隱鳴神従五位下、

十二月二十四日、大宰府、新羅の凶賊、我が隙を窺ふとの託宣を奏するにより、兵部少輔平季長を遣し、宗像大神等に奉幣せしむ
綾羅御衣、金銀裝寶劍を奉る

〔日本三代實錄〕三十四
陽成天皇 元慶二年十二月廿四日乙酉、遣兵部少輔従五位下兼行伊勢權介平朝臣季長、向大宰府、奉幣檀日、八幡及姫神、住吉、宗像等大神、其檀日、八幡、姫神、別奉綾羅御衣各一襲、金銀裝寶劍各一、以彼府奏有託宣云新羅凶賊欲窺我隙、并肥後國有大鳥集、河水變赤等之怪也、

元慶四年（八八〇）
三月二十七日、大和國城上郡宗像神、官社に列せらる、是神は筑前國宗像郡に坐す神と同神なり

〔日本三代實錄〕^{三十七} 陽成天皇 元慶四年三月廿七日庚辰、○^中以大和國城上郡宗像神預於官社、坐太政大臣東一條第、又坐筑前國宗像郡、皆是同神別社也、

○已下、東一條第の宗像神につき主たる史料を一括掲ぐ、

小一條家は近衛の南、東の洞院の西にあり

※〔帝王編年記〕^{十四} ^{五十六代}清和天皇 諱惟仁 水尾帝
^{三代實錄卷一至廿九}

文德天皇第四皇子、母太皇太后藤原明子、號染殿后、攝政忠仁公女也、嘉祥三年庚午三月廿五日癸卯、誕生外祖父太政大臣^{忠仁公}是也、小一條家^{近衛南、東洞院西}風姿甚美麗如神、好讀書傳、潛思釋教、歸念苦空發心菩提、同年十一月廿五日戊戌、立爲皇太子、一歲、是時惠亮擢腦、^{天安二年}戊寅八月廿七日乙卯受禪、同十一月七日甲子、卽位于大極殿、時御年九歲、此日、以太政大臣

爲攝政、攝政者異朝唐堯舉舜爲攝政、殷湯以伊尹爲阿衡、周成王幼而卽位、叔父周公旦攝政、是今攝政之儀也、周公旦者、文王之子、武王之弟、自知其貴、忠仁公者、皇帝之祖、皇后之父、世推其仁、本朝仲哀天皇^{越前國氣比神}崩、神功皇后^{攝津國廣田神}攝政、平三韓而歸筑紫、誕生譽田皇子^{應神天皇}、今^八皇子在襁褓、皇后猶攝政、其後推古天皇朝、皇子厩戶^{用明長子、推古姪}攝政、齊明天皇御宇、皇太子中大兄皇子^{天智天皇}、又攝政、天皇幼而卽位、忠仁公攝政、爾降藤氏相續爲執柄之臣、

※〔拾芥抄〕^中 諸名所部二十一

小一條 ^{近衛南東洞院西、師尹公家、一云山吹殿、清和天皇誕生所、貞信公家、坤角有宗像社}

元慶四年（八八〇）

元慶四年（八八〇）

三三〇

※〔帝王編年記〕^{十六} 天曆三年己酉八月十四日、關白太政大臣忠平薨略中諡曰貞信公、號小一

條殿、在胎七ヶ月誕生人也、與宗像大明神常有御物語、但神位階依爲下賜、殊痛思食、仍貞信公申與神階給、

※〔大鏡〕二 一 太政大臣忠平貞信公

このおとゞ（貞信公）これ基經のおとゞの四郎君、御母、本院大臣・枇杷大臣（仲平）に同、このおとゞ（貞信公）、延長八

年九月廿一日攝政、天慶四年十一月關白宣旨かぶりたまふ、公卿にて四十二年、大臣位にて卅

二年、よをしらせ給事廿年、後の御いみな、貞信公となづけたてまつる、小一條太政大臣と申、

朱雀院并村上の御をぢにをします、この御子五人、そのおりは御くらゐ太政大臣にて、御太

郎、左大臣にて實頼のおとゞ（清慎公）、これ小野宮と申き、二郎、右大臣師輔のおとゞ、これを九條殿

と申き、四郎、師氏の大納言ときこえき、五郎、又左大臣師尹のおとゞ、小一條殿と申きかし、

これ四人君達、左右の大臣・納言などにてさしつゞきおはしまし、いみじかりし御榮花ぞか

し、女君一所は、先坊のみやす所にておはしましき、つねにこの三人の大臣達のまいらせ給れ

うに、小一條の南、勘解由の小路には石だゝみをぞせられたりしが、まだ侍ぞかし、宗像の明

神のおはしませば、洞院小代の辻子よりおりさせ給しに、あめなどのふるひのれうとぞうけた

まはりし、凡その一町は人まかりありかざりき、いまは、あやしのものもむま・車にのりつゝ

みしゝとあるき侍れば、むかしのなごりに、いとかたじけなくこそみたまふれ、このおきな

どもは、いまも、おぼろげにてはとほり侍らず、今日もまいりはべるが、こしのいたく侍りつ

れば、術なくてぞ、まかりとほりつれど、猶いしだゝみをばよきてぞまかりつる、南のつらの

宗像の明神のおはしませば、
人まかり歩かず

道長、宗像の明神をたゆみなく恐ろしと語る

忠平、宗像の明神とうつゝに物申す

いとあしき泥をふみこみて候つれば、きたなきものもかくなりて侍るなり」とて、ひきいで、
みす、^(世志)「先祖の御ものはなにもほしけれど、小一條のみなん要に侍らぬ、人は子生、死がれうにこそ家もほしきに、さやうのおりほかへわたらん所は、なにゝかはせん、又、凡、常にもたゆみなくおそろし」とこそ、この入道殿^(道長)はおはせらるなれ、ことはりなりや、この貞信公には、宗像の明神うつゝにものなど申給けり、「われよりは御くらゐたかくてゐさせたまへるなむ、くるしき」と申給ければ、いと不便なる御こととて、神の御くらゐ申あげさせたまへる也、この殿、^(貞信公)何御時とはおぼえ侍らず、思に延喜・朱雀院の御ほどにこそははべりけめ、宣旨奉らせ給てをこなひに、陣座さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほどゝほらせ給に、ものゝけはひして、御大刀のいしづきをとらへたりければ、いとあやしくて、さぐらせ給に、毛はむくゝとおひたるての、爪ながく刀のはのやうなるに、「鬼なりけり」と、いとおそろしくおぼしけれど、おくしたるさまみえじとねんぜさせ給て、「おほやけの勅宣うけたまはりて定にまいる人とらふるは、なにものぞ、ゆるさずば、あしかりなむ」とて、御大刀をひきぬきて、彼が手をとらへさせ給へりければ、まどひてうちはなちてこそ、うしとらのすみざまにまかりにけれ、思に、よるのこと也けむかし、こと殿ばらの御ことよりも、この殿の御こと申は、^(貞信公)かたじけなくもあはれにもはべるかな」とて、音うちかはりて、はな度とうちかむめり、「いかなりけることにか、七月にてむまれさせ給へるとこそ、人、申つたへたれ、^(九四九)天曆三年八月十一日にぞ、うせさせ給ける、正一位に贈せられ給、御年七十一、^(九四九)○この説話、良房、忠平の混同ならん、

元慶四年（八八〇）—元慶五年（八八一）

三三二

十月十三日、丹後國息津嶋神に正六位上を授く

〔日本三代實錄〕三十八 陽成天皇 元慶四年十月十三日癸巳、山城國正六位上石坐神、丹後國正六位上息津嶋神、葛嶋神、坂代神並授從五位下、

元慶五年（八八一）
三月二十六日、五畿七道の諸神社の祝部・氏人をして、本系帳を三年に一進せしむ

〔日本三代實錄〕三十九 陽成天皇 元慶五年三月廿六日甲戌、略是日制、令五畿七道諸國諸神社祝部氏人、本系帳三年一進、

十月十六日、大和國城上郡從一位勳八等宗像神社に、筑前國の本社に準じて、神主を置き、高階真人仲守をもつて之に補す

〔日本三代實錄〕四十 陽成天皇 元慶五年十月十六日辛卯、略大和國城上郡從一位勳八等宗像神社、准筑前國本社置神主、以高階真人氏人爲之、

〔類聚三代格〕一 神宮司神主願宣事

太政官符

應准筑前國本社置從一位勳八等宗像大神社神主事坐大和國城上郡登美山

正六位上高階真人仲守

右得氏人內藏權助從五位下高階真人忠峯等解狀傳、件社坐大和國城上郡登美山、依太政官去年三月廿七日符旨預官社訖、自從清御原（天武）天皇御世至于當今、氏人等所奉神寶并園地色數稍多、高階真人累代鱗次執當社事、而今經世久遠人意懈緩、或不勤守掌紛失神寶、或彼此相讓闕怠祭事、如是之故屢致重崇、仍可准本社置神主狀、去年申官、而未蒙裁下、件仲守天性清廉堪爲神主、望請、早被補任令掌神事、但待氏長舉被補其替、相替之限一依格制、謹請 官裁者、從二

位行大納言兼左近衛大將源朝臣多宣、奉 勅依請、

元慶五年十月十六日 三代實錄第冊

元慶六年（八八二・憲康王八年）
四月、日本國王、使を新羅に遣し、
黄金・明珠を進む

〔三國史記〕新羅本紀十一
（八八二）
憲康王 八年夏四月、日本國王遣使、進黄金三百兩、明珠一十箇、

元慶八年（八八四）
二月二十一日、光孝天皇の即位に
より、大中臣氏人等を遣して、五
畿七道諸國の名神に奉幣せしむ

〔日本三代實錄〕四十五
光孝天皇 元慶八年二月廿一日壬子、○中告以可即位也、分遣大中臣氏人等於五
畿七道諸國、奉境内名神幣、

十二月十六日、肥前國田嶋神、正
四位上に昇敍せらる

〔日本三代實錄〕四十六
光孝天皇 元慶八年十二月十六日壬寅、授肥前國正四位下田嶋神正四位上、從
五位下金立神從五位上、甲斐國正六位上船形神從五位下、

仁和四年（八八八）

二月二十五日、宇多天皇の即位に
より、五畿七道の諸社に奉幣す
十月七日、大神宮及び諸社に奉幣
す
十一月八日、大神寶使を發遣す

〔日本紀略〕宇多
天皇 仁和四年二月廿五日、依御即位、奉幣伊勢並五畿七道諸社、
十月七日壬申、詔奉幣於伊勢太神宮及諸社、告十一月中卯日大嘗會可聞食之由、
十一月八日、發遣大神寶使、

寬平元年（八八九）

十二月二十五日、筑前國正二位市
杵島姫神・湍津姫神・田心姫神、
並に従一位に昇敍せらる

〔日本紀略〕宇多
天皇 寬平元年十二月廿五日壬午、奉授遠江國從四位上雄神正四位下、筑前國正二
位市杵嶋姫神、湍津姫神、田心姫神、並従一位、

寛平三年（八九一）——寛平五年（八九三）

三三四

寛平三年（八九一）

六月二日、諸社に奉幣して雨を祈る

八月二十八日、長門國宗形神、從五位上に敍せらる

寛平四年（八九二）

八月十四日、旱魃・怪異により諸社に奉幣す

寛平五年（八九三）

正月十一日、怪異により、五畿七道諸國の神社に奉幣す

〔日本紀略〕

宇多天皇

寛平三年六月二日庚辰、下知綱所、於京畿諸寺令轉讀經王、奉幣諸社、祈雨、

八月廿八日己巳、授伊勢國正五位以下堀坂神、丹生內神、丹生外神、並從四位下、○中長門國

從五位下宗形神從五位上、○下

四年八月十四日乙酉、奉幣諸社、依旱魃并怪異也、

五年正月十一日辛亥、仰五畿七道諸國、奉幣神社、并於國分及定額寺等、令轉讀仁王般若經、

依怪異也、

〔類聚三代格〕

一 祭并幣事

太政官符

應殊加檢察敬祀四箇祭事

右檢案内、二月祈年、六月十二月と次、十一月新嘗祭等者、國家之大事也、欲令歲災不起、時令順度、預此祭神、京畿外國大小通計五百五十八社、因茲特致潔齋慎令祭祀、而敬惟疎簡、禮非如在、每至祭日紆濫雲集、至獻幣帛老少拏攬、徒有陳設之營、曾無供神之實、禰宜祝部須向神祇官敬受幣物虔奉其社、而件等人無致其敬、或雇出身代不自參進、或雖躬受取無心奠祭、頑愚之輩狎贖神禁、神靈之祟職此之由、凡祭神之禮、以神主禰宜祝部爲其齋主、而不勤職掌疎畧神事、非唯神主等之怠、還又齋官不加糾勘之所致也、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、自今以後、京內諸社、所帶諸司殊加檢察、畿内外國當國官長相共監臨、祭祀之日必致齋敬、若祭事不慎、監察有怠者、官司處之重責、神主禰宜祝部等科被解職、一如

三月二日、諸國の社司神主等に檢察を加へ、四箇祭を敬祀せしむ

貞觀十年六月廿八日格、曾不寬宥、

寬平五年三月二日

十月二十九日、往昔、大和國城上

郡宗像神社の、修理に充てたる筑前國宗像郡金崎の氏賤十六人を、良として調庸を輸せしめ、代りて大和國城上郡等の徭丁を差して、修理料に充てしむ

〔類聚三代格〕

神社事

太政官符

應宛行宗像神社修理料賤代徭丁事

從良賤十六人、正丁、在筑前國宗像郡金崎

宛行徭丁「十」^{〔徭カ〕}八人、大和國城上郡四人、高市郡二人、十市郡二人、

天照大神の神勅

天孫を助け奉りて、天孫に崇め祭かれよ

右得彼社氏人從五位下守右少辨兼大學頭高階真人忠峯等解狀稱、件神坐大和國城上郡之内、與坐筑前國宗像郡從一位勳八等宗像大神同神也、舊記云、是天照大神之子也、大神勅曰、汝三神降居道中、奉助天孫、爲天孫所崇祭者、今國家每有禱請奉幣件神、是其本緣也、唯筑前社有封戸神田、大和社未預封例、因茲忠峯等始祖太政大臣淨廣壹高市皇子命、分氏賤年輸物令修理神舍、以爲永例而年代久遠、物情解體、氏衰路遙、不堪催發、須依貞觀十^{〔八六八〕}「八」^{〔徭カ〕}年六月廿八日格、申請祖神封物、以宛修理料、而大神宮事既異諸社、氏人等狐疑猶豫、空經年序、所在神舍既致破壞、今件賤同類蕃息已有其數、望請進件賤爲良、將令備調庸、其代永請隨近徭丁以宛修理料、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請者、仍須件徭丁待彼氏高階真人長者并神主等共署申請宛之、差宛之後不得輒差他役、但其死闕及耆老之代、又同待請宛之、永以爲例、

寬平五年（八九三）

寛平五年（八九三）—寛平六年（八九四）

三三六

寛平五年十月廿九日

十一月三日、諸國の神社に各位一階を進む

〔日本紀略〕

宇多天皇

寛平五年十一月三日甲辰、五畿七道神社各増位一階、

寛平六年（八九四）

四月十日、大宰府、飛驒使を上る、勅により、大宰府管内の諸社に奉幣す

四月二十日、諸社へ幣帛使を遣す

〔日本紀略〕

宇多天皇

寛平六年四月十日壬寅、大宰府飛驒使來申、仰遣奉幣管内諸社、

十四日丙午、大宰府飛驒使上奏新羅賊來著對馬嶋之由、同日賜勅符於彼府、

廿日、○中略

同日、分遣諸神社幣帛使、

七月二十二日、在唐の僧中瓊に太政官返牒を與ふ

〔日本紀略〕

宇多天皇

寛平六年七月廿二日、太政官牒送在唐僧中瓊、報書上表狀、

〔菅家文草〕

十牒狀

奉 勅爲太政官報在唐僧中瓊牒

太政官牒

在唐僧中瓊

報上表狀

牒、奉 勅、省中瓊表悉之、久阻兵亂、今稍安和、一書數行、先憂後喜、壑源茶等、准狀領受、

商人大唐の事を説く

誠之爲深、溟海如淺、來狀云、温州刺史朱褒、特發人信、遠投東國、波浪眇焉、雖感宿懷、稽之舊典、奈容納何、不敢固疑、中瓊消息、事理所至、欲罷不能、如聞商人說大唐事之次多云、

頃年災多く資具備へ難し

賊寇以來、十有餘年、朱褒獨全所部、天子特愛忠勤、事之髣髴也、雖得由緒於風聞、苟爲人君者、孰不傾耳以悅之、儀制有限、言申志屈、迎送之中、披陳旨趣、又頃年頻災、資具難備、而

朝議已定、欲發使者、辨整之間、或延年月、大官有問、得意斂之者、准勅牒送、宜知此意、沙

金一百五十小兩、以賜中瓘、旅庵衣鉢、適支分鉢、故牒、

寛平六年七月廿二日左大史云々

八月二十一日、菅原朝臣道眞を遣唐大使に、紀朝臣長谷雄を副使に任ず

〔日本紀略〕宇多天皇 寛平六年八月廿一日庚戌、以參議左大辨菅原朝臣爲遣唐大使、以左少辨紀朝臣長谷雄爲副使、

〔扶桑略記〕二十二宇多天皇 寛平六年甲寅五月、唐客含詔入朝、

八月廿一日庚戌、遣唐大使、參議左大辨兼勘解由長官菅原道一眞五十 遣唐副使、紀長谷雄四十

〔公卿補任〕宇多天皇 寛平六年甲寅

參議從四位下菅道一眞御年五十 〔凡付〕左大辨、式部大輔、春宮亮、勘解由長官、八月廿一日兼遣唐大使、十二月十五日兼侍從、

〔古今和歌集〕十八 雜歌下

遣唐判官藤原忠房

寛平御時に、もろこしのはう官にめされて侍りける時に、東宮のさぶらひにて、をのこ

どもさけたうべけるついでによりみ侍りける

〔藤原忠房〕ふちはらのたゞふさ

なよ竹のよながきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな

〔公卿補任〕宇多天皇 寛平七年

寛平六年（八九四）

遣唐裝束使

寬平六年（八九四）

參議從四位下源昇三十
同六年八月一兼遣唐裝束使、十二月十五日兼侍從、

三三八

九月十四日、遣唐大使菅原朝臣道眞、遣唐使進止につき議定を請ふ中、
中壇唐商王訥に付して大唐の疲弊を告ぐ

〔菅家文章〕九狀 請令諸公卿議定遣唐使進止狀、

右臣某、謹案在唐僧中壇、去年三月附商客王訥等所到之錄記、大唐凋弊、載之具矣、更告不朝之間、終停入唐之人、中壇雖區々之旅僧、爲聖朝盡其誠、代馬越鳥、豈非習性、臣等伏檢舊記度々使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊遂亡身者、唯未見至唐、有難阻飢寒之悲、如中壇所申報、未然之事、推而可知、臣等伏願、以中壇錄記之狀、遍下公卿博士、詳被定其可否、國之大事、不獨爲身、且陳款誠、伏請 處分、謹言、

寬平六年九月十四日 大使參議勘解由次官從四位下兼守左大辨行式部權大輔春宮亮菅原朝臣某

九月三十日、遣唐使派遣を停む

〔日本紀略〕宇多天皇 寬平六年九月卅日己丑中略 其日、停遣唐使、

※〔拾芥抄〕諸社部一 遣唐使、寬平六年任遣唐使菅・紀、不遂前途無沙汰、兩人其後無沙汰、

※〔公卿補任〕宇多天皇 寬平七年

參議從四位下菅道眞（所付） 左大辨、式部大輔、春宮亮、勘解由長官、遣唐大使、正月十一日兼近江守（止長官、餘官如元）十月 日任權中、同日從三位、

○已下、遣唐大使・遣唐副使・遣唐錄事の名見ゆる史料を一括掲ぐ、

太政官牒

※〔東寺文書〕禮一之十二
○山城

太政官牒 弘福寺

權律師法橋上人位聖寶

右大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、件聖寶宜補彼寺檢校、
傳燈法師位壽長死闕之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

寬平 （六年）
□□□□□□□□

外從五位下行右少史兼春宮少屬□□□□

遣唐副使

遣唐副使從五位上兼守右少辨行式部少輔文章博士讚岐介紀「朝臣」（長谷雄）（自署）
○本書ニ太政官印
十一顆ヲ踏ス

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
一二七

○コノ文書、字面ニ外印二十顆ヲ捺セリ、

（異筆）
「四月一日到來、」

太政官牒

太政官牒 東大寺

傳燈法師位智春年冊九
藤卅一

右、知事僧益良之替、

傳燈法師位良基年冊八
藤卅一

右、知事僧朝宗之替、

傳燈法師位基鏡年冊五
藤廿八

寬平六年（八九四）

寬平六年（八九四）

三四〇

右、知事僧性可之替、

傳燈滿位僧中寬年冊九
藏卅一

右、知事僧正能之替、

已上、並專寺、

以前、得彼寺牒傳、件等法師依例請補如件者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、依請者、寺宜承知、依宣補之、牒到准狀、故牒、

寬平七年三月十九日

遣唐錄事從八位下兼守右少史阿刀連（自署下同ジ）「春正」牒

遣唐錄事阿刀連春正
遣唐副使紀長谷雄

遣唐副使從五位上兼守右少辨行式部少輔文章博士讚岐介紀「朝臣」

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
一二八

○コノ文書、字面ニ外印二十顆ヲ捺セリ、

（異筆）
「七月十五日到來」

太政官牒

太政官牒 東大寺

應令重任造寺專當傳燈大法師位增有事、

右、得彼寺別當傳燈大師位濟棟辭狀傳、件增宥天性格勤、執事必果、所濟公事、苟有厥數、因

屢舉申功績、未賜褒賞望請、更賜重任、將勵人情、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將

皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

寬平七年六月廿八日

左大史正六位上善道朝臣「宗道」牒（自署下同ジ）

遣唐副使

遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介（長谷雄）「朝臣」

太政官符

※〔類聚三代格〕

八調唐事

太政官符

應令先進門文檢納調庸并例進雜官物

右得讚岐國解僞、檢案內、調庸并例進雜物、依倉庫令、國明注載進物色數、附綱丁等各令送所司、此號門文、須任門文全進納、而頃年綱丁等不出門文、私作自解、折留物數進納所司、不知其奸、隨進偏放田收、其所折留皆宛私用、或自望官職宛贖勞之料、或偷買雜物求貿易之利、綱丁之奸觸類多端、望請、仰檢納所司、將絕綱丁奸、但有稱非常漂失之類、令進公驗隨狀被定者、遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、依請、諸國准此、

遣唐大使

（八九六）
寬平八年閏正月一日

※〔長谷寺緣起文〕

吾遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道眞、忝加寺官附大安寺、因依小僧之請、攀入長谷靈寺、爰則面爲勝絕之靈場、視成大明之流記、精氣一通而得靈夢、十一面堂下二百餘步下、欽有岡、名雲懸梯、高不幾許、從厥頂架雲、有三金梯、至金峯山、三藏王各率山神等諸眷屬、踏梯影向、忽入十一面堂、各以五色蓮花捧寶前、則覺其所以、藏王權現答曰、此山者功德成就之地、諸佛經行之砌、是兜率天宮觀世音院也、菩薩聲聞住此山而逞功

寬平六年（八九四）

寬平六年（八九四）

三四二

德、諸天神祇在此山而振威驗、專治四海安寧、鎮衛一人寶祚、我等融彼冥誓、日々來而擁護伽藍、利益衆生云々、奚彌信仰無貳、仍鏡行基菩薩國符記七卷并流記文三卷、本願聖人上表狀一通、就中尤聚金去塊、勘出緣起文一首、其辭曰、傍衆流記

僂長谷寺者、夫於南閭浮提陽谷輪王所化之下、礫馭盧島水穗國長谷神河浦北豐山峯、而德道聖人建立十一面觀世音菩薩利生之道場也、○中略凡記錄取要、依勅奏聞、聊依恐天覽繁務、從數卷舊記、撰一首緣起者矣、

寬平八年二月十日

都維那僧行空

寺主法師惠義

上座法師圓詮

別當傳燈大法師位智照

俗別當左大臣從二位藤原朝臣良世

奉行去年七月廿七日、下諸寺并長谷寺宣旨、

從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村（村）

遣唐副使

遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄

中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平

遣唐大使

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道眞

○本文書疑ふべきところあれど、姑く茲に掲ぐ、他に寬平七年八月五日撰上の大安寺緣起（大日本史料一編一所收）あれど略す、

太政官符

※〔類聚三代格〕

八
農桑事

太政官符

應許耕作鴨河堤邊東西水陸田廿二町百九十五步事

右間山城國民苦使正五位下守左中辨平朝臣季長奏狀稱、得愛宕郡司解僭、錦部鄉百姓等愁狀僭、

前件田是已等口分、事具圖籍、貞觀十三年有官符、禁制堤東西田、件口分從天長年中領來稍久、

爲堤無害、仍國司不加禁遏、而寬平五年檢非違使稱有宣旨不許耕作、其所耕營獲稻皆勘收防河

所、自後不得開墾、望請、使裁被許耕作者、伏檢貞觀符云、除公田之外、皆悉禁遏無復令營、

縱雖公田爲堤可成害者莫令復耕作者、寬平宣旨云、一切禁止勘納獲稻者、官符宣旨事議兩端、

未知一從、加以既責調徭抑止口分、百姓之愁寔有可恤、望請、使與國司共加實檢、爲堤有害者

別勒言上、將給其替、引水無妨者任令耕營濟其徭調、謹請處分者、大納言正三位兼行左近衛大

將皇太子傳民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅、依請者、仍使與國司臨地勘定如右、

但諸家并百姓墾田多在堤西皆用中河水、今加實檢須聽開墾、何者件等田、以堤西中河水灌溉之、

不可爲堤防之害、又墾畝與百姓口分交錯、縱雖不耕、而不可爲放牧之地、但三條大路以南有荒

廢私田五六町、曾無百姓口分、然則件田當致放牧之煩者、遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春

宮權大夫侍從菅原朝臣道真宣、奉勅、依奏、

寬平八年四月十三日

※〔類聚三代格〕

十五
諸司田事

寬平六年（八九四）

寬平六年（八九四）

三四四

太政官符

太政官符

應給田諸司要劇下符勘解由使事

右檢案內、給要劇者、當司各注前月上日、後月四日進官、下符宮內省、若諸司有致雜怠、隨即抑止、待其辨申、然後許之、而元慶年中自從割官田給要劇諸司未必解文進官之、以不給米無復留意、是以懈怠官人無由勘責、不上具僚徒得俸米、因寬平元年十二月廿五日可載年終帳狀下知既訖、若無出給之符、何知用之遺、雖行米賜田名號各異、而計日請俸、彼此一同、仍須下符勘解由使勘會年終帳、其有用遺者便宛日月權官等料、不許輒宛他用、若有勘出者、官人遷替之日拘其解由、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、依件行之、

（八九六）
寬平八年九月五日

遣唐大使

太政官符

太政官符

※〔類聚三代格〕^{十五}
諸司田事

收廢司要劇番上料并公廨田事

山城國七十五町三百廿九步

散位寮十二町八段二百七十步

判事十八町五段三百七步

巡察彈正十三町七段四步

遣唐大使

左兵庫十二町九段二百卅四步

右兵庫十二町九段二百卅四步

園池司公廨田四町

攝津國六十六町七段三百十二步

內藥司廿一町九段五十四步

造兵司十町三段五十四步

鼓吹司十九町六段十八步

園池司六町九段二百八十八步

主油司七町九段二百五十八步

右依太政官去八月廿九日奏、併省件等司既畢、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權

大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、件要劇番上等料田、宜返收依舊爲官田、

寬平八年九月七日

※〔政事要略〕
交替雜事

太政官符 七道諸國司

應科責任終年調庸未徵前司事

右得越前國解僞、檢太政官去寬平二年九月十五日下五畿內七道諸國符僞、格出之後、順法者少、
加以諸國司等申請稠疊、斯卽緣時俗凋弊人民難任也、爲政之道、事尙寬賒、施令之本、宜在必

寬平六年（八九四）

寬平六年（八九四）

三四六

遣唐大使

濟、今須任終年調庸未進、令後任吏辨進、雖未取返抄、而莫致拘累、但據式、貢調庸使者、物之與帳同領入京、不得先後零疊、然則雖辨濟未進寔在後司、而催發調物事屬當時、若寄事後人、專闕乃貢者、加其科責、一如前符者、謹案格旨、凡謂令後任吏辨進者、前司徵貢之物、後任究成其務之意也、又謂寄事後人、專闕乃貢、加其科責、一如前符者、又大同二年言違期未進等罪之格、其文明矣、而或前司至于任終、特新任人、徒過徵納之限、遂違貢進之期、交替之日分付之時、不備實物無定綱領、新司雖注不與前司解由狀言上、而更被拘後更可辨進之格、官物逐年次第輸貢、今之新任者、後之前司也、前料後分、國司共徵、一身兩役、百姓何堪、望請、有前司不勘徵任終年調庸而致無實者、專任法條、將被科責、然則致緩怠者、且畏科責、守公平者、彌增激勵者、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、奉勅、凡違期未進之怠、隨其形迹、據大同格、莫有前司、唯辨濟究成之勤、勸彼功績、從寬平符、須委新任并戒新司、併責前司、少許未進依無他累、適與待新吏之可究、不責前司之有怠、自今以後、宜爲永例、五畿內七道諸國、亦宜准此者、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

（八九六）
寬平八年九月十九日

※〔類聚三代格〕

四
加減諸司官員并廢置事

太政官符

太政官符

侍醫四人 女醫博士一人 藥生十人

遣唐大使

右、依太政官去八月廿九日論奏、內藥司併典藥寮既訖、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大

辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道(眞)宣、奉勅、件等待醫・女醫博士・藥生等宜隸寮、

(八九六)
寬平八年十月五日

太政官符

※〔類聚三代格〕四
加減諸司官員并廢置事
太政官符

大角長上一人 少角長上一人 鉦鼓長上一人

右元鼓吹司長上、而依太政官去八月廿九日論奏、以左右兵庫・造兵・鼓吹等四司、爲兵庫一寮既訖、件長上宜隸彼寮、

使部十二人

右、便以廢左右兵庫使部隸兵庫寮

遣唐大使

以前被遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道(眞)宣、宜依件隸之、

(八九六)
寬平八年十月五日

太政官符

※〔類聚三代格〕十五
諸司田事
太政官符

應准要劇下符勘解由使給田諸司番上糧事

右案太政官去九月五日符傳、元慶年中割官田給諸司要劇、(八九九)寬平元年可載年終帳下知既訖者、夫給番上糧者、諸司去月五日應給米月料狀移宮內省、省卽惣計、同月十日申官下符、而去元慶年

寬平六年(八九四)

寬平六年（八九四）

三四八

遣唐大使

中亦割官田、宛給彼料、厥後所司晏然不進糧文、仍見仕不仕無知其由、論之政途理不可然、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、長上番上職掌雖異、從事勤公給稟惟一、自今以後、宜宮內省依例進糧文、隨即下符勘解由使、令勘會年終帳明知其用殘、若有勘出一如要劇、

（八九六）
寬平八年十一月十三日

※〔類聚三代格〕

十二
諸使并公文事

太政官符

太政官符

應四度公文使違期不上道者不待所司勘申解却見任事

遣唐大使

右得駿河國解僞、謹檢式條、四度公文進官之期各立定限、牧宰之勤不敢懈緩、而件使等左右紆避動致違期、太政官寬平六年九月廿九日符僞、件帳一任之內或過時不進、或雖進不勘等之輩還替之日雖進解由返却不收者、雖新制彌重責在長官、而奉使之人不處科罪、望請、使人無故不上道者、須依實勘定具狀言上、不待所司勘申將被解却見任、然則人心頗慎、公文無擁者、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、奉勅、依請、諸國准此、

（八九六）
寬平八年十一月廿日 舊關年月日今依政事要略補

※〔公卿補任〕

宇多天皇
寬平八年

遣唐大使

中納言菅道

御年五十二

（虎付）
左大辨、春宮權大夫、式部大輔、侍從、遣唐大使、八月廿八日兼民部卿、止大輔、餘官如元、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫菅原朝臣宣、奉勅、十一月廿日、私所注也

太政官符

※〔類聚三代格〕^{十五}
諸司田事

太政官符

應以官田宛諸司要劇并番上料事

大和國廿五町六段三百卅四步

攝津國卅三町一段三百卅四步

右内匠寮長上要劇料

河内國二町八段七百七十六步

攝津國十九町四段百廿九步

右元木工寮關官料、而依彼寮寬平七年十一月五日解狀返納、今使宛同寮長上要劇料

攝津國十一町五段二百卅六步

右典藥寮侍醫等要劇料

山城國一町 攝津國廿一町八段

右兵庫寮要劇并番上料

遣唐大使

以前遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉^{〔遣唐〕}勅、件要劇番上等料、宜停給京庫以官田給之、

寬平九年二月十七日^{〔八九七〕}

寬平六年（八九四）

寬平六年（八九四）

三五〇

※〔類聚三代格〕^八
不動々用事

太政官符

太政官符

應開見不動倉廩

右得山城國解僭、檢案内、太政官去寬平七年七月十日下午五畿内七道諸國符僭、交替式云、國司

交替之時依不動物多煩、自今以後、彼鉤進官、但應修理其倉、及疑有雨損、臨時請鉤、新案云、

不動之物理合算勘、自非開見何知積高、須每當交替請其鉤匙者、牧宰偏依新案好開不動、或亦

任意無請鉤匙、論之政途未爲允適、中納言兼左近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、

奉 勅、政有沿革、隨時弛張、自今以後、專如先式者、今檢此符廩有不盡、何則算勘不動者、

必據丈尺積高、其高廣之與丈尺在外易知、積高之與塞基在內難辨、已無開檢、何以算勘、望請、

改前件符、一依交替式新案行之、謹請官裁者、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權

大夫侍從菅原朝臣道眞宣、奉 勅、依請、諸國准此、

^{（八九七）}
寬平九年五月十三日

遣唐大使

※〔政事要略〕^{六十}
交替雜事

太政官符

太政官符 應催桑漆事

右去大同二年正月廿日格僭、云々者、如聞、諸國空進其帳、無植其實者、此格已久緩怠之漸、須

因格督責以懲將來、然而積習稍久、率爾難改、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿春宮權大夫侍

從菅原朝臣道眞宣、奉 勅、重下知、勤催殖者、諸國承知、依宣行之、仍須桑之與漆、隨戶上

遣唐大使

下、依令植填、巡省實錄、明年之内、言上其由、若不愼符旨、重致緩怠、責如先格、曾不寬宥、

(八九七)
寬平九年五月廿六日

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
二二九

○コノ文書、字面ニ外印十四顆ヲ捺セリ、

(異筆)
「十月廿五日到來、」

太政官牒

太政官牒 東大寺

傳燈滿位僧太保

右、得彼寺別當權律師法橋上人位濟棟解狀僞、造寺知事僧中寬死闕之替、以件太保、請補知件者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣、依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

遣唐錄事

(八九七)
寬平九年九月廿一日

從五位上守右少辨兼行太皇太后宮亮藤原(被良)「朝臣」

遣唐錄事從七位上守右大史阿刀連(自署下同ジ)「春正」

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
七二

○コノ文書、字面ニ外印十九顆ヲ捺セリ、

(異筆)
「到來同月十日、即白堂已了、」

太政官牒

太政官牒 東大寺

寬平六年(八九四)

寛平六年（八九四）

三五二

應補三綱事、

傳燈大法師位長審年六十九
萬冊七 花嚴宗

右、上座傳燈大法師位離邊秩滿之替、

傳燈大法師位賢永年五十八
萬冊八 花嚴宗

右、寺主傳燈大法師位行安秩滿之替、

傳燈法師位會遺年冊七
萬冊七 法相宗

右、都維那傳燈大法師位神焉秩滿之替、

以前、得治部省解僞、玄蕃寮解僞、僧綱牒僞、件三綱等、依彼寺申請、可補任之狀牒送者、寮依牒狀申送者、省依解狀申送如者、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣、依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

遣唐錄事

昌泰元年十月五日
（八九八）

遣唐錄事從八位下守左大史阿刀連「春正」牒
（自署 下同ジ）

從五位上守右少辨兼行太皇太后宮亮藤原「朝臣」
（校長）

＊〔東大寺文書〕東南院文書之一
一六九

○コノ文書、字面ニ外印十顆ヲ捺セリ、

太政官牒

太政官牒 東大寺 「四月一日到來、」
（異筆）

遣唐副使

遣唐副使從四位下守右大辨兼行式部大輔侍從文章博士紀朝臣長谷雄

右、左大臣宣、奉 勅、件人宜定彼寺別當者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、
（藤原時平）

昌泰二年三月廿八日

正六位上行右少史阿保朝臣「經覽」牒（自署下同ジ）

正五位下守右中辨兼行兵庫頭源「朝臣」

「奉行」（異筆）「以四月八日、白堂已了、」（裏書）

別當「道義」都維那「會遺」

上座「長審」

寺主「賢永」

※「東大寺文書」（東南院文書之一）一七〇

○コノ文書、字面ニ外印凡ソ十二顆ヲ捺セリ、

太政官牒

太政官牒 東大寺

左大臣

右、右大臣宣、奉 勅、宜定彼寺檢校者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、（菅原道真）

昌泰二年五月十四日

從七

遣唐副使

遣唐副使從四位下守右大辨兼行式部大輔侍從文章博士紀「朝臣」（長谷雄（自署下同ジ））

「奉行」（異筆）

別當「道義」

都維那

上座「長審」

寺主

寛平六年（八九四）

寛平六年（八九四）

三五四

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
七三

○コノ文書、字面ニ外印十二顆ヲ捺セリ、

〔十月十日、白堂已了、〕
（異筆）

太政官牒

太政官牒 東大寺

傳燈法師位南秀年六十三
藏冊二 花嚴宗

右、（藤原時平）左大臣宣、件南秀宜補上座長審死闕之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到淮狀、故牒、

昌泰三年九月一日
（九〇〇）正六位上行右少史御船宿禰（昌泰 下同）「有方」牒

遣唐副使紀長谷雄

遣唐副使從四位下守左大辨兼行式部大輔侍從文章博士紀（長谷雄）「朝臣」

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
一三一

○コノ文書、字面ニ外印十九顆ヲ捺セリ、

〔以同年十月十一日已剋到來、〕
（異筆）

太政官牒

太政官牒 東大寺

應補知事傳燈大法師位良惟年五十六
藏冊八 花嚴宗

右、得彼寺牒傳、造寺所司承前之例、專當一人、知事四人也、斯上兼知執印上下兩司別當一人、合六員也、因茲、爲省公損、以去昌泰元年閏十月一日、嘗暫間申停專當一人、（知）事二人、但、留置知事二人也、使上座傳燈大法師位長審兼行件造寺所雜事、然而不行下司俸料、今徐檢案內、

遣唐副使紀長谷雄

此大伽藍堂塔高廣、修理超諸房舍、大多造作勝餘、然則少吏巡檢乏領作事、加以堪能兼任長審死去、因今更加置知事一人、准三綱職、以置三員、但、加大字、號大知事、以爲兄吏、令檢領作事、彼俸料同前、乍三人皆一同行之者、(藤原時平)左大臣宣、停大字、依請者、寺宣承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

(九〇〇)
昌泰三年九月一日

正六位上行右少史御船宿禰(自置下同)「有方」牒

遣唐副使從四位下守左大辨兼式部大輔侍從文章博士紀(長谷雄)「朝臣」

※〔東大寺文書〕東南院文書之一
七四

○コノ文書、字面ニ外印十五顆ヲ捺セリ、

(異筆)
「以同月十六日、拜堂已了、」

太政官牒

太政官牒 東大寺

應補任三綱事、

傳燈大法師位良惟年五十七
曆卅九 花嚴宗

右、上座傳燈法師位南秀、依病辭退之替、

傳燈法師位義勢年五十八
曆卅四 花嚴宗

右、寺主傳燈大法師位賢永、遷任下野國藥師寺講師之替、

傳燈法師位離世年卅一
曆十六 律宗

右、造寺所知事傳燈大法師位良惟、轉任上座之替、

寬平六年(八九四)

寛平六年（八九四）

三五六

以前、左大臣宣、件等僧、宜補任者、寺宣承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

昌泰四年六月三日

正六位上行左少史兼算博士阿保朝臣「經覽」

遣唐副使

遣唐副使從四位下守左大辨兼行式部大輔侍從文章博士紀「朝臣」

＊〔東大寺文書〕 東南院文書之一

○コノ文書、字面ニ外印十一顆ヲ捺セリ、

〔以十一月三日白堂、即坐着、〕

太政官牒

太政官牒 東大寺

傳燈滿位僧峯皎年冊一
藤廿五 花嚴宗 專寺

右、左大臣宣、件峯皎宜補造寺所知事傳燈法師位太保秩滿之替者、寺宣承知、依宣行之、牒到

准狀、故牒、

延喜元年十月廿八日

左大史正六位上菅野□

遣唐副使紀長谷雄

遣唐副使從四位下守左大辨兼行式部大輔侍從文章博士紀「朝臣」

是月、諸社に奉幣す

〔西宮記〕九月 例幣 寛平六年九月、天皇御大極殿乾角、奉幣諸社事、

十月八日、筑前國宗形郡從一位勳八等田心姫神・市杵島姫神・湍津姫神、並に勳七等を授けらる

〔日本紀略〕宇多 天皇 寛平六年十月八日丁酉、授筑前國宗形郡從一位勳八等田心姫神、市杵嶋姫神、湍津姫神並勳七等、

十一月五日、左大辨高階真人忠岑の解狀により、筑前國從一位勳七等宗像大神、勳六等を授けらる

〔日本紀略〕^{宇多天皇} 寬平六年十一月五日癸亥、授筑前國從一位勳七等宗像大神勳七等、依左大辨高階真人忠岑之解狀也、

寬平八年（八九六）

八月十八日、諸社に奉幣す
八月二十二日、諸社に奉幣す

〔日本紀略〕^{宇多天皇} 寬平八年八月十八日、奉幣諸社、
八月廿二日、奉幣諸社、

寬平九年（八九七）

七月九日、諸社奉幣使を發遣す
八月十七日、諸社に奉幣し雨を祈る

〔日本紀略〕^{醍醐天皇} 寬平九年七月九日、發遣諸社奉幣使、
八月十七日庚申、^{略中}同日、祈雨奉幣諸社、
八月廿八日辛未、遣祓使於五畿七道諸國、并奉幣於諸社、爲行來十一月大嘗會也、
十二月三日甲辰、奉授五畿七道諸神三百卅社各位一階、

八月二十八日、五畿七道に使を遣して諸社に奉幣し、大嘗會を行ふべき由を告げしむ
十二月三日、五畿七道の諸社三百四十社に、各位一階を授け給ふ

昌泰元年（八九八）

五月四日、早により、僧智行らをして大名神社に讀經せしむ

〔祈雨記〕^{宇多天皇} 寬平十年五月四日、壬申、是日因畢、^{（半カ）}使僧綱智行僧等大名神社、令讀金剛般若經、

七月二十日、諸國をして神寶幣帛を名神に奉獻せしむ

〔日本紀略〕^{醍醐天皇} 昌泰元年七月廿日戊子、下知五畿七道諸國、奉幣神寶於諸名神社、^{或云、廿六日發遣之}

八月二十三日、五畿七道の諸名神に神寶奉獻の使者を發遣す

財、
八月廿三日庚申、發遣使者於伊勢大神宮并五畿七道諸名神、奉神財、又豐前國宇佐宮同奉神財、

寬平六年（八九四）—昌泰元年（八九八）

昌泰二年（八九九）—延長五年（九二七）

昌泰二年（八九九）
七月十七日、諸社に奉幣す

〔日本紀略〕醍醐天皇 昌泰二年七月十七日、奉幣諸社、

延長五年（九二七）
十二月二十六日、延喜式成る、中に宗像社及び遣唐使に關する諸制あり

〔延喜式〕一 四時祭上

國司祭祈年神二千三百九十五座

大 一百八十八座東海道卅二座、東山道卅八座、北陸道十三座、山陰道卅六座、山陽道十二座、南海道十九座、西海道卅八座、

座別絲三兩、綿三兩、

小二千二百七座東海道六百八十座、東山道三百卅座、北陸道三百卅八座、山陰道五百廿三座、山陽道百廿四座、南海道百卅四座、西海道六十九座、

座別絲二兩、綿二兩、

〔延喜式〕三 神祇三臨時祭

名神祭

名神祭二百八十五座

園神社一座

韓神社二座已上坐宮內省略

松尾神社二座

稻荷神社三座略

木嶋坐天照御魂神社一座

平野神社四座略

奥津嶋神社

奥津嶋神社一座

伊香神社一座略

速谷神社

速谷神社一座

伊都岐嶋神社一座略

伊都岐嶋神社
宗像神社

宗像神社三座

住吉神社三座略

田嶋坐神社

田嶋坐神社一座肥前國中略

座別繩五尺、綿一屯、絲一絢、五色薄繩各一尺、木綿二兩、麻五兩、褰料薦廿枚、若有大禱者、加繩五丈五尺、以布一端代絲一絢、

遣蕃國使時祭

〔延喜式〕三神祇三臨時祭

遣蕃國使時祭使還之日准此

五色薄繩各三疋四丈八尺、繩四疋、倭文二端、木綿十五斤、麻十五斤、布十六端、明衣料庸布六段、鰯、堅魚各十連、鮭廿隻、腊十籠、海藻二籠、鮐二斗四升二合、鹽二升四合二勺、缶四口、瓶五口、坏二百口、榲二俵、白米二斗、飯二石、酒一石、副案壺靈匏飾等、葉薦廿枚、

右擬發使者、惣祭天神地祇於郊野、祭庭當國司掃脩其地、又所司葺苦并設座、所須雜物、神祇官申官請、其酒肴等、所司各儲會集祭所、神祇官率神部等並著明衣、行祭事、大使自陳祝詞、神部奠幣、訖大使已下各供私幣神部執奠神座、

造遣唐使船

造遣唐使船木靈并山神祭

五色玉二百八十丸、金作鈴四口、鏡四面、絲一絢、繩一疋六尺、綿一屯、五色薄繩各一丈四尺、倭文三尺、木綿一斤八兩、鍬四口、褰薦二枚、已上京庫所請、麻一斤八兩、白米一斗四升、稻六束、酒一斗四升、鹽八升、鰯、堅魚各六斤、海藻、滑海藻、海松、雜海菜各八斤、已上用正稅、酒盞六口、坏四口、匏三柄、柏廿六把、棚二前已上用當國物、使一人、中臣氏

開遣唐船居祭社住吉

延長五年（九二七）

延長五年（九二七）

三六〇

幣料絹四丈、五色薄絕各四尺、絲四絢、綿四屯、木綿八兩、麻一斤四兩、

右神祇官差使、向社祭之、

〔延喜式〕三神祇三臨時祭

唐客入京路次神祭

唐客入京路次神祭

幣帛絕五尺、絲一絢、綿一屯、五色薄絕各一尺、木綿二兩、麻三兩、裏料薦四枚、已上幣前別所充、差使

二人、畿內外國各一人、並中臣、

蕃客送堺神祭

五色薄絕各四尺、倭文二尺、木綿、麻各二斤、庸布四段、鍬四口、牛皮、熊皮、鹿皮、猪皮各二張、酒二斗、米四升、鰯、堅魚各二斤、海藻四斤、腊八斤、鹽四升、稻十二束、水瓮二口、坏四口、匏二柄、薦二枚、藁四圍、榲八把、已上祭料、木綿四兩、麻一斤、酒六升、米四升、鰯、堅魚各一斤、雜海菜二斤、腊一斤、鹽一升、水瓮、坏各二口、匏一柄、食薦二枚、榲十把、輦籠一口、枋一枝、夫二人、已上祓料、

右蕃客入朝、迎畿內堺、祭却送神、其客徒等、比至京城、給祓麻、令除乃入、障神祭、

五色薄絕各一丈二尺、倭文一丈二尺、木綿、麻各十二斤、庸布八段、熊皮、牛皮、鹿皮、猪皮各四張、鍬十六口、米、酒各四斗、稻十六束、鰯、堅魚、海藻各八斤、腊、鹽各二斗、水瓮四口、坏八口、匏四柄、榲十二把、薦四枚、五色薄絕以下四所等分、

右客等入京、前二日、京城四隅爲障神祭、

〔延喜式〕八 神祇八
祝詞

遣唐使時奉幣

遣唐使時奉幣

皇御孫尊乃御命以氏、住吉爾辭竟奉留皇神等乃前爾申賜久、大唐爾使遣止佐牟爲爾、依船居無氏、播磨國與船乘止爲氏、使者遣止佐牟所念行間爾、皇神命以氏、船居波吾作止牟教悟給比比、教悟給比那我良、船居作給波禮悅已嘉志禮代乃幣帛乎、官位姓名爾令捧賈氏進奉止久申、

〔延喜式〕九 神祇九
神名

神名

神名上宮中
京中
五畿內
東海道

天神地祇惣三千一百卅二座

社二千八百六十一處

前二百七十一座

大四百九十二座

三百四座並預祈年、月次、新嘗等祭之案
上官幣、就中七十一座預相嘗祭

一百八十八座並預祈
年國幣

小二千六百卅座

四百卅三座並預祈年
案下官幣

延長五年（九二七）

延長五年（九二七）

二千二百七座並預祈
年國幣

略○中

山城國一百廿二座

大五十三座並月次新嘗、就中
十一座預相嘗祭

小六十九座並官
幣

乙訓郡十九座大五座
小十四座

略○中

葛野郡廿座大十四座
小六座

葛野坐月讀神社名神大、月
次新嘗、

木嶋坐天照御魂神社名神大、月
次相嘗新嘗

墮川神社

阿刀神社

松尾神社

松尾神社二座並名神大、月
次相嘗新嘗

深川神社

墮川御上神社

櫟谷神社

櫟谷神社

松尾末社

略○中

大和國二百八十六座

大一百廿八座並月次新嘗、就中
卅一座預相嘗祭

小一百五十八座並官
幣

平野祭神四座並名神大、
月次新嘗

添上郡卅七座大九座
小廿八座

略○中

城上郡卅五座大十五座
小廿座

略○中

塙倉神社

宗像神社三座並名神大
月次、

城下郡十七座大三座
小十四座

略○中

尾張國一百廿一座大八座
小一百十三座

略○中

中嶋郡卅座大三座
小廿七座

略○中

鹽江神社

宗形神社

大御靈神社

葉栗郡十座並小

略○下

高屋安倍神社三座並名神大
月次新嘗

布智神社

尾張大國靈神社

軺江神社

宗形神社

宗像神社

延長五年（九二七）

延長五年（九二七）

宗形神社

鴨神社三座

石上布都之魂神社

和氣郡一座小

略○中

津高郡二座小並

宗形神社

鴨神社

兒嶋郡二座小並

略○中

安藝國三座大並

佐伯郡二座大並

伊都伎嶋神社

速谷神社大神大、
月次新嘗

安藝郡一座大

多家神社大神
大

略○中

筑前國十九座大神十六座
小三座

宗像郡四座大並

宗像神社
織幡神社

宗像神社三座並大神
大神

那珂郡四座大並

宗形神社

布勢神社

宗形神社

伊都伎嶋神社大神
大神

織幡神社一座大神
大神

八幡大菩薩宮崎宮一座名神大

住吉神社三座並名神大

略○中

肥前國四座大一座
小三座

松浦郡二座大一座
小一座

田嶋坐神社

田嶋坐神社名神大

志々伎神社

基肄郡一座小

略○下

遣唐使敍位

〔延喜式〕十八
式部上

凡遣唐使下無位者、敍一階、

凡遣唐及渤海等使歸朝之日、特被敍位、頓除前勞、其水手應敍位者、京畿之人皆敍內位、

宗像

〔延喜式〕二十二
民部上 西海道

筑前國上管 怡土 志麻 早良 那珂 席田 糟屋 宗像 遠
賀 鞍手 嘉麻 穗浪 夜須 下座 上座 御笠

〔延喜式〕二十八
兵部省

遣唐使射手

凡遣唐使射手無位者、省與使共試練申官、然後與式部授位記、略○中

筑前國驛馬獨見・夜久各十五疋、
佐尉・深江・比善・額田・石瀨・長丘・把伎・廣瀨・隈崎・伏見・網別各五疋、傳馬御笠郡十
五疋、

津日

延長五年（九二七）

三十大藏省

凡遣蕃國使儲物者、省與使者依例修備、

三十大藏省

入唐大使

各彩帛五疋、
學問僧、
還學僧、
各彩帛
十疋、
費布二端、

六端、水手、各繩一疋、綿四屯、布二端、

入新羅使

入新羅使、龜六疋、綿十八屯、布十八端、判官、龜四疋、綿八屯、布八端、錄事、大通事、龜各三疋、綿六屯、布六端、史生、知乘船事、船師、醫師、少通事、雜使、各龜二疋、綿四屯、布四端、儉人、鍛工、卜部、柅師、水手長、挾抄、各龜一疋、綿二屯、布二端、水手、各綿二屯、布二端、

右賜入蕃使例、宜依前件、

〔延喜式〕三十七
典藥寮

遣諸蕃使

遣諸蕃使

遣唐使

唐使十一種

犀角丸、大戟丸各四劑、七氣丸、八味理仲丸、百毒散、度嶂散各十二劑、茯苓散十六劑、神明膏六劑、萬病膏、升麻膏各八劑、黃良膏四劑、所須藥種各依本方、其用度雜物、絹六口料、絹一丈二尺、裏油繩一丈三尺六寸五分、紙九十八張、木綿二斤十四兩、酢七斗七升、調布一端四尺、拭白布二丈、陶壺廿三口、炭七斛九升、

草藥五十九種

芍藥、白朮、地榆、桔梗各八斤、獨活、前胡、升麻、夜干、栝樓、牛膝、茯苓、茈胡、烏頭、附子、天雄、商陸、蜀椒、黃蓍、松脂、石南草各六斤、大戟、防己、黃蘗、紫苑、苦參、菖蒲各四斤、石韋、澤寫、玄參、藥本、熟艾、漏蘆、藺茹、甘遂、蛇衛、梨蘆、干地黄、枳實、桑根白皮、丹參各二斤、杏仁、五味子、兔絲子、葶藶子、蛇床子、半夏、蒲黃、麥門冬、僕奈各四斤、練胡麻一斗六升、桃仁一石二斗、黃芩、麻黃各八斤、黃連、茵芋、吳茱萸、防風、橘皮各六斤、白薇四斤、盛雜藥韓櫃四合、著、鏤、裏櫃席八枚、黑葛四斤、麻繩四了、枋四枝、

延長五年（九二七）

渤海使十七種

素女丸半劑、五香丸三兩、練仲丸、吳茱萸丸、干薑丸、犀角丸、四味理仲丸各一劑、七氣丸、八味理仲丸各二劑、大戟丸半劑、度嶂散、百毒散各二劑、茯苓散三劑、黃良膏、升麻膏各一劑、神明膏二劑、萬病膏三劑、所須藥種亦依本方、用度雜物篩三口料、絹六尺、治篩紗一尺五寸、裏油絕六尺五寸、紙廿三張、木綿八兩、絞綿五兩、調布六尺五寸、酢二斗四升、炭二石五斗、陶壺四口、陶碗四合、叩盆二口、

草藥八十種

練胡麻大五升、桃仁一斗四升、黃芩、薺萇、黃連、白朮、石斛、藍漆、細辛、桔梗、獨活、當歸、夜干、牛膝、茯苓、白芷、升麻、橘皮、附子、烏頭、天雄、黃耆、松脂、石南草、防己、黃蘗、白薇、紫苑、麥門冬、苦參、鬼臼、芎藭、干地黄、枳實、葛根各二斤、芍藥、地榆、前胡、白頭公、栝樓、防風、茈胡、茵草、商陸、大戟、茵芋、菖蒲、藥本、甘遂、石葦、澤寫、玄參、漏蘆、蘭茹、蛇衛、梨蘆、桑根白皮、皂莢、丹參、蒲黃、半夏、龍膽各一斤、龍骨、石硫黃、石膏各一斤、蜀椒四斤、吳茱萸五升、（衍力）「升麻」杏仁、五味子、兔絲子、葶藶子、蛇床子各二升、烏梅、大棗、麴各五升、爪薺四升、羚羊角十枚、熟艾二斤、僕奈、女青各一斤、盛雜藥韓檀二合、鐔、著裏櫃席四枚、黑葛二斤、麻繩八了、枋二枚、裏藥庸布二段、各方一尺五寸篋二合、紙八張、木綿三兩、

遣新羅使

新羅使六種

八味理仲丸、七氣丸各一劑、百毒散二劑、茯苓散四劑、神明膏、萬病膏各二劑、所須藥種並依

本方、其用度篩二口料、絹三尺、裹油絕二尺五寸、紙十二張、木綿三兩、絞調布五尺、酢一斗六升、盛膏藥陶壺四合、炭一石五斗、叩盆二口、

草藥廿四種

半夏、吳茱萸、僕奈、五味子各五升、升麻、夜干、白朮、當歸、厚朴、石硫黃、茯苓、黃芩、
麴各五斤、橘皮四斤、黃連、桃仁、杏仁各一斗、薺萆、細辛、地榆各三斤、麥門冬七升、菖蒲
一斤、蜀椒一斗、藺茹二斤、盛雜藥韓櫃二合、席四枚、黑葛二斤、麻繩二了、枋二枚、給客徒
白散漆高案二脚、白篋二合、夾纈覆二條、各二帶四條、敷布二條、竝三日之後
依數返上、黃袍四領、執案醫
生料、

後 記

私が福岡県立宗像高等学校に勤務することとなり、宗像の地に移り住んだのは、昭和四十年五月初旬であった。それ以来、教育の現場で、この地域の歴史を盛り込んだ日本史の授業を行なうために、関係の史料を集めてきた。少しでも生徒の郷土に対する理解と興味を深めたかったからである。幸いなことに、宗像郡は宗像大社の神郡であり、記紀を始めとして、宗像大社や同社家の文書が存在など、古代・中世にかけて、日本歴史の研究の上で、欠くべからざる重要な史料が少なくない。しかも、『福岡県史資料』の編纂者である伊東尾四郎氏が当郡宗像町赤間の出身であり、主な史料の大半は、『宗像郡誌』『福岡県史資料』として同氏の手により編纂刊行されている。これらが、この頃の私のささやかな史料蒐集の原拠であり、指針であった。さらに、恩師竹内理三先生の『平安遺文』『大宰府・太宰府天満宮史料』が刊行されて、史料を抽出する便宜を得た。しかしながら、校務の間断をぬっての作業であるため、ともすれば挫折しがちな私を激励し指導して下さったのが、川添昭二先生である。かつて竹内理三先生を中心として印行が進められていた『九州史料叢書』の一環として、自から蒐集・筆写された宗像神社関係史料をお貸しいただき、史料の所在についても種々御教示を受けた。こうした中で、昭和四十一年に小島鉦作先生らのお手になる『宗像神社史』上下二巻が上梓された。私にとってその恩恵ははかりしれないものがある。恰もそのころ、新城常三先生から『宗像神社史・附卷・年表』のうち、先生分担の中世後期（建武から慶長まで）の年表の草稿作成のために史料蒐集を行なうよう、依頼があった。ここに改めて、古代から中世末まで一貫しての史料を新城常三先生の指導のもとに集めることとなった。本史料篇の宗像郡・宗像神社関係史料のほとんどはこの期間に集めたもので

ある。

一方、昭和四十年以来、第三次沖ノ島學術調査が実施されていたのであるが、昭和四十六年、調査隊長岡崎敬先生から、沖ノ島関係の年表の作成と史料蒐集の話があった。この時、すなわち昭和四十六年には、『宗像神社史・附巻・年表』は刊行済みで、古代宗像に関する史料・事項は先の『宗像神社史』とともに網羅されており、私の蒐集した本史料篇は、結果的にこれらの『宗像神社史』及び『宗像神社史・附巻・年表』になぞらえたものに過ぎなかったのであるが、沖ノ島発掘出土品に、朝廷が直接執り行なわれた祭祀や遣新羅使・遣唐使の手による奉獻と考えられる品々も見えるところから、これらの関係事項をも含めて、「沖ノ島関係主要年表」を昭和四十七年に作成してみたのである。

やがて、第三次沖ノ島學術調査も終了し、調査報告書編纂の段階で昭和四十八年その附属資料として、沖ノ島の考古学的研究の参考に資するための史料の編纂を、正式に委嘱されたのである。そして、その際、史料内容は延喜式頃までを年代的下限とし、宗像・沖ノ島の史料の他に、遣新羅使・遣唐使・奉幣関係の史料を併載すること、これらは『国史大系』に収めているような基礎的な文献を主に出来るだけ使い易いものを作成して欲しいとの要望が出された。以上の編纂方針のもとに、以後はこれらの併載史料の蒐集に力点を置いたのである。

この頃私の身边は極めて多事であり、昭和五十年、宗像高等学校から東海大学文学部へと職を転じ、神奈川県へ単身赴任することになった。さて外交関係史料中、圧倒的に多いのは、いう迄もなく遣唐使関係であるが、各種の伝記・僧伝・将来目録・行実史料など、紙幅の都合もあって、その多くを割愛し、最小限に止めた。また、当初、史料篇の体裁を宗像大社・沖ノ島関係、奉幣記事関係、遣新羅使関係、遣唐使関係の四部に分つことを考えたが、相互の関連を知ることや、使用に当たっての便利さをも考えて、宗像大神の出現・鎮座に関する資料や、縁起・地誌

類は一応別にして、その主体を編年史料に置き、巻末に主要事項についての索引を付けることにした。その際、宗像大社関係の数多くの縁起・地誌類の取り扱いをどのようにするかが問題であったが、竹内理三先生の御示唆に基づき、私案でもって本史料篇に見る如き、資料六篇を第一部末尾に置くという取り扱いとした。また、史料本文、綱文など収録の体裁は『大日本史料』にならう積りであったが、他の二冊の報告書と同一型とするという事情もあって、綱文を史料上欄に配するようにした。

それにつけても、誠に有難かったのは、本史料篇編纂に際して、特に小島鉦作先生に懇篤なる示教を忝けのうしたことである。その上、校正刷にもお目通しいただき、細部にわたってお教えいただいた事は、全く望外の幸せであった。特に記して先生の御恩情に深謝の意を表したい。同時に、過分の御指導をいただいたにもかかわらず、十分に御期待に添えなかった点、先生の御寛容をお願いする次第である。

さらにまた、岡崎敬先生からは、長期に亘り不断に史料の採録、史料篇の体裁などに御教示と御援助を賜ったのも忘れ得ぬことである。衷心より御礼を申し上げたい。

史料採録に当っては、宗像大社、九州大学国史・東洋史研究室、東海大学日本史・東洋史研究室、出光美術館等は多大の便宜を与えられ、また編纂に関し奉幣記事関係については、東海大学原田敏明・梅田義彦、古代氏族については東海大学阿部武彦、僧伝については東海大学速水侑、万葉集については福岡女子大学鶴久の諸先生等の御高教に預った。更に目次・索引の整理・校正等については井上団平氏、索引原稿作成については東海大学會根総雄氏をはじめ日本史研究室の諸君の協力をえた。なお、編纂刊行に関する繁雑な事務については出光美術館弓場紀知氏、校正については古沢太一氏、印刷については株式会社精興社萩原和巳氏の御支援に預った。これらの諸氏の御協力と御援助とは感謝に堪えないところであり、厚く御礼申し上げたい。

以上の各方面の方々の御示教と御厚情によって本史料篇は完成を見たが、なお不備、不十分、至らない点が少ないであろう。浅学菲才、偏えに大方の御叱正を請う次第である。

いま、漸く、三校の校正を終えようとして、思えば私は恩師・先学・畏友に恵まれている幸せをしみじみと感ずるのである。ここに直接間接、格別の御芳誼をいただいた多くの方々の御懇情に対し心から鳴謝して擱筆したい。

昭和五十三年七月二十八日

正木喜三郎

智形箭 113
 宗像山 14
 宗形横根 114, 290
 宗形若萬呂(→宗形部若麻呂) 187, 188, 190
 宗形若麿 189
 宗刑若萬呂 191, 192
 室貴 216
 室木嶽 14
 牟漏埵(紀伊國) 180
 室原首御田 69

め

明州 243, 298
 明昭 309
 免勢(→橘免勢) 246

も

物部阿遲古連公 57
 物部龜鹿火大連(→物部大連龜鹿火) 59
 物部大連龜鹿火(→物部龜鹿火大連) 58, 59
 物部連摩呂 78
 守君大石 74
 守君荊田 81

や

邪久國 64
 益久嶋 180
 益救嶋 182
 矢田部造 65
 八千矛神(→大國主命) 9
 山上憶良 121
 山於憶良 84
 山上憶良臣(→山上憶良) 116
 山上臣憶良(→山上憶良) 88
 山口忌寸入麻呂 175
 山背直百足 78
 山代宿禰氏益 291
 山田大庭(→山田造大庭) 243
 山田造大庭(→山田大庭) 237, 238, 240
 倭漢直福因(→福因) 64
 東漢草直足嶋 73
 東漢長直阿利麻(→阿利麻) 72

大和宿禰長岡 106
 大和真人耳主(→大和耳主) 261
 大和耳主(→大和真人耳主) 288
 八女縣 57
 八女津媛 57
 八女國 57
 也良の崎 115

ゆ

雄萬 299
 雪連(→壹岐連) 39
 雪連宅滿(→雪宅麿) 135, 153
 雪宅麿(→雪連宅滿) 147

よ

揚州 124, 181, 182, 183, 184, 277, 289, 301
 揚州海陵縣 207, 209, 279, 282, 301
 永忠 203
 依網連稚子 72
 良枝宿禰朝生 268
 良枝宿禰清上 260, 268
 良岑朝臣長松(→良岑長松) 282, 293
 良岑長松(→良岑朝臣長松) 283, 292, 302
 餘姚縣 72

り

理鏡 123
 劉愼言(→劉惣管) 285, 298
 劉惣管(→劉愼言) 298, 299
 劉德高 71
 李邕 177
 靈雲 66, 67
 靈觀 80

わ

別島(松浦郡) 271
 分間浦 135, 146
 輪田泊 267
 海中(→中御島) 7, 104
 和珥津 49
 和邇部宿禰大田麿 260

14 索引(むさ—むな)

- 六鰭 135, 155
- 六岳 216
- 宗像 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 18, 19, 20, 25, 29, 52, 104, 205, 215, 216, 322, 328, 329, 367
 - 宗形 13, 83
 - 胷形 84, 85, 113
 - 胸肩 8, 13, 104
- 宗像朝臣 7, 10, 104
 - 宗形朝臣 253
- 宗像朝臣赤麻呂 168, 169, 170
 - 胷形朝臣赤麻呂 113
- 宗像朝臣秋足 256
 - 宗形朝臣秋足 253, 256
- 宗像朝臣池作 221, 224
- 宗形朝臣勝麿 254, 255
- 宗形朝臣大徳 207
- 宗形朝臣等杼 100
- 宗形朝臣豐子 306
- 宗形朝臣鳥麻呂 116, 167
- 宗形朝臣人君 179
- 宗形朝臣深津 198
- 宗形朝臣與呂志 170
- 宗形石麻呂 197
- 宗形王 194, 196, 201, 206, 211, 217, 218
- 宗像大神 17, 50, 76, 318, 319, 320, 335, 357
 - 宗形大神 103
 - 胸形大神 53, 54
 - 宗像太神 6, 10, 104
- 宗像神主(→筑紫宗形神主) 217, 221, 222, 223, 224
- 宗像君 9
 - 胸肩君 7, 10
 - 胸形君 6, 19
 - 胸方君 80
 - 宗形君 253
 - 胸肩の君 17
- 宗方君族愛賣 129
- 宗方君族入鹿 129
- 宗方君族弟桑 129
- 宗方君族小桑 129
- 胸形君徳善 75, 76
- 宗像宮 12, 216
- 宗像郡(→身形郡) 7, 14, 17, 68, 76, 104, 116, 169, 256, 318, 329, 335, 366
 - 宗形郡 68, 114, 198, 297, 356
- 宗像郡大領 198, 217, 221, 222, 224, 253, 256
 - 宗形郡大領 100, 116, 170, 207
- 宗像衣手 85
- 宗像三所大菩薩 11, 214
- 宗形嶋守(→名草氏) 114, 291
- 宗像社 216, 329
- 宗像神(筑前國) 8, 248, 292, 296, 307, 309, 310
- 宗像神(大和國) 322, 329
 - 胸肩神(筑前國) 8
 - 胸方神(筑前國) 55
 - 宗形神(伯耆國) 309
 - 宗形神(肥前國) 324
 - 宗形神(長門國) 334
- 宗像神社(筑前國) 7, 17, 276, 358, 366
- 宗像神社(大和國) 76, 318, 332, 335, 363
 - 宗形神社(尾張國) 363
 - 宗形神社(備前國) 366
 - 胷形神社(下野國) 364
 - 胷形神社(伯耆國) 365
- 宗像大菩薩 52, 53
- 宗像大神社(大和國) 332
- 宗像大明神(→宗像大神) 330
- 宗像之大神(→宗像大神) 13
- 宗像の神(→宗像大神) 21, 29
- 宗像の三神(→宗像大神) 18
- 宗像ノ大明神(→宗像大神) 51
- 宗形天神(肥前國) 323
- 宗像の明神(山城國) 330, 331
- 宗形船依 172
- 宗形部赤賣 94
- 宗形部阿比太賣 91
- 宗形部犬麻呂 95
- 宗形部岡足 179
- 宗形部堅牛 100
- 宗形部加麻麻伎 103
- 宗形部宿奈賣 91
- 宗形部津麿 116
- 宗形部若麻呂(→宗形若萬呂) 191

邊宮 6, 10, 104
 海濱 5, 9, 11, 18, 19
 邊津宮 6, 13, 19, 20, 34
 邊都宮 9
 へつみや 27
 辨正 69, 90
 辨通 82

ほ

法榮 179
 法載 184
 法勝 71
 法進 180, 183, 184
 法成 184
 菩提僊那 123
 穗積臣 60
 渤海道 195

ま

眞吉備朝臣(→吉備朝臣眞備) 169
 益城連 100
 松浦郡 29, 40, 202, 204, 243, 300
 松浦郡橘浦(→橘浦) 207, 208
 松浦の海 152
 松尾(山城國) 85, 293, 328
 松尾大神(→松尾神) 84
 松尾社(山城國)(→松尾神社) 322
 松尾神社(→松尾社) 85, 317, 358, 362
 松尾神(山城國) 84, 85, 247, 311
 松川造貞嗣 261, 263
 眞人栗田 88
 眞人興能 212
 眞人廣成(→多治比眞人廣成) 123, 131
 麻里布浦 135, 144

み

御井郡 59
 三嶋公嶋繼 258, 259, 272
 三島水間君 58
 御嶽(大島) 28
 道中貴(→道主貴) 9
 道主貴(→道中貴) 5

道君首名 103, 261
 道公首名 105
 道公廣持 261
 三津(→大伴の御津) 72, 121, 122
 御使君 54
 御津の濱(→大伴の御津) 144
 三津濱 280, 282
 南淵漢人請安 64
 南浦(對馬上縣郡) 270, 272
 源昇 338
 美努岡萬連(→美努連岡磨) 87
 美努宿禰(→難波部主足) 297
 美奴連岡磨(→美努岡萬連) 87
 美努連淨麻呂 98, 99
 水沼縣主猿大海 57
 水沼君 9
 水間君 56, 57, 58
 水沼別 56
 敏馬 139, 144
 嶺縣主泥麻呂 56
 美禰良久埼(松浦郡) 116
 身形郡(→宗像郡) 6, 10, 13, 104
 身像郡 7, 104
 身のかたの宮 35
 三野連(→美努連岡磨) 87
 旻樂埼(松浦郡) 275
 壬生使主宇太麻呂 164
 壬生關山 278
 三棟朝臣今嗣 243
 三宅吉士入石 78
 宮首阿彌陀 71
 妙位 71
 明聰 81
 神一郎 298
 三輪君色夫 68
 三輪君根麻呂 74
 神御井 298
 旻(→新漢人日文) 67

む

武庫の海 140
 武庫の浦 136, 138

12 索引(はたへつ)

秦大麻呂 130
 秦氏 84
 秦田麿 152
 秦都理(→秦忌寸都理) 85
 秦間満 134, 137
 幡文通 97
 初浦 22
 速須佐之男命(→素戔鳴尊) 5, 6
 林忌寸眞繼 223
 速谷神 249, 311, 317
 速谷神社 358, 366
 速鳥 186
 春苑宿禰玉成(→春苑玉成) 295
 春苑玉成(→春苑宿禰玉成) 288
 春大郎 298
 春道宿禰吉備成 268
 春道永藏 288
 播磨 186

 ひ
 東京一條 312
 東京第社 315
 引津亭 135, 151
 飛喪 285
 簸之川(出雲國) 11, 20
 永連老人 69, 71
 姫大神(→宗像大神) 34
 比賣神(河内國) 265
 姫社(肥前國) 104
 庇羅(松浦郡) 325
 庇良嶋(松浦郡) 243

 ふ
 深田(→深田村) 14, 69
 深田村(→深田) 7, 104
 深根文主 288
 福因(→倭漢直福因) 65
 副使(遣新羅副使, →大伴宿禰三中) 156, 157
 福洲長溪縣(赤岸鎮) 232
 福利(→鞍作福利) 64
 葛井連子老 135, 154
 藤江の浦 139

武州 299
 普照 119, 124, 125, 182, 183
 普昭 118
 藤原朝臣馬養 106
 藤原朝臣賀能(→藤原朝臣葛野麻呂) 231, 232
 藤原朝臣河清(→藤原朝臣清河) 173, 193, 194, 199, 209, 226
 藤原朝臣葛野(→藤原朝臣葛野麻呂) 230
 藤原朝臣葛野麿(→藤原朝臣葛野) 227, 228, 231, 236, 238, 240
 藤原朝臣葛野麻呂 242, 243, 244
 藤原朝臣清河(→藤原清河) 173, 175, 176, 177, 183, 197, 198, 210, 266
 藤原朝臣貞敏 259, 263, 289, 291
 藤原朝臣刷雄 175
 藤原朝臣鷹取 202
 藤原朝臣田麻呂 196
 藤原朝臣常嗣 257, 258, 263, 264, 265, 267, 269, 270, 271, 274, 276, 280, 282, 287, 290
 藤原朝臣常繼 280
 藤原朝臣豐並 291
 藤原朝臣松影 259
 藤原朝臣安方 315
 藤原清河(→藤原朝臣清河) 178, 194, 195, 199, 201, 204
 藤原清河(→藤原朝臣清河) 110, 181
 藤原葛野麿(→藤原朝臣葛野麻呂) 224
 藤原賀能(→藤原朝臣葛野麿) 236
 藤原貞敏(→藤原朝臣貞敏) 288
 ふちはらのたゞふさ(藤原忠房) 337
 藤原常嗣朝臣(→藤原朝臣常嗣) 266, 291
 布勢朝臣清直 210, 214
 布勢朝臣人主 185, 186
 船連夫子 186
 不彌國 49
 書直麻呂 71

 へ
 平群朝臣廣成 126, 167, 168
 平群蟲麻呂 197
 邊津嶋姫命(→湍津姫命) 9, 19

豊戸別皇子(→豊門別命) 56
 豊門別命(→豊戸別皇子) 58
 豊成(→名草直豊成) 291
 豊野真人 77
 豊村家長 227
 鳥養(→勝鳥養) 67
 曇靜 184

な

長井浦(備後國) 134, 140
 中嶋(宗像郡)(→大嶋) 8, 19
 中津島 20
 中津嶋姫命 8, 19
 中御島(→大嶋) 12
 中宮 6, 10, 104
 中瀛 5, 11, 18, 19
 中津宮 6, 8, 13, 19, 27, 28, 29, 34
 長門浦 134, 142
 長門嶋(→長門の島) 134, 141
 長門の島(→長門嶋) 142
 中臣朝臣鷹主 196
 中臣朝臣(→中臣朝臣名代) 159
 中臣朝臣名代 118, 119, 159
 中臣間人連老 71
 中臣連押熊 68
 長丹(→吉士長丹) 72
 仲真人石伴 195
 長岑宿禰高名(→長岑判官) 261, 262, 265,
 275, 280, 281, 288, 291
 長岑判官(→長岑宿禰高名) 285
 永原朝臣 77
 名草氏 114, 291
 名草直豊成 290
 名見山(宗像郡) 117
 七戸神官 11
 難波 60, 61, 63, 64, 67, 72, 123, 177, 181, 196,
 266, 270, 282
 難波渴 121
 難波津 118, 120, 227
 難波吉士木蓮子 60
 難波吉士男人 73
 難波吉師神 61

難波日鷹吉士 55
 難波部安良賣 252, 255, 256
 難波部主足(→美努宿禰) 297
 奴國 49
 なれこ石(沖ノ島) 23
 南路 195

に

錦部連道麻呂 84
 西仲嶋(天草郡) 209
 二の嶽(沖ノ島) 27
 仁好 296, 297

ぬ

縫殿神社(→縫殿大明神) 54
 縫殿大明神(→縫殿神社) 54
 額田人足 96

の

能許の浦 150
 能舉嶋 108, 300
 能許の亭 151
 野島が崎 139

は

斐世清 63, 64
 博多大津(→筑紫大津) 204
 博多津(→筑紫大津) 280, 291
 白潮鎮(海陵縣) 278
 羽栗 146
 羽栗臣翼(→羽栗翼) 204, 206, 207, 213, 214
 羽栗翔 195
 羽栗翼(→羽栗臣翼) 202
 土師稻足 149
 土師宿禰甥 80, 82
 土師宿禰豊麻呂 114
 間人連大蓋 73
 間人連御麿 72
 土師連八手 69
 波多朝臣廣足 96, 97
 秦忌寸知麻留女 84
 秦忌寸都理(→秦都理) 84

10 索引(ちか—とも)

智賀嶋 280
 値嘉嶋 243, 269, 325
 智行 357
 竹生王 198
 智國 71
 智宗 71, 82
 知聰 69, 71
 智達 72
 智通 72
 知辨 69
 智鳳 96
 道守臣麻呂 74
 智雄 96
 中瓊 336, 337, 338
 仲滿(→安倍朝臣仲磨) 110
 朝衡(→安倍朝臣仲磨) 109, 110, 111, 174,
 180, 181, 199, 226
 長溪縣(赤岸鎮) 232, 242
 智鸞 96
 智隆 81

つ

都加使主 53
 槻本連良棟(→槻本良棟) 274
 槻本良棟(→槻本連良棟) 288
 筑紫大津(→博多津) 72
 筑紫君葛子 59
 筑紫洲 4, 10, 18
 竹斯國 63
 筑紫水沼君 5
 筑紫水間君 58
 筑紫三宅連得許 80
 筑紫宗形神主(→宗像神主) 167
 筑紫胸肩君(→胸肩君) 3, 7
 筑紫館 135, 147
 對馬嶋南浦 270
 對馬連堅石 99
 鼓岩(沖ノ島) 37
 都努朝臣牛飼(→都努臣牛甘) 80
 都努臣牛甘(→都努朝臣牛飼) 79
 常嗣(→藤原朝臣常嗣) 279
 常嗣朝臣(→藤原朝臣常嗣) 288

角朝臣家主 117
 津史主治麻呂 114
 津日 69, 367
 津守國麿(→津守宿禰國麿) 210
 津守宿禰池吉 99
 津守宿禰國麻呂(→津守國麿) 209
 津守宿禰客人 108
 津守連吉祥 72, 108
 強石將軍(→宗像大菩薩) 52, 53

て

傳教大師(→最澄) 232, 235
 天照大神宮(沖ノ島) 32, 45
 天照大神の宮(沖ノ島) 28

と

十市郡 76, 318, 335
 道觀 69
 道光 69, 79
 道嚴 69
 道慈 88, 89, 90, 132, 203
 道昭 69, 70
 道照 327
 等定 221
 道邈 237, 304
 道曙 119, 123
 藤中納言大使(→藤原葛野麿・賀能) 233
 道通 69
 遠成(→高階遠成) 305
 道福 69
 藤判官(→藤原朝臣貞敏) 285
 刀岐直雄貞 285
 砥田宿禰 54
 登美山(大和國城上郡) 332
 耽羅嶋 73, 299, 300
 朋古滿(→大伴宿禰古麻呂) 181
 伴須賀雄 288
 伴宿禰有仁 285
 伴宿禰氏上 258, 272
 伴宿禰胡滿(→大伴宿禰古麻呂) 185
 伴宿禰成益 258
 伴判官 285

高階真人忠峯(→高階真人) 76, 318, 332, 335, 357
 高階真人遠成(→高階遠成) 230, 245, 246, 247
 高階真人仲守 332
 竹嶋 71
 高田首根麻呂(→高田根麻呂) 69
 高田根麻呂(→高田首根麻呂) 71
 高橋朝臣笠間 84
 竹葉瀬 54
 高岑宿禰貞繼 265
 高向朝臣麻呂(→高向臣麻呂) 80
 高向漢人玄理(→高向黒麻呂) 64, 67
 高向臣麻呂(→高向朝臣麻呂) 79
 高向黒麻呂(→高向漢人玄理) 68
 高向博士黒麻呂(→高向漢人玄理) 68
 高向史玄理(→高向漢人玄理) 71
 篁(→小野朝臣篁) 274
 寶藏(→御寶藏) 32
 湍津島姫(→湍津姫神) 25
 湍津島姫命(→湍津姫神) 19, 25
 湍津姫(→湍津姫神) 3, 4, 9, 10, 11, 12, 17, 18, 19, 215
 湍津姫神(→湍津姫命) 310, 311, 312, 314, 333, 356
 湍津姫命(→湍津姫) 5, 9, 18, 19, 21, 32, 85
 田寸津比賣命 6, 19
 多岐都姫命 9, 19
 多岐都比賣命 5
 當摩公楯 79
 當摩皇子 61
 田霧姫(→田心姫) 19
 田霧姫命(→田心姫神) 5, 18
 多紀理毘賣命 5, 6
 多記理毘賣命 19
 田口朝臣養年富 159, 266
 武國凝別命 58
 高市王(→高市皇子命) 77
 高市郡 76, 318, 335
 高市皇子(→高市王) 75, 77
 高市皇子命(→高市皇子) 75, 76, 318, 335
 建速須佐之男(→素戔鳴尊) 5, 256

田心姫(→田霧姫命) 3, 4, 9, 10, 11, 12, 17, 18, 19, 20, 21, 25, 215
 田心姫神(→田心姫命) 310, 311, 312, 314, 333, 356
 田心姫命(→田心姫) 5, 8, 9, 18, 19, 21, 25, 32, 85
 田道 54, 55
 丹比大夫 135, 143
 丹墀高主 288
 丹墀文雄 272, 280
 多治真人 132
 丹墀真人 133
 多治比真人縣守 106, 107, 112
 丹墀真人貞成 257
 丹墀真人高主 289
 多治真人土 176
 多治比真人濱成 210, 214
 多治真人廣成 167
 多治比真人廣成 118, 123, 126, 130, 133
 丹墀真人廣成 119, 131
 田島(宗像郡) 14, 17, 18, 19, 20, 24
 田嶋 11, 21, 205
 田島川 14
 田嶋神(肥前國) 248, 311, 313, 324, 326, 333
 田島坐神社(肥前國) 359, 367
 田島村(宗像郡) 15
 橘浦(→松浦郡橘浦) 169, 300
 橘朝臣逸勢(→橘免勢) 230
 橘免勢(→橘朝臣逸勢) 230
 田中朝臣法麻呂 81
 田邊秋庭 145
 田邊史島 71
 多禰嶋 130, 182, 248
 多麻の浦 138, 144
 田守(→小野朝臣田守) 180
 足姫(→神功皇后) 152
 丹福成 237, 239, 241

ち

値嘉(松浦郡) 120, 325
 智戒 309
 値賀嶋 275

8 索引(じょーたか)

定慧 69, 79
 性海 304
 淨願 82
 常曉 268, 270, 288, 289, 290, 293
 正三位社(→正三位の社) 31, 32, 37, 41, 44, 45
 正三位の社(→正三位社) 21, 26
 淨達 99
 小判官(→大藏忌寸麻呂) 156
 白猪史阿麻留 84
 白猪史廣成 113
 白猪史實然 80
 新羅道 71
 白嶽(沖ノ島) 27, 38, 45
 神叡 82, 89
 神功皇后(→大帶命) 52, 54, 251, 267, 329
 眞濟 272, 283, 284
 眞秀 309
 眞然 204

す

菅野朝臣淨子 265
 菅原朝臣(→菅原朝臣道眞) 337, 344, 345, 348, 349
 菅原朝臣梶成(→菅原梶成) 283, 293
 菅原梶成(→菅原朝臣梶成) 292
 菅原朝臣清公(→清公朝臣) 224, 232, 235, 242, 243, 244
 菅原朝臣某(→菅原朝臣道眞) 338
 菅原朝臣道一(→菅原朝臣道眞) 347
 菅原朝臣道眞 341, 342, 343, 346, 348, 350
 菅原朝臣善主 259, 269, 288, 289, 291
 少彦名の神 117
 勝鳥養 67
 素戔烏(→素戔鳴尊) 85
 素戔鳴尊 3, 4, 5, 9, 10, 11, 17, 18
 素戔烏尊 8, 9
 住吉 52, 82, 112, 122, 123, 328, 361
 住吉荒魂社 108
 住吉大神(→住吉神) 246, 285, 286, 300
 墨吉乃大御神(→住吉大神) 122, 123
 住吉社(→住吉神社) 359

住吉神(→住吉大神) 248, 287, 311
 住吉神社(→住吉大社) 313, 358, 367
 住吉大社(→住吉社) 107
 住吉大明神(→住吉大神) 52, 107
 皇大(御)神(→宗像大神) 33, 35, 50, 321

せ

清安 67
 赤岸鎮(長溪縣) 242
 赤山(登州) 299, 302
 堰 322
 善議 203

そ

蘇因高(→小野妹子) 63, 64
 惣集 99
 宗大臣(→宗像大菩薩) 53
 僧忍 69
 蘇我韓子宿禰 56
 蘇州 123, 167, 195, 232, 298
 楚州 211, 287, 298, 299
 楚州鹽城縣 207, 209
 蘇州常耽縣 209

た

大安寺 89, 231, 268, 316, 341
 大宮司氏俊(宗像) 25
 大宮司氏郷(宗像) 12
 太鼓石(沖ノ島) 23, 28
 大使(→阿倍朝臣繼麻呂) 148, 149, 150, 156, 157
 大唐大使(→多治比真人廣成) 121
 大判官(→壬生使主宇太麻呂) 140, 150, 151, 156
 大平良 275
 平朝臣季長 328
 田浦(松浦郡) 231, 242
 高丘百興 288
 高尾山(深田村) 7, 104
 竹敷浦 135, 155, 156
 高階遠成(→高階真人遠成) 246, 247
 高階真人(→高階真人忠峯) 76, 77, 332, 335

神湊村 15
 高元度 174, 193, 194, 195, 226
 高黄金 71
 甌稻益 285
 甌嶋郡(薩摩國) 208, 209
 許勢朝臣祖父 84
 巨勢朝臣邑治 99, 100
 許勢大臣男人 58
 巨勢臣藥 69
 巨勢神前臣譯語 73
 穴大寺 229
 孔大寺權現 228
 許斐 14, 215
 小泊瀬造 54
 巨萬朝臣大山 185
 高麗朝臣廣山 196
 狛嶋 135
 狛嶋亭 152
 小社 322, 323
 御門柱(沖ノ島) 23, 28, 34
 小屋島 23, 28, 33, 37
 崑崙國 167

さ

最澄(→傳教大師) 228, 229, 235, 236, 237,
 238, 239, 240, 241, 244, 301, 304
 境部臣 60
 坂合部宿禰大分 84, 112
 坂合部連稻積 72
 坂合部連石布 72
 坂合部連磐積 69
 坂合部連石積 74
 境部連石積 74
 坂田耳子郎君 59
 賢遣臣 54
 坂本臣糠手 61
 崎門山(→崎門の山) 6, 10, 13, 104
 崎門の山(→崎門山) 34
 貞敏(→藤原朝臣貞敏) 260
 薩麻之曲 71
 佐婆 135, 146
 娑婆 61

佐伯 98
 佐伯朝臣景弘 249, 250
 佐伯直安道 285
 佐伯今毛人宿禰(→佐伯宿禰今毛人) 203
 佐伯鞍職 250, 251
 佐伯宿禰今毛人(→佐伯今毛人宿禰) 202,
 204, 205
 佐伯宿禰麻呂 84
 佐味朝臣賀佐麻呂 84
 狹依毘賣命(→市杵嶋姬命) 5
 佐依姬命 8, 19

し

志賀 114, 115, 116
 志賀海神(→志賀神) 311
 慈覺(→圓仁) 304
 慈覺大師(→圓仁) 270, 280
 志賀社 108
 志賀大明神(→志賀神) 215
 志賀漢人慧隱(→惠隱) 64
 志賀の浦 148, 149
 志賀神(→志賀の皇神) 26
 志賀の神 31
 志賀嶋大明神(→志賀神) 52
 志賀の皇神(→志賀神) 199
 飾磨川 139
 城上郡(大和國) 76, 318, 329, 332, 335
 滋野朝臣繩子 265
 滋光大宮司 11, 214
 慈定 99
 思託 124, 183, 184
 神嶋(しとけしま) 71
 志斐連永世 285
 嶋守(宗像嶋守, →名草氏) 114, 291
 下縣郡(對馬嶋) 242
 下道朝臣長入 210, 211
 下道朝臣眞備(→吉備朝臣眞備) 130, 131
 下道吉備(→吉備朝臣眞備) 106
 壽應 198
 順曉 236, 239, 304
 順昌 296
 定惠 69, 71

6 索引(かん—こお)

菅道(→菅原朝臣道眞) 338, 348
 甘南備真人清野 210
 甘南備真人淨野 214
 甘南備真人高直 208
 甘南備真人信影 244, 266
 菅判官(→菅原朝臣善主) 285
 觀勒 213

き

紀(→紀朝臣長谷雄) 338, 339, 356
 義基 99
 義向 69
 吉士磐金(→吉士金) 60, 65, 66
 吉士小鮪 74
 吉士雄成(→乎那利) 64
 吉士金(→吉士磐金) 60
 吉士金子 60
 吉士岐彌 74
 吉士倉下 65, 66
 吉士駒 69, 71
 吉士長丹(→長丹) 69, 71
 吉士針間 74
 基秀 309
 義眞 236, 237, 239, 241, 292
 義靜 184
 基藏 309
 義通 71
 義德 69, 82
 紀朝臣(→紀朝臣長谷雄) 340, 341, 353, 354, 355
 紀朝臣馬主 159, 266
 紀朝臣長谷雄(→紀朝臣) 337, 342, 352
 紀朝臣春主 268
 紀朝臣必登 168
 紀朝臣三寅 266
 紀小弓宿禰 56
 紀夏井 226
 紀三津 268, 272, 273
 吉備朝臣眞備(→下道朝臣眞備) 173, 174, 175, 180, 181, 183, 185
 吉備大臣(→吉備朝臣眞備) 132
 吉備副使(→吉備朝臣眞備) 182

支閉丘 103
 義法 99
 行賀 178
 清氏(宗像) 216
 清公朝臣(→菅原清公) 225
 清水 322, 323
 清村宿禰(→袁管卿) 133
 金甲 124
 金正南 277

く

空海 230, 231, 234, 283, 284
 草壁吉士眞跡 67
 國背別皇子(→國背別命) 56
 國背別命(→國背別皇子) 58
 國造大穴牟遲命(→大國主命) 9
 熊毛浦(周防國) 135, 146
 來目皇子 61
 鞍作福利(→福利) 62
 內藏忌寸全成 194, 201
 車持君 55, 80
 車持部 55
 吳織 53, 54

け

氣比の海 140
 玄永 309
 玄法 119
 玄昉 106, 130, 131, 132, 174
 玄朗 119

こ

小一條 329, 330, 331
 業行(→普照) 182, 183
 皇后(→神功皇后) 49, 50, 51, 52, 53
 黃泗浦 184
 高大明神 24, 28
 興智 309
 河野氏(→河野ぬし) 21, 25
 河野ぬし(→河野氏) 30
 高内弓 197
 神湊 18

小崎於島(→遠瀛嶋) 45
 御寶藏(→寶藏) 45
 越知貞原 285
 弟媛 53, 54
 乎那利(→吉士雄成) 64
 小野朝臣石根 204, 205, 207, 209, 210
 小野朝臣馬養 112, 113
 小野朝臣毛野 83
 小野朝臣滋野(→小野滋野) 207, 211
 小野朝臣篁(→小野篁) 257, 261, 263, 264, 265, 271, 275, 276, 279, 280, 281
 小野朝臣田守(→田守) 179
 小野妹子(→蘇因高) 185
 小野妹子臣(→蘇因高) 64
 小野臣妹子(→蘇因高) 62, 63, 64
 小野滋野(→小野朝臣滋野) 208
 小野篁(→小野朝臣篁) 273, 280
 小野田守(→小野朝臣田守) 179
 袁布山 103
 織幡 215
 織幡神(→織幡明神) 306, 311, 327
 織幡神社 366
 織幡明神(→織幡神) 12
 オンガウ島(→遠瀛嶋) 45
 恩賀島(→遠瀛嶋) 45, 251
 御賀島 251

か

會稽縣(越州) 72
 戒融 197
 海陵縣(揚州) 207, 209, 301
 柿本朝臣人麿 140
 覺勝 69, 71
 香山連清貞 263
 笠朝臣仲守 258
 笠臣田作 237, 238, 240
 笠臣諸石 74
 風速浦 134, 141
 香椎聖母大菩薩 52
 かしふ江 148
 鹿嶋(松浦郡) 243, 300
 膳臣大丘 178

河清(→藤原清河) 174, 226
 珂是古 104
 可太の大島 145
 括州 72
 葛野鑄錢所 322
 葛野月讀神 311
 葛野麿(→藤原朝臣葛野麻呂) 226, 280, 281
 門部金 71
 掃守宿禰阿賀流 84
 掃守宿禰明 266
 掃守連小麻呂 69
 掃部連角麻呂 68
 金崎(鐘崎村) 22
 金崎 76, 198, 318, 335
 金崎(沖ノ島) 40
 金の岬(鐘崎村) 199
 賀能(→藤原朝臣葛野麻呂) 232, 233
 上縣郡南浦(對馬) 272
 神島(かみしま) 138
 神嶋神(肥前國) 326
 上毛野君 54
 上毛野公穎人 237, 238, 240
 上毛野公大川 207, 211
 上毛野君稚子 73
 龜石 23
 賀茂朝臣吉備麻呂 99
 鴨朝臣吉備麻呂 84, 100
 韓國連源 207, 208
 韓亭 135, 150
 からの浦 146
 韓智興 71, 73
 河内直鯨 74
 西漢大麻呂 73
 川内忌寸連 82
 川部酒麻呂 202
 河邊臣麻呂 71, 72
 川邊腹男 84
 鴈嶋 300
 觀常 80
 鑒眞 118, 124, 125, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 304
 觀智 81

4 索引(おお—おき)

大嶋鳴門(周防國) 135, 145
 大島村(宗像郡) 16
 大帶日姫(→神功皇后) 50, 321
 大帶命(→神功皇后) 315
 大津造廣人 85
 大伴大連(→大伴大連金村) 59
 大伴大連金村(→大伴大連) 58
 大伴談連 56
 大伴胡麿宿禰(→大伴宿禰古麻呂) 176
 大伴宿禰首名 159
 大伴宿禰子君 82
 大伴宿禰古麻呂(→朋古滿) 173, 175, 180,
 181, 182, 183, 185
 大伴宿禰胡萬呂 183
 大伴宿禰胡麿 184
 大伴宿禰胡萬(→大伴宿禰古麻呂) 181
 大伴宿禰胡滿麻呂(→大伴宿禰古麻呂) 182
 大伴宿禰繼人 209, 211
 大伴宿禰益立 202, 203, 204
 大伴宿禰御笠 185
 大伴宿禰三中 164
 大伴宿禰岑萬里(→大伴宿禰峰麻呂) 228,
 229, 230
 大伴宿禰峰麻呂(→大伴宿禰岑萬里) 223
 大伴宿禰山守 106
 大伴部博麻 82
 大伴の御津 88, 120, 138, 158
 大伴連國麻呂 78
 大伴連嚙 61
 大伴連狹手彦 59
 大伴山守 106
 大中臣朝臣國雄 50, 319, 320, 321
 大汝(→大國主命) 117
 大己貴神(→大國主命) 9
 大野朝臣東人 168
 近江毛野臣 58
 大神朝臣 253
 大神朝臣末足 204, 205, 207, 211
 大神宗雄 287, 288
 大物主神(→大國主命) 9
 大宅臣鎌柄 74
 大宅臣福主 265

岡君宜 71
 小鹿火宿禰 56
 氣息帶長足姫皇后宮(→神功皇后) 107
 置始連大伯 71
 奥島(→遠瀛嶋) 17, 19, 20
 奥嶋(近江國) 315
 遠瀛嶋(→息御嶋) 8, 19, 25
 奥津島 20, 21, 23, 24, 25, 27, 28
 瀛津島 28, 29
 沖津島 31, 44
 沖つ島 34
 沖つしま 30, 31, 33, 34
 おきつしま 32
 興都嶋神(筑前國宗像) 9
 奥津嶋神(近江國) 248, 311
 息津嶋神(丹後國) 332
 隱嶋神(備後國) 328
 奥津嶋神社(近江國) 358, 364
 隱津嶋神社(陸奥國) 365
 瀛津嶋姫(→瀛津島姫神) 4, 10, 18
 瀛津島姫神(→瀛津嶋姫命) 19
 奥津嶋姫命(→瀛津島姫神) 8, 19
 奥津嶋比賣命 5, 103
 瀛津嶋姫命 5, 8, 85
 沖つ御浦 147
 沖つ御しま(島)(→遠瀛嶋) 29, 31, 35
 遠瀛 5, 7, 11, 18, 19, 25
 奥宮 6, 7, 10, 104
 奥津宮 6, 19, 21, 25
 興津宮 8
 澳津宮 13
 瀛津宮 32
 沖津みや 30
 奥津宮神(→瀛津島姫神) 6
 息長真人老 82
 奥の島(→沖つ島) 18, 25
 おきの島 20
 息正三位社 13
 おきの御神(→瀛津島姫神) 20
 奥の御神 25
 息御嶋(→遠瀛嶋) 11, 12, 13, 53, 216
 奥の御島 19

333, 356
 市杵嶋姫命(→市杵嶋姫神) 4, 5, 7, 8, 18, 19, 21, 25, 32
 市寸嶋比賣命 5, 6
 一如 316
 一の嶽(沖ノ島) 27, 32, 37, 45
 櫟谷 322, 323
 櫟谷神 85, 305, 318
 櫟谷神社 362
 猪使連子首 80
 伊都岐嶋神(安藝國) 249, 311, 317
 伊都伎嶋神社(安藝國) 8, 358, 366
 伊都岐嶋中子天神(安藝國) 312
 嚴島(安藝國) 45
 伊都伎嶋 8
 嚴島大明神(安藝國) 251
 嚴嶋ノ大明神 51
 伊都嶋宗形小專神(安藝國) 317
 嚴嶋明神 52
 印南都麻(安藝國) 138
 犬上御田鋳(→犬上君三田耜) 65
 犬上君三田耜(→犬上御田鋳) 66
 新漢人大罔 64
 新漢人廣濟 64
 新漢人日文(→旻) 64
 伊與部家守(→伊與部連家守) 202
 伊與部連家守(→伊與部家守) 203
 磐井 58, 59
 いはひ島 145
 伊和大神(→大國主命) 103
 不言島(沖ノ島) 41
 石田野 153

う

有救嶋 277
 宇佐嶋 5, 9
 氏男(宗像) 11, 12, 214, 215
 顯見國玉神(→大國主命) 9
 海上真人三狩(→海上三狩) 204, 208, 211
 海上三狩(→海上真人三狩) 210, 212
 采女臣竹羅 79
 馬飼臣 58

海北道中 5, 9
 ト部宿禰平麿 283

え

榮叡 118, 119, 124, 125, 182, 183
 叡山大師(→最澄) 227, 301, 303
 惠雲 67
 慧雲 297
 惠隱(→志賀漢人慧隱) 67
 惠萼 297
 惠光 65
 惠齋 65
 惠施 69
 惠照 69
 越州 72
 惠日 65, 66, 71
 蛭子社 32
 兄媛 53, 54
 惠妙 71
 惠明 64
 惠靈(→紀朝臣春主) 268
 圓行 291
 圓載 278, 296, 297, 305, 307
 鹽城縣(楚州) 97, 207
 袁晉卿(→清村宿禰) 133
 圓仁(→慈覺大師) 296, 297, 300, 301, 302, 303, 304, 306

お

御麻島(沖ノ島) 23
 大海命 6, 7, 10, 104
 大石菰麿 141
 大浦田沼 115
 大國玉神(→大國主命) 9
 大國主神(→大國主命) 6, 9
 大國主命 253
 大藏忌寸麻呂(→小判官) 164
 凡河内直香腸 55
 大嶋(宗像郡)(→中津島) 11, 12, 14, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 24, 25, 28, 31, 32, 40, 41, 43, 44
 大嶋神(近江國) 248
 大嶋神社(近江國) 364

2 索引(あい—いち)

あ

合蠶田浦(肥前國松浦郡) 204
 明石の浦 144
 明石の門 140
 縣主益雄 264
 秋妻屋浦(薩摩國阿多郡) 182
 阿胡の浦 140
 阿兒奈波嶋(沖繩島) 182
 淺茅浦 135, 155
 朝野朝臣鹿取(→朝野宿禰鹿取) 225
 朝野宿禰鹿取(→朝野朝臣鹿取) 258
 朝原宿禰岡野 265
 朝原宿禰嶋主 258
 葦原醜雄命(→大國主命) 9
 阿曇連賴垂 74
 朝臣仲滿(→阿倍朝臣仲麻呂) 109
 朝臣名代(→中臣朝臣名代) 131
 朝臣真人(→粟田朝臣真人) 87
 朝臣真人粟田(→粟田朝臣真人) 88
 吾田片隅命 253
 阿知使主 53
 安致臣 58
 安埤宿禰良棟 289
 阿刀連春正 340, 351, 352
 穴織 53, 54
 穴太連 103
 阿倍朝臣老人 176
 阿倍朝臣繼麻呂(→大使) 134, 164
 安倍朝臣仲磨(→朝衡・仲滿) 109, 110
 阿倍朝臣仲麻呂 111
 安倍朝臣仲滿 266
 阿倍朝臣安麻呂 106
 安倍仲磨(→朝衡) 106, 110
 阿倍仲滿 167
 阿倍引田臣比羅夫 74
 天草郡 209
 尼子娘 75, 76
 天照大神 3, 4, 7, 8, 9, 10, 17, 18, 20, 51, 52,
 76, 335
 天照大御神 5
 天照皇大神(→天照大神) 12

奄美嶋 185
 安美能宇良(網の浦) 140
 荒雄 116
 荒木 69
 荒城郷(宗像郡) 179
 荒津 50, 319, 320, 321
 荒津の崎 149
 荒船社 32, 45
 荒船御社 24
 荒船の御社 24, 28
 阿利麻(→東漢長直阿利麻) 73
 阿禮村(對馬下縣郡) 243
 粟島 145
 粟田朝臣飽田麻呂 244
 粟田朝臣真人(→朝臣真人粟田) 84, 86, 97,
 98, 211
 粟田真人朝臣(→粟田朝臣真人) 81, 87
 粟田道磨 89
 安達 69

い

家島(播磨國) 136, 144, 158
 盧原公有子 262
 盧原公有守 261
 生屬嶋(松浦郡) 287
 伊吉博得(→伊吉連博德) 71
 壹岐連(→雪連) 39
 伊吉連古麻呂 99
 伊吉連博德(→伊吉博得) 72, 73, 74, 83
 的臣 54
 石籬浦(薩摩國) 185
 石川朝臣道益(→石川道益) 227, 228, 244,
 266
 石川道益(→石川朝臣道益) 224, 226
 惟正 301, 304
 出雲 11, 20, 68, 83, 113, 114, 216, 223
 石上朝臣乙麻呂 171
 石上朝臣宅嗣 195, 196
 板振鎌束 197
 市杵嶋姬(→市杵嶋姬神) 3, 9, 11, 12, 17, 19,
 25, 85, 215
 市杵嶋姬神(→市杵嶋姬) 310, 311, 312, 314,

索引

1. 本索引は史料篇本文の宗像関係の神名・社名・人名・地名・件名と、遣新羅使・遣唐使の人名・主要な関係地名等について作成したものである。
2. 語句は表音式仮名遣によって五十音順に配列し、所収箇所頁数を示した。
3. 語句は原則として訓読によったが、通行の慣用訓に従った。不明のものは字音によった。
4. 同じ表音の語句の場合、表記が異なれば別項として掲げ、見出し語句より一段下げて掲げた。但し、島と嶋、岑と峰と峯、岳と嶽、麻呂と麿等は同じ表記として扱った。
5. 同じ神・神社・人物・土地であっても、表音が異なれば、それぞれ別項として掲げ、尾部に→を付し参照語句を掲げた。
6. 神名・神社名について、必要と思われる場合(同一表音で鎮座の場所が異なる等)はその鎮座される国名を尾部に参考として掲げた。
7. 人名は氏姓(部)名を採ることを原則としたが、史料に氏姓のみ若しくは名のみ見える場合でも表記に従い別項として採り、尾部に→を付し参照語句を掲げ、若しくは尾部に参考事項を註記した。
8. 地名で国(州)郡(県)地域(村・浦等)を連記する場合は原則として地域(村・浦等)を中心として採った。また属する国(州)郡(県)名や現在の地名等を参考としてその尾部に註記した場合もある。
9. 参照語句若しくは参考事項は()で囲った。

宗像
沖ノ島

史料

(三分冊の三)

発行

宗像大社復興期成会

